松山市文化財調査報告書 75

松山市道「平井・水泥線」関連遺跡

古市遺跡
下苅屋遺跡

——2・3次調査——

2000

松山市教育委員会

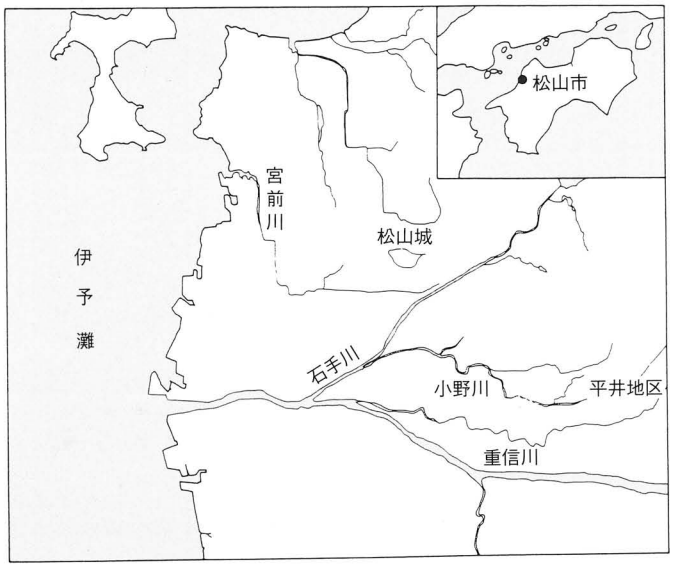
財団法人松山市生涯学習振興財団
埋蔵文化財センター

松山市道「平井・水泥線」関連遺跡

古　市　遺　跡

下　苅　屋　遺　跡

―2・3次調査―



2000

松山市教育委員会

財団法人松山市生涯学習振興財団
埋蔵文化財センター

巻頭図版　平井地区全景（東より）

序

この報告書は、平成８年から10年にかけて調査した松山市道「平井・水泥線」建設に伴う３遺跡の発掘調査報告書です。

松山平野東部に広がる小野地区は、北西部に高縄山系を、南東部には石鎚山系を望むところにあります。平野を見おろす丘陵には数多くの古墳が築かれ、窯跡なども発見されています。

今回の調査では、平野部を蛇行しながら西流する弥生時代前期から古代にかけての自然流路と、その周辺における古墳時代から古代にかけての集落址を確認することができました。そして、自然流路と人々の営みの密接な係わり合いを明らかにすることができました。

こうした成果をあげることができましたのも、関係各位の埋蔵文化財に対する深いご理解とご協力のたまものと感謝申し上げます。

本書が埋蔵文化財研究の一助となり、ひいては文化財保護、教育文化の向上に寄与できることを願うものです。

平成12年３月21日

財団法人　松山市生涯学習振興財団

理事長　中　村　時　広

例　　言

1．本書は、松山市教育委員会・㈶松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センターが平成８年～平成10年の間に松山市平井町内の松山市道新設工事に伴い実施した、３遺跡についての埋蔵文化財発掘調査の報告書である。

2．遺構は呼称を略号で記述した。竪穴式住居址：SB、溝：SD、土坑：SK、自然流路：SR、柱穴：SP、性格不明遺構：SXとした。

3．遺物の復元は、青野茂子、寺尾和恵、徳田弘子、西川千秋、松本美代子、横田知子、渡部英子が行った。

4．遺物の実測・製図及び遺構の製図は、担当調査員の指導のもと、山邊進也、加島なおみ、猪野美喜子、岩本美保、岡本邦栄、寺尾和恵、丹生谷道代、二神千春、横田知子が行った。

5．遺物の実測図は、土製品を1/4、石製品は1/2を基本とした。

6．遺構図・遺物図の縮尺は、縮分値をスケール下に記した。

7．本書に使用した方位は磁北である。

8．本書にかかる遺物・記録類は、松山市立埋蔵文化財センターが保管・収蔵している。

9．本書の執筆は、栗田茂敏、相原浩二、河野史知が分担執筆し、編集は河野史知が行った。なお、編集と校正は、梅木謙一、水口あおい、猪野美喜子、岡本邦栄の協力を得た。

10．遺物の撮影及び写真図版の作成は大西朋子が行った。

11．報告書作成においては、奈良国立文化財研究所松井章氏から御指導と御教示を賜った。記して感謝申し上げます。

12．製版　カラー写真・写真図版―175Ｌ
　　印刷　オフセット印刷
　　用紙　カラー写真―シルバーダイヤＳ　菊判76.5kg使用
　　白黒図版―シルバーダイヤＳ　菊判76.5kg使用
　　本文―シルバーダイヤＳ　菊判62.5kg使用
　　製本　アジロ綴じ

本 文 目 次

第１章　はじめに……〔栗田〕…… 1
　1　調査に至る経緯
　2　調査・刊行組織
　3　立地と環境
第２章　古市遺跡１区……〔栗田〕…… 9
　1　試掘調査
　2　遺構と遺物
　3　小結
第３章　古市遺跡２区……〔河野〕…… 57
　1　調査の経過
　2　層位
　3　遺構と遺物
　4　小結
第４章　下苅屋遺跡２次調査地……〔河野〕…… 81
　1　調査の経過
　2　層位
　3　遺構と遺物
　4　小結
第５章　下苅屋遺跡３次調査地……〔河野〕……109
　1　調査の経過
　2　層位
　3　１Ａ区の遺構と遺物
　4　１Ｂ区の遺構と遺物
　5　１Ｃ区の遺構と遺物……〔相原〕……142
　6　２区の遺構と遺物
　7　３区の遺構と遺物
　8　４区の遺構と遺物
　9　５区の遺構と遺物
　10　６区の遺構と遺物
　11　小結
第６章　まとめ……〔栗田〕……199

挿図目次

第１章　はじめに
第１図　松山平野の地形分類図（縮尺1/200,000）……2
第２図　調査地周辺の遺跡分布図（縮尺1/30,000）……5
第２章　古市遺跡１区
第３図　トレンチの配置図と調査地の位置図（縮尺1/400）……11
第４図　試掘調査出土遺物実測図（縮尺1/4）……13
第５図　SR１土層堆積図（縮尺1/50）……14
第６図　SD１とSR１の検出状況図（縮尺1/200）……15
第７図　SR１　10層出土遺物実測図(1)（縮尺1/4）……17
第８図　SR１　10層出土遺物実測図(2)（縮尺1/4）……18
第９図　SR１　10層出土遺物実測図(3)（縮尺1/4）……19
第10図　SR１　10層出土遺物実測図(4)（縮尺1/4）……20
第11図　SR１　10層出土遺物実測図(5)（縮尺1/4）……21
第12図　SR１　10層出土遺物実測図(6)（縮尺1/4・1/3・1/2）……22
第13図　SR１　８・９層出土遺物実測図(1)（縮尺1/4）……24
第14図　SR１　８・９層出土遺物実測図(2)（縮尺1/4）……25
第15図　SR１　５・６層出土遺物実測図(1)（縮尺1/4）……26
第16図　SR１　５・６層出土遺物実測図(2)（縮尺1/4）……27
第17図　SR１　５・６層出土遺物実測図(3)（縮尺1/2）……28
第18図　SR１出土層位不明遺物実測図（縮尺1/4）……28
第19図　SD１出土遺物実測図(1)（縮尺1/4）……30
第20図　SD１出土遺物実測図(2)（縮尺1/4）……31
第21図　SD１出土遺物実測図(3)（縮尺1/4）……32
第22図　SD１出土遺物実測図(4)（縮尺1/3・1/2）……33
第23図　SD１出土遺物実測図(5)・古銭拓影（縮尺1/2）……34
第24図　表採遺物実測図(1)（縮尺1/4）……34
第25図　表採遺物実測図(2)（縮尺1/3）……35
第３章　古市遺跡２区
第26図　調査地位置図（縮尺1/1,000）……58
第27図　調査地区割図（縮尺1/600）……59
第28図　A・B地区 南・北壁土層図（縮尺1/50）……60
第29図　C・D地区 北壁土層図（縮尺1/50）……61
第30図　A地区遺構配置図（縮尺1/80）……62
第31図　B地区遺構配置図（縮尺1/80）……63
第32図　B地区掘立１測量図・出土遺物実測図（縮尺1/50・1/4）……64

第33図　B地区掘立2測量図・出土遺物実測図（縮尺1/50・1/4）……65
第34図　B地区掘立3測量図（縮尺1/50）……66
第35図　B地区掘立3出土遺物実測図（縮尺1/4）……67
第36図　B地区第Ⅳ層出土遺物実測図（縮尺1/4）……67
第37図　C地区遺構配置図（縮尺1/80）……68
第38図　C地区掘立4測量図・出土遺物実測図（縮尺1/50・1/10・1/4）……69
第39図　C地区掘立5測量図（縮尺1/50）……70
第40図　D地区遺構配置図（縮尺1/80）……71
第41図　D地区SK7出土遺物実測図（縮尺1/4）……71
第42図　D地区SD4出土遺物実測図（縮尺1/4）……72
第43図　D地区第Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ層出土遺物実測図（縮尺1/4）……73

第4章　下苅屋遺跡2次調査地

第44図　調査地位置図（縮尺1/1,500）……82
第45図　調査地区割図（縮尺1/1,000）……83
第46図　A・B・C地区北・西壁土層図（縮尺1/50）……85
第47図　D・E・F地区北壁土層図（縮尺1/50）……87
第48図　A地区遺構配置図・SR2・第Ⅴ層出土遺物実測図（縮尺1/80・1/4）……89
第49図　B地区遺構配置図（縮尺1/80）……90
第50図　B地区SR2出土遺物実測図（縮尺1/4）……91
第51図　C地区遺構配置図（縮尺1/80）……92
第52図　C地区SR1・第Ⅴ層出土遺物実測図（縮尺1/4）……93
第53図　D地区遺構配置図・SR1出土遺物実測図（縮尺1/80・1/4）……94
第54図　E地区第Ⅵ層上面・自然流路中層上面の遺構配置図（縮尺1/80）……95
第55図　E地区SK1測量図（縮尺1/20）……96
第56図　E地区自然流路下層上面の遺構配置図（縮尺1/80）……97
第57図　E地区SR1・第Ⅴ層出土遺物実測図（縮尺1/4・1/2）……98
第58図　F地区遺構配置図（縮尺1/80）……99
第59図　F地区SD2出土遺物実測図（縮尺1/4）……100
第60図　F地区SR1出土遺物実測図（縮尺1/4）……101
第61図　F地区第Ⅴ層出土遺物実測図（縮尺1/4）……101

第5章　下苅屋遺跡3次調査地

第62図　調査地位置図（縮尺1/1,500）……110
第63図　1A・1B・1C区南・北壁土層図（縮尺1/40）……113
第64図　2・3区南壁土層図（縮尺1/40）……115
第65図　4・5・6区南・東壁土層図（縮尺1/40）……117
第66図　1A～1C区・2区と周辺遺跡の遺構配置図（縮尺1/250）……119
第67図　1A区遺構配置図（縮尺1/100）……122
第68図　SX1測量図（縮尺1/40）……123

第69図　SB 1 測量図・出土遺物実測図（縮尺1/40・1/4）……124
第70図　掘立 1 測量図（縮尺1/60）……125
第71図　SK 1 測量図（縮尺1/30）……126
第72図　SK 1 出土遺物実測図(1)（縮尺1/4）……127
第73図　SK 1 出土遺物実測図(2)（縮尺1/4）……128
第74図　第Ⅶ層出土遺物実測図（縮尺1/4）……129
第75図　SD 1 測量図・出土遺物実測図（縮尺1/40・1/4）……130
第76図　第Ⅵ層出土遺物実測図（縮尺1/4・1/2）……130
第77図　1 B 区遺構配置図（縮尺1/100）……131
第78図　SB 2 測量図・出土遺物実測図(1)（縮尺1/40・1/4）……132
第79図　SB 2 出土遺物実測図(2)（縮尺1/2）……133
第80図　SB 3 測量図（縮尺1/40）……133
第81図　SB 3 カマド測量図（縮尺1/20）……134
第82図　SB 3 出土遺物実測図（縮尺1/4）……134
第83図　掘立 2 測量図（縮尺1/60）……135
第84図　掘立 3 測量図（縮尺1/60）……136
第85図　SD 3 ・ 4 測量図（縮尺1/100）……137
第86図　SD 3 出土遺物実測図（縮尺1/4）……137
第87図　SK 2 測量図（縮尺1/20）……138
第88図　SK 3 測量図・出土遺物実測図（縮尺1/20・1/4）……139
第89図　SK 4 測量図・出土遺物実測図（縮尺1/20・1/4）……140
第90図　第Ⅶ層出土遺物実測図（縮尺1/4）……141
第91図　1 C 区遺構配置図（縮尺1/80）……142
第92図　SX 2 測量図・出土遺物実測図（縮尺1/40・1/4）……143
第93図　SB 4 測量図・出土遺物実測図（縮尺1/40・1/4）……144
第94図　掘立 4 測量図・出土遺物実測図（縮尺1/60・1/4）……145
第95図　掘立 5 測量図・出土遺物実測図（縮尺1/40・1/4）……145
第96図　SD 8 測量図・出土遺物実測図（縮尺1/80・1/4）……146
第97図　SK 6 測量図・出土遺物実測図（縮尺1/40・1/4）……147
第98図　SK 7 測量図・出土遺物実測図（縮尺1/40・1/4）……148
第99図　SP 6 ・ 7 測量図・出土遺物実測図（縮尺1/40・1/4）……148
第100図　SD 6 ・ 7 測量図（縮尺1/40）……149
第101図　第Ⅶ層出土遺物実測図（縮尺1/4）……149
第102図　2 区遺構配置図（縮尺1/150）……150
第103図　SR 1 測量図（縮尺1/150）……151
第104図　SB 5 測量図（縮尺1/60）……152
第105図　SB 5 上層出土遺物実測図(1)（縮尺1/4）……153
第106図　SB 5 上層出土遺物実測図(2)（縮尺1/4）……154

第107図　SB５中～下層出土遺物実測図(1)（縮尺1/4）……155
第108図　SB５中～下層出土遺物実測図(2)（縮尺1/4）……156
第109図　SB５中～下層出土遺物実測図(3)（縮尺1/4）……157
第110図　SB６測量図（縮尺1/60）……158
第111図　SB６出土遺物実測図(1)（縮尺1/4）……159
第112図　SB６出土遺物実測図(2)（縮尺1/4・1/2）……160
第113図　SB７測量図・出土遺物実測図（縮尺1/60・1/4）……161
第114図　SD９測量図・出土遺物実測図（縮尺1/40・1/4）……162
第115図　SD10測量図・出土遺物実測図（縮尺1/40・1/4）……163
第116図　SK９・10測量図（縮尺1/20）……164
第117図　SD11測量図（縮尺1/60）……165
第118図　SP27出土遺物実測図（縮尺1/4）……165
第119図　第Ⅶ層出土遺物実測図（縮尺1/4）……166
第120図　第Ⅶ層・層不明出土遺物実測図（縮尺1/4）……167
第121図　３区遺構配置図・SD 12測量図（縮尺1/100・1/40）……168
第122図　４区遺構配置図（縮尺1/100）……169
第123図　５区遺構配置図・壁土層断面図・SR１出土遺物実測図（縮尺1/100・1/50・1/4）……170
第124図　６区遺構配置図（縮尺1/100）……171
第125図　１号墓測量図（縮尺1/40）……172
第126図　１号墓出土遺物実測図・古銭拓影（縮尺1/4・1/2）……173
第127図　２号墓測量図（縮尺1/40）……174
第128図　２号墓出土遺物実測図(1)（縮尺1/4）……175
第129図　２号墓出土遺物実測図(2)（縮尺1/4）……176
第６章　まとめ
第130図　自然流路想定図（縮尺1/2,000）……201

表　目　次

第２章　古市遺跡１区
表１　試掘調査出土遺物観察表（土製品）……38
表２　SR１（10層）出土遺物観察表（土製品）……39
表３　SR１（10層）出土遺物観察表（石製品）……44
表４　SR１（８・９層）出土遺物観察表（土製品）……45
表５　SR１（５・６層）出土遺物観察表（土製品）……46
表６　SR１（５・６層）出土遺物観察表（石製品）……48
表７　SR１（層不明）出土遺物観察表（土製品）……48

表８　SD１出土遺物観察表（土製品）……49
表９　SD１出土遺物観察表（瓦）……52
表10　SD１出土遺物観察表（石製品）……53
表11　SD１出土遺物観察表（銭貨）……53
表12　表採遺物観察表（土製品）……53
表13　表採遺物観察表（石製品）……54
第３章　古市遺跡２区
表14　掘立柱建物址一覧……75
表15　土坑一覧……75
表16　溝一覧……76
表17　性格不明遺構一覧……76
表18　Ｂ地区掘立１出土遺物観察表（土製品）……76
表19　Ｂ地区掘立２出土遺物観察表（土製品）……76
表20　Ｂ地区掘立３出土遺物観察表（土製品）……76
表21　Ｂ地区第Ⅳ層出土遺物観察表（土製品）……77
表22　Ｃ地区掘立４出土遺物観察表（土製品）……77
表23　Ｄ地区SK７出土遺物観察表（土製品）……77
表24　Ｄ地区SD４出土遺物観察表（土製品）……77
表25　Ｄ地区第Ⅳ層出土遺物観察表（土製品）……78
表26　Ｄ地区第Ⅲ層出土遺物観察表（土製品）……78
表27　Ｄ地区第Ⅱ層出土遺物観察表（土製品）……78
第４章　下苅屋遺跡２次調査地
表28　土坑一覧……103
表29　溝一覧……103
表30　性格不明遺構一覧……103
表31　Ａ地区SR２出土遺物観察表（土製品）……103
表32　Ａ地区第Ⅴ層出土遺物観察表（土製品）……103
表33　Ｂ地区SR２出土遺物観察表（土製品）……103
表34　Ｃ地区SR１出土遺物観察表（土製品）……104
表35　Ｃ地区第Ⅴ層出土遺物観察表（土製品）……105
表36　Ｄ地区SR１出土遺物観察表（土製品）……105
表37　Ｅ地区SR１出土遺物観察表（土製品）……105
表38　Ｅ地区SR１出土遺物観察表（石製品）……105
表39　Ｅ地区第Ⅴ層出土遺物観察表（土製品）……106
表40　Ｆ地区SD２出土遺物観察表（土製品）……106
表41　Ｆ地区SR１出土遺物観察表（土製品）……106
表42　Ｆ地区第Ⅴ層出土遺物観察表（土製品）……106

第５章　下苅屋遺跡３次調査地

表43　竪穴式住居址一覧 ……179
表44　竪穴式住居址の炉・カマド一覧 ……179
表45　掘立柱建物址一覧 ……179
表46　溝一覧 ……179
表47　土坑一覧 ……180
表48　性格不明遺構一覧 ……180
表49　SB１出土遺物観察表（土製品） ……180
表50　SK１出土遺物観察表（土製品） ……181
表51　第Ⅶ層出土遺物観察表（土製品） ……183
表52　SD１出土遺物観察表（土製品） ……184
表53　第Ⅵ層出土遺物観察表（土製品） ……184
表54　SB２出土遺物観察表（土製品） ……184
表55　SB２出土遺物観察表（石製品） ……185
表56　SB３出土遺物観察表（土製品） ……185
表57　SD３出土遺物観察表（土製品） ……186
表58　SK３出土遺物観察表（土製品） ……186
表59　SK４出土遺物観察表（土製品） ……186
表60　第Ⅶ層出土遺物観察表（土製品） ……186
表61　SX２出土遺物観察表（土製品） ……187
表62　SB４出土遺物観察表（土製品） ……188
表63　掘立４出土遺物観察表（土製品） ……188
表64　掘立５出土遺物観察表（土製品） ……188
表65　SD８出土遺物観察表（土製品） ……188
表66　SK６出土遺物観察表（土製品） ……189
表67　SK７出土遺物観察表（土製品） ……189
表68　SP６出土遺物観察表（土製品） ……189
表69　SP７出土遺物観察表（土製品） ……189
表70　第Ⅶ層出土遺物観察表（土製品） ……189
表71　SB５出土遺物観察表（土製品） ……190
表72　SB６出土遺物観察表（土製品） ……194
表73　SB６出土遺物観察表（石製品） ……195
表74　SB７出土遺物観察表（土製品） ……195
表75　SD９出土遺物観察表（土製品） ……195
表76　SD10出土遺物観察表（土製品） ……196
表77　SP27出土遺物観察表（土製品） ……196
表78　第Ⅶ層出土遺物観察表（土製品） ……196
表79　層不明出土遺物観察表（土製品） ……198

表80　SR１出土遺物観察表（土製品）……198
表81　１号墓出土遺物観察表（銭貨）……198

図版目次

第２章　古市遺跡１区
図版１　１．調査前全景（東より）
　　２．SD１・SR１検出状況（西より）
図版２　１．SD１遺物出土状況（東より）
　　２．SD１・SR１の土層堆積状況（北より）
図版３　１．SR１　10層遺物出土状況(1)
　　２．SR１　10層遺物出土状況(2)
図版４　１．SD１・SR１完掘状況（東より）
　　２．SD１・SR１完掘状況（西より）
図版５　１．SR１　10層出土遺物(1)
図版６　１．SR１　10層出土遺物(2)
図版７　１．SR１出土遺物（８・９層、５・６層、層位不明）
図版８　１．出土遺物（SD１、表採、試掘調査Ｔ１）

第３章　古市遺跡２区
図版９　１．Ａ地区遺構検出状況（西より）
　　２．Ａ地区遺構完掘状況（東より）
図版10　１．Ｂ地区西壁土層（東より）
　　２．Ｂ地区遺構検出状況（西より）
図版11　１．Ｂ地区遺構完掘状況（東より）
　　２．Ｂ地区掘立３完掘状況（北より）
図版12　１．Ｃ地区遺構検出状況（東より）
　　２．Ｃ地区掘立４・Ｐ２遺物出土状況（南より）
図版13　１．Ｃ地区遺構完掘状況（東より）
　　２．Ｃ地区遺構完掘状況（西より）
図版14　１．Ｄ地区遺構検出状況（東より）
　　２．Ｄ地区遺構完掘状況（東より）
図版15　１．Ｃ地区掘立４出土遺物
　　２．Ｄ地区 SD４出土遺物
　　３．Ｄ地区第Ⅳ層出土遺物

第４章　下苅屋遺跡２次調査地

図版16　１．Ａ地区 SR２検出状況（東より）
　　２．Ａ地区 SR２完掘状況（西より）
図版17　１．Ｂ地区遺構検出状況（東より）
　　２．Ｂ地区遺構完掘状況（西より）
図版18　１．Ｂ地区 SR２完掘状況（北より）
　　２．Ｂ地区遺構完掘状況（東より）
図版19　１．Ｃ地区南壁土層（北より）
　　２．Ｃ地区遺構検出状況（東より）
図版20　１．Ｃ地区 SR１完掘状況（東より）
　　２．Ｃ地区 SR１完掘状況（西より）
図版21　１．Ｄ地区遺構検出状況（東より）
　　２．Ｄ地区遺構完掘状況（東より）
図版22　１．Ｅ地区南壁土層（北より）
　　２．Ｅ地区遺構検出状況（西より）
図版23　１．Ｅ地区 SK１礫検出状況（東より）
　　２．Ｅ地区 SR１中層上面検出・SK１・SX５完掘状況（東より）
図版24　１．Ｅ地区 SR１中層上面検出状況（北より）
　　２．Ｅ地区 SR１完掘状況（東より）
図版25　１．Ｆ地区遺構検出状況（西より）
　　２．Ｆ地区 SR１礫検出状況（南より）
図版26　１．Ｆ地区遺構完掘状況（西より）
　　２．Ｆ地区遺構完掘状況（東より）
図版27　１．Ａ地区第Ⅴ層出土遺物
　　２．Ｄ地区 SR１出土遺物
　　３．Ｅ地区 SR１出土遺物

第５章　下苅屋遺跡３次調査地

図版28　１．２区から６区を望む（西より）
　　２．１Ａ区遺構検出状況（北より）
図版29　１．１Ａ区 SK１中層遺物出土状況（東より）
　　２．１Ａ区遺構完掘状況（東より）
図版30　１．１Ｂ区遺構検出状況（北より）
　　２．１Ｂ区 SB３カマド内遺物出土状況（北西より）
図版31　１．１Ｂ区遺構完掘状況（北より）
　　２．１Ｂ区 SB３完掘状況（西より）
図版32　１．１Ｃ区調査前全景（西より）
　　２．１Ｃ区遺構検出状況（南より）

図版33　1．1C区西側遺構完掘状況（南東より）
　　2．1C区SD8完掘状況（西より）
図版34　1．2区遺構検出状況（北より）
　　2．2区遺構完掘状況（北東より）
図版35　1．2区SB5完掘状況（北東より）
　　2．2区SR1南岸完掘状況（東より）
図版36　1．3区遺構検出状況（東より）
　　2．3区遺構完掘状況（東より）
図版37　1．4区遺構検出状況（東より）
　　2．4区遺構完掘状況（西より）
図版38　1．5区SR1北壁完掘状況（西より）
　　2．5区SR1北壁完掘状況（南東より）
図版39　1．6区1・2号墓検出状況（東より）
　　2．6区1号墓上面礫検出状況（西より）
図版40　1．6区1号墓床面検出状況（西より）
　　2．6区1号墓完掘状況（東より）
図版41　1．6区2号墓上面礫検出状況（北より）
　　2．6区2号墓骨出土状況（東より）
図版42　1．6区2号墓床面掘り方検出状況（東より）
　　2．6区2号墓完掘状況（東より）
図版43　1．1A区SK1出土遺物
図版44　1．1A区第VI層出土遺物
　　2．1B区SB2出土遺物
　　3．1B区SB3出土遺物
　　4．1C区SK6出土遺物
図版45　1．2区SB5上層出土遺物
　　2．2区SB5中～下層出土遺物
図版46　1．2区SB5中～下層出土遺物
　　2．2区SB6出土遺物
　　3．2区第VII層出土遺物
　　4．6区1号墓出土遺物

第1章　はじめに

1．調査に至る経緯

松山市は、松山市東南部の平井町、水泥町において松山市道の新設を計画した。この計画路線は、松山市の指定する周知の包蔵地「№90 権現山古墳群・№152 平井遺物包含地」に含まれる地点にあたる。平成7年10月、このうち、用地買収が進行中の平井町部分の総延長約1㎞、14,500㎡についての埋蔵文化財確認調査願が松山市道路部道路建設第1課から、松山市教育委員会（以下、市教委）に提出された。これにもとづき、平成8年3月、市教委によって実施された試掘調査の結果、弥生時代から古代・中世にわたる遺物を包含する土層が申請地の各所において検出され、これらの地点については本格調査が必要と判断された。このため、道路建設第1課と市教委、ならびに㈶松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センターの三者は、遺跡の取り扱いについて協議を行い、遺跡と判断された部分についての本格調査を実施することとなった。道路は、水田地帯を東西に貫くかたちで計画されており、現況農道、生活道路、用水路、畦畔等の保全が前提となったうえ、用地買収の遅れている部分もあり、結果的に調査は工区を4区に分割し、それぞれに担当者を置き、断続的に3年次の工程で実施された。以下に調査区、調査期間、担当者を記しておく。

「古市遺跡1区」……平成8年4月1日～　同　年9月30日　担当：栗田茂敏、大森一成
「古市遺跡2区」……平成9年2月17日～　同　年3月31日　担当：河野史知
「下苅屋遺跡2次調査地」…平成8年11月18日～平成9年2月14日　担当：河野史知
「下苅屋遺跡3次調査地」…平成9年4月18日～平成10年10月31日　担当：河野史知、相原浩二

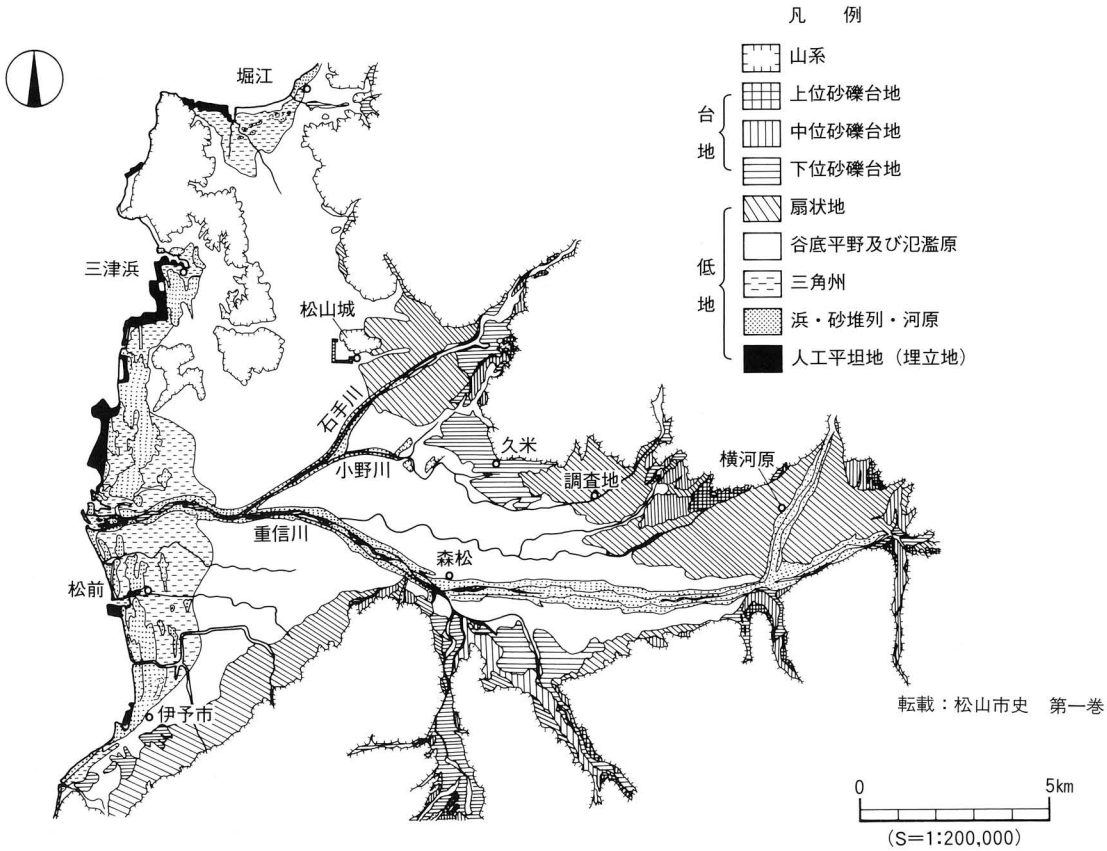
2．刊行組織（平成12年3月31日現在）

松山市教育委員会	教育長	池田　尚郷
事務局	局長	團上　和敬
	次長	森脇　將
	次長	赤星　忠男
文化教育課	課長	松平　泰定
㈶松山市生涯学習振興財団	理事長	中村　時広
	事務局長	二宮　正昌
	事務局次長	河口　雄三
埋蔵文化財センター	所長	河口　雄三
	次長	田所　延行
	調査係長	田城　武志
	主任	栗田　正芳（文化教育課職員）
	調査担当	栗田　茂敏、相原　浩二、河野　史知
		大森　一成（平成10年退職）

3．立地と環境

(1) 地理的環境

道後平野は、その北東部を高縄半島の大部分を占める高縄山系の南西面に、また、東から南東部を四国山脈北東麓に限られ、西方の海岸線に向かって扇状に開けた沖積平野である。平野には、高縄山系に源を発し、北東から南西方向に流れる石手川と、四国山脈東三方が森に水源を持ち、西流する重信川の２大河川がある。この２河川は、それぞれいくつかの支流を集めながら西流し、西方の海岸線から約４kmの通称出合で合流し、伊予灘に注いでいる。平野は、これらの河川の沖積作用によって形成されている。その構成を大雑把にみてみると、北方の石手川扇状地、およびその西方にひろがる氾濫原、南方の重信川扇状地、およびその中流域以西にひろがる大規模な氾濫原に加えて、両河川の中間にあって、石手川の支流である小野川により形成された比較的小規模な扇状地などが主なものである。調査地はこの小野川の現流路の北約１km付近の小野川扇状地上、北方扇側部付近にあり、北方直近には高縄山系の南東麓斜面が迫り、調査地の特に北方周辺には沖積作用によって形成された段丘状の高まりが残っている。



第１図　松山平野の地形分類図

(2) 歴史的環境

ここでは、調査地周辺の道後平野南東部の平井・小野地区から若干西方の来住・久米地区の遺跡分布を中心に述べることにする。

旧石器時代の遺物は、この地区に限らず道後平野では該期の遺構とともに出土した例は知られておらず、数例ある資料も採集遺物であったり、単独出土であったりする例がすべてである。この地区では、鷹子町五郎兵衛谷古墳群の調査に伴い出土した角錐状形石器、久米窪田Ⅴ遺跡出土の角錐状石器、あるいは平井町山田池で採集されたナイフ形石器などの数例が知られているのみで、いずれも後期旧石器時代のものと考えられている〔重松 1992〕。

この地区で、確実な遺構とともに遺物が出土するのは、縄文時代後期中頃以降である。この時期の良好な一括遺物としては、久米窪田町森元遺跡の土坑出土の土器群がある〔栗田 1989〕。この森元遺跡の近隣の久米窪田Ⅰ遺跡でも同様の時期の遺物を出土しており、これらの遺物は小型方形住居址にともなうものとされている〔吉本 他 1981〕。晩期では、近年になって来住台地上での遺構・遺物の検出が目立ってきている。特に久米高畑遺跡36次調査では、晩期中葉の土器群をともなう円形住居址1棟が検出されているほか、同エリア内の26次調査・35次調査でも同様の時期の土坑の検出をみており、該期の資料の希薄な当平野にあっては、貴重な例といえる〔小玉 1997／河野 1998／小笠原 1998〕。晩期末の比較的良好な例としては、南久米片廻り遺跡2次調査の土器群がある。明確な遺構にともなうものではないが、層位・平面ともにまとまりがみられ、一括性の高い遺物群である〔松村 他 1996〕。

縄文時代には点的であった遺跡分布も弥生時代になると、面的なひろがりを持ち、その数も大幅に増大する。その中でも最も注目されるのが、やはり来住台地上に展開する前期末から中期初頭の集落である。このエリアの弥生遺跡は、前期末から後期まで継続してはいるが、その盛期は上述の前末～中初の段階にある。集落は、少数の円形竪穴住居と数多くの無柱長方形竪穴と土坑などによって構成されているが、近年の調査（久米高畑23・25・28・29次）や過去の来住Ⅴ遺跡などの調査成果をあわせると、同時期併存の環濠を複数ともなう可能性が高くなってきている〔橋本 1995／高尾 1996／小笠原 1997〕。中期の良好な資料は現在のところ少ないが、中期も後半あるいは後期初頭、凹線文の段階の遺物を出土する遺跡はいくつかある。来住廃寺15次調査では、台地の縁辺の落ち際に投棄された状況で多数の凹線文段階の遺物が出土し〔西尾 他 1993〕、また、久米窪田町古屋敷Ⅰ遺跡では比較的規模の大きい溝からやはり該期の遺物が出土している〔梅木 他 1992〕。この両遺跡ともに、台地の縁辺部に位置することで共通しているが、台地上には現在のところこの時期に該当する遺構が希薄であり、この時期のこのエリアの集落展開についてはまだ不明な部分が多い。なお、この段階の住居址は鷹子町五郎兵衛谷古墳群の調査中に、低丘陵緩斜面で1棟検出されているが〔森 1978〕、平地部との比高差20m程度の緩傾斜面であり、高地性集落と言えるような立地ではない。後期の集落は、面としてのひろがりは把握されていないのが現状であるが、単発的に遺構が検出される例はいくつかある。南久米片廻り遺跡では円形住居址1棟から、終末期の土器とともに鉄鏃を1点出土していることで注目できる〔栗田 1987〕。その他、後期の遺構・遺物は主に久米窪田Ⅰ～Ⅴ遺跡や、平井遺跡〔豊田 他 1982〕など国道11号松山東道路関係の調査での出土が報告されている。

このエリアにおける古墳時代の集落は、6世紀代以降のものが主に確認されている。南土居町開遺跡では、比較的小規模な調査面積であったにもかかわらず、方形竪穴住居址5棟、掘立柱建物3棟などが検出され、出土遺物ならびに切り合いから、6世紀初頭から後半までの住居形態の変遷や竪穴か

ら掘立への移行が検討されている〔宮内 1996〕。本調査地南西端に隣接する下苅屋遺跡も6世紀後半を主体とする集落で、検出された9棟の方形竪穴住居址の一部から生焼け・焼け歪みの顕著な須恵器が出土している。遺跡北東の小野谷に分布する窯址群からの中継点あるいは集積地のような性格を推定されている集落である〔重松 1996〕。

調査地北方の丘陵上には桧山峠古墳群、芝ケ峠古墳群、かいなご古墳群、久米大池古墳群、東方の低丘陵上には播磨塚古墳群など小規模な円墳あるいは方墳を主体とする古墳群が密集しており、そのほとんどが後期古墳と考えられているが、これらの古墳群の中には平井町の観音山古墳のように5世紀代の大規模な帆立貝形古墳と推定されているようなもの〔相田 1980〕、あるいは鷹子町素鵞神社古墳のような当地では最大規模の円墳〔愛媛県教委 1991〕とされている古墳がある。また、平地部に眼を転ずると高井町波賀部神社古墳、北久米町二ツ塚古墳、北梅本町葉佐池古墳〔栗田 1994〕や、現在では消滅してしまったが鷹子町タンチ山古墳など当平野では数少ない後期の前方後円墳が多く分布する地域である。この背景のひとつには当然後述するように、7世紀代になって来住台地上に展開する官衙遺跡群や古代寺院成立の基盤となった地方豪族の存在が挙げられよう。

近年の来住台地上での久米官衙遺跡群の調査は着実な成果を挙げつつある。白鳳寺院址来住廃寺の調査が契機となり、その後調査の進展とともに明らかとなった、寺院隣接部分の方一町規模の「回廊状遺構」で区画された施設の存在や、台地北部の掘立柱建物群をともなう半町規模の方形区画域の至近距離での「久米評」線刻須恵器の発見により高まったこの区画の評庁院の可能性、あるいはその西部の濠で囲われた正倉域の発見に加えて、これらの施設とともに存在する台地上の方一町規模の方形地割り等、きわめて重要な遺跡群である〔橋本 1997・1998〕。これらの施設の初現は現在のところ7世紀前葉の年代が推定されているが、この遺跡群に須恵器を供給した可能性の高い窯址群が先にもふれた小野谷に分布する松山平野東部古窯址群である。発掘調査が行われたものは7世紀前半の駄場姥ケ懐1号窯1基のみであるが、この地区では現在のところ駄場姥ケ懐、悪社谷、枝朶下池、茨谷など10数基の須恵器窯の存在が確認されており、最も古いもので6世紀後半、新しいものには8世紀後半のものがある。操業の盛期を、概ね7世紀代に持つ窯址群である〔栗田・岡根 1996〕。

〔文献〕

重松　佳久　「小野川水系における旧石器文化」『来住・久米地区の遺跡』㈶松山市埋蔵文化財センター 1992
「下苅屋遺跡」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅷ』松山市教育委員会・㈶松山市埋蔵文化財センター 1996

栗田　茂敏　「南久米片廻り遺跡」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅰ』松山市教育委員会 1987
「久米窪田森元遺跡」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅱ』松山市教育委員会 1989
『葉佐池古墳―木棺がのこされた横穴式石室の調査―』松山市教育委員会 1994

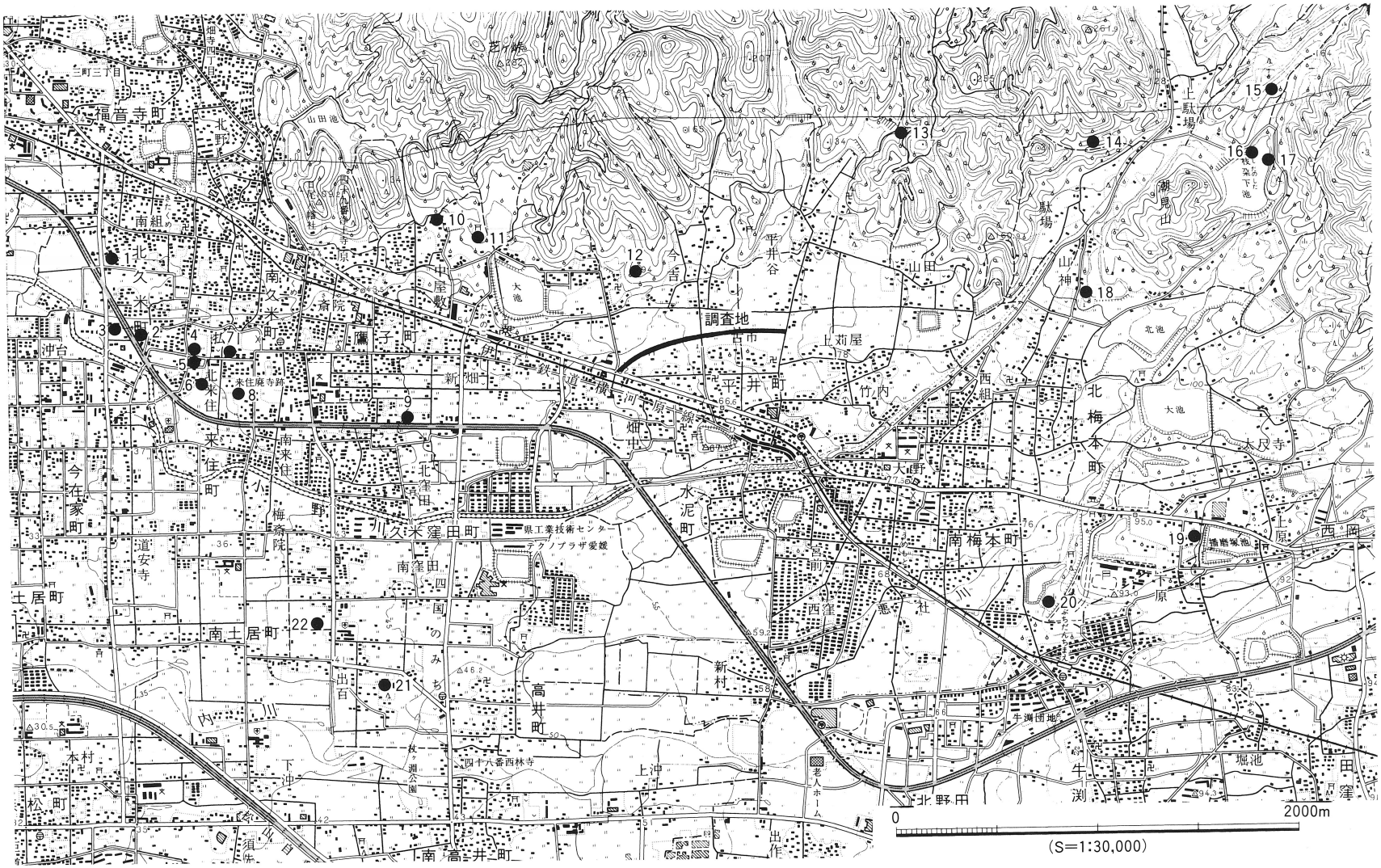
栗田　茂敏・岡根なおみ「駄場姥ケ懐窯址」『小野川流域の遺跡』松山市教育委員会・㈶松山市埋蔵文化財センター 1996

吉本　　拡・阪本　安光「来住Ⅴ遺跡、久米窪田Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ遺跡」『一般国道11号松山東道路関係遺跡埋蔵文化財調査報告書Ⅱ』愛媛県教育委員会・㈶愛媛県埋蔵文化財調査センター 1981

小玉亜紀子　「久米高畑遺跡26次調査地」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅸ』松山市教育委員会・㈶松山市埋蔵文化財センター 1997

河野　史知　「久米高畑遺跡35次調査地」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅹ』松山市教育委員会・㈶松山市埋蔵文化財センター 1998

小笠原善治　「久米高畑遺跡36次調査地」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅹ』松山市教育委員会・㈶松山市埋蔵文化財センター 1998



1. 二ツ塚古墳
2. 南久米片廻り遺跡
3. 南久米片廻り遺跡2次調査地
4. 久米高畑遺跡26次調査地
5. 久米高畑遺跡35次調査地
6. 久米高畑遺跡36次調査地
7. 久米高畑遺跡23・25・28・29次調査地
8. 来住廃寺
9. 久米窪田森元遺跡
10. 五郎兵衛谷古墳群
11. 素鵞神社古墳
12. 観音山古墳
13. 茨谷1号窯
14. 駄場姥ヶ懐1・2号窯
15. 悪社谷1～3号窯
16. 枝朶下池2・3号窯
17. 枝朶下池1・4号窯
18. 葉佐池古墳
19. 播磨塚古墳
20. 播磨塚天神山古墳
21. 波賀部神社古墳
22. 開遺跡

第２図　調査地周辺の遺跡分布図

「久米高畑遺跡28次・29次調査地」『松山市埋蔵文化財調査年報IX』松山市教育委員会・㈶松山市埋蔵文化財センター 1997

橋本　雄一　「久米高畑遺跡23次調査地」『松山市埋蔵文化財調査年報VII』松山市教育委員会・㈶松山市埋蔵文化財センター 1995

「久米官衙遺跡群～総括と今後の展望～」『松山市埋蔵文化財調査年報IX』松山市教育委員会・㈶松山市埋蔵文化財センター 1997

「久米官衙遺跡群～今後の展望～」『松山市埋蔵文化財調査年報X』松山市教育委員会・㈶松山市埋蔵文化財センター 1998

高尾　和長　「久米高畑遺跡25次調査地」『松山市埋蔵文化財調査年報VIII』松山市教育委員会・㈶松山市埋蔵文化財センター 1996

西尾幸則ほか　『来住廃寺遺跡―第15次調査報告書―』松山市教育委員会・㈶松山市埋蔵文化財センター 1993

梅木　謙一・宮内　慎一　「久米窪田古屋敷C遺跡」『来住・久米地区の遺跡』松山市教育委員会・㈶松山市埋蔵文化財センター 1992

宮内　慎一　「開遺跡―1次調査地―」『小野川流域の遺跡』松山市教育委員会・㈶松山市埋蔵文化財センター 1996

森　　光晴　『五郎兵衛谷古墳』松山市教育委員会 1978

豊田達雄ほか　「平井遺跡」『一般国道11号松山東道路関係遺跡埋蔵文化財調査報告書IV』愛媛県教育委員会・愛媛県埋蔵文化財調査センター 1982

相田　則美　「4・5世紀伊予の首長墓」『社会科学研究第1号』1980

愛媛県教育委員会　『愛媛県内古墳―分布調査報告―』1991

第２章

古市遺跡

―１区―

第２章　古市遺跡１区

１．試掘調査

(1) 概　　要

１区は路線東端部の東西150m、南北16mの範囲である。現況は水田で、道路はこれらの水田をそれぞれ分断するようなかたちで計画された。したがって、調査中はこれら水田の畦畔、用水路、取排水施設の保全が前提となり、調査区全域の面的な掘削は行い得なかった。そこで、それぞれの水田一枚ごとにトレンチを設定することにより、調査区全体の遺構の濃淡を把握することとした。設定されたトレンチは合計12本、配置は第３図のとおりである。その結果、最東部のＴ１と、中央よりのＴ６から西端部のＴ12に至る範囲で遺物を包含した自然流路や溝状の遺構が検出された。基本的には２、３面の水田下面で、含礫黄色シルトを切り込んだかたちでの検出であった。なお、Ｔ１周辺では現況水田や用水路の関係から拡張掘削が困難であったため、このトレンチ調査による記録でとどめざるを得なかった。したがって、本格調査時にある程度面的な調査となったのはＴ６以西の部分で、これらの部分についても用水路、畦畔に規制されて第３図に示されたような調査区の形状、配置となった。

(2) 試掘調査出土遺物（第４図、図版８）

試掘調査で遺物を出土したのはＴ１、３～６、８、11である。このうち、Ｔ１では幅15mの自然流路が検出されており、遺物はこの流路出土のものである。湧水やこれにともなう崩落のため深部までの掘削は行い得なかった。遺物は後述する流路 SR １の５・６層相当層出土のものである。また、Ｔ３～５は水田耕土中の採集品、Ｔ６以西のトレンチでは流路あるいは溝の平面プラン検出面までの掘削でとどめており、遺物は遺構最上層のものということになる。

Ｔ１出土遺物

須恵器蓋（１～４）　口縁部にかえりをもつもの４と、持たない２・３がある。４には１のような宝珠つまみが伴う。

須恵器坏（５～７）　貼り付け高台を持つ５・７と、持たない６がある。６は復原口径10.1cm、器高2.5cmと小型で浅く、口縁部が大きく外反する特異な形態である。口端部内面には凹線状の窪みが巡る。

須恵器甕（８）　肩部から口頸基部にかけての片、肩部には２条の沈線、その上位に５本単位の櫛歯状工具による列点文を施されている。

須恵器壺（９）　肩部から体部下位の片、肩部の２条の沈線間に４本単位の工具による押し引きに近い列点文を施されている。

須恵器皿（10）　復原口径17.2cmの皿、乳白色の色調を呈している。

土師器坏（11）　円盤高台の回転台土師器坏の底部、切り離しは回転ヘラ切りである。

Ｔ３出土遺物

土師器坏（12）　回転台成形の坏片、回転ヘラ切りによる切り離しである。

Ｔ４出土遺物

青磁碗（13・14）　龍泉窯系碗の底部小片、いずれも高台内には施釉されず、13では畳付も削られている。

Ｔ５出土遺物

須恵器甕（15）　焼成不良の口頸部片である。口縁部は外上方に直線的に開き、上端に面を持っている。

碗（16）　黒褐色の鉄釉を施された天目茶碗の小破片である。

Ｔ６出土遺物

須恵器坏（17）　体部の遺存が僅かなため、判然としないが、若干歪んでいるものと思われる。底部外面は、ヘラ切り未調整のままである。

須恵器壺（18）　脚付壺の脚部片、１条の突帯と４方向の長方形透孔が確認できる。

Ｔ８出土遺物

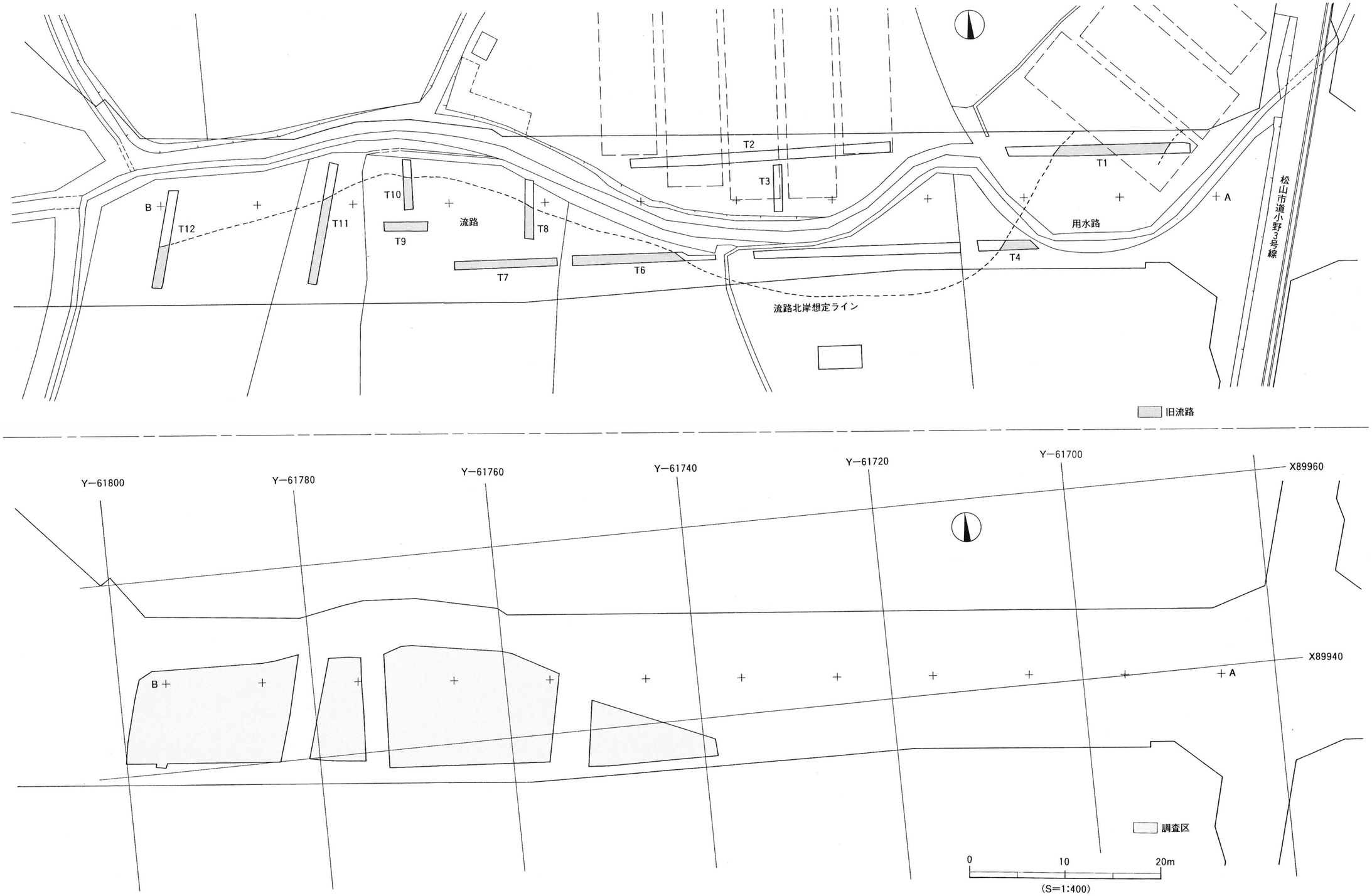
須恵器壺（19・20）　19は長頸壺の頸部、20は短頸壺の底～体部片である。

須恵器高坏（21）　脚裾片、復原径13.2cmを計る。

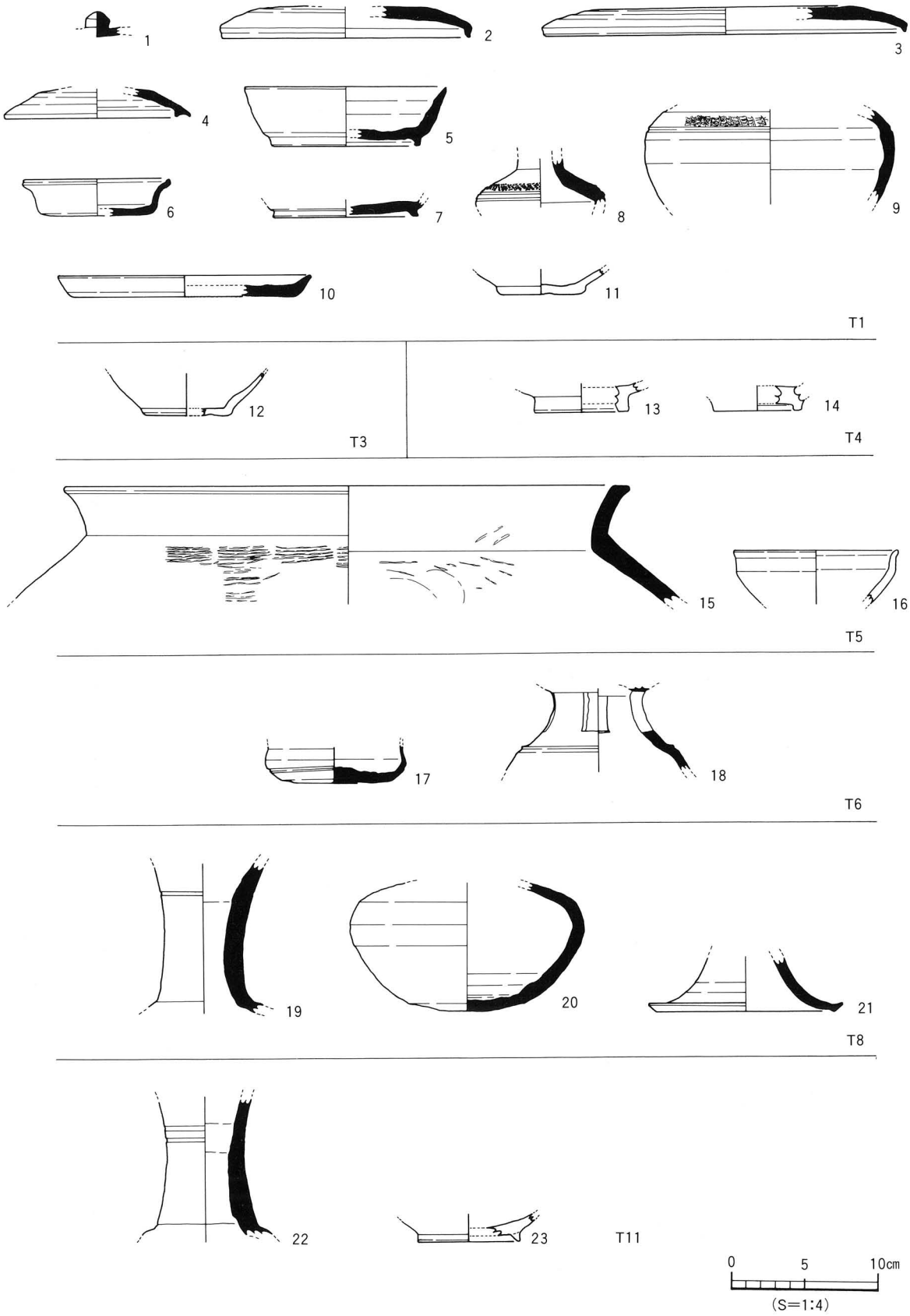
Ｔ11出土遺物

須恵器壺（22）　長頸壺頸部片、中位に平行沈線２条が施されている。

土師器椀（23）　断面三角形の貼り付け高台を持つ底部。白色に近い胎土で堅緻に焼成されている。



第３図　トレンチの配置図と調査地の位置図



第４図　試掘調査出土遺物実測図

２．遺構と遺物

検出された遺構には、SR １としている自然流路と溝 SD １がある。SR １は東から西方向に蛇行しながら流れており、調査ではその北岸付近の一部のみが検出されたにすぎない。これとても湧水のため最下層まで完掘できたわけではないが、掘削できた範囲での最下層10層には弥生時代前期の遺物が比較的単純なかたちで包含されている。何面かの水田耕土下面の５・６層には古墳時代から中世にかけての遺物があり、その下位、10層上面の８・９層には、５・６層相当、10層相当の遺物が混淆状態で包含されていた。

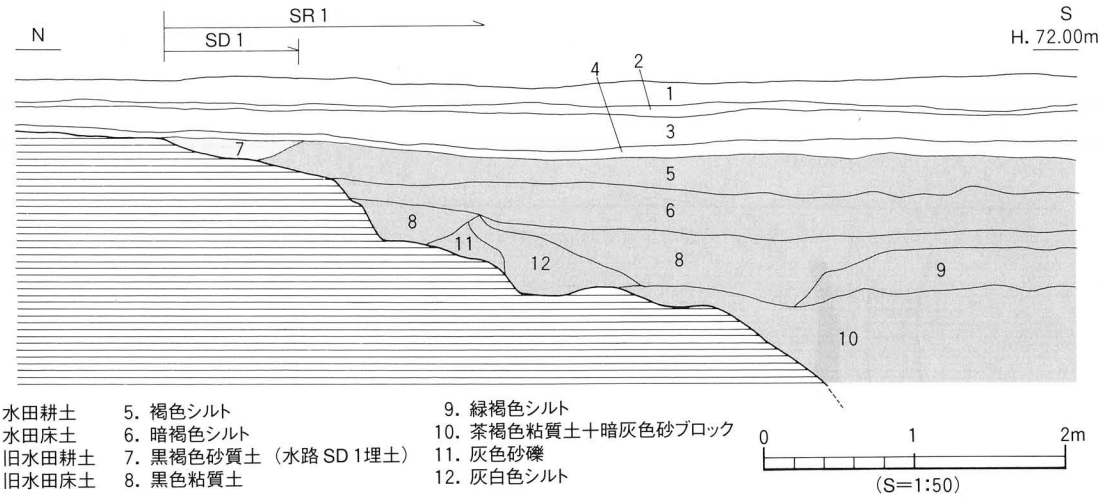
SD １は SR １を切る溝で、深さ10～30cm程度の遺存状況である。多くの角礫や円礫とともに弥生時代から中世までの遺物を含んでいる。本来これらの礫によって構築された石組みの水路であったものと思われる。

(1) SR １出土遺物（第７～17図）

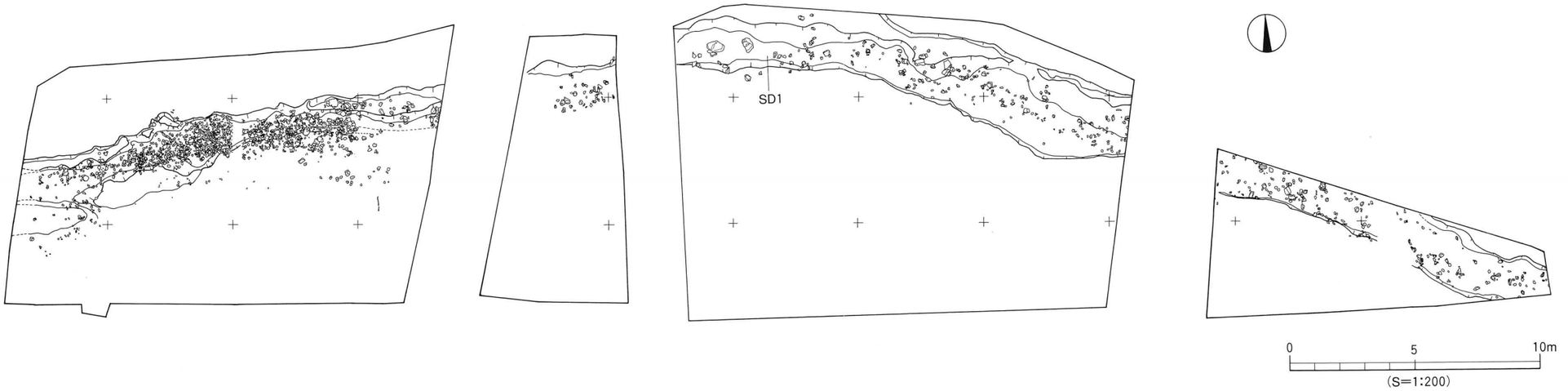
10層出土の遺物（第７～12図、図版５・６）

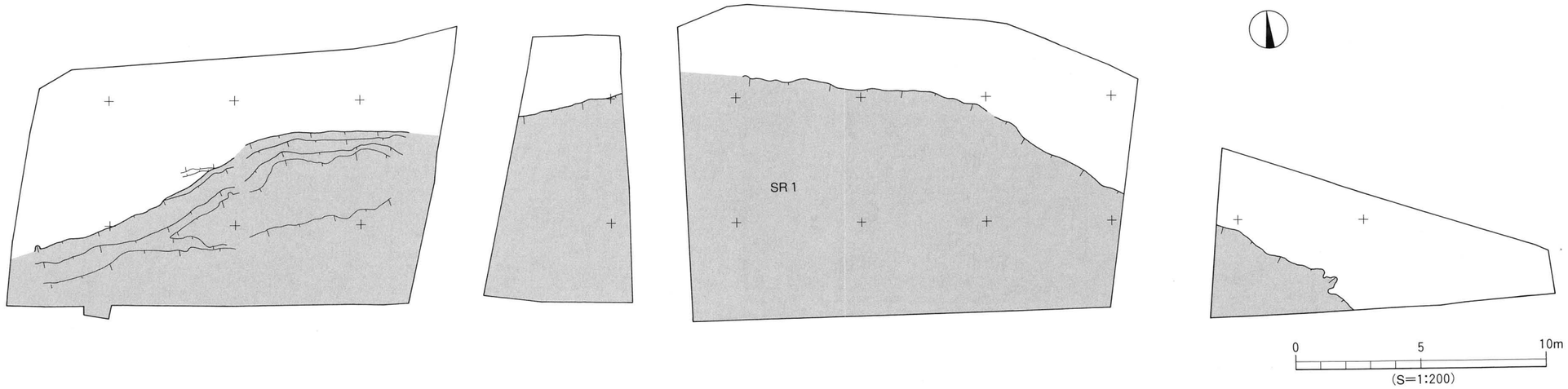
弥生土器（第７～12図）

甕（24～65）　24～27は口縁部を折り曲げ、端部に刻み目を持ち、頸部無文のものである。頸部にヘラ描沈線による施文を持つ28～34の多くが口縁部折り曲げであるが、33は口端部に接して断面三角形の突帯状の貼り付けによる口縁部で三角形の頂部を小さく刻まれている。胴部の内外面に粗いミガキを施されている。34は口径14.5～14.8cm、口縁部を折り曲げた後、花弁状の突起を捻り出すように成形した特異な形状の口縁部形態をなしている。頸部には４条のヘラ描沈線が巡っている。その他、頸部施文には35のような複数条の沈線と山形文を組み合わせたものや、37のような格子状の施文、48のような沈線と刺突文の組み合わせなどがある。底部には分厚い平底が多いが、中には58～60のように低い輪高台状に周縁が若干高くなるものや、窪み底の62・63などがある。57や60のようなものは壺であるかもしれない。その他、64や65のようなものは、中期以降に年代の降るものである。

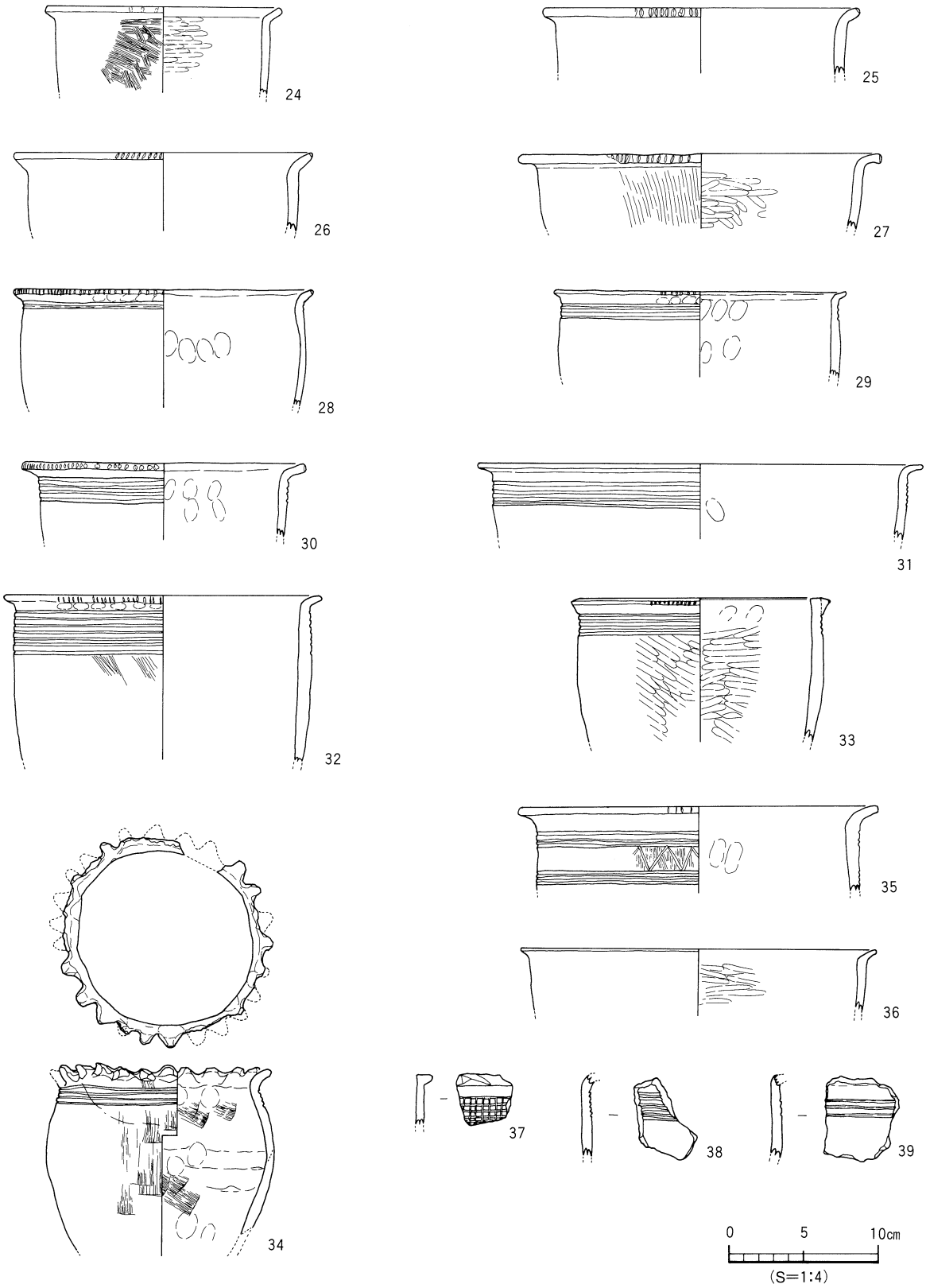


第５図　SR １土層堆積図

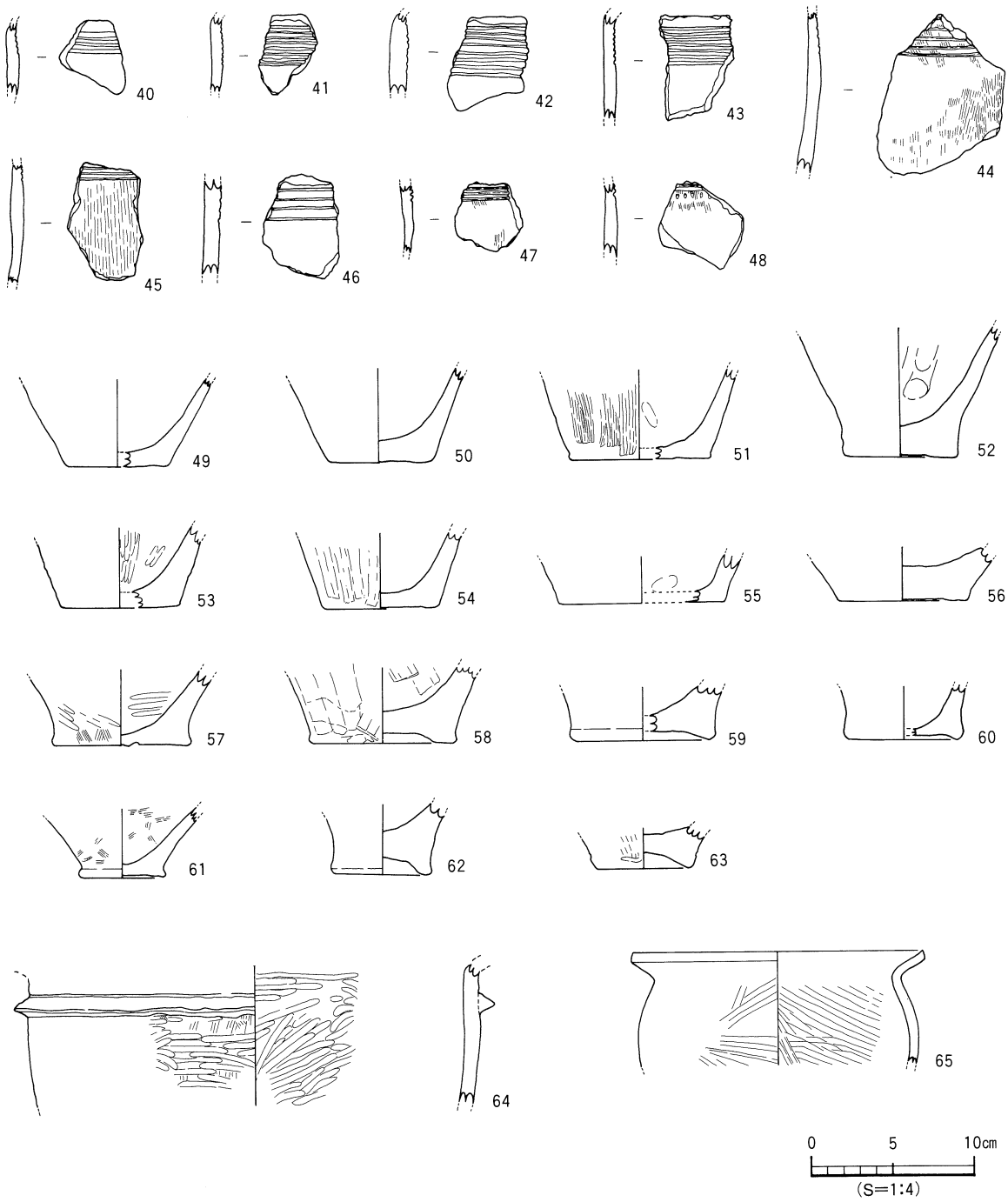




第６図　SD １と SR １の検出状況図

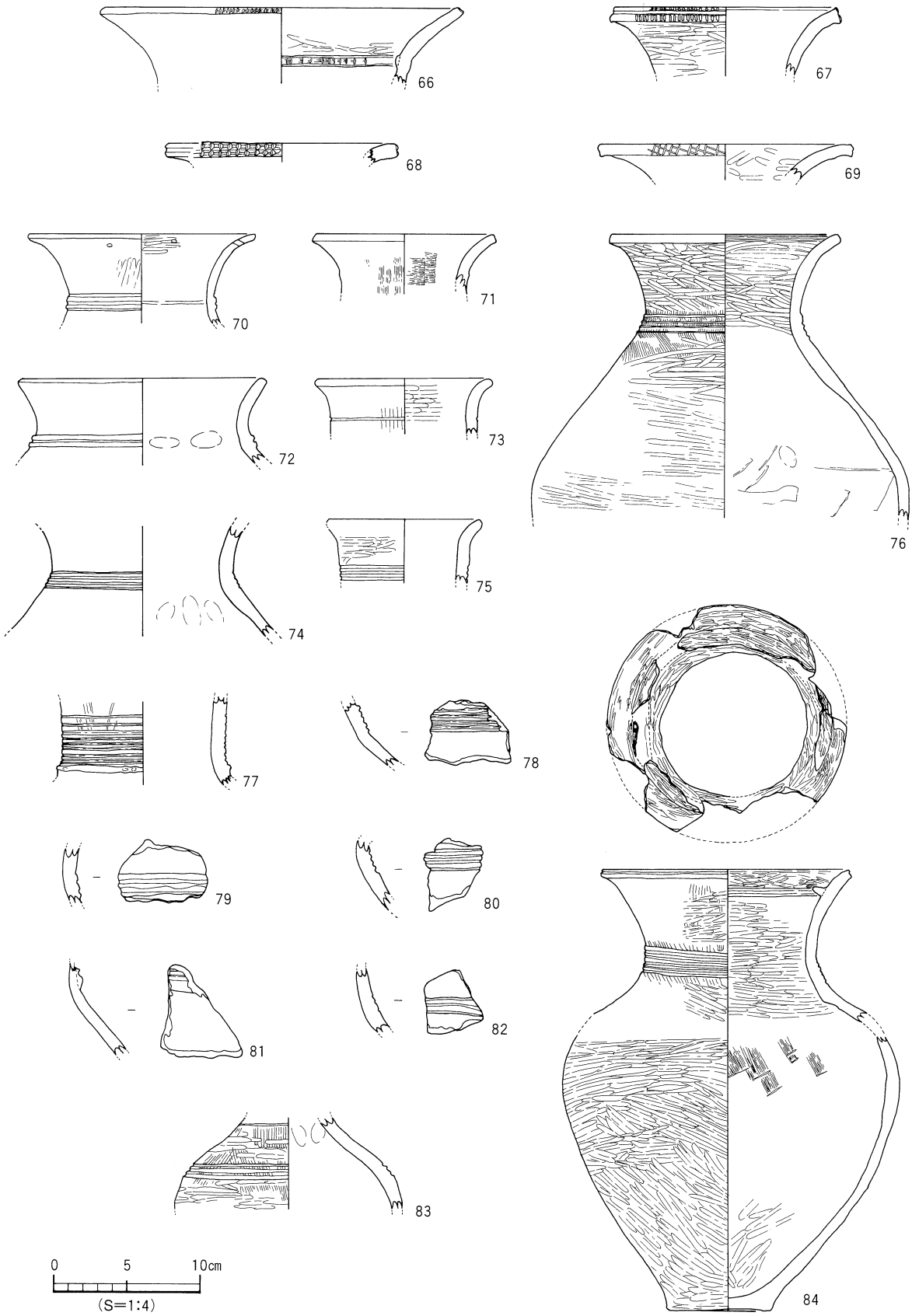


第７図　SR 1　10層出土遺物実測図(1)

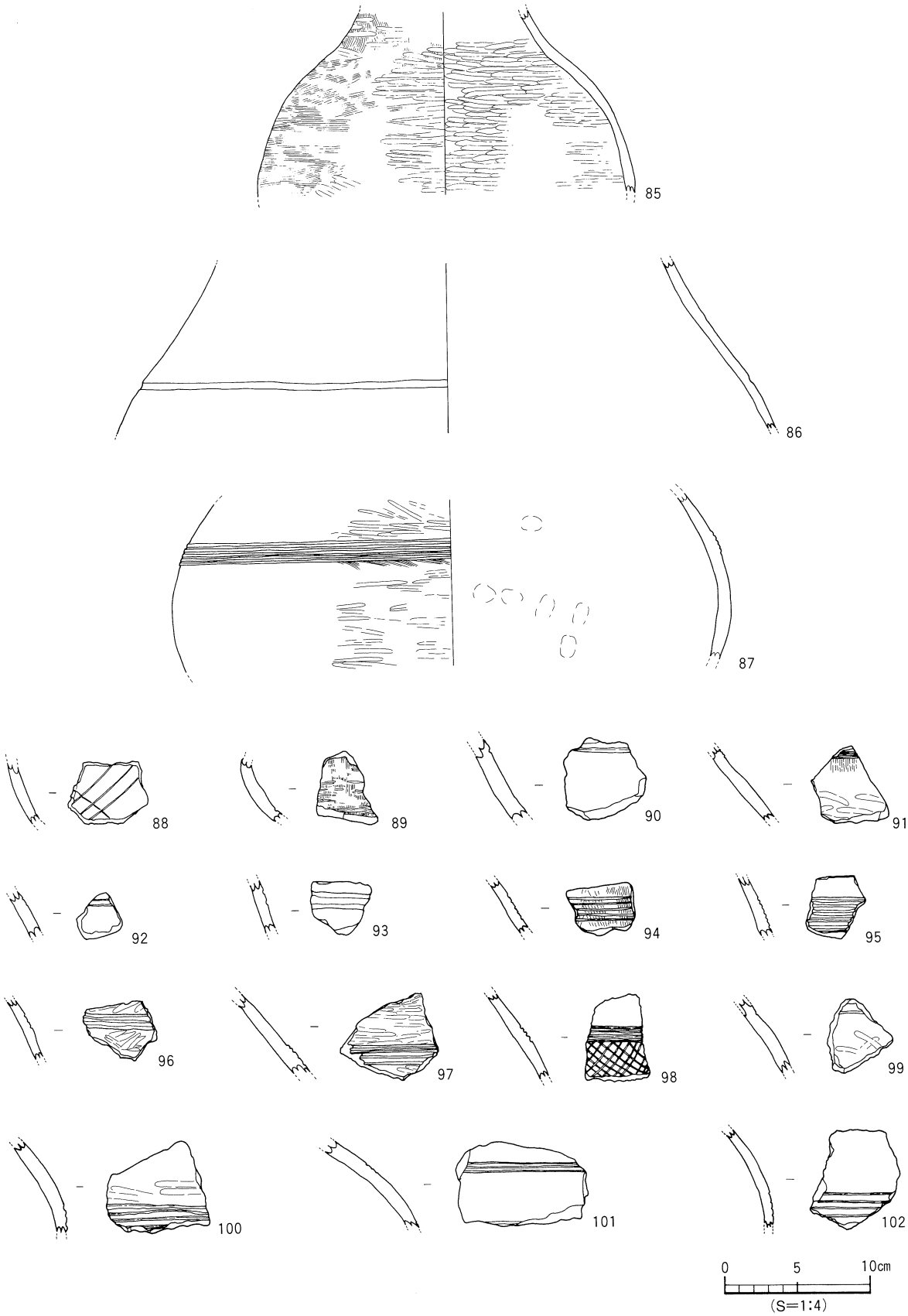


第８図　SR １　10層出土遺物実測図(2)

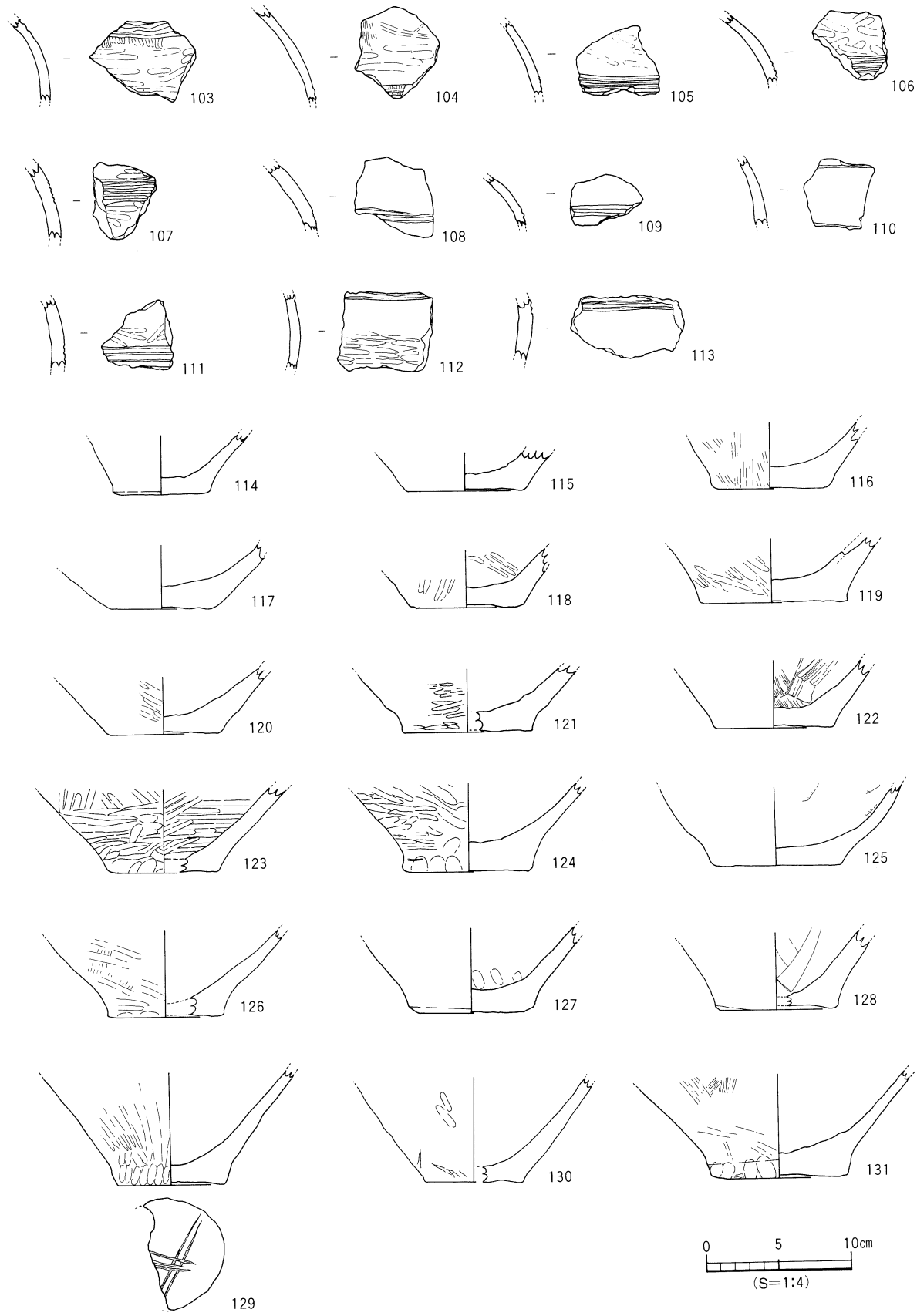
壺（66～131）　中・小型品が多く、口径が30cmを超えると考えられるような大型品86・97などが僅かに存在している。中・小型品の口頸部には、74・76のように筒状の頸部を経て短い口縁部が開くもの、肩部からすぼまった後明確な頸部を形成しないで口縁部が外上方に開くものとがある。多くのものが頸部、あるいは胴上・中位にヘラ描沈線を主体とした施文を持つ。これらの中には明確な削り出し突帯を持つ70・72・76・78や、曖昧ながらも削り出し突帯状を呈する84・97などが含まれている。口端面に刻みを持つものも多く、67・68のように横位の一条の沈線と刻み目を併せ持つものもある。



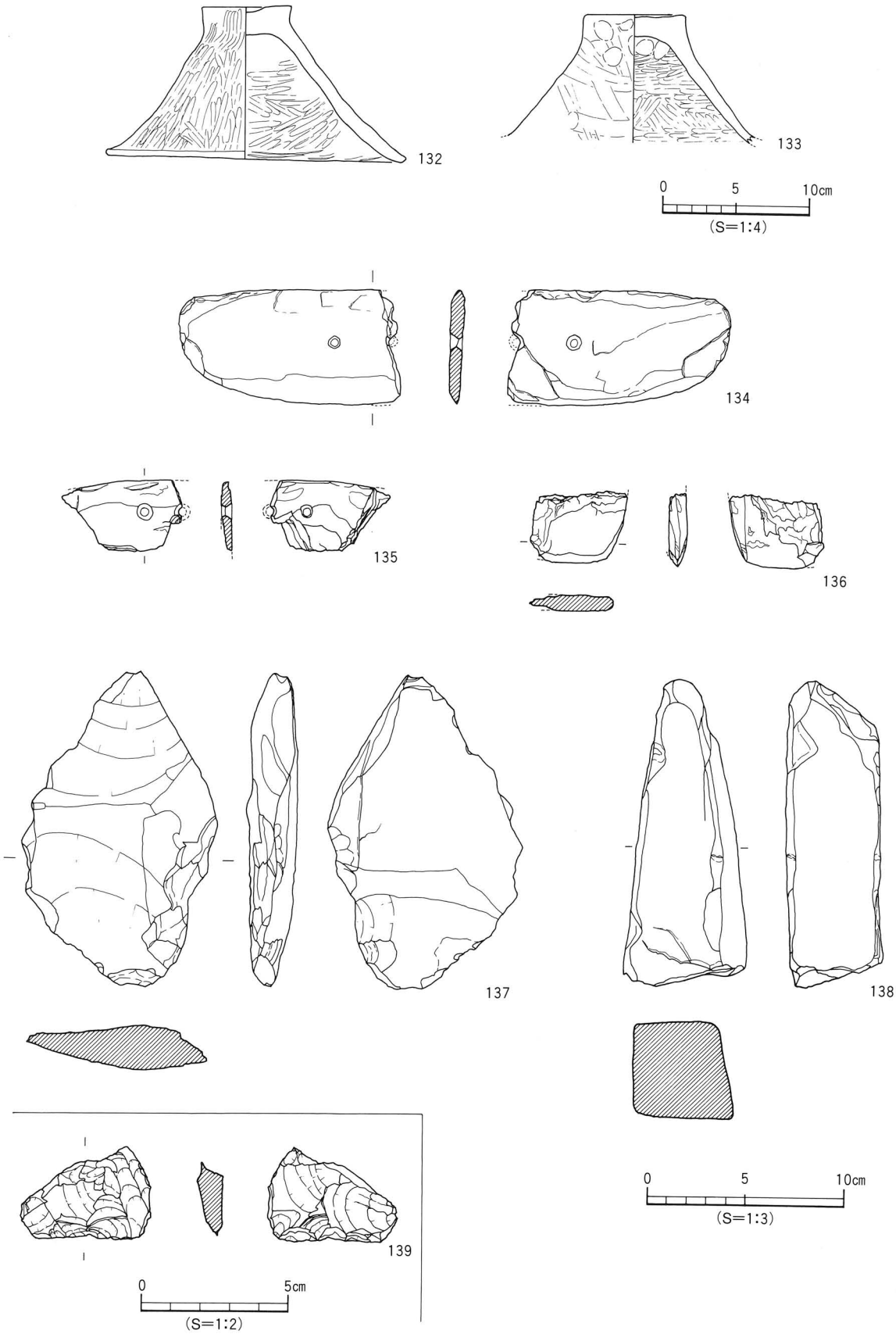
第9図　SR 1　10層出土遺物実測図(3)



第10図　SR 1　10層出土遺物実測図(4)



第11図　SR 1　10層出土遺物実測図(5)



第12図　SR 1　10層出土遺物実測図(6)

長頸壺のなかには所謂「連鎖状刻目文」を施された突帯を伴う77のようなものもある。なお、81の頸部突帯は貼り付けによっている。66・84では口縁部内面突帯を伴う。底部は平底を基本としている。129の外底面にはヘラ描による記号状の陰刻が施されている。またこれらの壺の多くはよく磨かれ、比較的堅緻に焼かれている。

蓋（132・133）　復原完形品132は器高10.4cm、裾径20.4cmで、裾部を欠く133とともに天井部は若干の窪みを持っている。132は内外面ともに、また133では内面をよく磨かれ、焼成も堅緻である。

石製品（第12図）

石庖丁（134・135）　2点ともに緑色片岩製で、134は外湾刃半月形、両面からの2箇所の穿孔のうち、その1箇所の部分で折損している。研磨は全面には行われず、刃部と背部の周縁のごく限られた部分を磨かれているのみである。刃部の成形に偏りはなく、両面から均等に研ぎ出されている。135は、穿孔部から背部周辺の破片であるが、134と同形態をなすものと考えられる。

石斧（136）　黒色片岩製の加工斧片。剝離や破損のため、刃部と側縁の一部のみが生きているが、刃部は偏った研ぎとなっている。

剝片（137・139）　137は安山岩の大型剝片、139はサヌカイトである。

砥石（138）　細粒砂岩を素材とした砥石、3面を使用されている。

８・９層出土の遺物（第13・14図、図版7）

縄文土器（第13図）

鉢（140）　胴部から頸部の小破片で、胴部で強く屈曲した後、頸部が大きく外反する。晩期中～後半に属するものと思われる。

弥生土器（第13図）

壺（141～148）　141は明確な頸部を形成せず、短い口縁部が開くもの、頸部には2条の沈線を施される。145では筒状の頸部を経て短い口縁部が開く。胴部中位と頸基部には4～5条の沈線が巡り、頸部ではこの沈線に「連鎖状刻目文」を施した突帯が組み合わされている。口縁部内面には刻目を持った突帯が注口状に巡っている。なお、胎土には長石粒が多く含まれる。142も口縁部内面突帯を持つ口縁部片であるが、この内面突帯上面には連続竹管文が施されている。胴部に施文を持つものには、143のような沈線・重弧文・斜格子文を組み合わされたものがある。底部には146のような突出した平底と単純な平底とがあるが、後者は時期が下る可能性がある。

甕（149・150）　149は強く屈曲した短い口縁部と、頸部下に断面三角形の圧痕文突帯を持つ甕で、中期中葉の特徴を備えている。150は、これよりも降る中期後葉、凹線文系の甕である。

蓋（151）　裾径14.4cmの小型の蓋。天井部外面に若干の摩滅がみられるが、現況で器高6.6cmを測る。器壁が分厚く、外面の調整も刷毛目の後ナデられているのみで磨きはみられず、比較的鈍重な印象を受ける。

須恵器（第14図）

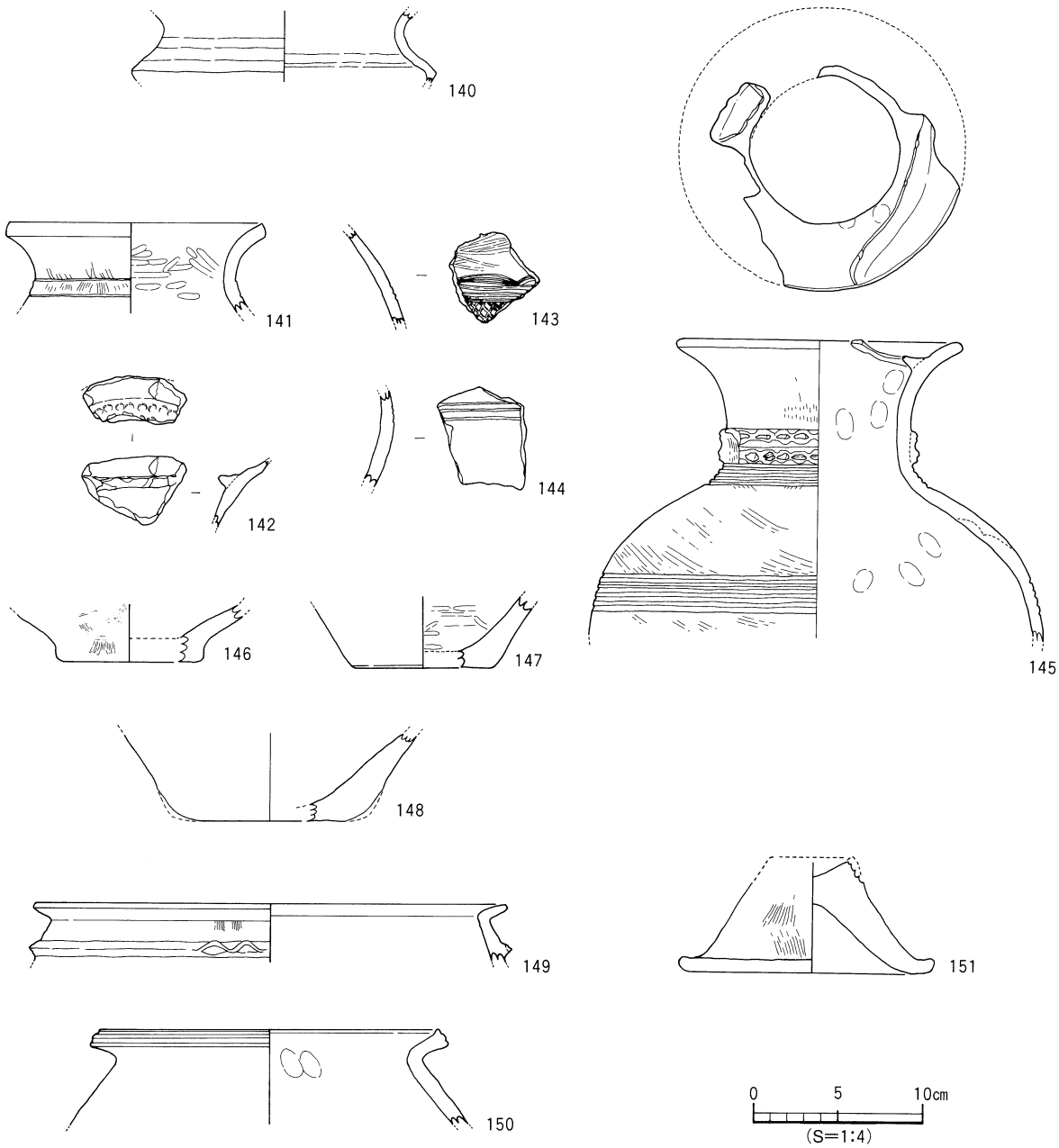
瑳（152）　頸部から口縁部を欠失している。胴部上位の穿孔部直上と頸基部にそれぞれ1条の沈線

が巡る。焼成は甘く、乳白色に近い色調を呈している。

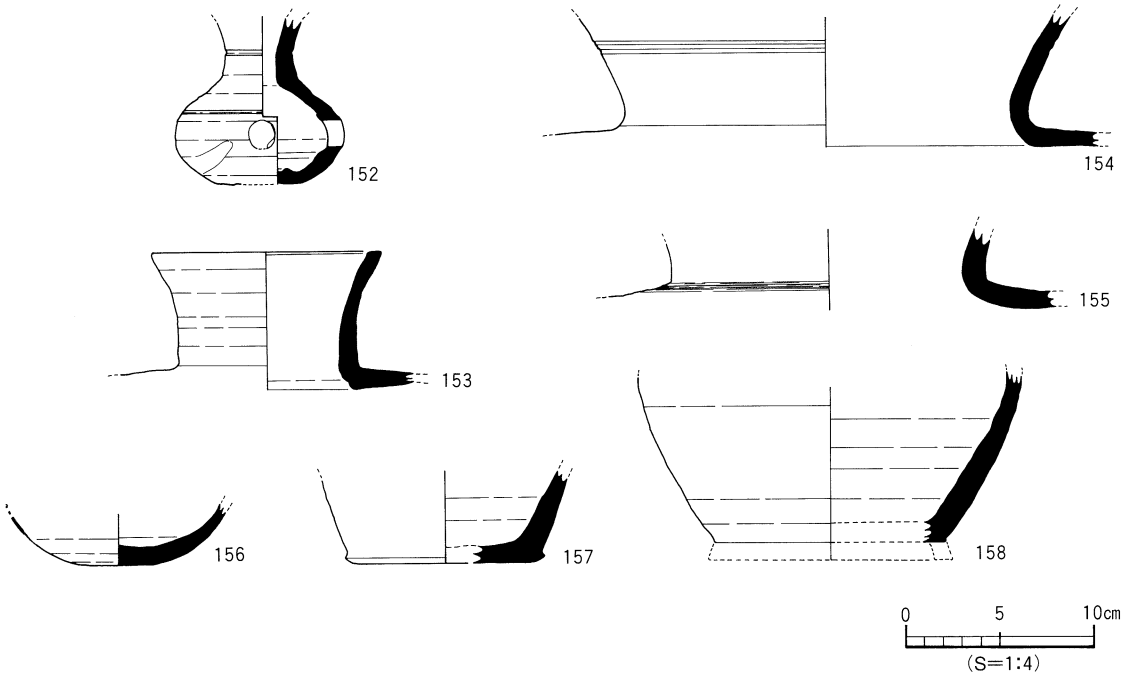
横瓮（153）　復原口径12.2cmの口縁部片。頸部の屈曲の度合いからすると、横瓮とするのが適当と思われる。

甕（154・155）　大型甕の頸部片２点。

壺（156～158）　すべて底部片で、丸底の156、平底の157、高台を欠いてはいるが、輪高台の158とがある。



第13図　SR１　８・９層出土遺物実測図(1)



第14図　SR 1　8・9層出土遺物実測図(2)

5・6層出土の遺物（第15～17図、図版7）

須恵器（第15・16図）

坏（159～176）　身には古墳時代タイプのもの160～164と、それ以降の身、蓋が逆転するタイプ165・166、さらに後続する159・167～176のようなものがある。このうち、164は蓋になるかもしれない。

皿（177・178）　177の口縁部が外上方に開き気味に立ち上がるのに対して、178はより垂直に近く立ち上がっている。

椀（179・180）　内湾する口縁部の破片と、円盤高台の底部片がある。底部外面は切り離し後撫でられており、すのこ痕が残っている。

高坏（181～183）　小型の高坏脚部片。

壺（184～192）　短頸壺、長頸壺、脚付壺などがある。短頸壺187の肩部や丸底の壺189の外底面にはヘラ記号が刻まれている。脚付壺192の脚端部外面にはヘラによる列点文が施されている。

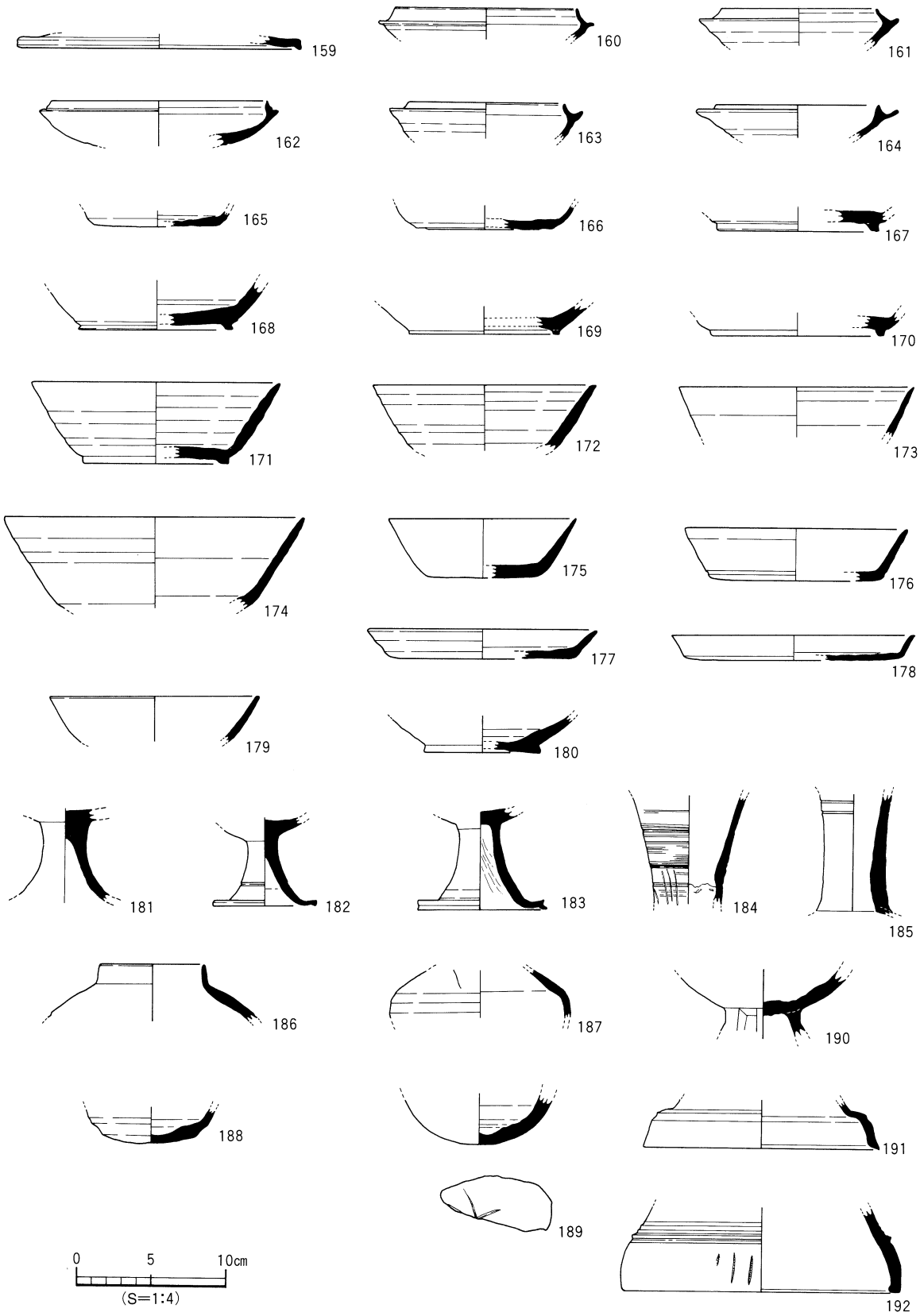
甕（193～198）　小型の胴部198のほか口頸部の出土がある。198には195のような短く外上方に開くような口縁部が伴うものと考えられる。

土師器（第16図）

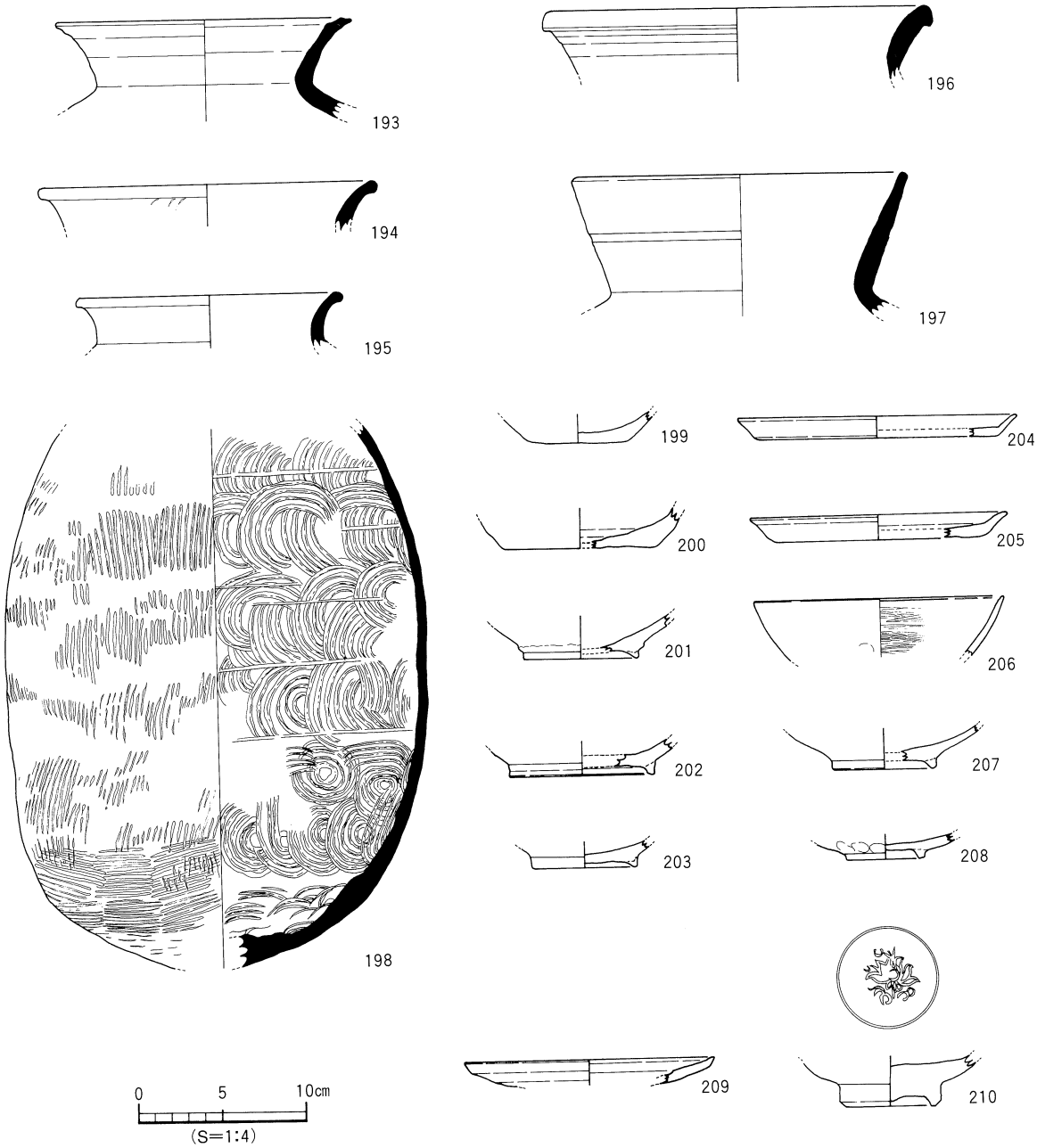
坏（199・200）　回転台土師器坏の底部が2点出土している。うち、199は二次的に被熱している。

椀（201～203）　貼り付け高台を持つ椀底部片。

皿（204・205）　204は復原底径14.5cmの底部から短い口縁部が外上方に直線的に立ち上がっている。鋭角的に立ち上がる204に較べて205の屈曲は緩やかで、口縁部が若干外反している。



第15図　SR１　５・６層出土遺物実測図(1)



第16図　SR 1　5・6層出土遺物実測図(2)

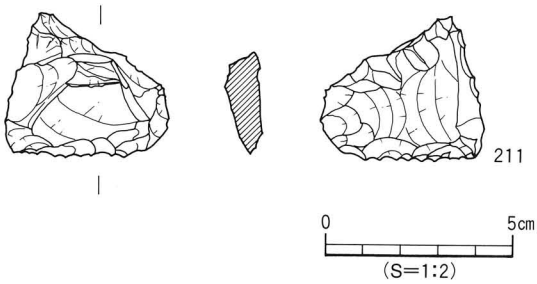
黒色土器（第16図）

椀（206･207）　両者ともにA類椀、206は口縁部片、内面には横方向の細かいミガキを施されている。

瓦器椀（第16図―208）　直径4.7cmの低い輪高台を持つ和泉型椀の底部片。

施釉陶器（第16図）

灰釉皿（209）　内面に段を持つ段皿、外面の施釉部位は口縁部付近のみ。



第17図　SR１　５・６層出土遺物実測図(3)

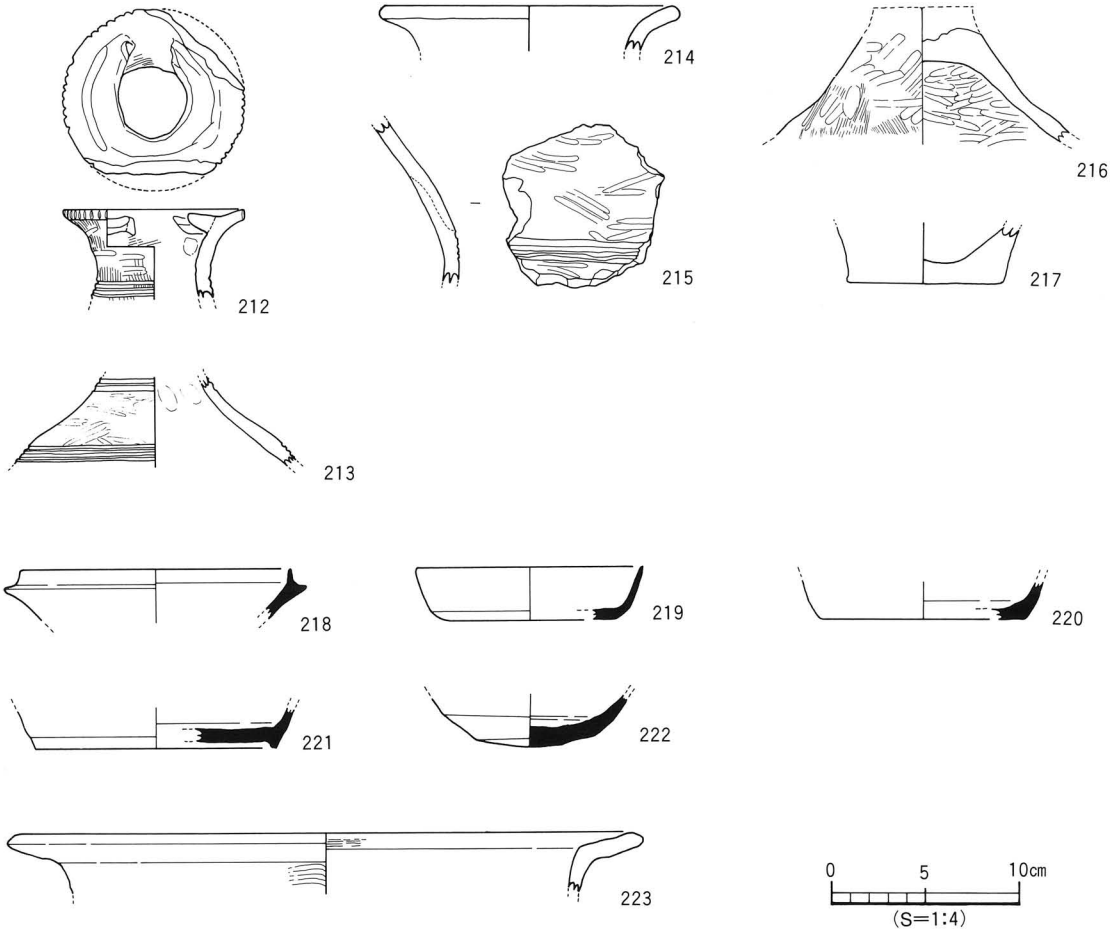
青磁碗（210）　龍泉窯系青磁碗。内面見込み部には花文を陰刻するが、この部分には釉掛けが施されていない。また、高台内面や畳付けも露胎である。

石製品（第17図）

スクレイパー（211）　サヌカイトの横長剝片を素材としている。

層位不明の遺物（第18図、図版７）

とり上げ、あるいは整理途中で結果的に出土層位が曖昧になってしまった遺物が若干存在するが、SR １出土であることにかわりはないので、ここでとり上げておく。



第18図　SR １出土層位不明遺物実測図

弥生土器

壺（212～217）　2点ある口縁部のうち、212は口径9.7cmを測る小型品。口端部に刻みを持ち、内面には馬蹄形状に突帯が貼り付けられ、注口状になっている。頸部外面には4条の沈線が施されている。外面は刷毛目の後横方向に磨かれ、焼成は堅緻である。胴上部の片には小型品213と中型品215の2点があり、両者ともに最大径部やや上位に3～4条の沈線が巡っている。また、213の頸基部には現状で2条の沈線が確認できる。本来、212のような口頸部を伴っていたものと考えられる。

蓋（216）　裾部、天井部を欠く。外面の調整が刷毛目の後ヘラ状工具で粗くナデられているのに較べて内面は入念に磨かれている。

須恵器

坏（218～221）　身受けのかえりを持つ218、持たない平底の219・220、さらに底部に貼り付け高台を持つ221がある。

壺（222）　短頸壺の底部と思われる丸底の底部。

土師器

鍋（223）　口縁部の小片で復原口径には若干の不安があるが、中世の土師器鍋である。

SD 1出土の遺物（第19～23図、図版8）

弥生土器（第19図）

壺（224～227）　肩部の片224には、細い竹管様のものを3本、あるいは2本束ねた工具で、刺突列点文、平行沈線文、波状文を組み合わせた文様を描いている。その他の底部はみな平底、胎土に長石粒を多く含んでいる。

須恵器（第19・20図）

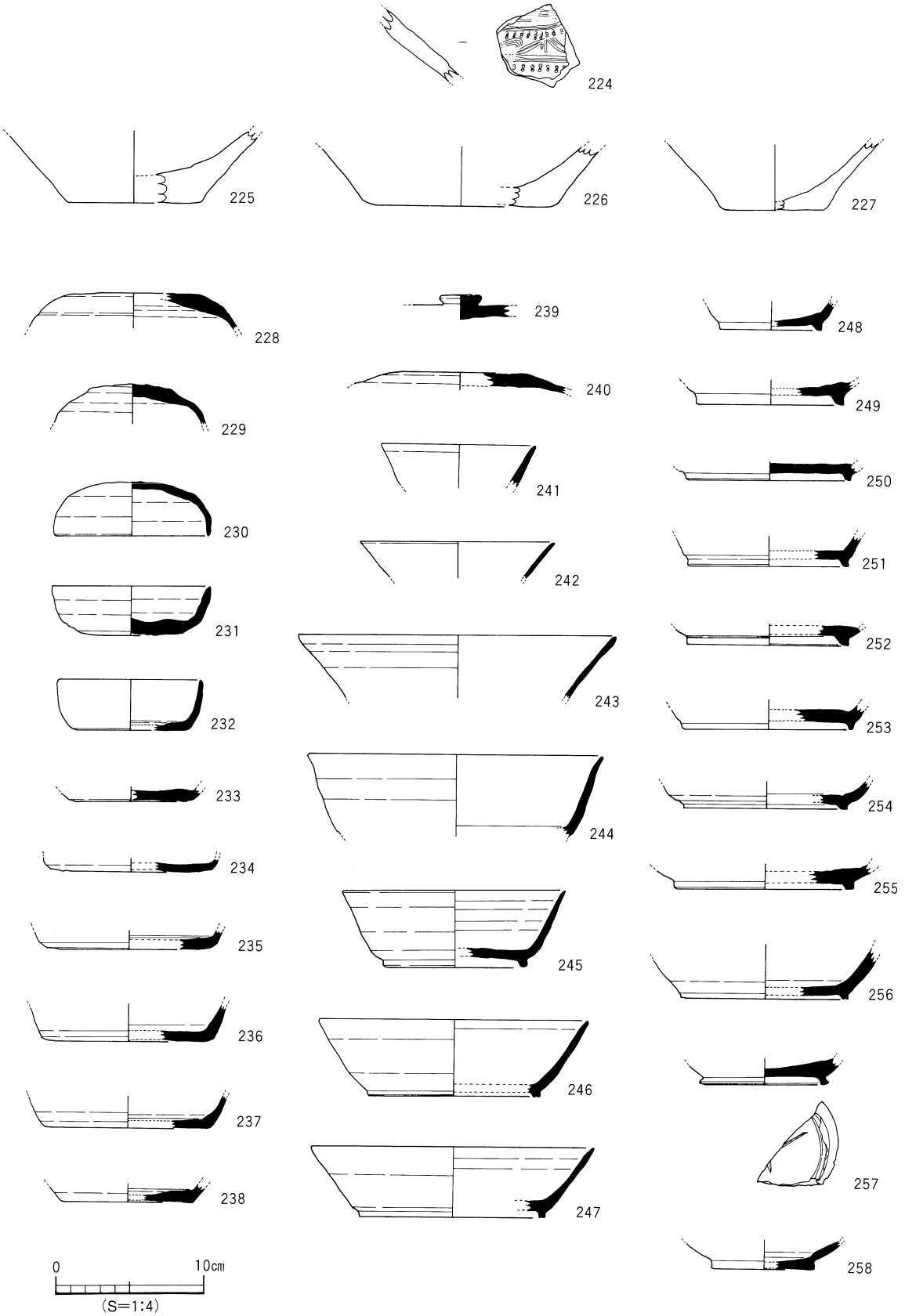
坏（228～257）　身・蓋をあわせると、古墳時代タイプのものから輪高台の底部を持つものまで各時期のものがある。これらのうち、比較的遺存状況の良好なものについて記述しておく。蓋230は口径10.4cm、器高3.6cm、口縁部と天井部との境に鈍い稜がある。天井部は、切り離し痕が目だたない程度に軽く撫でられている。身231は復原口径10.7cm、器高3.4cmを測る。底部の切り離し痕は調整されていない。底部で破裂しており、製品として用をなさなかったものと考えられる。身245は器高5.3cm、復原口径15.7cm、底径10.6cmを測る。断面方形の高台は貼り付けによる。体部は直線的に外上方に立ち上がるが、口縁部で若干外反している。

椀（258）　円盤状高台の底部片。

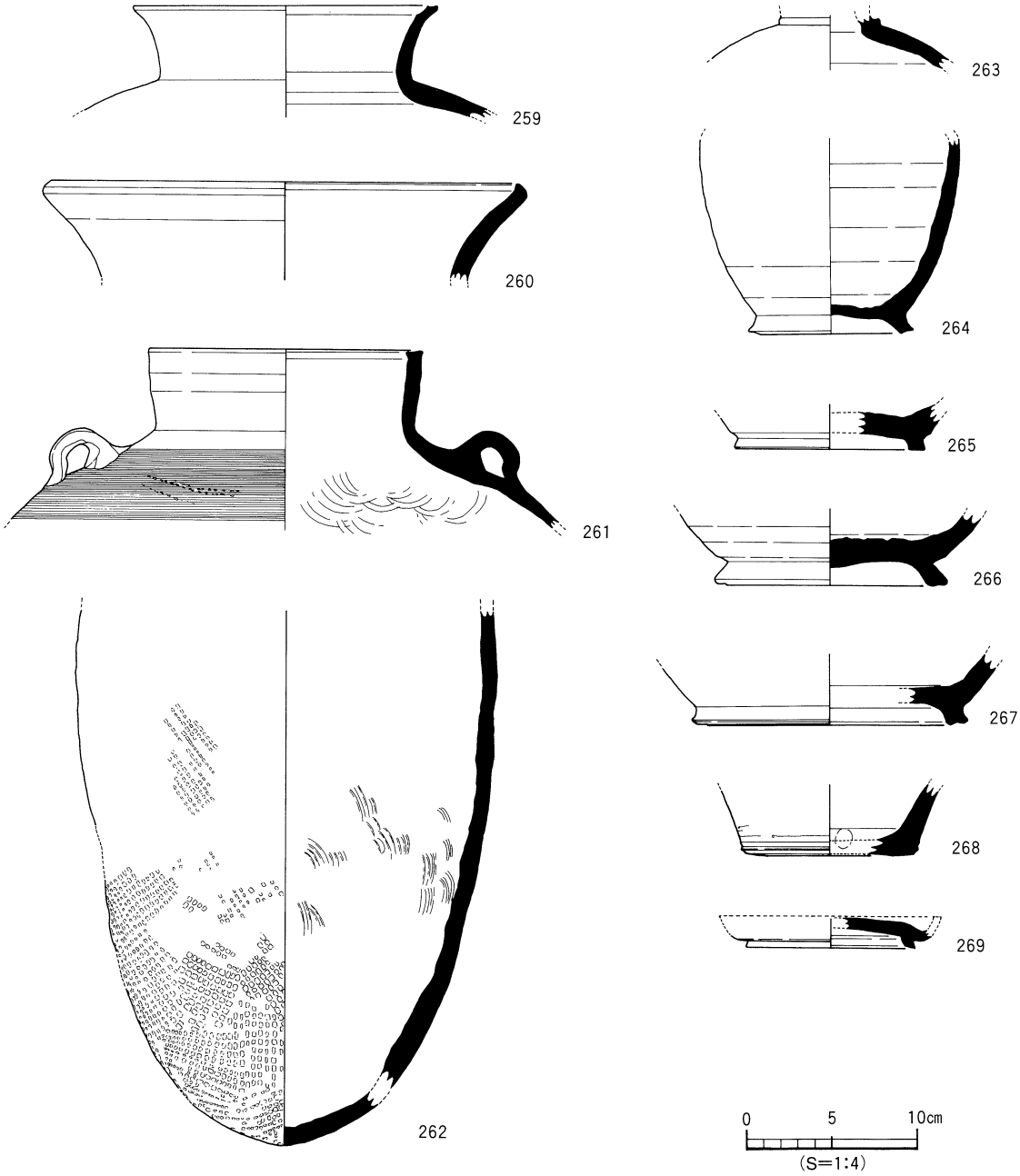
甕（259～262）　口頸部片3点のうち、口縁部が開くもの259・260と、直立する261とがある。261は肩部の2箇所に環状把手を持つ双耳甕である。262の胴部下半は砲弾形を呈する。外面は浅い格子叩き、内面の叩きは横方向に粗く撫で消されている。

壺（263～268）　輪高台を持つもの264～267と平底の268がある。肩部263と下半部264とは接合はしないが、同一個体と考えられるもので、稜を持って屈曲する胴部形態をなす。

硯（269）　かろうじて機能する程度の低い輪高台を持った小型の陶硯であるが、使用痕はみられない。



第19図　SD 1 出土遺物実測図(1)

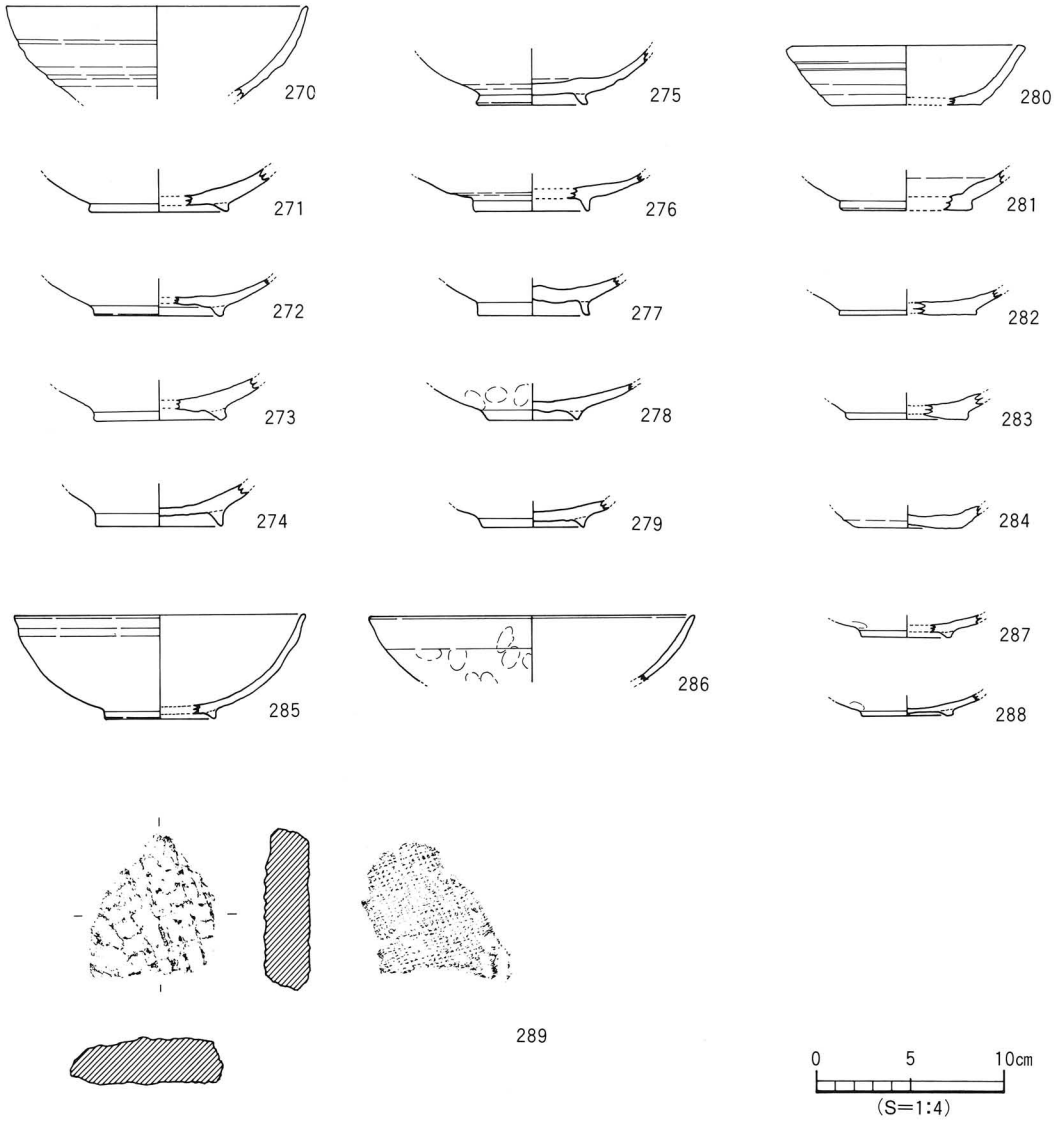


第20図　SD 1 出土遺物実測図(2)

土師器（第21図）

椀（270～279）　貼り付けの輪高台を持つ椀の一群。ほとんどが、断面三角形の低い高台を持つ。いずれも摩滅が進行したり、二次的な被熱により器面が荒れており観察が難しいが、270の内面は磨かれているようである。また、この椀の外面には回転成形の痕跡が凹凸として残っている。

坏（280～284）　回転台成形の坏の一群、これらも摩滅のため切りはなし痕等の観察はできない。284は小皿になるかもしれない。



第21図　SD 1 出土遺物実測図(3)

瓦器（第21図）

椀（285～288）　いずれも和泉型の椀である。285で器高5.2cm、口径15.5cm、底径5.8cmを測る。

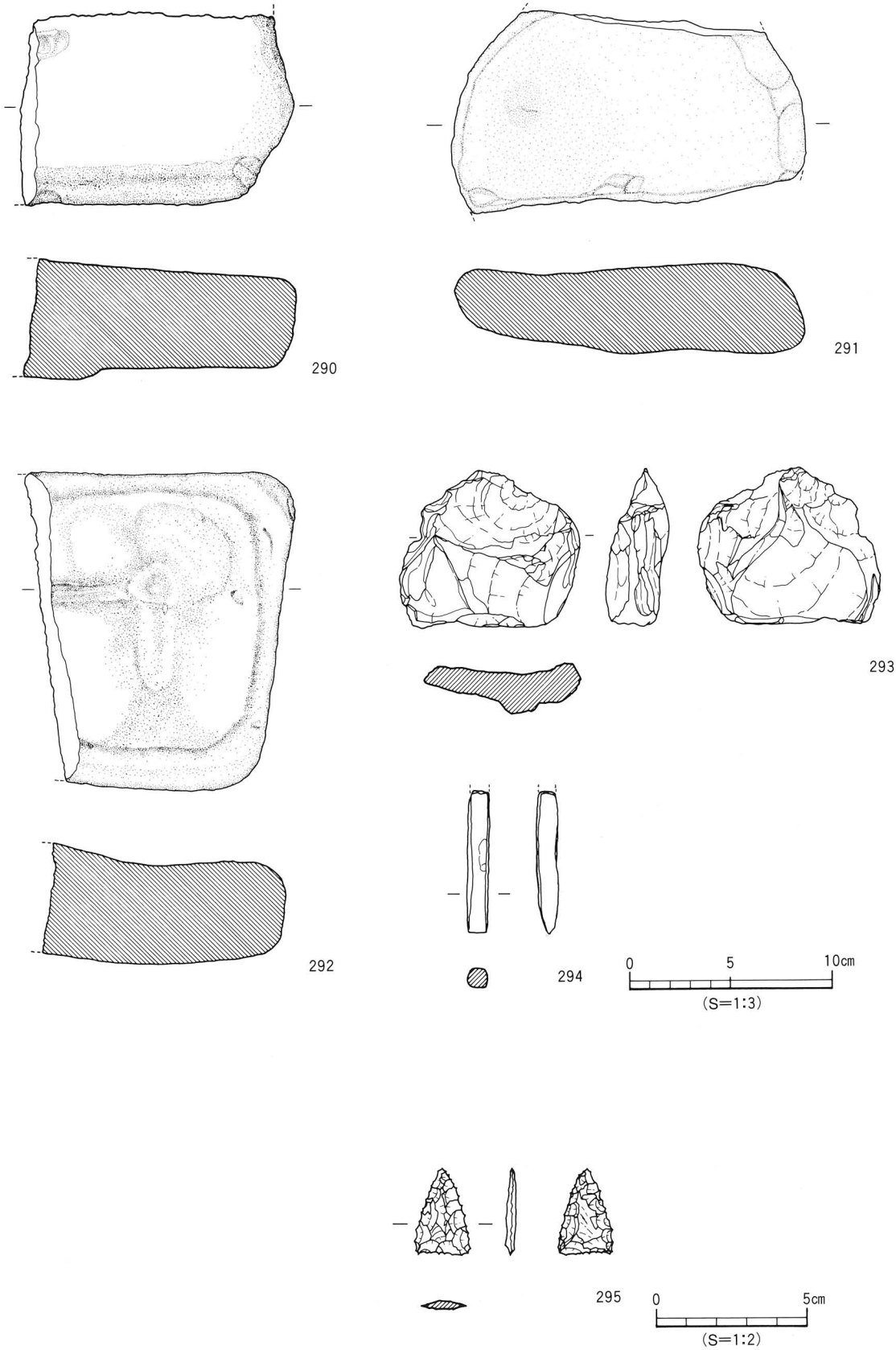
瓦（第21図―289）　斜格子叩きの平瓦と思われる片、表面の布目は若干粗い。

石製品（第22図）

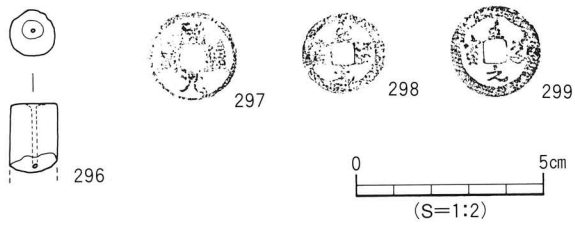
台石（290～292）　砂岩の自然石を利用したもので、いずれも破損している。作業面には擦り痕と敲打痕の双方が確認できる。

石核（293）　かなり風化しているが、サヌカイトの石核。側縁の２面に自然面を残している。

石斧（294）　緑泥片岩製の柱状片刃、基部を欠損しており、現存長で6.8cmを測る。横断面形は１



第22図　SD 1 出土遺物実測図(4)



第23図　SD １出土遺物実測図(5)・古銭拓影

cm四方の隅丸方形に近い形状をなしており、全体的に鎬が甘い。

石鏃（295）　長さ2.8cm、基部幅1.8cmの三角形鏃、重量1.4ｇを測る。サヌカイト製。

その他の遺物（第23図）

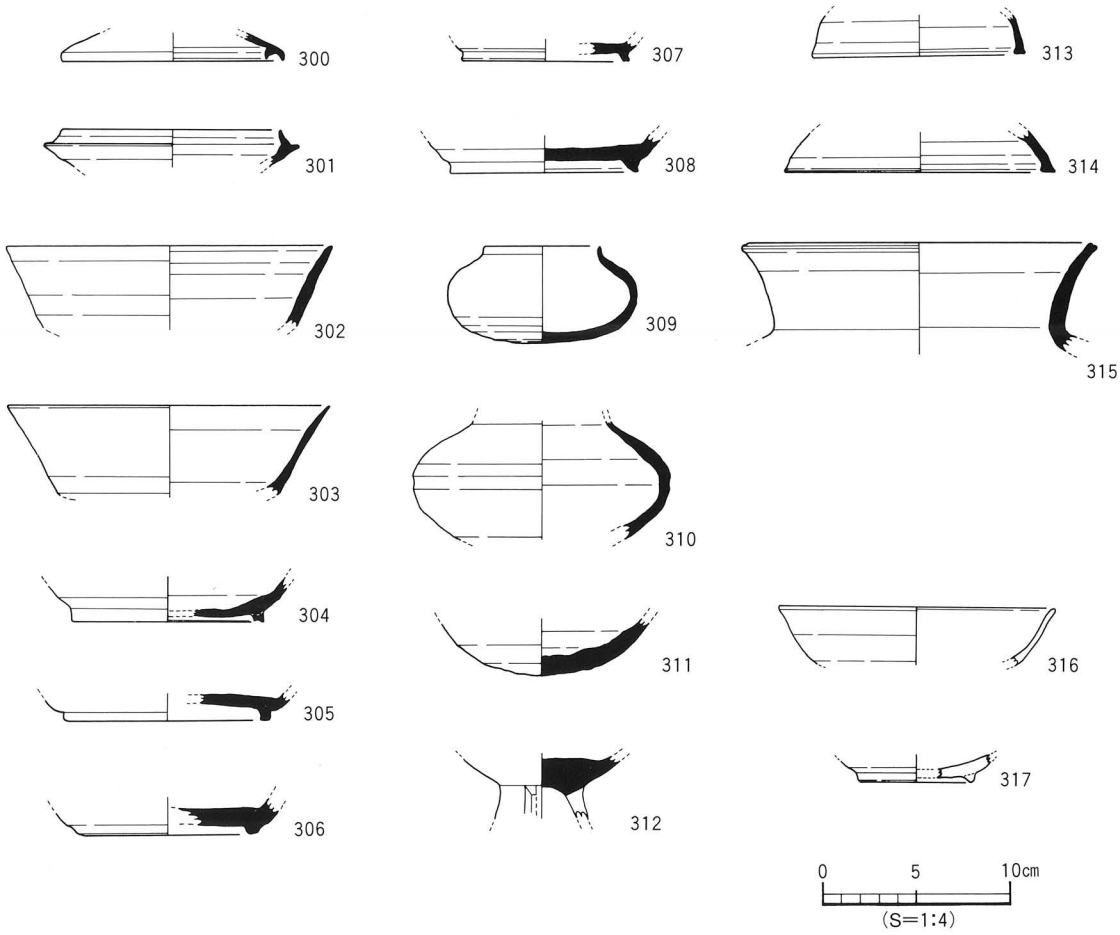
管玉（296）　直径1.2cmを測る大型の管玉片、碧玉製。

銭貨（297～299）　中国銭が３点出土している。297は「開元通寶」、621年初鋳の唐銭。298･299は955年初鋳の北宋銭、「至道元寶」２種。

耕作土中の表採遺物（第24・25図、図版８）

須恵器（第24図）

坏（300～308）　300はかえりを持つ蓋の小破片、端部に面を持つのが特徴的である。その他、輪高台を持つ坏が多く出土している。

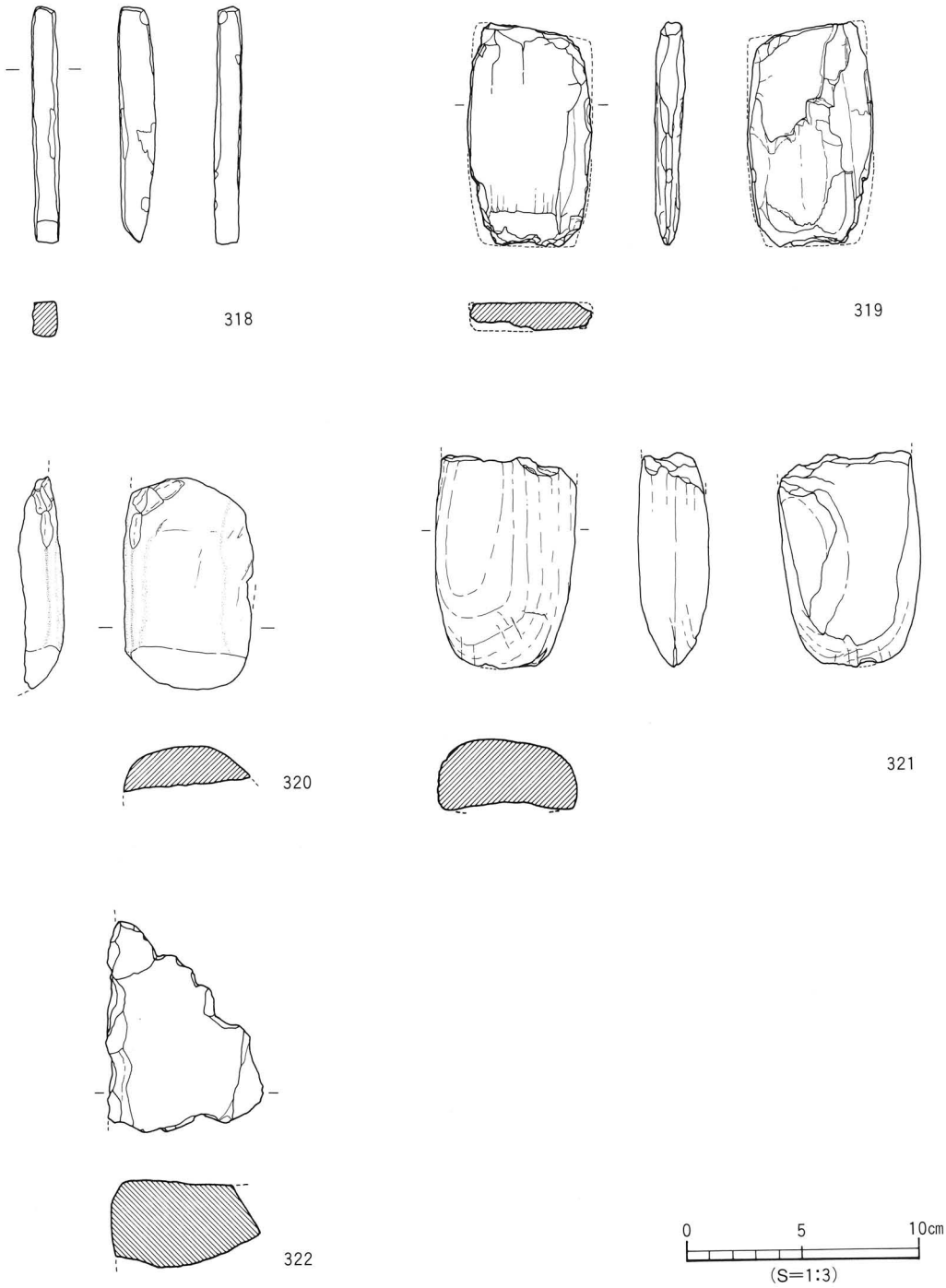


第24図　表採遺物実測図(1)

壺（309～312）　309・310は短頸壺、312は台付壺である。復原完形品の309は、口径6.3cm、器高5.2cm、胴部最大径10.1cmを測る小型品である。

蓋（313・314）　端部の形状に若干違和感があるが、一応壺蓋として扱っておく。特に314は脚付壺の脚端になるかもしれない。

甕（315）　端部に突帯や肥厚帯を持たず、これといった特徴のない口頸部。



第25図　表採遺物実測図(2)

緑釉陶器椀（第24図―316）　小片のため、傾きに若干不安な部分があり、皿になるかもしれない。須恵質の生地の内外面に施釉されているが、ほとんど銀化してしまっている。

土師器椀（第24図―317）　径5.8cmの貼り付け高台を持つ底部片、高台には貼り付け時の指頭圧痕がみられる。

石製品（第25図）

石斧（318～321）　加工斧２点、伐採斧２点の出土があり、いずれも緑泥片岩製である。柱状片刃の318は完形品で、全長10.2cm、重量36.0ｇ。両側面はほとんど研磨されていない。319は扁平片刃の未製品と考えられ、短冊状の自然石から刃部を研磨し始めた時点で製作を放棄している。320・321の２点の伐採斧は折損あるいは剝離した破損品である。

台石（322）　破損した小片であるが、肌理の細かい砂岩で擦り痕がある。

３．小　結

この調査区において調査されたのは、SR １としている自然流路と溝 SD １であり、両者ともに多様な遺物を包含していた。SR １は東西方向に蛇行しながら流れるもので、調査ではその北岸付近の一部が検出されているのみで、対岸となる南岸は検出されていない。ここで周辺の地形をみてみると、調査区内を西流している現況用水路の北直近には東西方向に走る段丘があり、この段丘に沿うように現在の用水路が流れ、また SR １の北岸も検出されている。したがって、現存するこの段丘は SR １によって形成されたものと考えられる。そこで、調査区の南方向を見渡してみると、南約70～100mの付近にこの北段丘に対応するような高まりが東西に走っており、この高まりが流路南岸に相当するものと考えられる。つまり、調査では幅70～100m前後の東西方向に走る大規模な流路の北岸付近の一部が検出されているものと推定できる。試掘調査Ｔ１で確認されたような幅10m程度の比較的小規模な流路は北東方向からこの大規模な流路に合流しているのであろう。

本文中でも述べたように流路の最深部まで完掘できたわけではないが、調査できた範囲内では流路内には大きく３枚の包含層があり、下位の第10層としている暗茶褐色粘質土からは弥生時代前期の遺物が出土している。甕でいえば多くのものが口縁部折り曲げで、端部に刻み目を持ち、頸部は無文のもの、２・３条から多いものでは７・８条程度のヘラ描沈線、あるいは複数条のヘラ描沈線間に山形文を組み合わせたものなどがある。外面の調整は確認できるものでは刷毛目あるいはナデが多いが、唯一口縁部貼り付けのもの（33）には内外面にミガキが採用されている。壺では、頸部や胴部上位に２・３条のヘラ描沈線を持つものが多い。これらの中には削り出した突帯上に沈線を施すものが含まれている。また、「連鎖状刻目」を伴う突帯を持つものも僅かではあるが存在している。これらのことから、10層の弥生遺物は前期後半から末、梅木謙一氏による当平野の弥生編年の前期Ⅲ・Ⅳ、特にⅢ段階を中心とした遺物群と判断できる。また、土器の多くには激しいローリングを受けた形跡がみられない。近年の調査で、流路北側の段丘上の直近において、やはりこの時期の遺物を伴う土坑等が検出されており、該期の集落が付近に存在することが判明しつつある。したがって、これらの遺物の多くはこの集落にかかわるものである可能性が高い。

小　　結

この10層上位の９～５層にかけては、７～８世紀を中心とした遺物が包含されている。下位の８・９層にはそれらに弥生時代前期後半から中期の遺物が混ざり、上位の５・６層には10～13世紀代の遺物が少量含まれるという状況である。先述のようにこの流路は溝 SD １に切られている。5・6層に含まれる比較的年代の降る遺物はこの溝にかかわるものと考え、流路 SR １の北岸は８世紀代にはほとんど埋まっていたものと推定する。当然、幅70mを超える流路であるので、その全体が埋没した年代については不明とせざるを得ない。

溝 SD １からは古代の遺物も多く出土し、また少量ながら弥生時代の土器・石器や古墳時代の管玉、唐銭・北宋銭、10世紀以降の土師器など多様な遺物が出土しているが、最も新しい遺物は13世紀中頃と考えられる瓦器である。また、これらの遺物とともに拳大から人頭大あるいはこれを超える大きさの角礫・円礫が多数検出された。これらの礫群によって構築された水路のようなものではなかったかと考えており、いつの段階で構築されたものかは不詳であるにしても、13世紀頃まではその機能を果たしていたものと考えられる。

なお、調査地北の段丘上には先述の弥生集落のみならず、縄文晩期の土坑、古墳時代後期の竪穴住居、古墳時代から古代の掘立柱建物など各期の遺構が確認されており、流路内の遺物の多くはやはり段丘上のこれらの遺構群にかかわるものと推定される。

〔文献〕

梅木　謙一　「西瀬戸内地方の弥生時代前期土器―松山平野を中心として―」『牟田裕二君追悼論集』牟田裕二君追悼論集刊行会 1994

山本　健一・山之内志郎　「古市遺跡２次調査地（１区）」「五楽遺跡（１、５区）」『松山市文化財調査年報IX』松山市教育委員会・㈶松山市埋蔵文化財センター 1997

遺物観察表

(1)　番号は本文中の通し番号である。

(2)　**法量欄**　（　）は復原推定値である。

調整欄　遺物の各部位を略記した。

口縁部―口、口縁端部―口端、頸部―頸、胴部―胴、胴部上半―胴上、胴部下半―胴下、底部―底、坏部―坏、脚部―脚、柱部―柱、天井部―天、受部―受、つまみ―つ、かえり―か、裾部―裾、高台―高

胎土・焼成欄　胎土には、その粗密とともに含まれる鉱物を略記した。石英―石、長石―長、砂粒―砂、なおカッコ内は鉱物粒子の大きさをミリメートル単位で表している。焼成具合は次のとおりである。良好―◎、ふつう―○、不良―△。

表１　試掘調査出土遺物観察表　土製品

(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
1	坏蓋	残高　1.8	宝珠つまみ。焼けひずみしている。	ナデ	ナデ	灰色	長(1) ◎	T-1	
2	坏蓋	口径 (17.0) 残高　2.2	やや扁平な笠形の天井部。口縁部は下方へ屈曲し端面にクボミがみられる。	天回転ヘラ削り 口回転ナデ	ナデ	灰色	密 ◎	T-1	
3	坏蓋	口径 (24.8) 残高　1.8	やや扁平な笠形の天井部。口縁部は下方へゆるやかに屈曲し端部は丸みをおびている。	天回転ヘラ削り 口回転ナデ	ナデ	灰色	長(1) ◎	T-1	
4	坏蓋	口径 (12.6) 残高　2.0	扁平な天井部。口縁端部とかえり端部はほぼ同じ位置で接地する。	回転ナデ	回転ナデ	灰色	長(1) ◎	T-1	
5	坏身	口径 (13.6) 器高　4.1 底径 (10.1)	貼り付け高台。高台は体部と底部の境付近に付く。	回転ナデ	回転ナデ	灰色	長(1) ◎	T-1	8
6	坏身	口径 (10.1) 器高　2.5 底径　7.6	底部は扁平。口縁部は外反し端面にはクボミがある。内面に自然釉付着。	口回転ナデ 底ヘラ切り	回転ナデ	白灰色 淡灰色	密 ◎	T-1	
7	坏身	底径 (10.0) 残高　1.1	底体部の境付近に貼り付高台。	口回転ナデ 底ヘラ切り	回転ナデ	灰色	密 ◎	T-1	
8	瓿	残高　3.1	肩部に２乗の沈線。その上位に５本単位の工具で押し引きしたような列点がある。自然釉付着。	回転ナデ	回転ナデ	淡灰色	密・長(1) ◎	T-1	
9	壺	残高　6.5	肩部に２乗の沈線。その間に４本単位の歯状工具による列点文がみられる。	回転ナデ	回転ナデ	淡灰色 白灰色	密・長(1) ◎	T-1	
10	皿	口径 (17.2) 器高　1.5 底径 (14.6)	平底。体部は斜め上方に直線的に立ち上がる。口縁端面部は丸みをおびている。	口ナデ 底回転ヘラ切り	ナデ	白色	密 △	T-1	
11	坏	底径　(5.2) 残高　1.7	円盤高台。	マメツ	マメツ	淡橙色	石・長(1) ○	T-1	
12	坏	底径　(5.6) 残高　2.9	平底の底部から斜め上に直線的に立ち上がる。	体ナデ 底回転ヘラ切り	ナデ	淡灰褐色 淡黄白色	石・長(1～2) ○	T-3	
13	碗	底径　(6.4) 残高　1.9	龍泉窯系青磁碗の底部。高台内面は露胎。畳付が削られている。	施釉	施釉	緑灰色	密 ◎	T-4	
14	碗	底径　(6.0) 残高　1.7	龍泉窯系青磁碗の底部。高台内面は露胎。	高施釉 底無釉	施釉	淡緑色	密 ◎	T-4	
15	甕	口径 (38.6) 残高　8.1	口縁部は外上方に直線的に開き上端部に面をもつ。	口回転ナデ 体タタキ	口回転ナデ 体タタキ	淡黄褐色	密 △	T-5	
16	碗	口径 (11.0) 残高　3.7	天目茶碗・黒褐色の鉄釉。	施釉	施釉	黒茶色	密 ◎	T-5	
17	坏	残高　2.4	底部は扁平で立ち上がりは内湾している。	体回転ナデ 底回転ヘラ切り	回転ナデ	暗灰色	密 ◎	T-6	
18	壺	残高　5.6	脚付壺の脚部。１条の突帯と４方向の長方形透孔がみられる。	回転ナデ	回転ナデ	淡灰色	密・石・長(1) ◎	T-6	
19	壺	残高　10.3	長頸壺の頸部。内外面とも自然釉付着。	回転ナデ	回転ナデ	淡灰色	密 ◎	T-8	
20	壺	残高　8.8	短頸壺の底部～体部。肩部が張っている。	マメツ	マメツ	白灰色	長(3) △	T-8	

試掘調査出土遺物観察表　土製品　(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
21	高坏	底径 (12.2) 残高 3.7	脚裾片。裾端部に面をもつ。自然釉付着。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 暗灰色	密 ◎	T-8	
22	壺	残高 9.2	長頸壺の頸部。中位に平行沈線2条。	回転ナデ	回転ナデ	白灰色	密 ◎	T-11	
23	椀	底径 (7.0) 残高 1.9	貼り付け高台。断面三角形の高台が底部と体部の境に付いている。	回転ナデ	回転ナデ	乳白色	密 ○	T-11	

表2　SR 1 (10層) 出土遺物観察表　土製品　(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
24	甕	口径 (15.8) 残高 5.8	口縁端面に刻目。頸部無文。	㊐ヨコナデ ㊗ハケ(12本/1cm)	㊐ヨコナデ ㊗ミガキ	黒色 淡黄白色	石・長(1～2) ◎		5
25	甕	口径 (21.2) 残高 4.4	口縁端面に深い刻目。頸部無文。	ナデ	ナデ	黒色 淡褐色	石・長(1～3) ◎	外面にススト付着	5
26	甕	口径 (20.0) 残高 5.3	口縁端面に刻目。頸部無文。	ナデ	ナデ	茶褐色 淡黄白色	石(1～3) ◎		5
27	甕	口径 (24.2) 残高 5.0	口縁端面に刻目。頸部無文。	㊐ヨコナデ ㊗ハケ(5本/1cm)	㊐ヨコナデ ㊗ミガキ	灰褐色 暗褐色	石(3) ◎		5
28	甕	口径 (20.0) 残高 7.8	口縁端面に刻目。頸部にヘラ描沈線文1条。	㊐指頭痕→ナデ ㊗ナデ	㊐ナデ ㊗指頭痕→ナデ	黒色 灰褐色	石・長(1～3) ◎	外面にススト付着	5
29	甕	口径 (19.6) 残高 5.7	口縁端面に刻目。頸部にヘラ描沈線文3条。	㊐指頭痕→ナデ ㊗ナデ	㊐ナデ ㊗指頭痕→ナデ	淡褐色 淡黄褐色	石・長(1) ウンモ ◎		5
30	甕	口径 (18.8) 残高 4.9	口縁端面に刻目。頸部にヘラ描沈線文4条。	ナデ	㊐ナデ ㊗指頭痕→ナデ	淡褐色 黒褐色	石・長(1～3) 金 ◎		5
31	甕	口径 (30.0) 残高 5.0	口縁端面は無文で丸くおさめられている。頸部にヘラ描沈線文4条。	ナデ	指頭痕→ナデ	淡黄白色	石・長(1～3) ◎		5
32	甕	口径 (21.3) 残高 11.1	口縁端面に刻目。頸部にヘラ描沈線文7条。	㊐指頭痕→ナデ ㊗ハケ→ナデ	ナデ	灰黄褐色	石・長(1～3) ◎		5
33	甕	口径 (17.3) 残高 9.6	断面三角形状の貼り付けによる口縁。口縁端面に刻目。頸部にヘラ描沈線文4条。	㊐ヨコナデ ㊗ミガキ	㊐指頭痕→ナデ ㊗ミガキ	茶褐色	石・長(1～4) ◎	外面にススト付着	5
34	甕	口径 14.5 ～14.8 残高 12.5	口縁を折り曲げた後、花弁状の突起をもたらした口縁部。頸部にヘラ描沈線文4条。	ハケ→ナデ	指頭痕・ハケ→ナデ	淡灰褐色	石・長(1～2) ◎		5
35	甕	口径 (24.0) 残高 5.7	口縁端面に刻目。頸部に上段・ヘラ描沈線文4条、中段・山形文、下段・ヘラ描沈線文4条。	㊐ヨコナデ ㊗ハケ	㊐ヨコナデ ㊗指頭痕	黒褐色 淡褐色	石・長(1～2) ◎		5
36	甕	口径 (23.8) 残高 4.2	口縁端面、頸部ともに無文。口縁端部は丸くおさめられている。	ナデ	㊐ヨコナデ ㊗ミガキ	赤褐色	石・長(1～2) ◎		5
37	甕	残高 3.3	口縁部片。頸部にヘラ描格子文。	ナデ	ナデ	赤褐色	石・長(1～3) ◎		
38	甕	残高 5.4	頸部片。ヘラ描沈線文6条。	ナデ	ナデ	黒褐色 黒色	石・長(1～3) ○		
39	甕	残高 5.6	頸部片。ヘラ描沈線文3条。	ナデ	ナデ	黄褐色	長(1～2) ○		

SR 1 （10層）出土遺物観察表　土製品　(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
40	甕	残高 4.5	頸部片。ヘラ描沈線文４条。	ナデ	ナデ	淡褐色 淡黄褐色	石・長(１～３) ウンモ ○		
41	甕	残高 4.7	頸部片。ヘラ描沈線文８条。	ナデ	ナデ	灰褐色	石・長(２) ◎	外面にススス付着	
42	甕	残高 5.8	頸部片。やや厚みのある器壁。ヘラ描沈線文８条。	ナデ	指頭痕→ナデ	淡褐色	石・長(２) ◎		
43	甕	残高 6.4	頸部片。ヘラ描沈線文７条。	ナデ	ミガキ	黒色 灰褐色	石・長(１～３) ◎	外面にススス付着	
44	甕	残高 9.9	頸部片。ヘラ描沈線文は５条まで確認できる。	ハケ	ナデ	黒色 灰褐色	石・長(１～４) ◎	外面にススス付着	
45	甕	残高 7.2	頸部片。ヘラ描沈線文は３条まで確認できる。	ハケ(5～6本/1cm)	ミガキ	黒色 灰褐色	長(１～５) ◎	外面にススス付着	
46	甕	残高 5.7	頸部片。ヘラ描沈線文は４条まで確認できる。	ナデ	ナデ	淡褐色	長(１～２) ◎		
47	甕	残高 4.1	頸部片。ヘラ描沈線文は３条まで確認できる。	ハケ	ミガキ	黒色	石・長(１～５) ◎		
48	甕	残高 4.3	頸部片。ヘラ描沈線文は１条まで確認でき、その上に刺突文。	ハケ	ナデ	灰褐色	石・長(１～２) ウンモ ◎		
49	甕	底径 (6.0) 残高 5.4	平底。	ナデ	ナデ	淡黄橙色	長(１～２) ◎		
50	甕	底径 6.3 残高 5.8	平底。	ナデ	ミガキ	淡黄褐色	石・長(５) ◎		
51	甕	底径 (8.7) 残高 5.5	平底。	胴ハケ(6本/1cm) 底ナデ	指頭痕→ナデ	淡褐色	石(３) ◎		
52	甕	底径 7.1 残高 8.0	厚みをもち突出する平底。	ナデ	指頭痕→ナデ	黒褐色 黒色	石(１～３) ◎		
53	甕	底径 (7.4) 残高 5.0	厚みのある平底。	ナデ	ミガキ	乳灰白色	石・長(３) ◎		
54	甕	底径 (7.0) 残高 4.7	平底。	胴ハケ→ナデ 底ナデ	ナデ	淡褐色 茶褐色	石・長(１～３) ◎		
55	甕	底径 (10.0) 残高 2.9	平底。	ナデ	指頭痕→ナデ	灰茶褐色 淡褐色	石・長(１～４) ウンモ ◎		
56	甕	底径 (7.8) 残高 3.2	厚みのある平底。	ナデ	指頭痕→ナデ	淡黄灰白色	石(１～２) ウンモ ◎		
57	甕	底径 (8.5) 残高 4.7	ゆるやかなくびれをもつ平底。	ナデ	底下ハケ 胴ミガキ→ナデ	淡黄褐色	石・長(１～２) ◎		
58	甕	底径 (9.0) 残高 4.7	周縁に輪状の若干の高まりをもつ底部。	胴ハケ→ナデ 底ナデ	ハケ→ナデ	橙褐色 黒褐色	石・長(２) ウンモ ○		
59	甕	底径 (8.0) 残高 3.3	周縁に輪状の若干の高まりをもつ底部。	ナデ	ナデ	黄褐色	石・長(１～３) ○		

SR 1 （10層）出土遺物観察表　土製品

(3)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
60	甕	底径 (6.8) 残高 3.2	周縁に輪状の若干の高まりをもつ底部。	ナデ	ナデ	淡褐色	石・長(1～2) ◎		
61	甕	底径 (5.0) 残高 4.3	わずかに突出する平底。	ハケ→ナデ	ハケ→ナデ	淡灰白色 黄灰色	石・長(2) ◎		
62	甕	底径 6.1 残高 4.4	厚みのあるクボミ底。	ナデ	ナデ	淡黄褐色	石・長(1～3) ◎		
63	甕	底径 5.6 残高 2.5	厚みのあるクボミ底。	胴ハケ 底ナデ	ハケ	黄白色 黄褐色	石・長(1～3) ○		
64	甕	残高 8.6	頸胴部片。頸部に断面三角状の貼り付け突帯。	ミガキ	ミガキ	黄褐色 黒色	石・長(1～4) ◎		
65	甕	口径 (17.6) 残高 7.0	口端部外側に平坦面。やや張りのある胴部。	ハケ	ハケ	黒褐色 淡黄白色	長(1) ◎	外面にススト付着	
66	壺	口径 (24.8) 残高 5.2	口縁端面に刻目。口縁内面に刻目貼り付け突帯。	口上ナデ 口下ミガキ	ナデ	黒褐色	石・長(2) ◎		
67	壺	口径 (15.2) 残高 4.7	口縁端面の1条のヘラ描沈線の上下に刻目。	ナデ	ミガキ	灰褐色	長(2) ◎		
68	壺	口径 (15.6) 残高 1.4	口縁端面の1条のヘラ描沈線の上下に刻目。	ナデ	ナデ	暗褐色	石・長(1～2) ◎		
69	壺	口径 (17.4) 残高 2.5	口縁端面にヘラ描斜格子文。	ナデ	ミガキ→ナデ	茶褐色	石(3) ◎		
70	壺	口径 (15.6) 残高 6.1	口縁部にφ4mmの円孔。頸部削り出し突帯上に沈線2条。	ミガキ	ミガキ	灰褐色	石・長(1～2) ◎		
71	壺	口径 (12.2) 残高 4.1	ゆるやかに外反する口縁。端部は面をもつ。	ハケ	ハケ(11本/1cm)	茶褐色	長(2) ◎		
72	壺	口径 (16.6) 残高 5.9	ゆるやかに外反する口縁。口縁端部は丸くおさめられている。頸部に削出突帯上に2条の沈線。	ナデ	指頭痕→ナデ	淡褐色	石・長(1～2) ◎		
73	壺	口径 (11.6) 残高 3.8	短く開く口縁。筒状の頸部にヘラ描沈線文1条。	口ヨコナデ 頸ハケ	ミガキ	黒褐色	石・長(1～3) ◎		
74	壺	残高 7.5	頸部片。ヘラ描沈線文4条。	ナデ	指頭痕→ナデ	乳白色	石・長(1～3) ウンモ ○		
75	壺	口径 (10.4) 残高 4.4	短く開く口縁。筒状の頸部にはヘラ描状線文が4条まで確認できる。	ミガキ	ナデ	茶褐色 黄褐色	長(3) ◎		
76	壺	口径 16.0 残高 11.6	口縁端部は平らで頸部に明確な削り出し突帯上に4条の沈線。	口ヨコナデ 頸ハケ 胴ミガキ	口ヨコナデ 頸ミガキ 胴ハケ	茶褐色 黄褐色	石・長(3) ◎		5
77	壺	残高 5.8	長頸壺の頸部片。ヘラ描沈線文8条の下に連鎖状刻目突帯。	ハケ	ナデ	灰褐色	石・長(2～5) ○		
78	壺	残高 4.1	頸部片。削り出し突帯上の沈線は5条まで確認できる。	ミガキ	ナデ	黒褐色 灰褐色	石・長(1～4) ◎		
79	壺	残高 3.6	頸部片。沈線は3条まで確認できる。	ナデ	指頭痕→ナデ	灰褐色	石・長(1～2) ◎		

SR 1 （10層）出土遺物観察表　土製品

(4)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
80	壺	残高 3.9	頸部片。沈線は４条まで確認できる。	ナデ	ナデ	淡黄褐色 灰褐色	石・長(1～2) ○		
81	壺	残高 6.2	頸部片。貼付突帯上に横位の沈線。	ナデ	頸ミガキ 胴ナデ	乳灰色 灰褐色	長(2) ◎		
82	壺	残高 4.3	頸部片。ヘラ描沈線文３条。	ナデ	ナデ	淡黄褐色	石・長(1～2) ◎		
83	壺	残高 6.4	胴部片。頸部に沈線１条まで確認できる。胴部上位に３条の沈線。	ハケ→ミガキ	指頭痕→ナデ	黒褐色 灰褐色	石・長(1～2) ウンモ ◎		
84	壺	口径 16.9 器高 (30.2) 底径 18.7	口縁内面に突帯。口端面に１条の沈線。頸部に削り出し突帯上に５条の沈線。	口ヨコナデ 頸ハケ→ミガキ 胴ミガキ 底ナデ	口ヨコナデ 頸ミガキ 胴上ハケ→ナデ 胴下ミガキ	黒褐・淡褐 淡褐・黒褐	石・長(3) ◎		5
85	壺	残高 12.5	胴上位から頸基部の片。	ハケ→ミガキ	ミガキ	灰褐色	長(1)		
86	壺	残高 11.5	胴部上位にヘラ描沈線文１条。大型品。	ナデ	ナデ	黒褐色 淡灰褐色	石・長(2) ○		
87	壺	残高 11.4	胴部片。丸味をおびた胴部。胴部上位にヘラ描沈線文５条。	ミガキ	指頭痕→ナデ	暗褐色 淡褐色	石・長(3) ◎		
88	壺	残高 4.3	胴部片。ヘラ描斜格子文。	ナデ	ナデ	橙褐色 黒褐色	石・長(1～2) ◎		6
89	壺	残高 4.4	胴部片。胴部上位にヘラ描沈線文１条以上。	ナデ	ハケ→ミガキ	黒褐色 淡灰褐色	石・長(2) ◎		6
90	壺	残高 5.5	胴部片。胴部上位にヘラ描沈線文１条以上。	ナデ	指頭痕→ナデ	黄褐色 淡灰褐色	石・長(1～2) ウンモ ◎		6
91	壺	残高 5.0	胴部片。胴部上位にヘラ描沈線文３条以上。	ミガキ	ナデ	暗茶褐色	石・長(2～6) ○		6
92	壺	残高 3.1	胴部片。胴部上位にヘラ描沈線文２条以上。	ナデ	ナデ	淡褐色	石・長(1～2) ◎		6
93	壺	残高 3.6	胴部片。胴部上位にヘラ描沈線文２条。	ナデ	ナデ	淡黄褐色	石・長(1～2) ◎		6
94	壺	残高 3.6	胴部片。胴部上位にヘラ描沈線文５条。	ハケ	ナデ	黄褐色 淡黄褐色	石・長(1) ◎		6
95	壺	残高 4.0	胴部片。胴部上位にヘラ描沈線文８条以上。	ナデ	マメツ	灰褐色	石・長(1～2) ○		6
96	壺	残高 4.0	胴部片。胴部上位にヘラ描沈線文３条。	ミガキ	指頭痕→ナデ	灰褐色 黒褐色	石・長(1～2) ◎		6
97	壺	残高 5.2	大型壺の胴部片。削り出し突帯上に４条の沈線。	ミガキ	ナデ	淡褐色	石・長(1～3) ウンモ ◎		6
98	壺	残高 5.9	胴部片。胴部上位にヘラ描沈線文４条。その下に格子文。	ナデ	ナデ	黒色	石・長(2) ◎		6
99	壺	残高 4.7	胴部片。胴部上位にヘラ描沈線文１条以上。	ミガキ	ナデ	黒色	長(1～4) ◎		6

SR 1 （10層）出土遺物観察表　土製品

(5)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
100	壺	残高 6.2	胴部片。胴部中位にヘラ描沈線文4条以上。	ミガキ	ナデ	灰色 淡黄白色	石・長(1～3) ○		6
101	壺	残高 6.0	胴部片。胴部上位にヘラ描沈線文3条。	ナデ	ナデ	黄褐色	石・長(1～2) ◎		6
102	壺	残高 6.6	胴部片。胴部中位にヘラ描沈線文4条。	ナデ	指頭痕→ナデ	淡黄褐色 淡黄白色	石・長(1～4) ○		6
103	壺	残高 5.6	胴部片。胴部上位にヘラ描沈線文3条以上。	ミガキ	ナデ	灰褐色	長(1) ◎		
104	壺	残高 6.2	胴部片。胴部中位にヘラ描沈線文2条以上。	ハケ→ミガキ	ナデ	淡黄褐色	石・長(1～2) ◎		
105	壺	残高 4.6	胴部片。胴部中位にヘラ描沈線文5～4条。	ミガキ	ナデ	淡灰褐色	石・長(2) ○		
106	壺	残高 4.6	胴部片。胴部中位にヘラ描沈線文4条以上。	ミガキ	ナデ	茶褐色	石・長(2) ○		
107	壺	残高 5.2	胴部片。胴部上位にヘラ描沈線文5条以上。	ミガキ	マメツ	黒色 灰褐色	石・長(1～3) ◎	外面にススス付着	
108	壺	残高 4.6	胴部片。胴部中位にヘラ描沈線文3～2条。	マメツ	ナデ	乳白色 淡灰褐色	石・長(1～2) ○		
109	壺	残高 3.4	胴部片。胴部中位にヘラ描沈線文2条。	マメツ	ナデ	灰褐色 淡褐色	石・長(4) ○		
110	壺	残高 4.6	胴部片。胴部上位にヘラ描沈線文1条以上。	ハケ→ナデ	指頭痕→ナデ	淡褐色	石・長(1) ◎		
111	壺	残高 4.6	胴部片。胴部中位にヘラ描沈線文4条以上。	ミガキ	ミガキ	暗褐色 灰褐色	石・長(1～6) ◎		
112	壺	残高 4.2	胴部片。胴部中位にヘラ描沈線文2条以上。 大型品。	ミガキ	ミガキ	黒褐色	石・長(1～2) ◎	外面にススス付着	
113	壺	残高 4.2	胴部片。胴部上位にヘラ描沈線文2条以上。	ナデ	ナデ	灰褐色 淡黄褐色	長(1～3) ○		
114	壺	底径 6.1 残高 4.1	平底。	ナデ	ナデ	灰褐色	石・長(2～4) ○		
115	壺	底径 (8.0) 残高 2.6	厚みのある平底。	ナデ	ナデ	黄褐色 茶褐色	石・長(2～3) ◎		
116	壺	底径 8.1 残高 4.6	平底。	胴ハケ 底ナデ	ナデ	淡黄白色	石・長(1～5) ◎		
117	壺	底径 6.9 残高 4.6	厚みのある平底。	ナデ	ナデ	黒褐色 淡黄褐色	石・長(1～4) ○		
118	壺	底径 7.4 残高 4.0	平底。	胴ミガキ 底ナデ	ミガキ	淡褐色 黒灰色	石・長(1～2) ◎		
119	壺	底径 9.9 残高 4.5	厚みのある平底。	胴ミガキ 底ナデ	ナデ	淡黄褐色 淡黄灰褐色	石・長(1～2) ◎		

SR 1 （10層）出土遺物観察表　土製品　(6)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
120	壺	底径 7.4 残高 4.5	平底。	胴ミガキ 底ナデ	ナデ	淡褐色	石・長(1～2) ○		
121	壺	底径 (8.8) 残高 4.3	突出気味の平底。	胴ミガキ 底ナデ	ナデ	淡褐色	石(2)		
122	壺	底径 (8.0) 残高 4.7	厚みのある平底。	ナデ	ハケ	淡黄灰白色 黒灰色	石・長(2) ◎		
123	壺	底径 (7.2) 残高 5.8	平底。	胴ミガキ 底ナデ	ミガキ	灰褐色 黒色	石・長(2) ◎		
124	壺	底径 8.3 残高 6.1	突出気味。厚みのある平底。	胴指頭痕・ミガキ 底ナデ	ナデ	黒褐色	石・長(1～2) ○		
125	壺	底径 8.9 残高 5.5	平底。	ナデ	ハケ→ナデ	淡黄灰白色 黒灰色	石・長(1～3) ◎		
126	壺	底径 (8.0) 残高 6.0	突出気味の平底。	胴ハケ→ミガキ 底ナデ	ナデ	淡灰白色 乳灰白色	石・長(1～2) ◎		
127	壺	底径 (7.4) 残高 5.8	厚みのある平底。	ナデ	指頭痕→ナデ	淡黄灰白色	石(1～4) ○		
128	壺	底径 (8.0) 残高 5.3	わずかなクボミをもつ平底。	ナデ	ハケ→ナデ	淡黄白色	長(2) ◎		
129	壺	底径 7.3 残高 7.8	平底。外底面にヘラ描による記号状の陰刻。	胴ミガキ 底ナデ	ナデ	黒褐色 黒色	長(2) ◎		6
130	壺	底径 (6.7) 残高 7.1	平底。	胴ミガキ 底ナデ	ナデ	淡褐色	石(2) ◎		
131	壺	底径 9.5 残高 7.2	平底。	胴ハケ→ナデ 指頭痕 底ナデ	ナデ	淡白色 黒褐色	石・長(2) ○		
132	蓋	天井径 6.1 器高 10.5 底径 (20.4)	天井部はわずかなクボミをもち裾端部はやや丸味をもつ。	天井ナデ 胴底ミガキ	ミガキ	黒褐色	長(3) ◎		6
133	蓋	天井径 6.6 残高 8.8	天井部はわずかなクボミをもつ。	指頭痕・ハケ→ミガキ	指頭痕→ミガキ	黄褐色 黒色	石(2) ◎		

表３　SR 1 （10層）出土遺物観察表　石製品

番号	器種	残存	材質	法量 長さ(cm)	法量 幅(cm)	法量 厚さ(cm)	法量 重さ(g)	備考	図版
134	石庖丁	½	緑色片岩	11.1	5.8	0.8	85.5		6
135	石庖丁		緑色片岩	6.1	3.5	0.5	17.5		6
136	石斧		黒色片岩	3.7	4.9	1.0	26.0		6
137	剝片		安山岩	15.9	9.9	2.6	354.0		
138	砥石		細粒砂岩	15.6	6.3	4.8	413.0		
139	剝片		サヌカイト	4.4	3.1	0.9	13.7		

表４　SR１（８・９層）出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
140	鉢	残高　4.2	縄文土器。頸～胴部片胴部で強く屈曲する。	ナデ	ナデ	淡褐色	石・長(1) ウンモ ◎		
141	壺	口径　14.2 残高　5.4	短い口縁部。頸部にヘラ描沈線文２条。	口ヨコナデ 頸ハケ→ナデ	口ヨコナデ 頸ミガキ	黄白色	石・長(1) ○		
142	壺	残高　4.0	口縁部片。口縁内面に刻目をもつ貼り付け突帯の上面に連続竹管文。	ナデ	ナデ	乳白色	石・長(1～2) ○		
143	壺	残高　5.3	胴部片。胴部上位にヘラ描重弧文・沈線２条・斜格子文。	ナデ	ナデ	暗褐色	長(3) ○		
144	壺	残高　5.8	胴部片。胴部中位にヘラ描沈線文２条。	ナデ	ナデ	乳白色 淡灰褐色	石・長(1～2) ○		
145	壺	口径　(16.2) 残高　17.6	口縁内面に貼付突帯。筒状の頸部に連鎖状刻目をもつ貼付突帯の下に４条の沈線。胴部上位に５条の沈線。	ハケ→ナデ	指頭痕→ナデ	淡黄白色	石・長(1～3) ○		7
146	壺	底径　(8.0) 残高　3.4	突出した厚みのある平底。	胴ハケ→ナデ 底ナデ	ナデ	暗灰褐色 淡灰褐色	石・長(1～3) ◎		
147	壺	底径　(8.0) 残高　4.3	平底。	胴ミガキ 底ナデ	ミガキ	淡黄褐色	石・長(1～3) ◎		
148	壺	底径　(10.2) 残高　5.2	平底。	マメツ	マメツ	暗灰褐色	石・長(1) ○		
149	甕	口径　(27.8) 残高　3.4	屈曲した短い口縁部。頸部下位に断面三角形の圧痕文突帯。	ハケ→ナデ	ナデ	淡黄白色	石(2) ◎		
150	甕	口径　(20.0) 残高　5.6	口縁部の屈曲が強く、短い口・頸部をもつ。口縁端面に２条の沈線。	ナデ	指頭痕→ナデ	淡黄白色	石・長(1～3) ◎		
151	蓋	底径　14.4 残高　6.6	小型品。厚みのある器壁。	ハケ→ナデ	指頭痕→ナデ	黄褐色	石・長(1～3) ◎		7
152	甑	底径　4.3 残高　8.9	胴部に φ1.9cmの円孔。円孔の部直上と頸基部にそれぞれ１条の沈線。	頸胴回転ナデ 底回転ヘラ削り	ナデ	淡黄白色	密 △		7
153	横瓮	口径　(12.2) 残高　7.5	口縁端部は平らにおさめられている。	回転ナデ	回転ナデ	淡紫灰色	石・長(1) ◎		
154	甕	残高　7.0	頸～胴部。大型品。頸部に２条の沈線。	回転ナデ	頸回転ナデ 胴タタキ	暗灰色	長(1) ◎		
155	甕	残高　4.3	頸～胴部。大型品。内外面に自然釉付着。	頸回転ナデ 胴カキ目	頸回転ナデ 胴タタキ	緑灰色 灰白色	石・長(1) ◎		
156	壺	残高　3.2	丸底。	胴回転ナデ 底回転ヘラ削り	回転ナデ	灰色 灰白色	砂 ◎		
157	壺	底径　10.6 残高　5.6	平底。底面に自然釉付着。	胴回転ナデ 底不定方向のナデ	回転ナデ	暗灰色 灰白色	砂 ◎		
158	壺	残高　9.0	台付壺の胴～底部。高台部欠損。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰白色	密 ◎		

表５　SR１（５・６層）出土遺物観察表　土製品　(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
159	坏蓋	口径 (19.2) 残高 0.8	口縁部は下方へ屈曲し、端部は丸く仕上げる。	回転ナデ	回転ナデ	淡灰色	密 ◎		
160	坏身	口径 (12.3) 残高 2.1	立ち上がりは内傾し、受部は水平。口縁端部はやや尖り気味。	回転ナデ	回転ナデ	淡灰色	密 ◎		
161	坏身	口径 (10.4) 残高 2.5	立ち上がりは内傾し、受部は上外方へのびる。	回転ナデ	回転ナデ	暗灰色 淡青灰色	長(1) ◎		
162	坏身	口径 (14.4) 残高 3.0	立ち上がりは直立し、受部は短く、水平。外面に自然釉付着。	回転ナデ	回転ナデ	暗灰色 淡青灰色	密 ◎		
163	坏身	口径 (10.4) 残高 2.4	立ち上がりは内傾し、受部は上外方へのびる。	回転ナデ	回転ナデ	淡灰色	密・砂 ◎		
164	坏身	口径 (11.0) 残高 2.2	立ち上がりは短く、内傾。受部は上外方へのびる。蓋の可能性がある。	回転ナデ	回転ナデ	白灰色	密・砂 ◎		
165	坏身	底径 (8.4) 残高 1.1	扁平な底部。	胴回転ナデ 底ヘラ切リ	回転ナデ	淡灰色	長(1) ◎		
166	坏身	底径 (9.0) 残高 1.7	扁平な底部。	胴回転ナデ 底ヘラ切リ	回転ナデ	明灰色	密 ◎		
167	坏身	底径 (10.9) 残高 1.4	高台の付く坏。高台は体部と底部の境付近に付く。貼付高台。	胴高回転ナデ 底ナデ	回転ナデ	暗青灰色	石・長(1) ◎		
168	坏身	底径 (10.2) 残高 3.2	高台の付く坏・高台は体部と底部の境付近に付く。貼付高台。	胴高回転ナデ 底ナデ	回転ナデ	淡灰色	密・砂 ◎		
169	坏身	底径 (10.2) 残高 1.9	高台の付く坏。高台は短く、体部と底部の境付近に付く。貼付高台。	胴高回転ナデ 底ナデ	回転ナデ	暗灰色 淡灰色	密・砂 ◎		
170	坏身	底径 (11.6) 残高 1.7	高台の付く坏。高台は境界よりやや内側に付く。貼付高台。	回転ナデ	回転ナデ	淡灰色 淡青灰色	石(1) ◎		
171	坏身	口径 16.9 器高 5.5 残高 (9.8)	口縁端部は尖る。高台は短く体部と底部の境付近に付く。貼付高台。	口胴高ヨコナデ 底ナデ	回転ナデ	暗灰色	長(1) ◎		7
172	坏身	口径 (15.0) 残高 4.4	口縁端部は尖り気味。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色	長(1) ◎		
173	坏身	口径 (15.8) 残高 3.4	口縁端部は尖り気味。	回転ナデ	回転ナデ	灰褐色	密 ◎		
174	坏身	口径 (20.0) 残高 6.2	口縁端部は丸く仕上げる。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 明灰色	密・石・長(1) ◎		
175	坏身	口径 (12.8) 器高 4.0 底径 (7.6)	口縁端部は尖り気味。平底。	口回転ナデ 底ヘラ切リ	回転ナデ	淡茶灰褐色	長(1) ◎		7
176	坏身	口径 (15.0) 器高 3.4 底径 (11.4)	口縁端部は丸く仕上げる。平底。	口回転ナデ 底ヘラ切リ	回転ナデ	灰色	密 ◎		
177	皿	口径 (15.4) 器高 2.0 底径 (11.8)	口縁端部は丸く仕上げる。平底。	口回転ナデ 底回転ヘラ切リ	回転ナデ	暗灰色	密 ◎		
178	皿	口径 (16.4) 器高 1.8 底径 (14.8)	口縁端面にわずかなクボミがみられる。平底。	口回転ナデ 底ヘラ切リ→ナデ	回転ナデ	明灰色	密・長(1) ◎		

SR 1 （5・6層）出土遺物観察表　土製品

(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
179	椀	口径 (14.0) 残高 3.1	口縁は内湾し、端部は丸く仕上げる。	回転ナデ	回転ナデ	明灰色	密 ◎		
180	椀	底径 (7.8) 残高 2.5	円盤高台。	胴ナデ 底ヘラ切り→ナデ	ナデ	白灰色	石(1) ◎		
181	高坏	残高 6.4	小型品。脚部片。	回転ナデ	坏高ナデ 脚シボリ痕→回転ナデ	明灰色	密 ◎		
182	高坏	底径 (7.0) 残高 6.0	小型品。脚端部は下方にわずかに屈曲する。脚柱部に沈線1条。坏底面・脚裾部に自然釉。	回転ナデ	回転ナデ	明灰色	密 ◎		
183	高坏	底径 8.4 残高 6.7	小型品。脚端部は下方に強く屈曲し、端面にはナデクボミ。	回転ナデ	坏底ナデ 脚シボリ痕→回転ナデ	灰色	密 ◎		
184	壺	残高 7.3	長頸壺の頸部。口縁にむけて大きく外反する。	カキ目→回転ナデ	頸上回転ナデ 頸下未調整	灰色 淡茶灰色	長(1) ◎		
185	壺	残高 8.0	長頸壺の頸部。直立気味。	回転ナデ	回転ナデ	暗灰色	長(1) ◎		
186	壺	口径 (7.0) 残高 3.8	短頸壺。口縁は直立し端部は丸く仕上げる。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 明灰色	密 ◎		
187	壺	残高 3.2	短頸壺。肩部にヘラ記号。	胴上回転ナデ 胴下ヘラ削り	回転ナデ	灰色	密・長(4) ◎		
188	壺	残高 2.4	丸底。	胴回転ナデ 底ヘラ削り	回転ナデ	白灰色 淡灰色	長(1) ◎		
189	壺	残高 3.4	丸底。底面にヘラ記号。	回転ナデ	回転ナデ	灰色	密		
190	壺	残高 4.6	脚付壺。脚部の3方向に長方形の透し。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 明灰色	石・長(1) ◎		
191	壺	底径 (16.0) 残高 3.3	脚付壺。有段の脚部。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 明灰色	密 ◎		
192	壺	底径 (18.8) 残高 5.8	脚付壺。端部はゆるやかに内湾する。脚端外面にヘラによる列点文。	回転ナデ	回転ナデ	灰褐色	砂 ◎		
193	甕	口径 (17.8) 残高 6.1	口縁部は外反し、端面にクボミがある。	回転ナデ	回転ナデ	灰色	密 ◎		
194	甕	口径 (20.2) 残高 2.6	口縁部はゆるやかに外反し、端部は丸く仕上げる。	回転ナデ	回転ナデ	白灰色	密 ◎		
195	甕	口径 (15.4) 残高 3.2	口縁部は短く外反し、端部は丸く仕上げる。	回転ナデ	回転ナデ	暗灰色	砂 ◎		
196	甕	口径 (21.6) 残高 4.4	口縁部はゆるやかに外反し端部は下方へやや拡張している。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 明灰色	石・長(1) ◎		
197	甕	口径 (19.6) 残高 8.5	口縁部は直線的に外反し、端部は丸く仕上げる。浅い沈線1条。内外面に自然釉付着。	回転ナデ	回転ナデ	灰色	石・長(2) ◎		
198	甕	残高 32.8	細長い胴部。	タタキ	タタキ	灰色	長(1) ◎		7

SR １（５・６層）出土遺物観察表　土製品　(3)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
199	坏	底径 (6.0) 残高 1.8	土師質。二次的に被熱している。	㊐マメツ ㊞回転ヘラ切り	マメツ	淡橙色 淡黄褐色	密 ○		
200	坏	底径 (9.0) 残高 2.4	土師質。やや厚みのある器壁。	マメツ	ナデ	橙褐色 淡黄褐色	砂 ○		
201	椀	底径 (6.4) 残高 2.6	土師質。貼付高台。	マメツ	マメツ	乳灰白色	密 ○		
202	椀	底径 (8.6) 残高 2.1	土師質。貼付高台。高台底端面は平ら気味。	回転ナデ	回転ナデ	淡黄褐色	密 ○		
203	椀	底径 6.2 残高 1.6	土師質。貼付高台。	ナデ	マメツ	乳白色	石(2) ○		
204	皿	口径 (16.6) 器高 1.3 底径 (14.5)	土師質。口縁部は短く外上方に直線的に立ち上がる。	ナデ	ナデ	淡橙色	砂 ○		
205	皿	口径 (15.2) 器高 1.5 底径 (12.2)	土師質。口縁部は緩やかに屈曲し、わずかに外反する。	㊐ナデ ㊞回転ヘラ切り	ナデ	乳白色	砂 ○		
206	椀	口径 (15.0) 残高 3.6	黒色土器。口縁部はゆるやかに外反し、端部は丸く仕上げる。	マメツ (指頭痕)	ミガキ	淡灰褐色 黒色	密 ◎		
207	椀	底径 (6.0) 残高 2.5	黒色土器。貼付高台。	マメツ	マメツ	灰褐色 黒色	石(1) ○		
208	椀	底径 4.6 残高 1.4	瓦器。貼付高台。	指頭痕	マメツ	黒色	長(1) ○		
209	皿	口径 (14.8) 残高 1.6	灰釉。内面に段をもつ。口縁部付近のみに施釉。	回転ナデ	回転ナデ	灰褐色	密 ◎		
210	碗	底径 (5.4) 残高 3.0	龍泉窯系青磁碗。内面見込み部に花文の陰刻。内面見込み部・高台内面・畳付けは露胎。	㊐施釉 ㊞回転ナデ	施釉	緑灰色	密 ◎		

表６　SR １（５・６層）出土遺物観察表　石製品

番号	器種	残存	材質	法量 長さ(cm)	法量 幅(cm)	法量 厚さ(cm)	法量 重さ(g)	備考	図版
211	スクレイパー	完存	サヌカイト	4.3	3.8	1.0	17.9		

表７　SR １（層不明）出土遺物観察表　土製品　(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
212	壺	口径 (9.7) 残高 4.7	小型品。口縁端面に刻目。口縁内面に馬蹄形状に突帯が貼り付けられる。注口状。頸部に沈線４条。	ハケ(8本/1cm)→ミガキ	ハケ→ナデ	黒褐色	石・長(2) ◎		7
213	壺	残高 4.8	胴部片。小型品。頸部に２条の沈線。胴部上位に４条の沈線が確認できる。	ミガキ	ナデ	黒褐色	石・長(1～2) ◎		
214	壺	口径 (15.6) 残高 2.4	口縁端部は丸くおさめられている。	ヨコナデ	ヨコナデ	淡黄白色	石・長(1～2) ◎		
215	壺	残高 8.5	胴部片。胴部中位に４条の沈線。	ミガキ	ナデ	黒褐色 淡黄褐色	石・長(2～3) ○		

SR 1（層不明）出土遺物観察表　土製品　(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
216	蓋	残高 5.7	天井部、裾部欠損。	ハケ→ミガキ	ミガキ	黄褐色	長(2～3) ○		
217	壺	底径 8.1 残高 3.1	平底。	ナデ	ナデ	淡灰褐色	石・長(2) ◎		
218	坏身	口径 (14.4) 残高 2.7	立ち上がりは直立し、受部は水平。	回転ナデ	回転ナデ	暗灰色	密 ◎		
219	坏身	口径 (12.2) 器高 2.9 底径 (9.2)	口縁は直線的に外反し、端部は丸味をおびている。平底。	㊐回転ナデ ㊡回転ヘラ切リ	回転ナデ	明灰色	長(1) ◎		
220	坏身	底径 (11.0) 残高 2.0	平底。	回転ナデ	回転ナデ	明灰色	密 ◎		
221	坏身	底径 (13.0) 残高 2.2	高台は、体部と底部の境界に貼り付けられている。	㊥回転ナデ ㊡ナデ	回転ナデ	灰色	長(1) ◎		
222	壺	残高 2.9	短頸壺。	㊥回転ナデ ㊡ヘラ切リ	回転ナデ	灰色 淡青灰色	長(1) ◎		
223	鍋	口径 (32.6) 残高 3.3	土師質。口縁は水平気味に広がり端部は面をなす。	ハケ	ハケ	黄白色	石・長(2～4) ○		

表 8　SD 1　出土遺物観察表　土製品　(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
224	壺	残高 4.8	竹管紋が上2列下3列ありその間に平行沈線文と波状文を組み合わせた文様を描いている。	マメツ	マメツ	淡灰褐色	石・長(1～2) ○		
225	壺	底径 (8.7) 残高 4.9	平底。	㊥ミガキ ㊡ナデ	ナデ	淡灰褐色 暗灰褐色	石・長(1～3) ○		
226	壺	底径 (11.5) 残高 4.1	平底。	ナデ	ナデ	淡灰褐色	石・長(1～2) 金・砂 ○		
227	壺	底径 (6.6) 残高 4.5	立ち上がりをもつ平底。	㊥ミガキ ㊡ナデ	ナデ	淡灰褐色 黒色	石・長(1～2) 砂 ○		
228	坏蓋	残高 2.5	扁平な天井部。	㊤回転ヘラ削リ 回転ナデ	回転ナデ	灰白色	石・長(1) △		
229	坏蓋	残高 2.7	天井部外面はヘラ切リ未調整。	㊤回転ヘラ切リ未調整 ㊥回転ナデ	㊤タテナデ ㊥回転ナデ	暗灰色 淡紫白色	密 ◎		
230	坏蓋	口径 10.4 器高 3.7	扁平な天井部。口縁部と天井部との境に鈍い稜がある。	㊤回転ヘラ切リ ㊐回転ナデ	回転ナデ	茶褐色 紫褐色	石・長(1～2) 砂 ○		8
231	坏身	口径 (10.7) 器高 3.4	底部切離し痕未調整。底部で破裂している。口縁端部は尖る。	㊐回転ナデ ㊡回転ヘラ切リ	回転ナデ	灰色	長(1～2) ◎		
232	坏身	口径 (9.6) 器高 3.5 底径 (8.0)	立ち上がりはやや内湾。底部は扁平。口縁部は丸みを帯びる。内面に自然釉付着。	㊐回転ナデ ㊡回転ヘラ切リ	回転ナデ	淡紫灰色	密 ◎		
233	坏	底径 (7.4) 残高 1.0	扁平な底部。	㊥回転ナデ ㊡回転ヘラ切リ	回転ナデ	青灰色	密 ◎		

SD 1　出土遺物観察表　土製品　(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
234	坏	底径 (7.6) 残高 0.9	扁平な底部。	㊍回転ナデ ㊐回転ヘラ切リ	回転ナデ	灰色 淡灰色	長(1)・砂 ○		
235	坏	底径 (9.2) 残高 1.3	扁平な底部。	㊍回転ナデ ㊐回転ヘラ削リ	回転ナデ	淡青灰色 灰褐色	長(1) ○		
236	坏	底径 (10.0) 残高 2.6	扁平な底部。	㊍回転ナデ ㊐回転ヘラ切リ	回転ナデ	灰色	砂 ○		
237	坏	底径 (10.8) 残高 2.2	扁平な底部。	㊍回転ナデ ㊐回転ヘラ切リ	回転ナデ	淡灰褐色	長(1)・砂 ○		
238	坏	底径 (8.8) 残高 1.3	扁平な底部。	㊍回転ナデ ㊐回転ヘラ切リ	回転ナデ	淡灰白色	長(1) ○		
239	蓋	残高 1.7	ボタン状のつまみが付く蓋。	㊤回転ヘラ切リ	㊤タテナデ ㊍回転ナデ	暗灰色 灰褐色	密 ○		
240	蓋	残高 1.3	扁平な天井部。	㊤回転ヘラ切リ→ナデ ㊐回転ナデ	回転ナデ	青灰白色	密 ◎		
241	坏	口径 (10.4) 残高 2.8	口縁端部はやや丸みを帯び、口縁は直線的に立ち上がる。	回転ナデ	回転ナデ	淡緑灰色	密・砂 ○		
242	坏	口径 (13.0) 残高 2.5	口縁端部は丸みを帯びている。口縁は直線的に立ち上がる。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 淡灰白色	密・長(1) ○		
243	坏	口径 (21.3) 残高 4.3	口縁端部は尖り気味。口縁は少し外反する。	回転ナデ	回転ナデ	淡灰褐色	長(1) ○		
244	坏	口径 (19.9) 残高 5.6	口縁端部は丸みを帯び口縁の立ち上がりは少し外反している。	回転ナデ	回転ナデ	淡灰色 淡灰色	密 ○		
245	坏	口径 (14.9) 器高 5.3 底径 (9.3)	貼り付け高台。体部は直線的に外方に立ち上がるが口縁部で少し外反する。	㊐回転ナデ ㊐回転ヘラ切リ	回転ナデ	灰色	砂 ○		8
246	坏	口径 (18.2) 器高 5.2 底径 (11.6)	貼り付け高台。高台接地面に工具による窪みが有る高台は底体部の内側に付く。	回転ナデ	回転ナデ	淡灰褐色 灰色	砂 ○		
247	坏	口径 (19.0) 器高 4.8 底径 (12.5)	貼り付け高台接地面に工具による窪みが有る。高台は底体部の内側に付く。	回転ナデ	回転ナデ	淡青灰色	長(1) ○		
248	坏	底径 (6.9) 残高 1.9	貼り付け高台。高台接地面に工具による窪みがある。	回転ナデ	回転ナデ	灰褐色 淡青灰色	密 ◎		
249	坏	底径 (10.0) 残高 1.5	貼り付け高台。外側に接地面をもつ。	回転ナデ	回転ナデ	淡青灰色	長(1) ○		
250	坏	底径 (10.8) 残高 1.2	貼り付け高台。高台が少し内側に入り外側に接地面をもつ。	回転ナデ	回転ナデ	淡緑灰色 濃灰色	長(1)・砂 ○		
251	坏	底径 (10.7) 残高 2.1	貼り付け高台。「ハ」の字に付く。底体部の境に付く。	回転ナデ	回転ナデ	灰色	砂 ○		
252	坏	底径 (10.9) 残高 1.3	貼り付け高台。接地面は外側で、底体部の境に付く。	回転ナデ	回転ナデ	灰色	密 ○		
253	坏	底径 (11.7) 残高 1.7	貼り付け高台。底体部の境に付く。	㊍回転ナデ ㊐工具痕	回転ナデ	青灰色	密 ◎		

SD 1　出土遺物観察表　土製品

(3)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
254	坏	底径 (11.1) 残高 1.9	貼り付け高台。「ハ」の字に付く。底体部の境に付く。	回転ナデ	回転ナデ	㊍灰茶褐色 ㊐灰褐色 灰褐色	密 ◎		
255	坏	底径 (12.1) 残高 1.7	貼り付け高台。接地面に工具による窪みがある。高台は底体部の内側に付く。	回転ナデ	回転ナデ	淡灰色 灰白色	密 ○		
256	坏	底径 (11.2) 残高 3.5	貼り付け高台。接地面に工具による窪みがある。高台は底体部の境に付く。	㊍回転ナデ ㊐工具痕	回転ナデ	淡灰白色 淡灰色	長(1) ○		
257	坏	底径 (7.8) 残高 1.8	貼り付け高台。接地面は内側で「ハ」の字に付く。底にヘラ記号が見られる。	回転ナデ	回転ナデ	淡灰色	長(1) ○		
258	坏	底径 (6.9) 残高 2.0	円盤状高台。体部は直線的に立ち上がる。	㊍回転ナデ ㊐回転ナデ→ナデ	回転ナデ	灰白色	長(1) ○		
259	甕	口径 (17.9) 残高 6.5	頸部はゆるやかに立ち上がる。口端部は丸みを帯びその内側に2つの段がある。肩に自然釉。	㊐回転ナデ ㊐タタキ	回転ナデ	淡灰褐色 青灰色	密・長(1) ◎		
260	甕	口径 (27.3) 残高 5.8	頸部は外反し、口端部は面をなす。	回転ナデ	回転ナデ	淡灰褐色	密・長(1～2) ○		
261	甕	口径 (16.0) 基部径 (15.4) 残高 10.8	頸部はほぼまっすぐ立ち上がり口縁部で少し開く。肩部には2ケ所に環状把手がついている。	㊐回転ナデ ㊐タタキ→カキ目	㊐回転ナデ ㊐タタキ	淡灰色	密・長(1) ○		
262	甕	残高 31.4	胴部下半は砲弾形をしている。外面は浅い格子叩き、内面は横方向に粗く撫で消されている。	タタキ	タタキ→ナデ	淡灰褐色 濃灰色	密・長(1) ○		
263	壺	口頸部径 (6.0) 残高 3.0	肩から短かく立ち上がり内側に窪みがあるがそこから上は欠損している。肩部に自然釉付着。	回転ナデ	回転ナデ	淡灰色 淡灰褐色	密 ◎		
264	壺	底径 (8.3) 残高 11.5	高台は「ハ」の字に開いており接地面は内側である。高台に工具による窪みがある。	削り→ナデ	回転ナデ	淡灰色	砂 ○		
265	壺	底径 (11.0) 残高 2.7	貼り付け高台。「ハ」の字に開いている。内側はガタガタしている。	回転ヘラ削り	回転ナデ	淡灰褐色 青灰色	密・長(1～2) ◎		
266	壺	底径 (12.0) 残高 4.2	貼り付け高台。「ハ」の字に開いている。内面にヘラ描きがある。内、外面とも自然釉付着。	㊍回転ヘラ削り ㊐回転ナデ	回転ナデ	灰褐色 淡灰色	長(1) ◎		
267	壺	底径 (14.2) 残高 4.1	貼り付け高台。「ハ」の字に開いており接地面は内側で高台には工具による窪みがある。	回転ナデ	回転ナデ	淡黄褐色	密・砂 △		
268	壺	底径 (7.4) 残高 4.2	平底。内面の立ち上がりに指頭痕があり、底部外面にはワラ圧痕がある。	㊍ケズリ ㊐回転ヘラ切り	回転ナデ	淡灰白色	密 ○		
269	硯	底径 (9.8) 残高 1.8	貼り付け高台。接地面は外側になる。底部が中央に向ってもり上がっている。	回転ナデ	回転ナデ	暗灰色 淡青灰色	密・長(1) 砂 ◎		8
270	椀	口径 (16.0) 残高 4.9	体部は内反し口端部は丸みを持っている。	マメツ	マメツ	乳褐色	密 ○		
271	椀	底径 (7.4) 残高 2.3	貼り付け輪高台。「ハ」の字に付いている。	マメツ	マメツ	乳白色	石(1) ○		
272	椀	底径 (6.8) 残高 2.0	貼り付け輪高台。「ハ」の字に付いている。	㊍ハケ目→ナデ ㊐ナデ	ハケ目→ナデ	乳白色 乳褐色	密 ○		
273	椀	底径 (6.8) 残高 2.2	貼り付け輪高台。「ハ」の字に付いており接地面は内側になる。	マメツ	マメツ	㊍黒色 ㊐橙色 乳白色	石・長(1) ○		

SD 1　出土遺物観察表　土製品　(4)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
274	椀	底径 (6.8) 残高 2.2	貼り付け輪高台。底体部の境に直立に付く。	マメツ	マメツ	淡橙白色 灰白色	密 ○		
275	椀	底径 5.9 残高 3.0	貼り付け輪高台。「ハ」の字に付いている。	ナデ	ナデ	淡黄褐色	密・長(1) ○		
276	椀	底径 (6.0) 残高 2.0	貼り付け輪高台。底体部の境に直立に付く。	マメツ	マメツ	乳白色 淡橙白色	石(1) ○		
277	椀	底径 (5.9) 残高 2.0	貼り付け輪高台。底部の境に直立に付く。	マメツ	マメツ	乳黄色	砂 ○		
278	椀	底径 (4.8) 残高 2.0	貼り付け輪高台。高台が少し内反している。外面に指頭痕有り。	体ナデ 底マメツ	ナデ	乳白色 淡灰褐色	石(1) ○		
279	椀	底径 5.5 残高 1.4	貼り付け輪高台。高台が少し内反している。	マメツ	マメツ	乳灰白色	密 ○		
280	杯	口径 (12.7) 器高 3.2 底径 (7.8)	立ち上がりは直線的。口縁端部は丸い。	体マメツ 底回転糸切リ	マメツ	乳褐色	密 ○		
281	杯	底径 (6.6) 残高 2.1	円盤状高台。平底。高台からの立ち上がりは直線的。	ナデ	ナデ	乳黄白色	石・長 ○		
282	杯	底径 (7.2) 残高 1.4	円盤状高台。平底。高台からの立ち上がりは直線的。	マメツ	マメツ	乳橙色 乳橙白色	密・長 ○		
283	杯	底径 (6.4) 残高 1.4	円盤状高台。平底。高台からの立ち上がりは直線的。	マメツ	マメツ	淡乳褐色	石・長(1) ○		
284	皿	底径 (5.4) 残高 1.2	底部からの立ち上がりは直線的。底部すのこ痕。	体マメツ 底回転ヘラ切リ	マメツ	淡黄褐色 乳白色	石・長 ○		
285	椀	口径 (15.5) 器高 (5.2) 底径 (5.8)	和泉型瓦器椀。口縁部直下の外面にナデ窪み。	マメツ	マメツ	黒色	密 ○		
286	椀	口径 (17.2) 残高 3.6	和泉型瓦器椀。	指頭痕	マメツ	黒色 灰白色	石(1～2) ○		
287	椀	底径 (4.8) 残高 1.2	和泉型瓦器椀底部。	体マメツ 底ナデ	マメツ	黒色	密 ○		
288	椀	底径 (4.8) 残高 1.1	和泉型瓦器椀底部。	体マメツ・指頭痕 底指頭痕	マメツ	淡橙褐色	石(1～2) ○		

表 9　SD 1　出土遺物観察表　瓦

番号	種類	法量 長さ(cm)	法量 幅(cm)	法量 厚さ(cm)	法量 重さ(kg)	調整 凸面	調整 凹面	色調 (凸面)(凹面)	胎土 焼成	備考	図版
289	平瓦	8.5	8.1	2.5	0.14	斜格子タタキ	布目痕	灰白	長・砂(1) ○		

表10　SD 1　出土遺物観察表　石製品

番号	器　種	残　存	材　質	法　量				備　考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
290	台　石	破損	砂岩	13.4	9.5	6.2	1240		
291	台　石	破損	砂岩	17.3	10.1	4.4	1255		
292	台　石	破損	砂岩	13.3	15.7	5.9	1955		
293	石　核		サヌカイト	9.0	7.8	2.6	192.7		
294	石　斧	ほぼ完存	緑泥片岩	6.8	1.1	1.1	15.1		8
295	石　礎	完存	サヌカイト	2.8	1.8	0.3	1.4		8
296	管　玉	完存	碧玉	1.8	1.3	1.2	5.1		8

表11　SD 1　出土遺物観察表　銭貨

番号	銭　名	初鋳年	銭径(mm)	孔径(mm)	外縁厚(mm)	内側厚(mm)	重量(g)	備　考	図版
297	開元通寶	621	29.0	7.0	1.5	1.4	3.0		8
298	至道元寶	955	22.0	6.0	1.3	1.1	2.8		8
299	至道元寶	955	24.0	6.0	1.3	1.2	3.4		8

表12　表採遺物観察表　土製品　(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調	胎土	備考	図版
				外面	内面	(外面) (内面)	焼成		
300	坏蓋	口径 (12.0) 残高 1.5	端部に面を持ち、かえりは端部より下がらない。	回転ナデ	回転ナデ	灰色	密 ◎		
301	坏身	口径 (11.7) 残高 2.0	立ち上がりは内傾し、受部は太く水平にのびる。	回転ナデ	回転ナデ	淡灰白色	密 ○		
302	坏	口径 (17.3) 残高 4.4	口縁端部は丸みを帯びる。	回転ナデ	回転ナデ	暗灰色 淡青灰色	長(1) ◎		
303	坏	口径 (17.1) 残高 4.9	体部～口縁部にかけて直線的に立ち上がる。	回転ナデ	回転ナデ	濃灰色	長(1) ○		
304	坏	底径 10.2 残高 2.4	貼り付け高台。高台接地面に工具による窪みがある。	㊍回転ナデ ㊐回転ヘラ削リ	回転ナデ	灰褐色 淡灰褐色	長(1) ○		
305	坏	底径 (11.1) 残高 1.4	貼り付け高台。体部との接着部外側に、接着時にできたと思われる窪みがある。	㊍回転ナデ ㊐回転ヘラ削リ	回転ナデ	灰色 灰白色	長・砂 ◎		
306	坏	底径 (9.7) 残高 1.9	貼り付け高台。接着部内、外面にナデによる窪みがある。	回転ナデ	回転ナデ	灰色	長・砂 ○		
307	坏	底径 (9.0) 残高 (1.1)	貼り付け高台。高台接地面に工具による窪みがある。高台は「ハ」の字に開く。	㊍回転ナデ ㊐回転ヘラ切リ	回転ナデ	灰色	長 ○		

表採遺物観察表　土製品

(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
308	坏	底径 (10.1) 残高 2.0	貼り付け高台。「ハ」の字に開く。	㊍回転ナデ ㊐回転ヘラ切リ	回転ナデ	淡橙色	密 △		
309	短頸壺	口径 6.2 器高 5.1 胴部径 10.1	口縁は直線的に立ち短かく、口縁端部は、丸みをもっている。	㊍回転ナデ ㊐回転ヘラ削リ	㊍回転ナデ ㊐タテナデ	暗灰色	長(1) ◎		8
310	短頸壺	口頸基部径 (7.4) 胴部径 (13.7) 残高 6.4	自然釉がかかっている。胴部中央にナデた時にできたと思われる窪みがある。	㊍回転ナデ ㊐回転ヘラ削リ	回転ナデ	灰色	石・長(1～3) ○		
311	壺	残高 3.0	丸底壺の底部。	㊍回転ナデ ㊐回転ヘラ削リ	回転ナデ	濃灰色 青灰色	密・長(1) ◎		
312	台付壺	基部径 (4.6) 残高 3.4	脚部の透しは三方に開いていると思われる。全体に自然釉がかかっている。	ナデ	回転ナデ	淡緑灰色 淡灰色	密・長(1) ◎		
313	蓋	口径 (11.4) 残高 2.2	接地面は平らで、内側に少し出っぱっている。	回転ナデ	回転ナデ	灰褐色 灰色	密・長 ○		
314	蓋	口径 (14.5) 残高 2.1	接地面は平らで、内側に少し出っぱっている。	回転ナデ	回転ナデ	淡紫灰色	密・長 ◎		
315	甕	口径 (18.4) 頸部径 (15.6) 残高 5.8	口縁部に工具による窪みがある頸部は稜をもって外反し、内面には自然釉が付着している。	回転ナデ	回転ナデ	暗灰褐色 暗灰色	密 ◎		
316	椀	口径 (14.9) 残高 3.1	緑釉。口縁端部は丸みを帯び、体部は内・外面とも釉薬がかかっている。	㊍回転ナデ ㊐回転ヘラ削リ	回転ナデ	濃灰色	密 ◎		
317	椀	底径 (6.0) 残高 1.5	貼り付け高台。体部との接着時に付いたと思われる指頭痕あり。	㊍マメツ ㊐回転ヘラ切リ マメツ	マメツ	淡橙白色	石(1) ○		

表 13　表採遺物観察表　石製品

番号	器種	残存	材質	法量 長さ(cm)	法量 幅(cm)	法量 厚さ(cm)	法量 重さ(g)	備考	図版
318	磨製石斧	完存	緑泥片岩	10.2	1.1	1.4	36.0		8
319	磨製石斧		緑泥片岩	9.4	5.3	1.2	104.3	未製品	8
320	磨製石斧	破損	緑泥片岩	9.1	5.5	1.6	140.8		8
321	磨製石斧	破損	緑泥片岩	8.9	5.9	2.8	271		8
322	台石	破損	砂岩	9.4	5.8	4.4	209		

第３章

古市遺跡

―２区―

第３章　古市遺跡２区

１．調査の経過

(1) 調査に至る経緯

1995（平成７）年10月、松山市道路部道路建設第１課（以下、道路建設第１課）より、松山市平井町甲1724外における松山市道「平井・水泥線」道路建設工事にあたり、当該地における埋蔵文化財の確認願いが松山市教育委員会文化教育課（以下、文化教育課）に提出された。

当該地は、松山市の指定する埋蔵文化財包蔵地の『90権現山古墳群』内にある。北に広がる丘陵には古墳時代後期を中心とした古墳群や、古墳時代後期から古代にかけての窯址群が多数存在している。また、調査地周辺ではこれまでに上苅屋遺跡１・２次調査地、下苅屋遺跡の調査が行われている。上苅屋遺跡１次調査地では、古墳時代後期の小型石室や掘立柱建物址、溝を検出した。上苅屋遺跡２次調査地では、古墳時代の掘立柱建物址２棟を検出した。下苅屋遺跡では、古墳時代後期の竪穴式住居址６棟、土坑、溝、掘立柱建物に伴う柱穴等が検出されている。調査地東隣の古市遺跡１区では、弥生時代前期から古代にかけて機能していたと考えられる自然流路や室町時代の水路が検出されている。このように申請地周辺には多くの遺跡が分布している。

したがって、文化教育課では、当該地における埋蔵文化財の有無と、さらには遺跡の範囲やその性格を確認するために、路線のうち用地買収完了部分について、1996（平成８）年11月に９本のトレンチによる試掘調査を実施した。試掘調査の結果、古墳時代の掘立柱建物址や土坑、柱穴等を確認した。

これらの結果を受け、文化教育課・㈶松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センターと道路建設第１課は発掘調査について協議を行い、開発工事によって失われる遺構や遺物について、記録保存のため発掘調査を実施することにした。今回の調査では古墳時代の集落構造解明を主目的とし、平成９年２月17日から平成９年３月31日の間に野外調査を実施した。なお、調査の都合上、調査区をＡ・Ｂ・Ｃ・Ｄ地区に分けた。さらに調査地内を４ｍ四方のグリットに分け、グリットは北から南へＡ・Ｂ・Ｃ、西から東へ１・２・３とし、第27図に示した。

(2) 調査組織

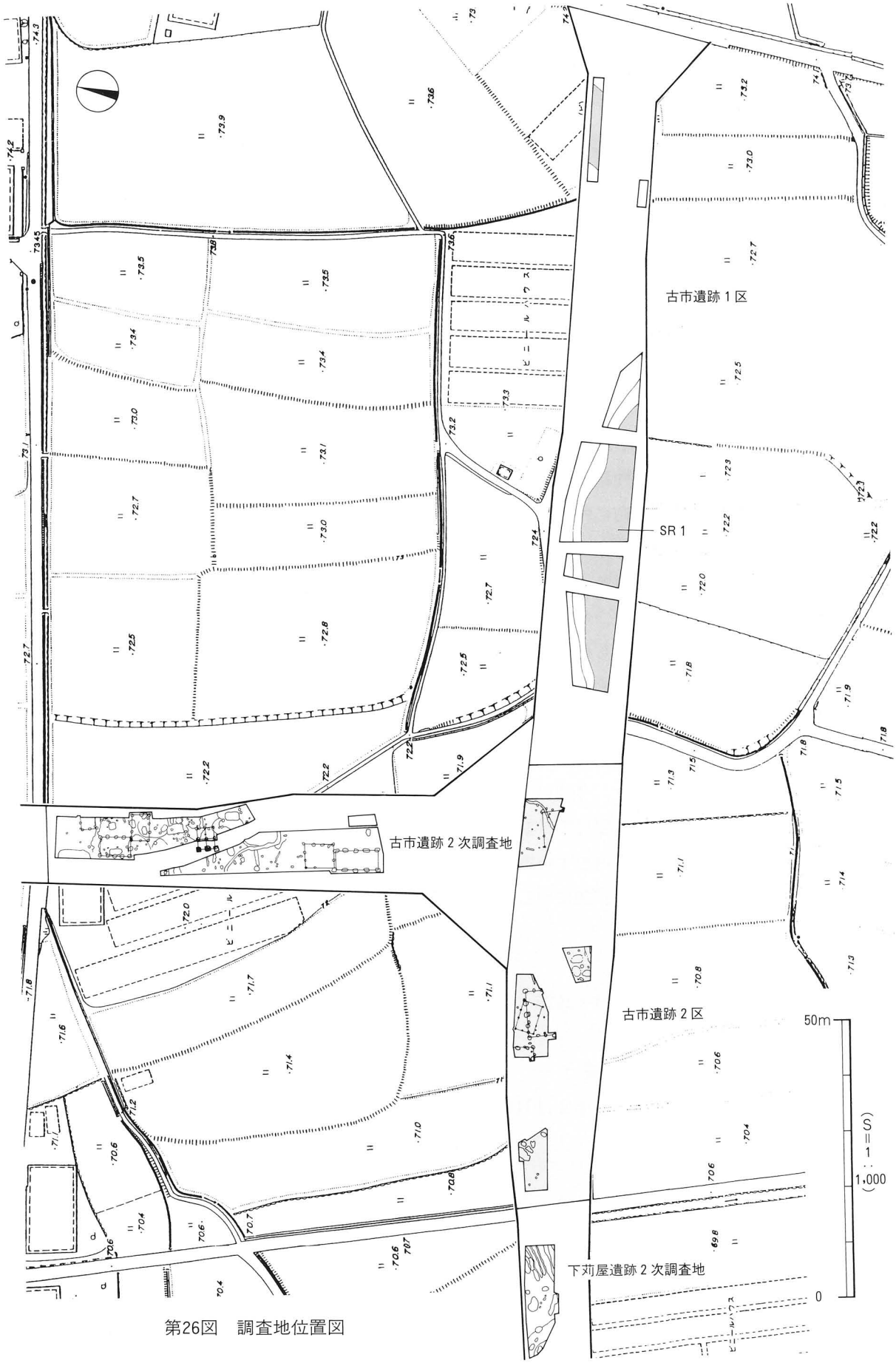
調 査 地　松山市平井町甲1724・1725・1726・1735・1736

遺 跡 名　古市遺跡

調査面積　1,297㎡（２区の面積）

調査期間　1997年２月17日～同年３月31日

調査担当　河野史知



第26図　調査地位置図

2．層　位（第28・29図）

本遺跡は、小野谷に水源を発する小野川と、平井谷に水源を発する堀越川によって形成された扇状地の扇央付近、標高71mに立地する。基本土層は第Ⅰ層暗青灰色土、第Ⅱ層黄褐色土、第Ⅲ層暗灰色土、第Ⅳ層黒褐色土、第Ⅴ層黒色土、第Ⅵ層黄灰色土である。調査地は東西に全長約90m、南北に幅14～19mで、東から西へ向けて約１mの緩傾斜をなしている。

第Ⅰ層―農耕による耕作土で厚さ10～25cmの堆積を測る。

第Ⅱ層―耕作に伴う床土で厚さ３～15cmの堆積を測る。

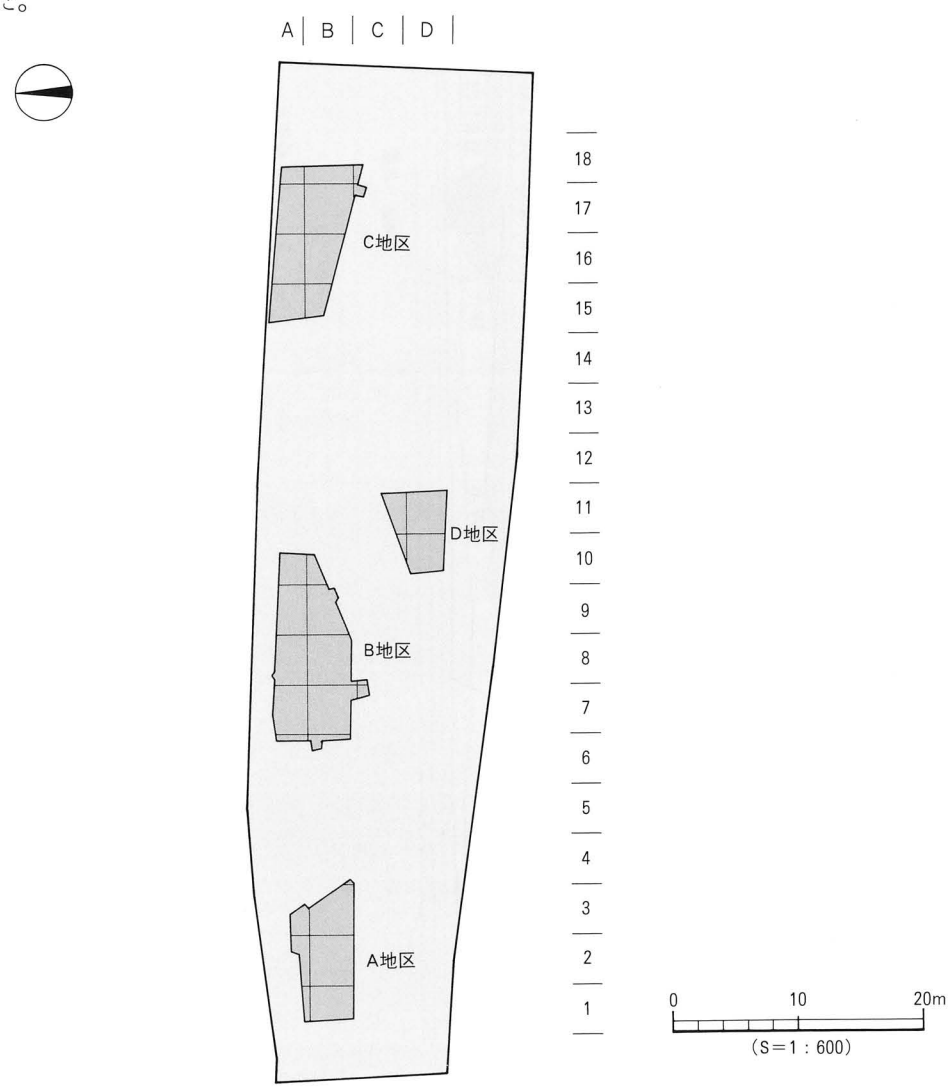
第Ⅲ層―旧耕作土で厚さ５～14cmの堆積を測る。

第Ⅳ層―Ｂ地区の全域、Ｄ地区の南側に堆積する。土師器・須恵器を包含し、厚さ６～10cmの堆積を測る。

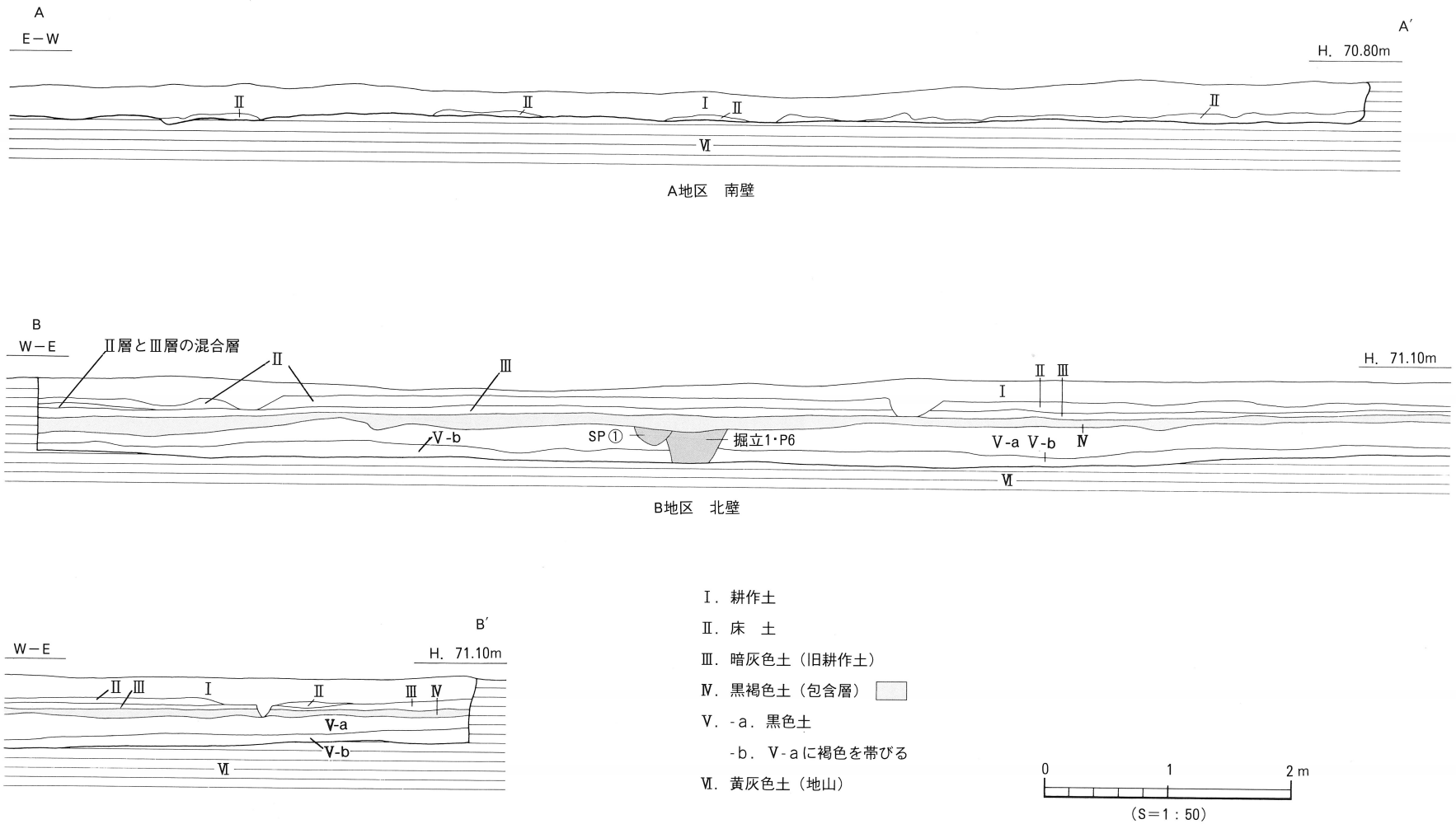
第Ⅴ層―無遺物層で、柔らかく、やや粘性を帯びる。Ｂ・Ｃ地区に厚さ10～35cmの堆積を測る。色調の違いからⅤ－ａ層は黒色土、Ⅴ－ｂ層はⅤ－ａ層に褐色を帯びた層になる。

第Ⅵ層―地山と呼ばれるものである。

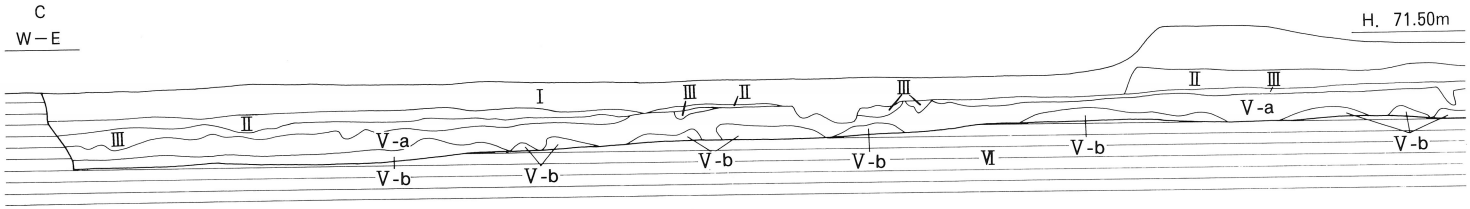
遺構は、第Ⅴ・Ⅵ層上面にて掘立柱建物址５棟、土坑７基、柱穴25基、溝４条、性格不明遺構４基を検出した。



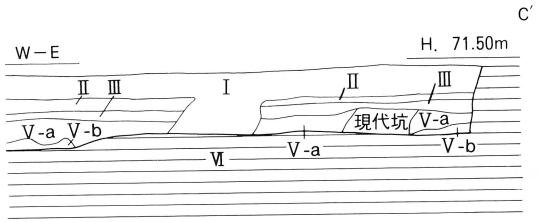
第27図　調査地区割図



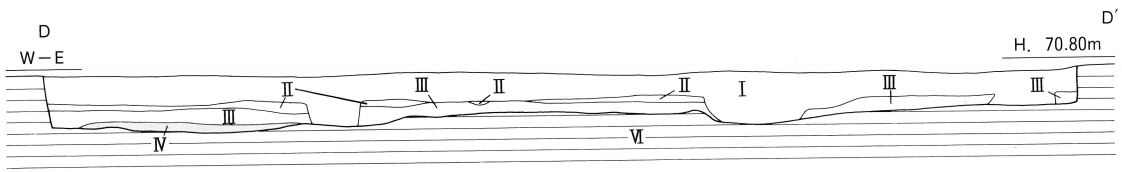
第28図　A・B地区 南・北壁土層図



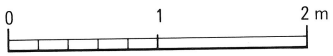
C地区　北壁



Ⅰ. 耕作土
Ⅱ. 床　土
Ⅲ. 暗灰色土（旧耕作土）
Ⅳ. 黒褐色土（包含層）
Ⅴ. -a. 黒色土
-b. Ⅴ-a に褐色を帯びる
Ⅵ. 黄灰色土（地山）



D地区　北壁



（S＝1：50）

第29図　C・D地区 北壁土層図

３．遺構と遺物

〔1〕Ａ 地 区（第30図）

遺構は第Ⅵ層上面にて土坑４基、柱穴４基、性格不明遺構１基を検出した。

SK １（第30図）

調査区北東部のＡ～Ｂ・２～３区に位置し、北端は調査区外に延びる。平面形態は不整長方形、断面形態は逆台形状を呈する。規模は長軸2.5m以上、短軸1.1m、検出面よりの深さ40cmを測る。埋土は暗褐色土である。出土遺物は須恵器・土師器の細片が出土している。

時期：出土遺物が細片であるため、埋土から古墳時代としか判らない。

SK ２（第30図）

調査区東部のＢ・３区に位置する。平面形態は楕円形、断面形態は逆台形状を呈する。規模は長軸1.5m、短軸0.8m、検出面よりの深さ30cmを測る。埋土は上層が暗褐色土、下層が黒色土である。出土遺物はない。

時期：出土遺物がなく時期判断は困難であるが、埋土より古墳時代と考えられる。

SK ３（第30図）

調査区南東部のＢ・３区に位置する。平面形態は楕円形、断面形態は逆台形状を呈する。規模は長軸1.1m、短軸0.8m、深さ32cmを測る。埋土は黒色土である。出土遺物はない。

時期：出土遺物がなく時期判断は困難であるが、埋土より古墳時代と考えられる。

SK ４（第30図）

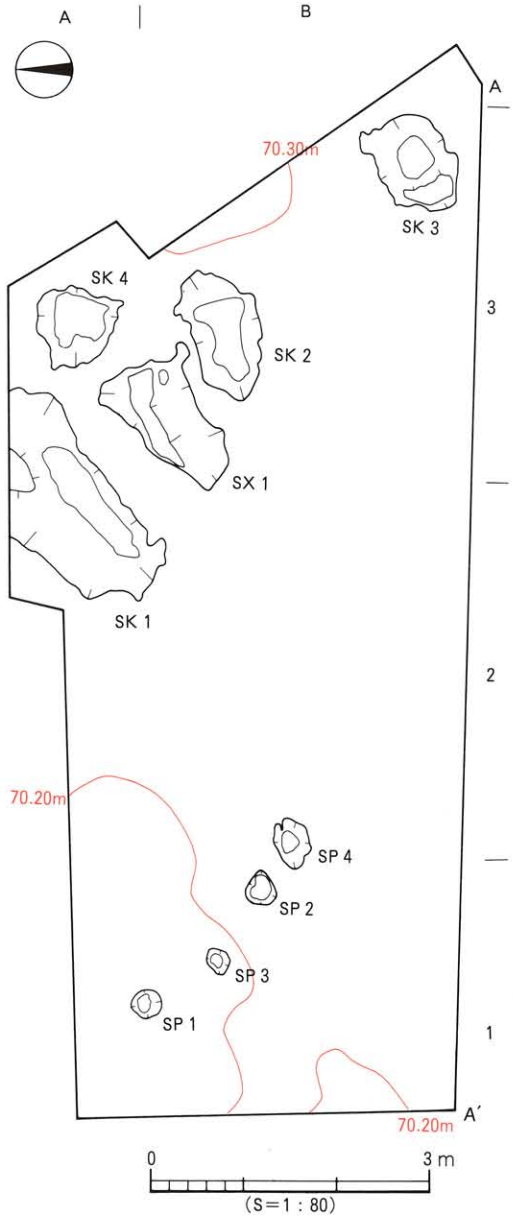
調査区北東部のＡ・３区に位置する。平面形態は楕円形、断面形態は逆台形状を呈し、規模は長軸0.9m、短軸0.85m、深さ39cmを測る。埋土は黒色土である。出土遺物はない。

時期：埋土より古墳時代と考えられる。

柱穴（第30図）

本地区において検出したピットは４基である。円形３基、楕円形１基である。埋土は暗褐色土である。規模は直径0.25～0.55m、検出面よりの深さ3～11cmを測る。出土遺物はSP １・３から土師器の細片が出土している。

時期：出土遺物が細片であるため、埋土から古墳時代以降に埋没したとしか判らない。

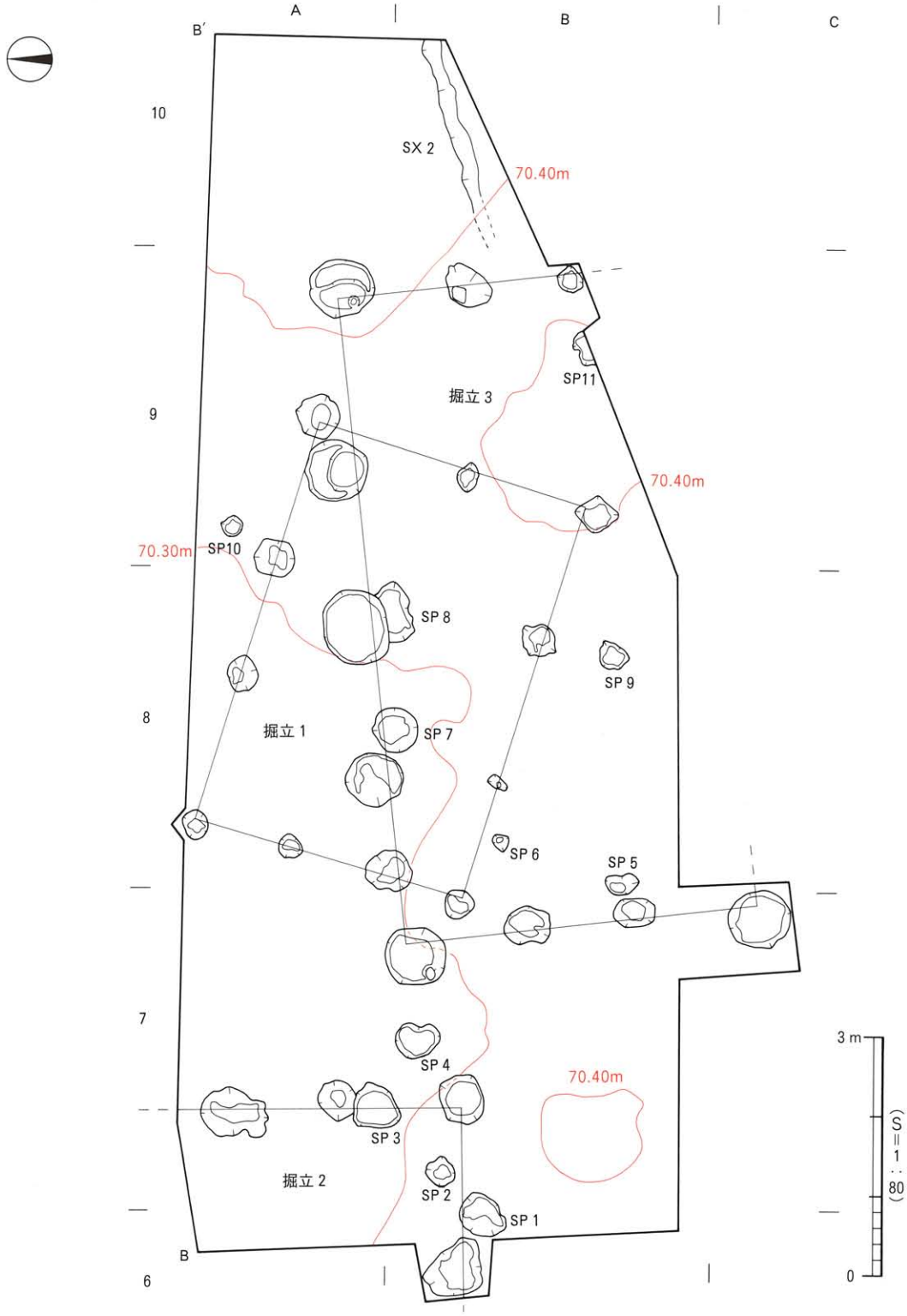


第30図　Ａ地区遺構配置図

SX 1（第30図）

調査区北東部のA～B・2～3区に位置する。平面形態が不整形、断面形態が逆三角形状を呈する。規模は長軸1.6m、短軸0.8m、検出面よりの深さ30cmを測る。埋土は上層が灰褐色土、中層から下層にかけ黄灰褐色土を呈する。遺物の出土はない。

時期：出土遺物がなく時期判断は困難である。埋土から古墳時代以降に埋没したとしか判断できない。



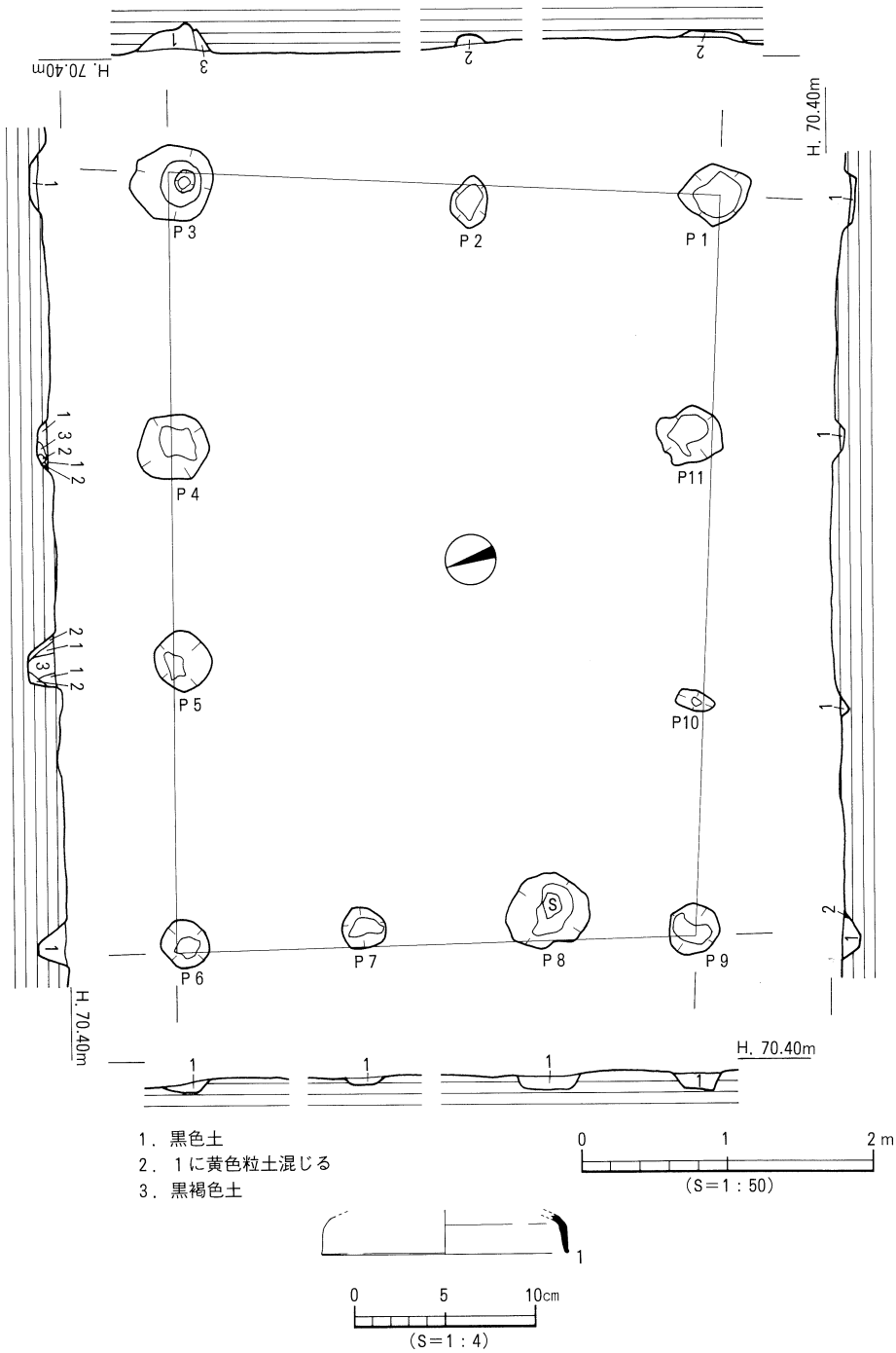
第31図　B地区遺構配置図

〔2〕Ｂ 地 区（第31図）

第Ⅴ層上面にて掘立柱建物址３棟、柱穴11基、性格不明遺構１基を検出した。旧地形は南東方向から北西方向に緩傾斜する。

掘立１（第32図）

調査区中央部西側のＡ～Ｂ・７～９区に位置する。３間×２～３間の東西棟で、主軸はＥ-17°-Ｓを指向する。梁は西側が３間分、東側が２間分の検出であり、桁行長5.2m、梁行長3.5mを測る。柱穴の平面形態は円形～楕円形を呈し、規模は径16～56cm、検出面よりの深さ３～20cm、床面積18.2m²を測る。柱痕は未検出であるが、Ｐ３・８の基底部に根石を検出した。埋土は黒褐色～黒色土である。



第32図　Ｂ地区掘立１測量図・出土遺物実測図

遺物は須恵器・土師器片が出土している。

出土遺物（第32図）

１はＰ３出土の須恵器の坏蓋である。内湾して下がる口縁部に端部は外反する。

時期：出土遺物１の形態より、６Ｃ末～７Ｃ初頭に埋没したと考える。

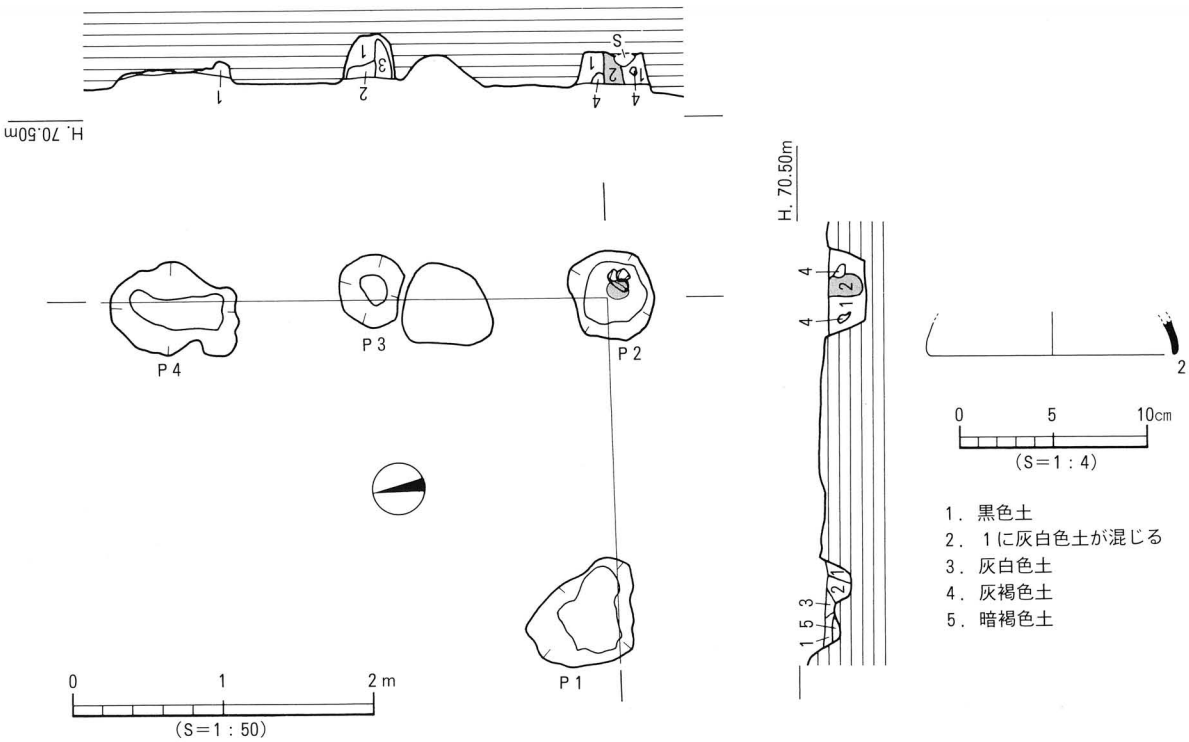
掘立２（第33図）

調査区西側のＡ～Ｂ・６～７区に位置する。東西１間以上×南北２間以上で、東西・南北は調査区外に延びる。主軸はほぼ真北を指向する。柱間は東西2.0m以上、南北3.0m以上を測る。柱穴の平面形態は円形を呈し、規模は径40～86cm、検出面よりの深さ10～29cmを測る。Ｐ２より直径15cmの柱痕を検出し、基底部には柱痕の一部を囲む様に10～15cm大の根詰石を検出した。埋土は暗褐色～黒色土である。遺物は須恵器・土師器片が出土している。

出土遺物（第33図）

２はＰ２出土の須恵器の坏蓋の口縁部片である。内湾気味に下がる口縁部をもつ。

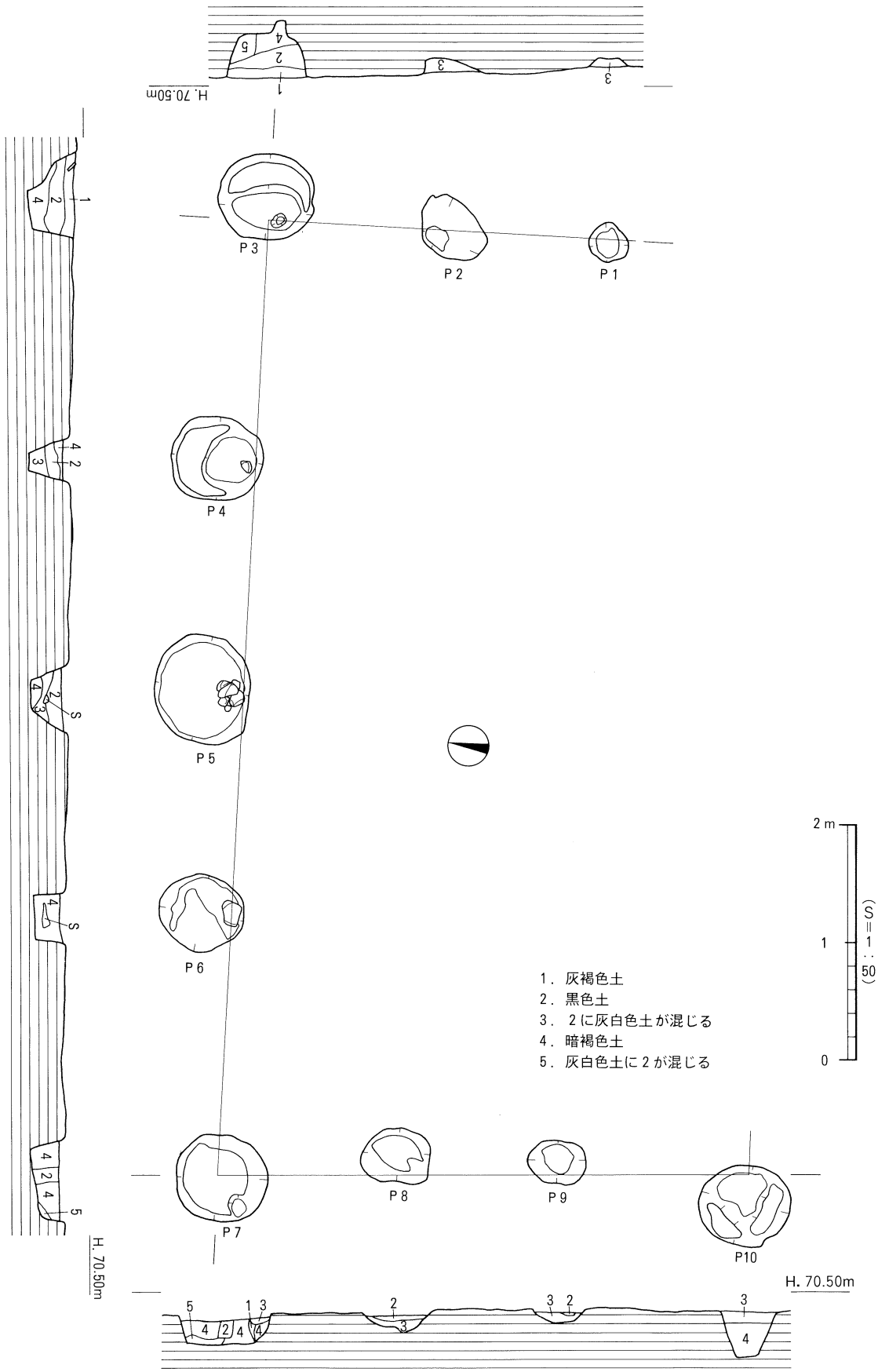
時期：出土遺物２の形態や埋土より、６Ｃ末～７Ｃ初頭に埋没したものと考えられる。



第33図　Ｂ地区掘立２測量図・出土遺物実測図

掘立３（第34図、図版11）

調査区南側のＡ～Ｃ・７～９区に位置する。４間×３間の東西棟で、主軸はＥ－７°－Ｎを指向する。桁行長8.0m、梁行長4.5mを測る。柱穴の平面形態は円形を呈し、規模は径32～95cm、検出面よりの深さ７～49cm、床面積36.0m²を測る。柱穴の大きさは桁方向Ｐ３～７・10が大きいのに対し、梁方向の内側のＰ１・２・８・９は小振りな特徴をもつ。埋土は暗褐色～黒色土である。Ｐ４・５・６にお



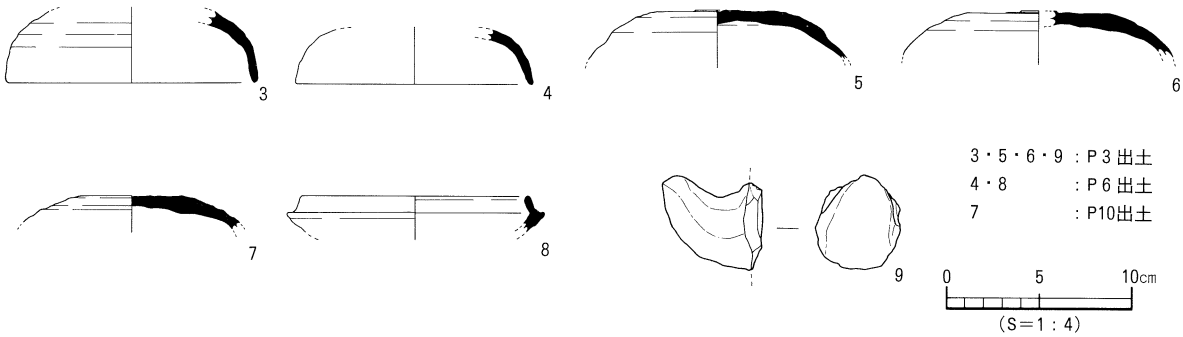
第34図　Ｂ地区掘立３測量図

いて根詰石を検出した。遺物は須恵器・土師器片が出土している。

出土遺物（第35図）

3～7は須恵器の坏蓋である。3・4は内湾して下がる口縁部をもつ。5～7は平らな天井部をもつ。8は須恵器の坏身である。立ち上がりは外反気味である。9は土師器の甑の把手である。湾曲しながら外上方向にのびる。

時期：出土遺物の形態より、6c末～7c初頭に埋没したものと考えられる。



第35図　B地区掘立3出土遺物実測図

柱穴（第31図）

本地区において検出したピットは11基である。円形6基、楕円形5基で、埋土の違いにより2つに分類され、黒色土4基（SP 3・5・6・8）、黄色粒土混じりの黒色土7基（SP 1・2・4・7・9・10・11）となる。平面形態は円形～楕円形を呈し、規模は直径0.2～0.6m、検出面よりの深さ4～30cmを測る。遺物は弥生土器・土師器・須恵器片が出土している。

時期：出土遺物が細片であるため埋土より、古墳時代後期前後に埋没したとしか判断できない。

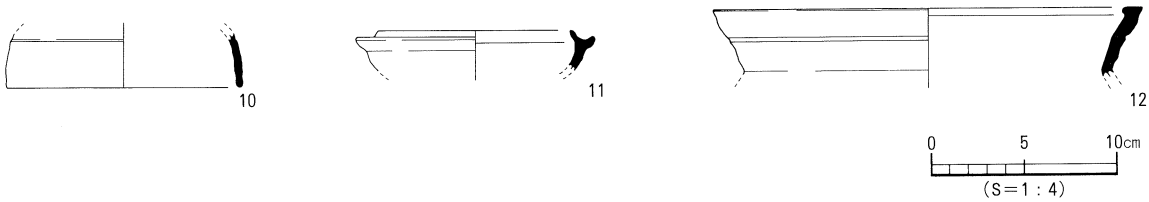
SX 2（第31図）

調査区北東部B・10区に位置し、南・東側は調査区外に延びる。東西に直線状に延びており、北から南に段をもつ。規模は検出長2.3m、検出面よりの深さ17cmを測る。埋土は黒色土である。出土遺物はない。

時期：出土遺物がなく埋土より古墳時代に埋没したものとしか判らない。

第Ⅳ層出土遺物（第36図）

10は坏蓋である。内湾気味に下がる口縁部である。天井部と口縁部の境界の稜が微かにみられる。11は坏身である。受部は外上方につり上がる。12は甕の口縁部である。外反する口縁部に、端部は内側に肥厚され、端面は平らな面をなす。



第36図　B地区第Ⅳ層出土遺物実測図

〔3〕Ｃ 地 区（第37図）

第Ⅴ層上面にて掘立柱建物址２棟、柱穴５基、溝３条を検出した。旧地形は東から西へ緩傾斜する。

掘立４（第38図）

調査区南側のＢ～Ｃ・16～17区に位置し、南側は調査区外に延びる。掘立５を切る。東西３間×南北２間で、桁行長6.2m以上、梁行長3.8mを測る。柱穴の平面形態は円形を呈し、規模は径23～44cm、検出面よりの深さ７～25cmを測る。埋土は黒褐色～黒色土である。Ｐ５より直径12cmの柱痕を検出した。遺物はＰ２より土師器の椀と瓦器椀の２点を出土している。この土器は、口縁部を被せ合わせた状態で、基底部に横にして出土している。

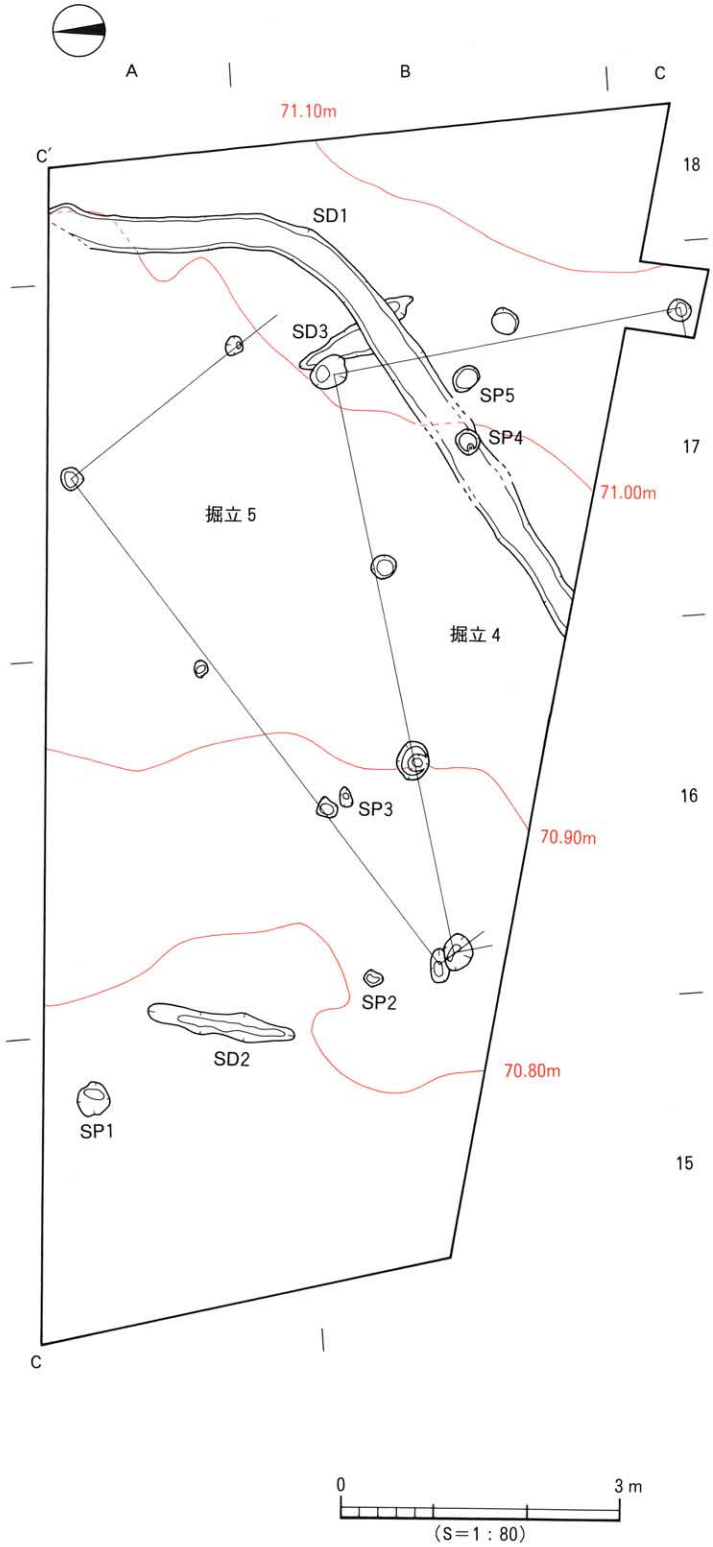
出土遺物（第38図、図版12・15）

13は瓦器椀である。胴部は内湾し、底部に外踏ん張りの比較的高い貼り付け高台をもつ。胴部内外面に横方向のミガキが施されている。和泉型瓦器椀。14は土師器の椀である。内湾する胴部に口縁端部付近に成形時の粘土紐の積み上げ痕が残る。

時期：出土遺物13の形態から、12Ｃ前半に埋没したものと考えられる。

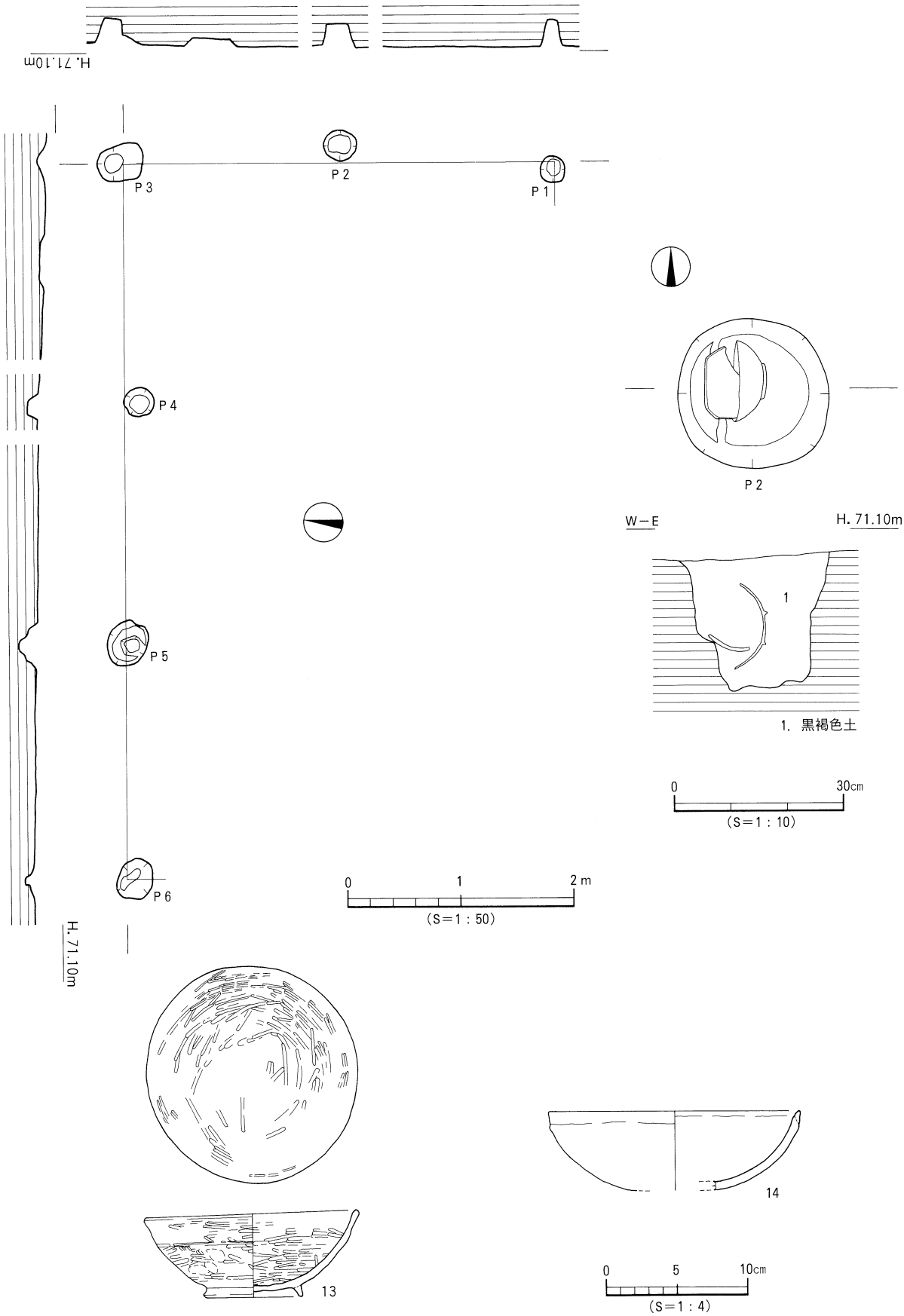
掘立５（第39図）

調査区南北側のＡ～Ｂ・16～17区に位置する。東西３間×南北１間の検出であり、南側は未検出である。掘立４に切られる。桁行長6.5mの柱間2.0～2.5m、梁行長2.3mの柱間を測る。柱穴の平面形態は円形～楕円形を呈し、規模は径16～34cm、検出面よりの深さ８～25cmを測る。埋土は黒褐色～黒色土である。柱痕は未検出である。出土遺物はない。



第37図　Ｃ地区遺構配置図

時期：出土遺物がないため、切り合いや埋土から、掘立４に先行する古代としか判らない。



第38図　C 地区掘立 4 測量図・出土遺物実測図

SD １（第37図）

調査区東端のＡ～Ｂ･16～18区に位置する。北方向より屈曲し南西方向に延びる。規模は検出長7.5m、上場幅0.3～0.45m、検出面よりの深さ７cmを測る。断面形態はレンズ状を呈し、埋土は黒褐色土である。遺物は土師質の細片が出土している。

時期：僅かに出土した遺物や埋土が掘立４と類似していることより、12Ｃ前半に埋没したものと考えられる。

SD ２（第37図）

調査区西側のＡ・15～16区に位置する。検出長1.6m、上場幅20～30cm、検出面よりの深さ８cmを測る。埋土は黒色土である。出土遺物はない。

時期：出土遺物がなく時期判断は困難である。埋土から、古墳時代に埋没したとしか判断できない。

SD ３（第37図）

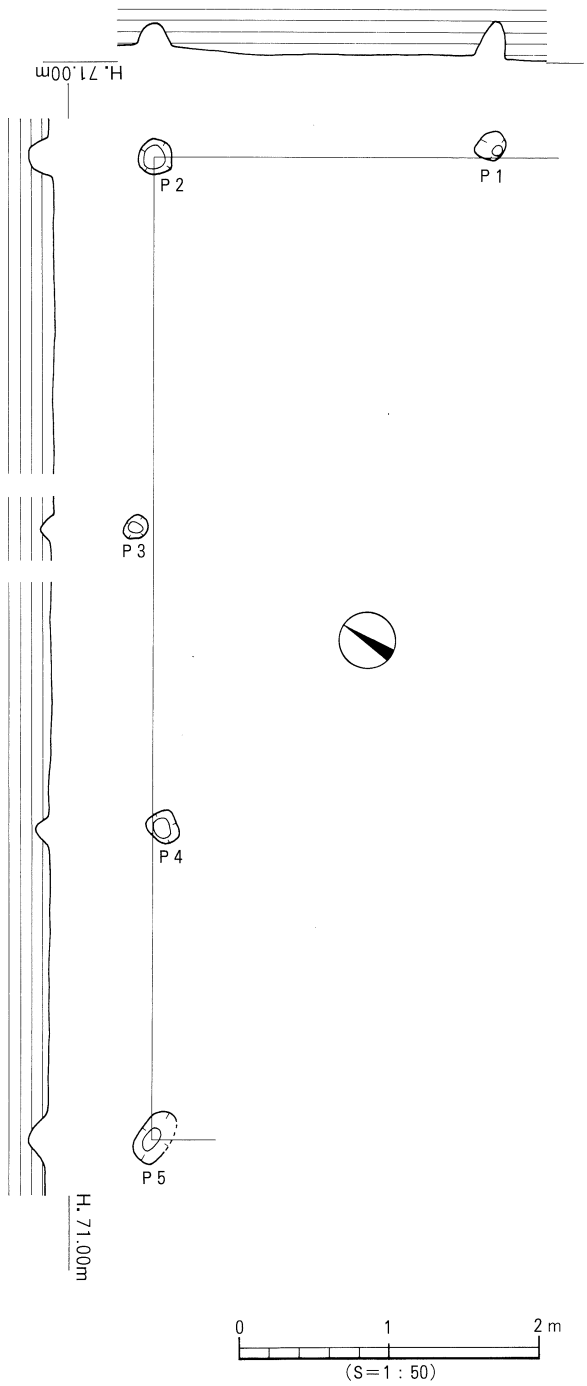
調査区東側のＢ･17区に位置し、掘立４・SD １に切られる。検出長1.4m、上場幅38cm、検出面よりの深さ10cmを測る。埋土は黒色土である。出土遺物はない。

時期：出土遺物がなく時期判断は困難である。埋土から、古墳時代に埋没したとしか判断できない。

柱穴（第37図）

本地区において検出したピットは５基である。円形４基、楕円形１基で、埋土は黒色土である。規模は直径17～43m、検出面よりの深さ６～26cmを測る。遺物は出土していない。

時期：出土遺物がなく時期判断は困難である。埋土から古墳時代に埋没したとしか判断できない。



第39図　Ｃ地区掘立５測量図

〔4〕D 地 区（第40図）

第VI層上面にて土坑３基、柱穴５基、溝１条、性格不明遺構２基を検出した。

SK 5（第40図）

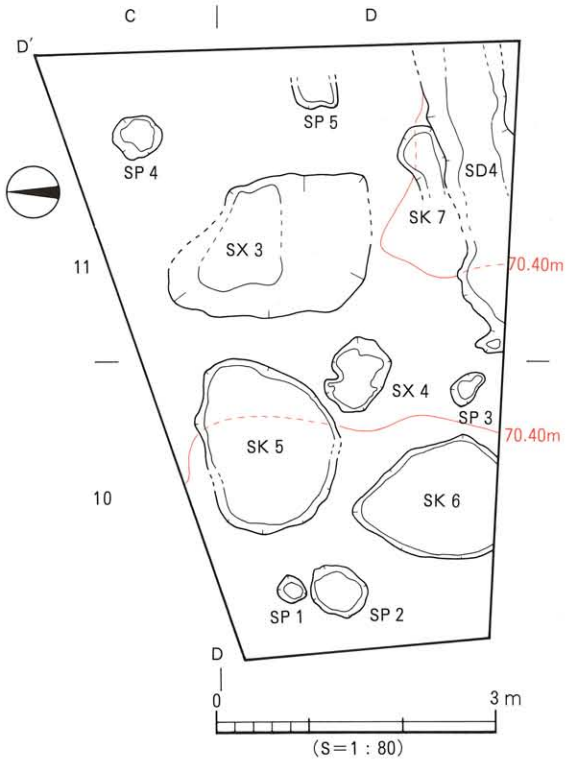
調査区北西部のC～D・10～11区に位置する。平面形態は楕円形、断面形態は皿状を呈する。規模は長軸1.9m、短軸1.4m、検出面よりの深さ18cmを測る。埋土は暗褐色土である。遺物は須恵器・土師器の細片が出土する。

時期：出土遺物が細片であるため、埋土から古墳時代としか判らない。

SK 6（第40図）

調査区南西部のD・10区に位置し、南側は調査区外に延びる。平面形態は楕円形、断面形態はレンズ状を呈する。規模は長軸1.5m以上、短軸1.3m、検出面よりの深さ15cmを測る。埋土は暗褐色土である。遺物は須恵器の細片が出土する。

時期：出土遺物が細片であるため、埋土から古墳時代としか判らない。



第40図　D地区遺構配置図

SK 7（第40図）

調査区南西部のD・11区に位置し、SD 4に切られる。平面形態は楕円形、断面形態は逆台形状を呈する。規模は長軸0.7m以上、短軸0.4m、検出面よりの深さ23cmを測る。埋土は黒褐色土である。遺物は須恵器が出土する。

出土遺物（第41図）

15・16は須恵器の甕である。15は口縁部は外反し端部は斜めに面をなす。16は緩やかな「く」の字状の口縁部に端部は丸い。

時期：SD 4に切られることより、下限を６C前半と考える。

第41図　D地区 SK 7出土遺物実測図

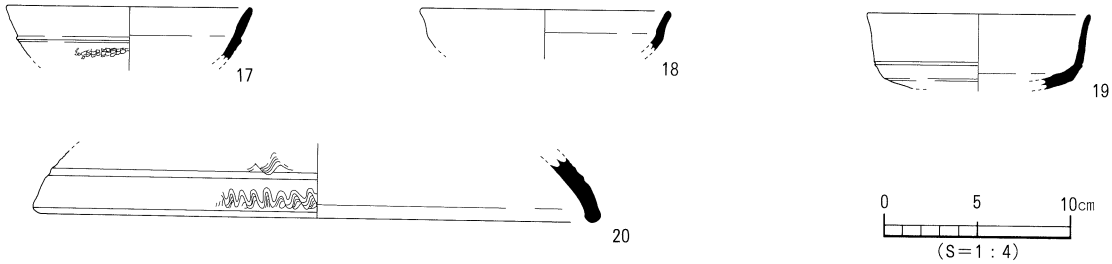
SD ４（第40図）

調査区南東部のD・11区に位置する。検出長3.0m、上場幅0.8～0.9m、検出面よりの深さ25cmを測り、東から南西方向の調査区外に延びる。東西を指向しており、断面形態は舟底状を呈する。埋土は黒色土で、遺物は須恵器・土師器片が出土している。

出土遺物（第42図、図版15）

17～19は須恵器の無蓋高坏である。17・18は、胴部が内湾し、口縁部は外反する。17は口縁と胴部の境界に稜をもち、その下に波状文が施される。19は底部と胴部の境が屈曲し、口縁端部はやや外反する。20は須恵器の器台の脚裾部である。

時期：出土遺物より、６Ｃ前半に埋没したものと考えられる。



第42図　Ｄ地区 SD ４出土遺物実測図

柱穴（第40図）

本地区において検出したピットは５基である。円形３基、楕円形２基で埋土の違いにより２つに分類され黒褐色土３基（SP １・２・３）、黒色土２基（SP ４・５）となる。規模は直径0.2～0.6m、検出面よりの深さ10～20cmを測る。遺物は黒色土より弥生土器、黒褐色土より土師器・須恵器の細片が出土している。

時期：出土遺物より、黒色土は弥生時代、黒褐色土は古墳時代後期と考える。

SX ３（第40図）

調査区東側Ｃ～Ｄ・11区に位置する。平面形態は北側が突出した隅丸の方形、断面形態はレンズ状を呈する。規模は長さ2.1m、幅1.5m、検出面よりの深さ15cmを測る。埋土は暗褐色土である。遺物は土師器片が出土している。

時期：出土遺物が細片であるため、埋土から古墳時代としか判らない。

SX ４（第40図）

調査区中央部D・10～11区に位置する。平面形態は楕円形、断面形態は逆台形状を呈している。規模は長軸0.8m、短軸0.6m、検出面よりの深さ６cmを測る。埋土は暗褐色土である。出土遺物はない。

時期：埋土より、古墳時代としか判らない。

第Ⅳ層出土遺物（第43図、図版15）

21～28は須恵器で、21・22は坏蓋である。21は内湾して下がる口縁端はやや外反する。22は天井部に宝珠つまみをもつ。

23・24は坏身である。23は立ち上がりは内傾しており受部に沈線状の凹みをもつ。24は立ち上がりは短く受部端は丸い。

25・26は高坏である。25は端部付近で屈曲し端部は段をなす。内面にはしぼり痕がみられる。26は脚裾部が上下に肥厚される。

27・28は壺である。27は外反気味の口縁内外面には回転ナデ調整が施されている。28は口頸部の基部が細く、口縁部は外反する。

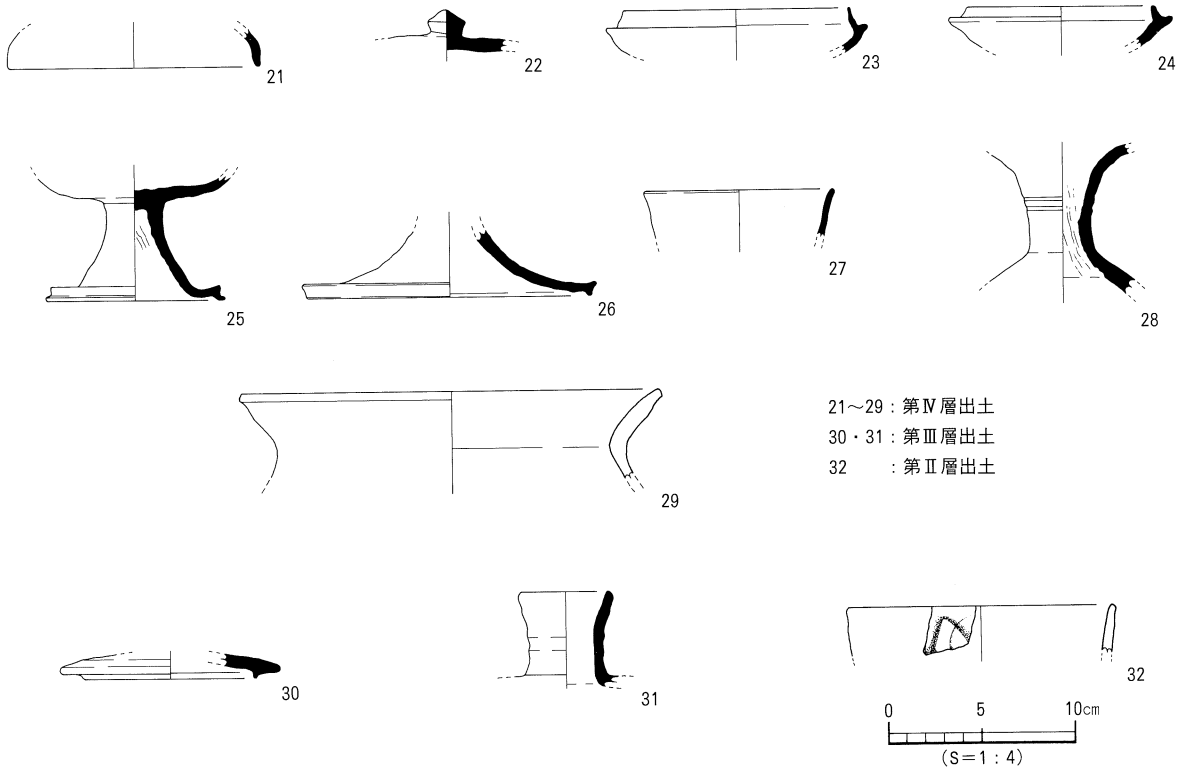
29は土師器の甕である。「く」の字状の口縁部に端部は平らな面をなす。

第Ⅲ層出土遺物（第43図）

30は坏蓋である。かえりが天井端部より下方に突出する。31は横瓶の口縁部である。緩やかに外反する。

第Ⅱ層出土遺物（第43図）

32は青磁碗である。外面に片切彫りによる蓮弁文が施される。龍泉窯系のものである。



第43図　D地区 第Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ層出土遺物実測図

４．小　結

今回の調査では、古墳時代と古代の集落関連遺構を検出した。今回の調査地は古市遺跡１区の弥生時代前期から古代の自然流路の北側の微高地部にある。

縄文時代

Ａ・Ｂ・Ｃ地区の低地部で検出した第Ⅴ層黒色土は無遺物層で、古市遺跡２次調査地のＢ区南側落ち込み部に堆積した土層と同じものである。古市遺跡２次調査地では、黒色土を縄文時代晩期の土坑が切ることから、それ以前に堆積した土層であることが判っている。また、土質が柔らかく細粒土であることから、火山灰（アカホヤ火山灰）の降灰の可能性が考えられている。

弥生時代

Ｄ地区のＳＰ ４とＳＰ ５は弥生時代中期の柱穴である。北隣の古市遺跡２次調査地では、弥生時代前期から中期までの土坑を検出し、古市１区では自然流路から弥生時代前期の土器が出土している。したがって、今回の調査地を含む古市１区自然流路の北側には、弥生時代前期～中期の集落が展開するものと考えられる。周辺において集落の存在を示す資料である。

古墳時代

Ｂ地区では掘立柱建物址が３棟検出され、Ａ・Ｃ・Ｄ地区では土坑を主とした集落関連遺構を検出した。これらのことから、６世紀末～７世紀初頭には居住域として機能していたことが分かる。また、掘立１・３は重複しているが、柱穴には切り合いがなく、出土遺物は同時期の遺物で、新旧関係は判断できなかった。

古　代

掘立４の柱穴内からは瓦器椀と土師器椀が出土した。これは、建物の廃絶に伴う祭祀遺物と考えられる。類例は兵庫県の多利・前田遺跡（12世紀後半～13世紀初頭）において、掘立柱建物の柱を抜き取り、それを埋め戻す途中で瓦器椀を１個ずつ埋納する柱穴を２ヶ所検出しており、建物の廃絶時の鎮物と考えられている。同時期の遺構は、北隣の古市遺跡２次調査地に掘立柱建物址が２棟検出されており、古墳時代に継続して集落が営まれていたことがわかる。

今回の調査では、古墳時代後期と古代末の集落の一部を確認することができた。今後の調査では、流路南岸の確認と流路周辺における集落の構造や範囲を解明することが、調査課題である。

〔文献〕

尾上　　実　「南河内の瓦器椀」『藤澤一夫先生古稀記念古文化論』1983
『多利遺跡群発掘調査報告』兵庫県教育委員会 1987
辻　　佳伸　「皿と銭貨　―中世地鎮め遺構の一様相―」『真朱（創刊号）』㈶徳島県埋蔵文化財センター 1992
梅木謙一編　『小野川流域の遺跡』松山市教育委員会・㈶松山市埋蔵文化財センター 1996
重松　佳久　「下苅屋遺跡」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅷ』松山市教育委員会・㈶松山市埋蔵文化財センター 1996
栗田　茂敏・河野　史知・大森　一成　「古市遺跡（１・２区）、下苅屋遺跡２次調査地」『松山市埋蔵文化財調査年報

IX』松山市教育委員会・㈶松山市埋蔵文化財センター 1997
山本 健一・山之内志郎 「古市遺跡2次調査地」「五楽遺跡」『松山市埋蔵文化財調査年報IX』松山市教育委員会・㈶松山市埋蔵文化財センター 1997

遺構・遺物一覧

(1) 以下の表は遺構・遺物の計測値及び観察一覧である。

(2) 遺物観察表の各記載について。

法量欄（ ）：復元推定値

形態・施文欄：土器の各部位名称を略記。

例）口→口縁部、口端→口縁端部、天→天井部、つ→つまみ、胴→胴部、坏→坏部、脚→脚部、高→高台、底→底部

胎土・焼成欄：胎土欄では混和剤を略記した。

例）砂→砂粒、長→長石、石→石英、密→精製土、チャ→チャート

（ ）内の数値は混和剤粒子の大きさを示す。(単位：mm)

焼成欄の略記について。◎→良好、○→良、△→不良。

表14 掘立柱建物址一覧

掘立	規模(間)	方向	桁行		梁行		方位	床面積(㎡)	時期	備考
			実長(m)	柱間寸法(m)	実長(m)	柱間寸法(m)				
1	3×2～3	東西	5.2	1.8・1.6・1.8	3.5	1.9・1.6	E-17°-S	18.2	6C末～7C初頭	
2	2以上×1以上	南北	3.0以上	1.6・1.4・α	2.0以上	2.0・α	N-1°-W	6.0以上	6C末～7C初頭	調査区外に延びる
3	4×3	東西	8.0	2.0・2.0・1.9・2.1	4.5	1.5・1.4・1.6	E-7°-N	36.0	6C末～7C初頭	調査区外に延びる
4	3×2	東西	6.2	2.1・2.1・20	3.8	1.9・1.9	E-8°-N	23.6	12C前半	調査区外に延びる
5	3×1以上	東西	6.5	2.5・2.0・2.0	2.3以上	2.3・α	E-33°-N	15.0以上	古代	

表15 土坑一覧

土坑(SK)	区名	平面形	断面形	規模(m) 長さ(長径)×幅(短径)×深さ	床面積(㎡)	埋立	出土遺物	時期	備考
1	A～B 2～3	不整長方形	逆台形状	2.5以上×1.1×0.4	2.07	暗褐色土	須恵・土師	古墳	調査区外に延びる
2	B・3	楕円形	逆台形状	1.5×0.8×0.3	0.84	暗褐色土 黒色土	ナシ	古墳	
3	B・3	楕円形	逆台形状	1.1×0.8×0.32	0.74	黒色土	ナシ	古墳	
4	A・3	楕円形	逆台形状	0.9×0.85×0.39	0.53	黒色土	ナシ	古墳	
5	C～D 10～11	楕円形	皿状	1.9×1.4×0.18	2.15	暗褐色土	須恵・土師	古墳	
6	D・10	楕円形	レンズ状	1.5以上×1.3×0.15	1.49	暗褐色土	須恵	古墳	調査区外に延びる
7	D・11	楕円形	逆台形状	0.7以上×0.4×0.23	0.24	黒褐色土	須恵	6C前半	SD 4に切られる

表16　溝一覧

溝(SD)	区　名	断面形	規　模(m) 長さ(長径)×幅(短径)×深さ	方　向	埋　立	出土遺物	時　期	備　考
1	A～B・16～18	レンズ状	7.5以上×0.45×0.07	南西	黒褐色土	土師質	12C前半	調査区外に延びる
2	A・15～16	レンズ状	1.6×0.3×0.08	北東	黒色土	ナシ	古墳	
3	B・17	レンズ状	1.4×0.38×0.1	南北	黒色土	ナシ	古墳	SD１に切られる
4	D・11	舟底状	3.0以上×0.9×0.25	南西	黒色土	須恵・土師	6C前半	調査区外に延びる

表17　性格不明遺構一覧

性格不明遺構(SX)	区　名	平面形	断面形	規　模(m) 長さ(長径)×幅(短径)×深さ	床面積(㎡)	埋　立	出土遺物	時　期	備　考
1	A～B 2～3	不整形	逆三角形状	1.6×0.8×0.3	1.01	灰褐色土 黄灰褐色土	ナシ	古墳以降	
2	B 10	長方形	皿状	2.3×0.3×0.17	0.87	黒色土	ナシ	古墳	調査区外に延びる
3	C～D 11	方形	レンズ状	2.1×1.5×0.15	2.62	暗褐色土	土師	古墳	
4	D 10～11	楕円形	逆台形状	0.8×0.6×0.06	0.38	暗褐色土	ナシ	古墳	

表18　B地区掘立１出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形　態・施　文	調　整		色調	胎　土 焼　成	備考	図版
				外　面	内　面	(外面) (内面)			
1	坏蓋	口径 (13.4) 残高　2.1	内湾して下がる口縁部に端部は外反する。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	長(1) 砂 ◎		

表19　B地区掘立２出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形　態・施　文	調　整		色調	胎　土 焼　成	備考	図版
				外　面	内　面	(外面) (内面)			
2	坏蓋	口径 (13.0) 残高　1.8	内湾気味に下がる口縁部。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ○		

表20　B地区掘立３出土遺物観察表　土製品　(1)

番号	器種	法量(cm)	形　態・施　文	調　整		色調	胎　土 焼　成	備考	図版
				外　面	内　面	(外面) (内面)			
3	坏蓋	口径 (13.0) 残高　3.8	内湾して下がる口縁部。	㊦回転ヘラケズリ ㊥回転ナデ	回転ナデ	灰黒色 灰黒色	密 ○		
4	坏蓋	口径 (12.4) 残高　2.9	内湾して下がる口縁部。	㊦回転ヘラケズリ ㊥回転ナデ	回転ナデ	オリーブ灰色 灰色	長(1) ◎		
5	坏蓋	残高　2.6	平らな天井部。	㊦回転ヘラケズリ ㊥回転ナデ	マメツ	橙色 浅橙色	長(1) チャ(1～2) △		
6	坏蓋	残高　2.4	平らな天井部。	回転ヘラケズリ 回転ナデ	ナデ 回転ナデ	灰黒色 灰色	密 ○		
7	坏蓋	残高　1.8	平らな天井部。	回転ヘラケズリ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ○	自然釉 灰黒色	

B 地区掘立 3 出土遺物観察表　土製品　(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
8	坏身	口径 (12.0) 残高 1.9	立ち上がりが外反気味。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎		
9	甑	残高 5.3	湾曲し外上方向にのびる把手。	マメツ	マメツ	橙色 橙色	長(1～2) ○		

表21　B 地区第Ⅳ層出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
10	坏蓋	口径 (12.5) 残高 2.9	内湾気味に下がる口縁部。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	長(1) ◎		
11	坏身	口径 (10.2) 残高 2.1	受部が外上方にのびる。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	長(1) ◎		
12	甕	口径 (22.8) 残高 3.7	外反する口縁部に、端部は内側に肥厚され、端面は平らな面をなす。	ナデ	ナデ	オリーブ黒色 オリーブ黒色	長(1) 砂 ◎	自然釉	

表22　C 地区掘立 4 出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
13	椀	口径 14.9 底径 6.8 器高 5.8	内湾する胴部に、外踏ん張りの貼付け高台をもつ。(和泉型)	ミガキ 胴指頭痕 高ナデ	ミガキ	黒色 黒色	長(1) 砂 ○		15
14	椀	口径 (18.0) 残高 5.5	内湾する胴部に、口縁端部は尖り気味。	口端ヨコナデ 胴マメツ	口端ヨコナデ 胴ナデ	明赤褐色 橙色	長(1) 砂 ◎		

表23　D 地区 SK 7 出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
15	甕	口径 (18.8) 残高 4.8	口縁部は外反し端部は斜めに面をなす。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	長(1～2) △		
16	甕	口径 (20.8) 残高 4.4	緩やかな「く」の字状の口縁部に端部は丸くおさまる。	マメツ	マメツ	淡黄色 淡黄色	密 △		

表24　D 地区 SD 4 出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
17	高坏	口径 (13.0) 残高 2.8	内湾気味の坏部に稜をもつ。	坏タタキ	ナデ	オリーブ黒色 灰色	長(1) ◎	自然釉	15
18	高坏	口径 (13.2) 残高 2.1	外反する口縁部。	回転ナデ	回転ナデ	白灰色 白灰色	密 ○		15
19	高坏	口径 (11.6) 残高 4.0	底部から胴部にかけ屈曲がみられ口縁端部はやや外反する。	口坏回転ナデ 底回転ヘラケズリ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		15
20	器台	底径 (29.4) 残高 3.4	凹線を狭んで、波状文が施される。	ナデ	ナデ	灰色 灰色	長(1～2) ◎		15

表25　Ｄ地区第Ⅳ層出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
21	坏蓋	口径 (13.2) 残高 2.0	内湾して下がる口縁端部はやや外反する。	回転ナデ	回転ナデ	白灰色 白灰色	密 ○		
22	坏蓋	つまみ径 1.9 つまみ高 1.4 残高 2.2	天井部に宝珠つまみをもつ。	㋝ナデ ㋭回転ヘラケズリ	ナデ	白灰色 白灰色	長(1) △		15
23	坏身	口径 (12.0) 残高 2.3	立ち上がりは内傾しており受部に沈線状の凹みをもつ。	回転ナデ	回転ナデ	橙色 橙色	長(1～2) ○		
24	坏身	口径 (9.7) 残高 2.2	立ち上がりは短く、受部端は丸い。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	密 ○		
25	高坏	脚底径 (9.4) 残高 6.5	脚は接合基部から外反し、端部付近で屈曲し、端部は段をなす。	回転ナデ	㊢回転ナデ ㊧回転ナデ・しぼり痕	灰色 灰色	長(1) ◎		15
26	高坏	脚底径 (15.0) 残高 3.6	脚裾端が上下に肥厚される。	ナデ	ナデ	暗灰色 暗灰色	長(1) ◎		15
27	壺	口径 (10.0) 残高 2.5	外反気味の口縁端部をもつ。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	長(1) ◎		
28	壺	残高 7.9	口頸部の基部は細く、口縁部は外反する。上胴部の張りは弱い。	ナデ	ナデ・しぼり痕	青灰色 青灰色	密 ◎		15
29	甕	口径 (22.4) 残高 4.7	「く」の字状の口縁部に端部は平らな面をなす。	マメツ	マメツ	橙色 橙色	長(1～2) 砂 ○		

表26　Ｄ地区第Ⅲ層出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
30	坏蓋	口径 (9.0) 残高 1.3	かえりが天井端部より下方に突出する。	㋭回転ヘラケズリ ㋥(かえり)回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	長(1) ○		
31	横瓶	口径 (4.6) 残高 5.0	緩やかに外反する口縁部。	ナデ	ナデ	灰色 灰色	長(1) ◎		

表27　Ｄ地区第Ⅱ層出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
32	碗	口径 (14.0) 残高 2.6	外面に片切彫りによる文様。(龍泉窯)	施釉	施釉	明緑灰色 明緑灰色	密 ◎		

第４章

下苅屋遺跡

―２次調査地―

第４章　下苅屋遺跡２次調査地

１．調査の経過

(1) 調査に至る経緯

1995（平成７）年10月、松山市道路部道路建設第１課（以下、道路建設第１課）より、松山市平井町甲2456-1外における松山市道「平井・水泥線」道路建設工事にあたり、当該地における埋蔵文化財の確認願いが松山市教育委員会文化教育課（以下、文化教育課）に提出された。

当該地は、松山市の指定する埋蔵文化財包蔵地の『90権現山古墳群』・『152平井遺物包含地』内にある。調査地周辺では、これまでに上苅屋遺跡１・２次調査地、下苅屋遺跡の調査が行われている。

上苅屋遺跡１次調査地では古墳時代後期の小型石室や掘立柱建物址、溝を検出し、２次調査地では古墳時代の掘立柱建物址２棟を検出した。下苅屋遺跡では古墳時代後期の竪穴式住居址６棟、土坑、溝、掘立柱建物に伴う柱穴等が検出されている。調査地東隣の古市遺跡１区では、弥生時代前期から古代にかけて機能していたと考えられる自然流路や室町時代の水路が検出されている。このように申請地の周辺には多くの遺跡が分布している。

したがって、文化教育課では、当該地における埋蔵文化財の有無と、さらには遺跡の範囲やその性格を確認するために、路線のうち用地買収完了部分について、1996（平成８）年11月に21本のトレンチによる試掘調査を実施した。試掘調査の結果、古市遺跡１区で検出された弥生時代前期から中世までに機能していた自然流路の北岸や、土坑、柱穴等を確認した。

これらの結果を受け、文化教育課・㈶松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センターと道路建設第１課は発掘調査について協議を行い、開発工事によって失われる遺構や遺物について、記録保存のため発掘調査を実施することにした。今回の調査では古市遺跡１区で検出された自然流路の範囲確認と古墳時代の集落構造解明を主目的とし、1996（平成８）年11月18日から1997（平成９）年２月14日の間に野外調査を実施した。なお、調査の都合上、調査区をＡ～Ｆ地区に分けた。さらに調査地内を４ｍグリットに分け、グリットは北から南へＡ・Ｂ・Ｃ、西から東へ１・２・３とし、第45図に示した。

(2) 調査組織

調 査 地　松山市平井町甲1739・1745・1748-1・1751-1・2450・2456-1・2465

遺 跡 名　下苅屋遺跡２次調査地

調査期間　1996年11月18日～1997年2月14日

調査面積　3,935㎡

調査担当　河野史知

古市遺跡２区
F地区
下苅屋遺跡
２次調査地
E地区
D地区
C地区
B地区
A地区
下苅屋遺跡
３次調査地
0
50m
(S＝１：1,500)

第44図　調査地位置図

2．層　位（第46・47図）

本遺跡は、小野谷に水源を発する小野川と、平井谷に水源を発する堀越川によって形成された扇状地の扇央付近、標高65～70mに立地する。基本土層は第Ⅰ層から第Ⅵ層まである。調査地は東西に全長約300m、幅13～14mで、東から西へ向けて５mの緩傾斜を呈している。

第Ⅰ層―暗灰色土：現代の農耕による客土で厚さ10～30cmの堆積を測る。

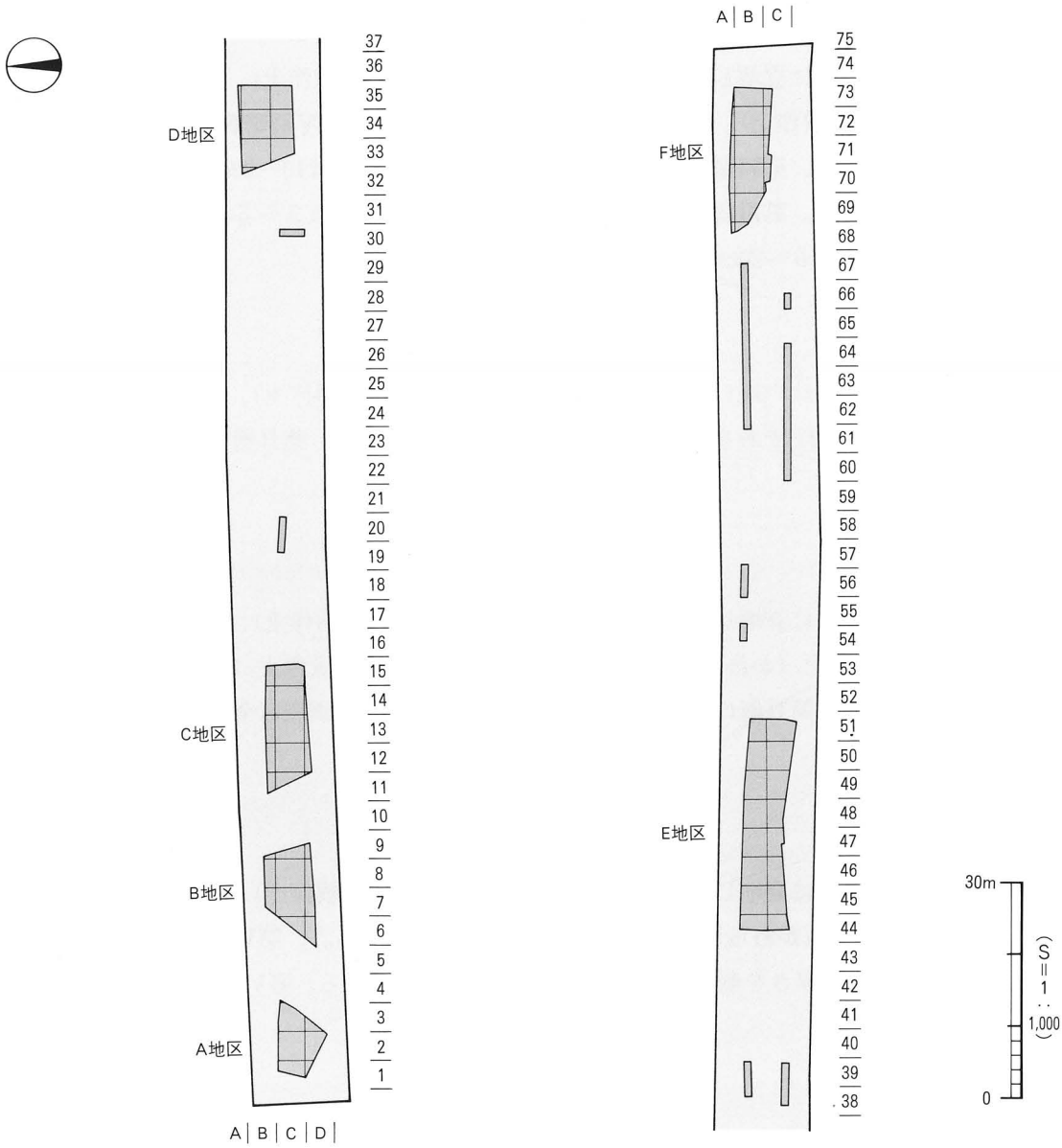
第Ⅱ層―黄褐色土～暗黄色土：水田耕作に伴う床土で厚さ２～10cmの堆積を測る。色調の違いからⅡ－ａ層黄褐色土、Ⅱ－ｂ層暗黄色土である。

第Ⅲ層―灰色土：旧耕作土で厚さ４～18cmの堆積を測る。

第Ⅳ層―黄灰色土：旧耕作土に伴う床土で厚さ２～10cmの堆積を測る。

第Ⅴ層―Ａ～Ｃ・Ｅ・Ｆ地区に堆積し、中世の遺物を包含し、厚さ３～20cmの堆積を測る。色調の違いからⅤ－ａ層明黄灰褐色土、Ⅴ－ｂ層黄灰褐色土、Ⅴ－ｃ層暗黄灰褐色土になる。

第Ⅵ層―黄色～黄灰色土：地山と呼ばれるものであり、この面において遺構を検出した。



第45図　調査地区割図

Ａ地区の層位

本調査区は標高64.9mに立地し、基本土層は、第Ⅰ層暗灰色土（耕作土）、第Ⅱ層黄褐色土（水田床土）、第Ⅲ層灰色土（旧耕作土）、第Ⅳ層黄灰色土（旧水田床土）、第Ⅴ層暗黄灰褐色土（かわらけ・瓦器を包含する。）、第Ⅵ層黄灰色土（地山）である。第Ⅰ層は10～30cmの厚さを測る。第Ⅱ層は３～８cmの厚さを測る。第Ⅲ層は４～18cmの厚さを測る。第Ⅳ層は３～10cmの厚さを測る。第Ⅴ層は南西部を除いた全域に堆積しており、６～20cmの厚さを測る。

Ｂ地区の層位

本調査区は標高65.2mに立地し、基本土層は、第Ⅰ層暗灰色土（耕作土）、第Ⅱ層黄褐色土（水田床土）、第Ⅲ層灰色土（旧耕作土）、第Ⅳ層黄灰色土（旧水田床土）、第Ⅴ層暗黄灰褐色土～黄灰褐色土（かわらけ・土師質・備前焼・磁器を包含する。）、第Ⅵ層黄灰色土（地山）である。第Ⅰ層は12～20cmの厚さを測る。第Ⅱ層は２～８cmの厚さを測る。第Ⅲ層は６～10cmの厚さを測る。第Ⅳ層は２～10cmの厚さを測る。第Ⅴ層は調査区西半部に堆積し、８～20cmの厚さを測る。

Ｃ地区の層位

本調査区は標高65.6mに立地し、基本土層は、第Ⅰ層暗灰色土（耕作土）、第Ⅱ層黄褐色土（水田床土）、第Ⅲ層灰色土（旧耕作土）、第Ⅳ層黄灰色土（旧水田床土）、第Ⅴ層暗黄灰褐色土（かわらけ・土師質・陶器を包含する。）、第Ⅵ層黄灰色土（地山）である。第Ⅰ層は10～20cmの厚さを測る。第Ⅱ層は２～６cmの厚さを測る。第Ⅲ層は６～10cmの厚さを測る。第Ⅳ層は３～５cmの厚さを測る。第Ⅴ層は調査区全域に堆積し、６～20cmの厚さを測る。

Ｄ地区の層位

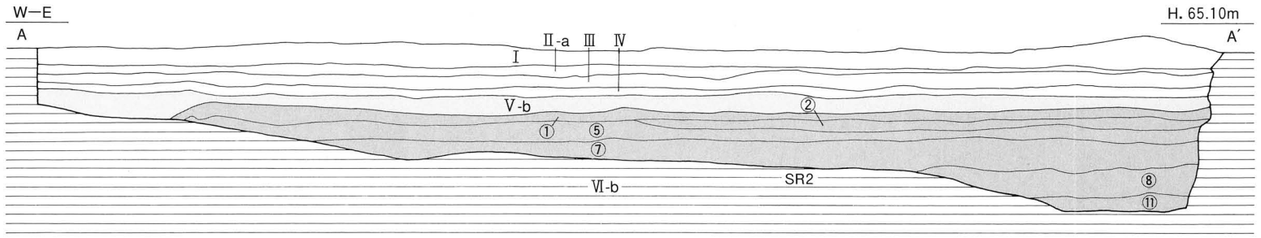
本調査区は標高67.2mに立地し、基本土層は、第Ⅰ層暗灰色土（耕作土）、第Ⅱ層黄褐色土（水田床土）、第Ⅵ層黄色土（地山）である。第Ⅰ層は14～24cmの厚さを測る。第Ⅱ層は調査区東側に薄く堆積する。

Ｅ地区の層位

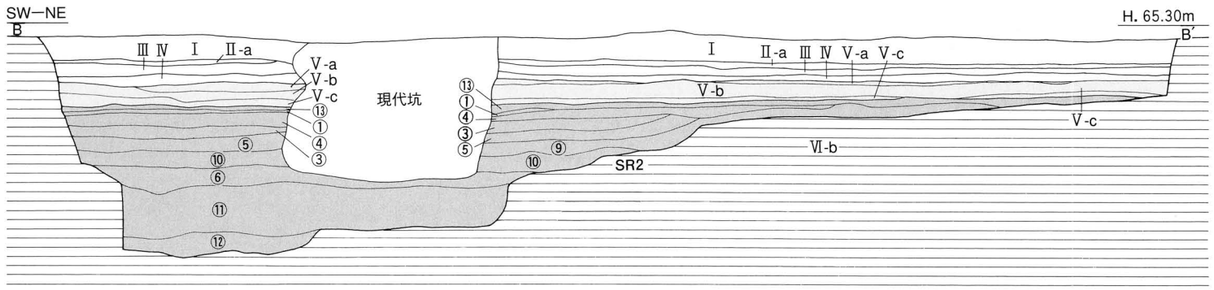
本調査区は標高68.8mに立地し、基本土層は、第Ⅰ層暗灰色土（耕作土）、第Ⅱ層黄褐色土（水田床土）、第Ⅴ層暗黄灰褐色土（かわらけ・磁器を包含する。）第Ⅵ層黄灰色土（地山）である。第Ⅰ層は14～30cmの厚さを測る。第Ⅱ層は３～10cmの厚さを測る。第Ⅴ層は調査区全域に堆積し、６～20cmの厚さを測る。

Ｆ地区の層位

本調査区は標高70.1mに立地し、基本土層は、第Ⅰ層暗灰色土（耕作土）、第Ⅱ層暗黄色土（水田床土）、第Ⅴ層黄灰褐色土（かわらけ・瓦器・備前焼・磁器を包含する。）、第Ⅵ層黄灰色土（地山）である。第Ⅰ層は14～20cmの厚さを測る。第Ⅱ層は３～６cmの厚さを測る。第Ⅴ層は調査区全域に堆積し、３～20cmの厚さを測る。



A地区　北　壁



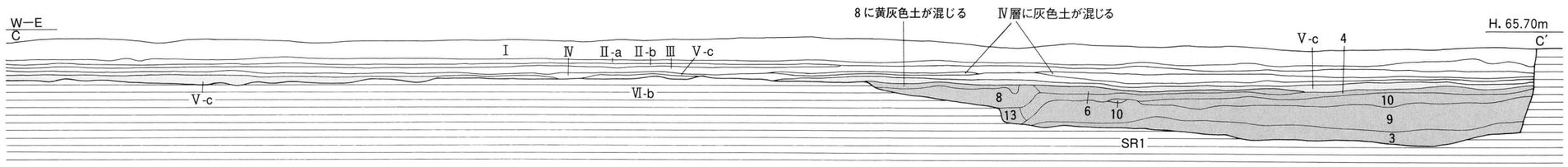
B地区　西　壁

第Ⅰ層　暗灰色土
第Ⅱ層　a黄褐色土
　　b暗黄色土
第Ⅲ層　灰色土
第Ⅳ層　黄灰色土
第Ⅴ層　包含層
　　a明黄灰褐色土
　　b黄灰褐色土
　　c暗黄灰褐色土
第Ⅵ層　a黄色土
　　b黄灰色土

SR１埋土
1　暗灰褐色土
2　灰褐色土
3　青灰色粘質土
4　黄灰色粘質土
5　黄灰色砂質土
6　黄灰色砂
7　暗黄灰色土
8　黒灰色粘土
9　青黒色粘土
10　９のオリーブ色を帯びる
11　灰色土
12　暗灰色土
13　暗灰色土（0.1～1cm大の黄色礫）
14　暗灰色砂質土
15　黒色土
16　黒褐色土
17　16層に灰色帯びる
18　暗褐色土
19　18層に暗色強い
20　18層に粘性を帯びる

SR２埋土
①　暗灰褐色土
②　１層に灰色を帯びる
③　暗灰褐色土（0.1～2cm大の黄色粒混）
④　３層に灰色強い
⑤　青灰色粘質土
⑥　青灰色砂質土
⑦　黄灰色粘質土
⑧　７層より粘質が強い
⑨　黄灰色砂質土
⑩　黄灰色砂質土（僅かに青味を帯びる）
⑪　暗灰色粘質土（1～5cm大の礫少含）
⑫　黒灰色粘土
⑬　灰色土

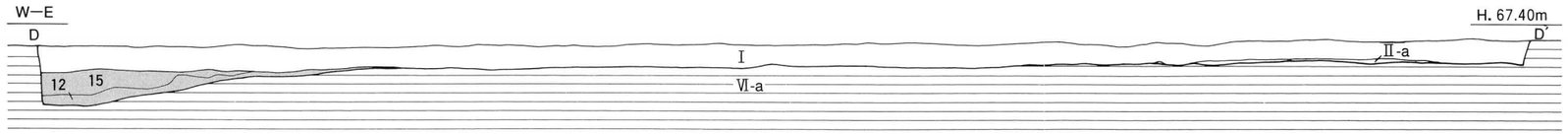
SR 埋土



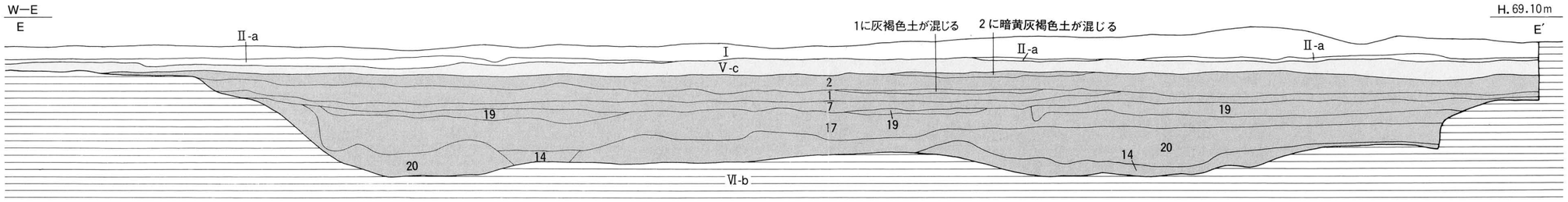
C地区　北　壁

0　1　2m
(S=1:50)

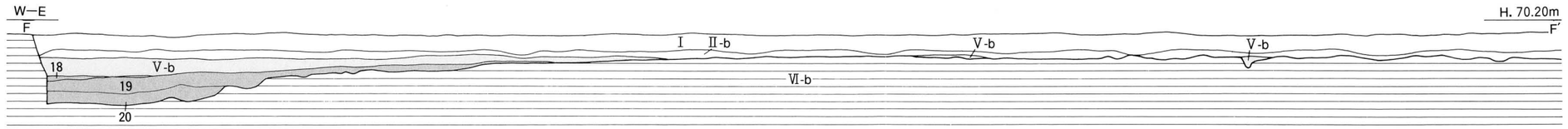
第46図　A・B・C地区北・西壁土層図



D地区　北　壁



E地区　北　壁



F地区　北　壁

第Ⅰ層　暗灰色土
第Ⅱ層　a黄褐色土
　　b暗黄色土
第Ⅲ層　灰色土
第Ⅳ層　黄灰色土
第Ⅴ層　包含層
　　a明黄灰褐色土
　　b黄灰褐色土
　　c暗黄灰褐色土
第Ⅵ層　a黄色土
　　b黄灰色土
　　SR 埋土

SR 1 埋土
1　暗灰褐色土
2　灰褐色土
3　青灰色粘質土
4　黄灰色粘質土
5　黄灰色砂質土
6　黄灰色砂
7　暗黄灰色土
8　黒灰色粘土
9　青黒色粘土
10　9のオリーブ色を帯びる
11　灰色土
12　暗灰色土
13　暗灰色土（0.1～1cm大の黄色礫）
14　暗灰色砂質土
15　黒色土
16　黒褐色土
17　16層に灰色帯びる
18　暗褐色土
19　18層に暗色強い
20　18層に粘性を帯びる

0　1　2m
（S=1:50）

第47図　D・E・F地区北壁土層図

3．遺構と遺物

〔1〕A 地 区（第48図）

調査区北東部の第VI層上面にて、自然流路の南岸を検出した。

SR 2（第48図）

調査区北東部のC～D・1～4区に位置する。河岸は南西より北東方向に4～15°の傾斜角をもち、調査区外に延びる。最深部は深さ0.7mを測るが、さらに傾斜する傾向を示しており、調査区外に基底面がある。傾斜面には10～15cm大の礫が貼り付く様に覆っている。埋土は上層が暗灰褐色土（第46図1・2層）、中層が青灰色粘質土～黄灰色粘質土（第46図5・7・8層）、下層は暗灰色粘質土（第46図11層）が堆積する。遺物は上～下層にかけて弥生土器・須恵器・土師器の細片が出土する。

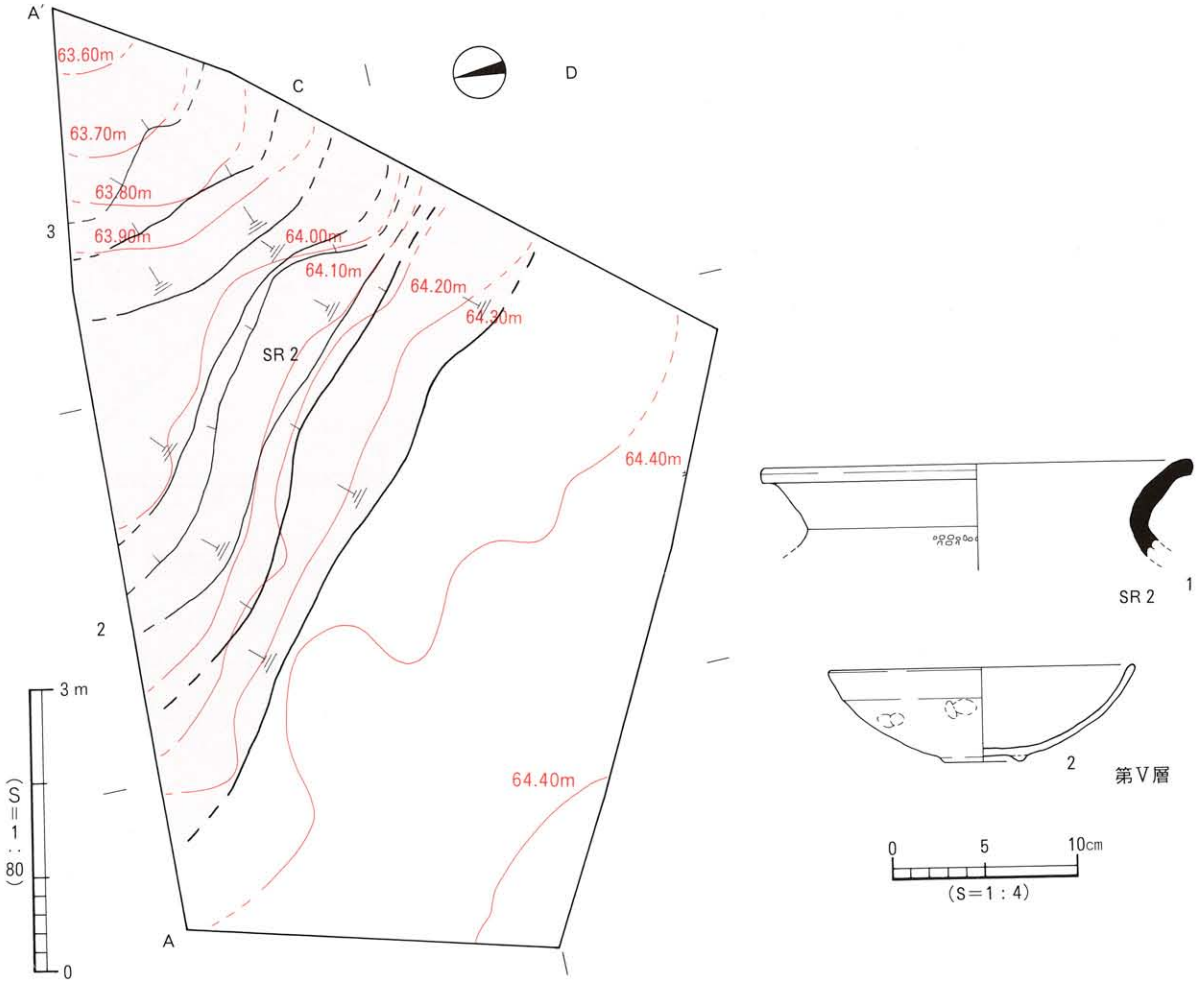
出土遺物（第48図）

1は中層で出土した須恵器の甕で、「く」の字状の口縁部に胴部外面には格子状の叩きが施される。

時期：埋土が、古市遺跡1区SR 1と同様なことより、SR 1につづく流路と判断され、弥生時代前期から古代までに機能していたと考えられる。

第V層出土遺物（第48図、図版27）

2は瓦器椀である。胴部は内湾し、底部には断面逆台形状の高台をもつ。和泉型。



第48図　A地区遺構配置図・SR 2・第V層出土遺物実測図

〔2〕Ｂ 地 区（第49図）

第Ⅵ層上面にて、自然流路の東岸・柱穴５基・鋤跡16条・性格不明遺構４基を検出した。

鋤跡遺構（第49図）

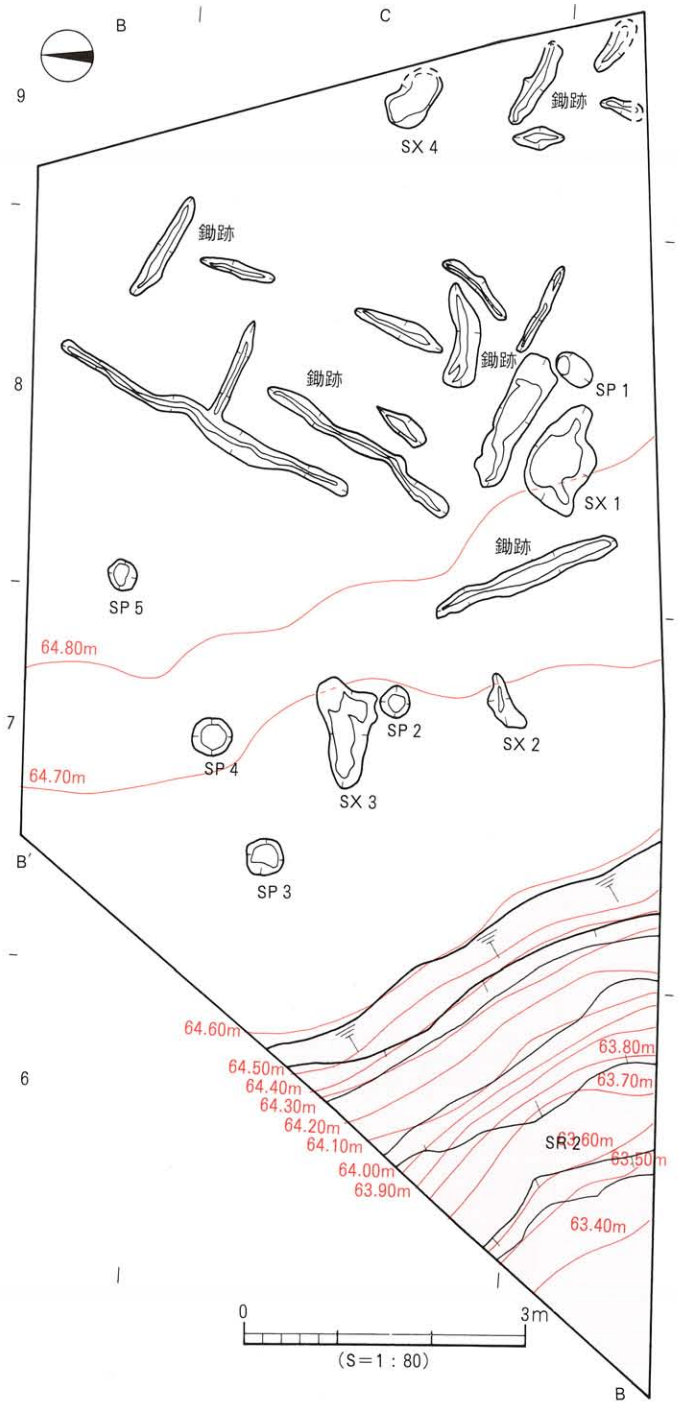
調査区東側のＢ～Ｄ・７～９区に位置する。南東から北西方向に７条、南西から北東方向に６条、南北方向に３条を検出した。規模は検出長0.7～4.2m、幅0.1～0.3m、深さ３～５cmを測る。埋土は明黄灰色土である。遺物は土師器の細片が出土する。

時期：出土遺物から中世とするが、詳細な時期は判らない。

柱穴（第49図）

本地区において検出した柱穴は５基で、平面形態が円形のものが４基、楕円形のものが１基である。柱穴は埋土の違いにより２つに分類され、暗褐色土埋土が２基（SP １・２）、明黄灰色土埋土が３基（SP ３～５）となる。規模は直径0.3～0.4m、深さ10～50cmを測る。遺物は須恵器・土師器の細片が出土する。

時期：出土遺物が細片であるため、埋土から暗褐色土は古墳時代以降、灰褐色土は中世以降に埋没したと考える。



第49図　Ｂ地区遺構配置図

SR ２（第49図、図版18）

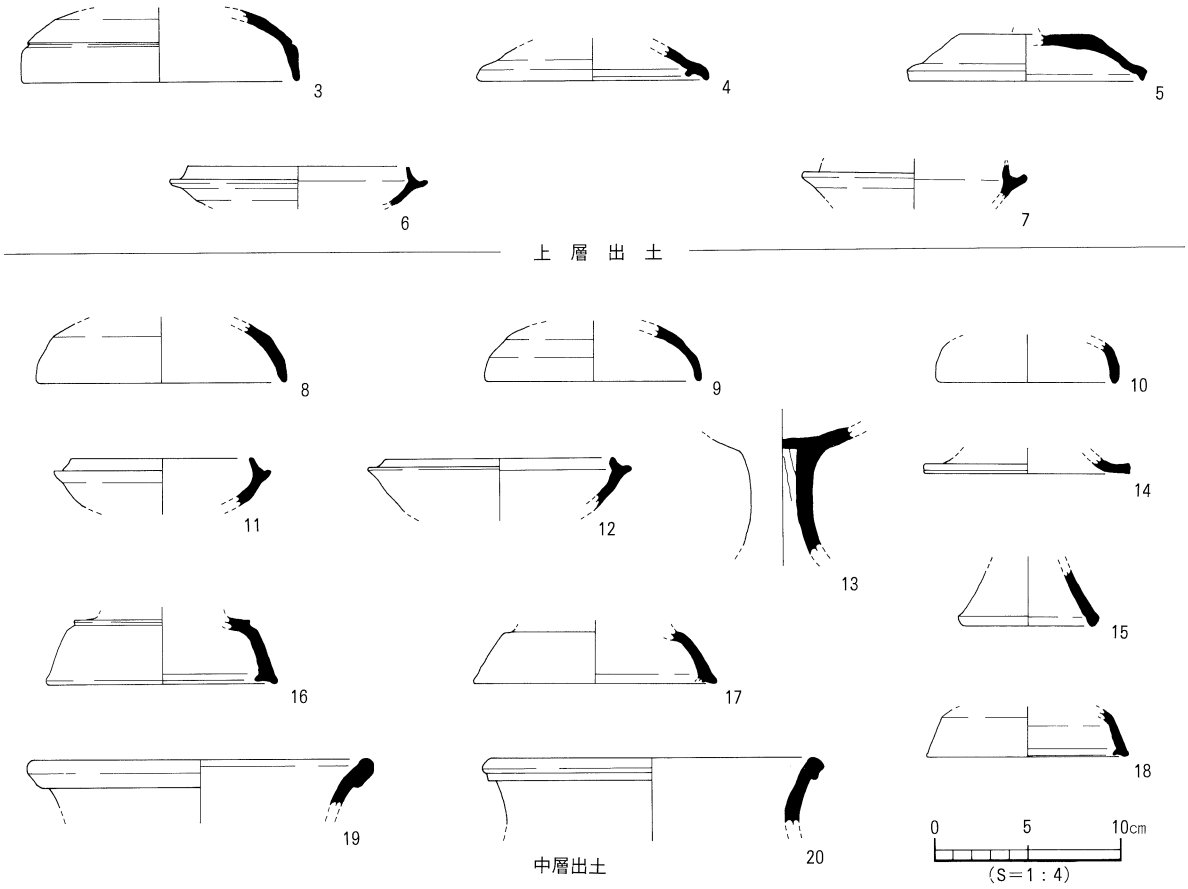
調査区南西部のＣ～Ｄ・６～７区に位置し、流路の東岸を検出した。北東より南西方向に傾斜角24°となり、急傾斜を呈し調査区外に延びる規模は、検出幅5.2m、深さ1.4mを測る。埋土は上層が灰色～暗灰褐色土（第46図13・１・４・３層）、中層は青灰色粘質土～青灰色砂質土（第46図５・９・10・６層）、下層が暗灰色粘質土～黒灰色粘土（第46図11・12層）で、下層になるにしたがい粘性が強い傾向を示す。遺物は上層から中層にかけて須恵器・土師器片、下層から弥生土器片の細片が出土している。

出土遺物（第50図）

上層からは３～７が出土した。須恵器：３～５は坏蓋である。３は天井部と口縁部の境界に凹みによる稜をもつ。４はかえりが口縁端部より上がる。５は平らな天井部に口縁端部は下方向に断面三角形状をなす。６・７は坏身である。６は受部に沈線状の凹みをもつ。７は上方向にのびる立ち上がり

をもつ。中層からは8～20が出土した。須恵器：8～10は坏蓋である。内湾して下がる口縁部をもつ。11・12は坏身である。内傾する立ち上がりが短い。13～15は高坏の脚部である。13は外反しながら下方にのびる。14はラッパ状に開く脚裾部である。15はやや外反して下がる脚裾部である。16～18は台付き壺の脚部である。外傾する脚裾部に端面は凹みをもつ。19・20は甕である。19は口縁端部に凸帯状の貼り付けがみられる。20は口縁部は外反し、端部は肥厚される。

時期：A地区SR 2の東岸で、古市遺跡1区SR 1につづく流路と判断され、弥生時代前期から古代までに機能していたと考えられる。



第50図　B地区SR 2出土遺物実測図

SX 1（第49図）

調査区南側のC～D・8区に位置する。平面形態は不整楕円形、断面形態は逆台形状を呈する。規模は長軸1.2m、短軸0.66m、深さ4cmを測る。埋土は暗褐色土である。出土遺物は須恵器・土師器の細片が出土する。

時期：出土遺物から古墳時代に埋没したとしか判らない。

SX 2（第49図）

調査区南側のC・7区に位置する。平面形態は三日月形、断面形態は逆台形状を呈する。規模は長軸0.65m、短軸0.2m、深さ16cmを測る。埋土は暗褐色土である。出土遺物はない。

時期：出土遺物がなく時期特定は困難であるが、SX 1と同じ埋土であることから古墳時代と考える。

SX ３（第49図）

調査区中央部西寄りのＣ・７区に位置する。平面形態は不整楕円形、断面形態は逆台形状を呈する。規模は長軸1.16m、短軸0.6m、深さ８cmを測る。４～16cm大の礫を検出した。埋土は暗褐色土である。出土遺物はない。

時期：出土遺物がなく時期判断は困難であるが、SX １と同じ埋土であることから古墳時代と考える。

SX ４（第49図）

調査区東側のＣ・９区に位置する。平面形態は不整楕円形、断面形態は皿状を呈する。規模は長軸0.7m、短軸0.35m、深さ４cmを測る。埋土は明黄灰褐色土である。出土遺物はない。

時期：出土遺物がなく時期判断は困難であるが、第Ⅴ-ａ層と同じ埋土であることから中世と考える。

〔3〕Ｃ 地 区（第51図）

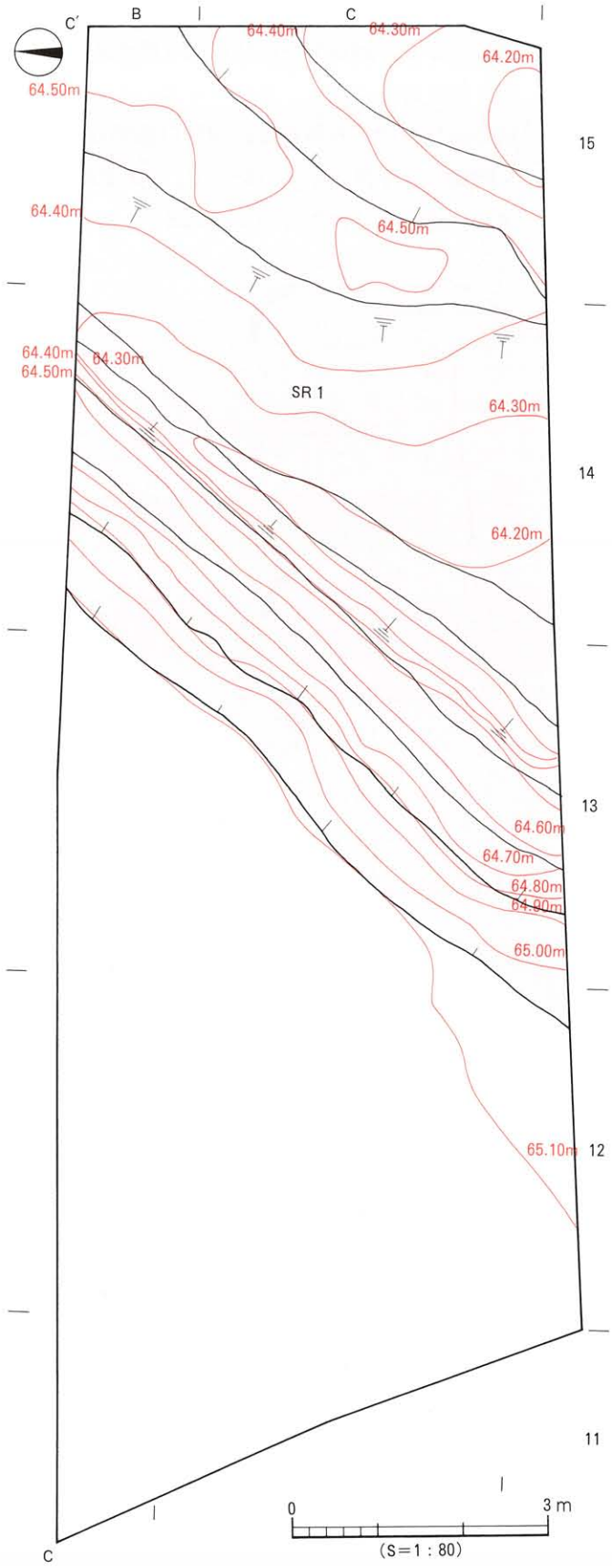
第Ⅵ層上面にて、自然流路を検出した。

SR １（第51図、図版20）

調査区東側のＢ～Ｄ・12～15区に位置し、流路の北岸を検出した。傾斜角は南東方向に16～20°の急傾斜を呈する。河岸の中位部が段状にやや凹んでおり、河川の攻撃斜面の様相を示している。規模は、検出長11.5m、検出幅5.7m、深さ0.9mを測る。埋土は上層が黒灰色粘土～暗灰色土（第46図８・６・４・13層）、中層が青黒色粘土（第46図10・９層）、下層が青灰色粘質土（第46図３層）である。遺物は上層から中層にかけて須恵器・土師器片、下層から弥生土器片が出土する。

出土遺物（第52図）

21～29は上層から出土した。須恵器：21は坏蓋である。天井部と口縁部の境は屈曲し、内湾気味に下がる口縁部をもつ。22・23は坏身である。22の受部は外上方向、立ち上がりは上方向にのびる。23は外方向にのびる受部に、内傾する短い立ち上がりをもつ。24は高坏で、坏部は接合基部から内湾気味に立



第51図　Ｃ地区遺構配置図

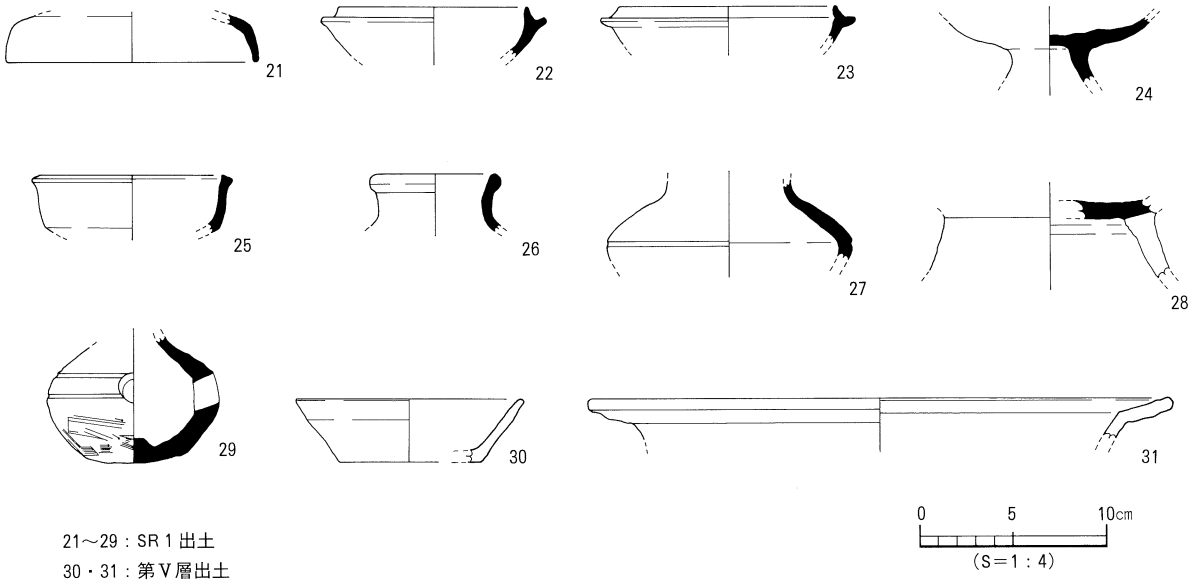
ち上がる。25は坏身で、口縁端部が肥厚される。26・27は壺である。26は外反する口縁端部は丸く肥厚される。27は屈曲した胴部に1条の沈線をもつ。28は器台の脚基部で、透かしが施されている。29は甕で、胴部に穿孔がみられ、その上下に凹線が施される。

時期：古市遺跡1区SR 1との位置関係から、SR 1につづく流路と判断され、弥生時代前期から古代にかけ機能していたと考えられる。

第V層出土遺物（第52図）

C地区の第V層からは土師器・陶器片が出土した。このうち、特徴的な土師器の坏・陶器の鍋を掲載する。

30は土師器の坏である。平底の底部より外傾する口縁部をもつ。31は陶器の鍋である。口縁部が屈曲し外方向にのびる。内外面に施釉がみられる。



第52図　C地区SR 1・第V層出土遺物実測図

〔4〕D 地 区（第53図）

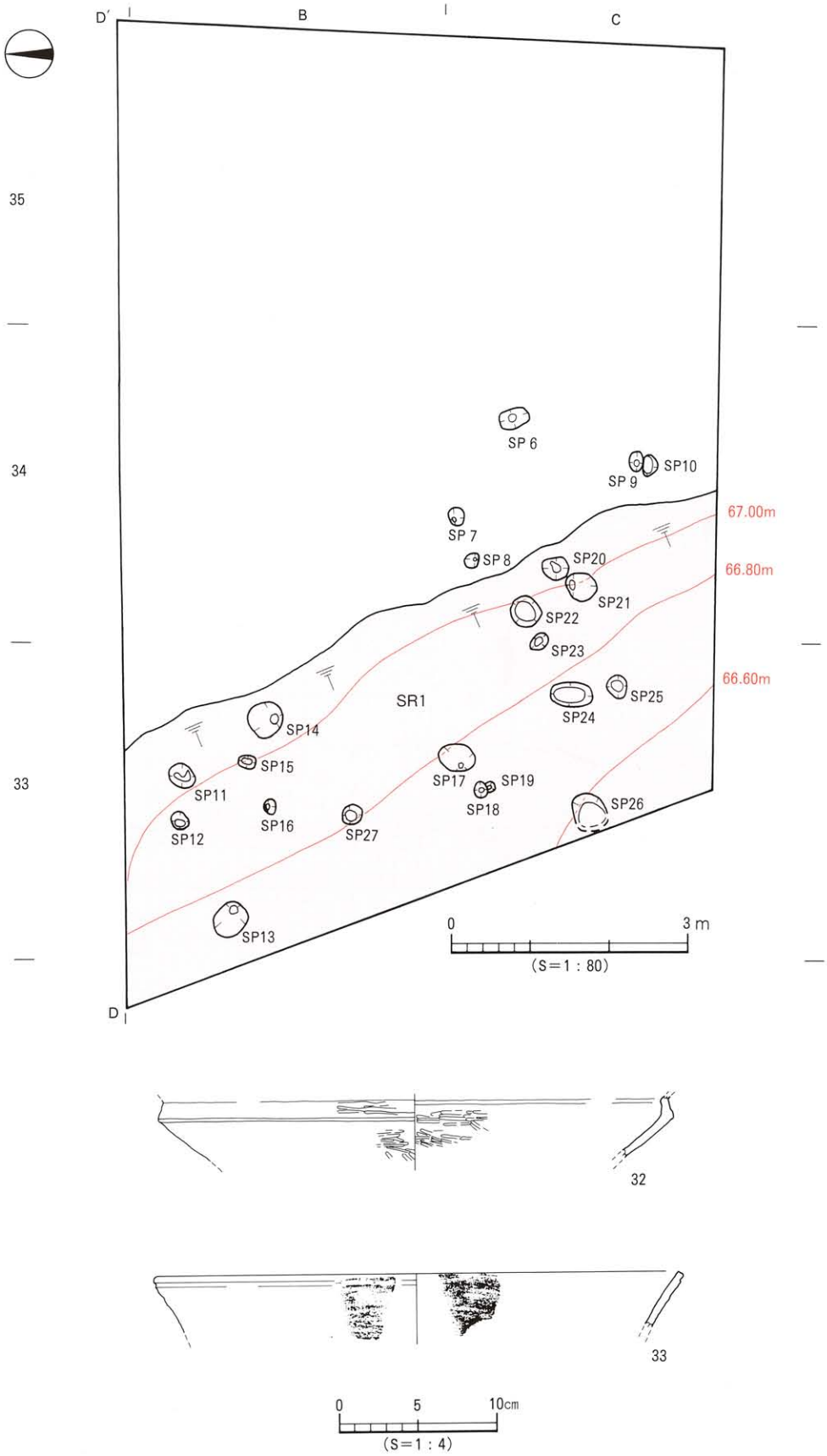
第VI層上面にて、柱穴22基と自然流路を検出した。

SR 1（第53図）

調査区西側B～C・32～34区に位置し、流路の北岸を検出した。柱穴のSP 11～SP 26は流路の上面で検出したものである。東より西方向に傾斜して下がり、傾斜角は6～15°と緩やかな傾斜を呈する。埋土は上層は粘性の強い黒色土、下層は暗灰色土である。遺物は弥生土器・須恵器・土師器片に混じり縄文土器片が2点出土する。

出土遺物（第53図、図版27）

32は縄文土器の浅鉢である。頸部が屈曲する。内外面にミガキ調整が施される。33は深鉢である。外反する口縁部に巻貝条痕調整が施される。



第53図　D地区遺構配置図・SR 1 出土遺物実測図

時期：僅かに出土した縄文土器片で上限の時期決定は難しく、細片であるが多数出土した弥生土器・須恵器・土師器片より古市遺跡SR 1と同時期である弥生時代前期から古代にかけて機能していたと考えられる。

柱穴（第53図）

本地区において検出したピットは22基である。第VI層上面およびSR 1上面での検出である。柱穴は調査区の南半部に多くSR 1の傾斜部を中心に検出され、平面形態は円形20基、楕円形2基である。柱穴は埋土の違いにより2つに分類され、黒褐色土の埋土が21基（SP 6～SP 26）、暗褐色土の埋土が1基（SP 27）となる。規模は径0.2～0.5m、深さ3～35cmを測る。柱穴の殆どがSR 1の傾斜面にて検出された。遺物はSP 2から弥生土器片の細片が僅かに出土した。

時期：出土遺物が細片であるため、埋土から黒褐色土は弥生時代、暗褐色土はそれ以降のものであるとしか判らない。

〔5〕E 地 区（第54図）

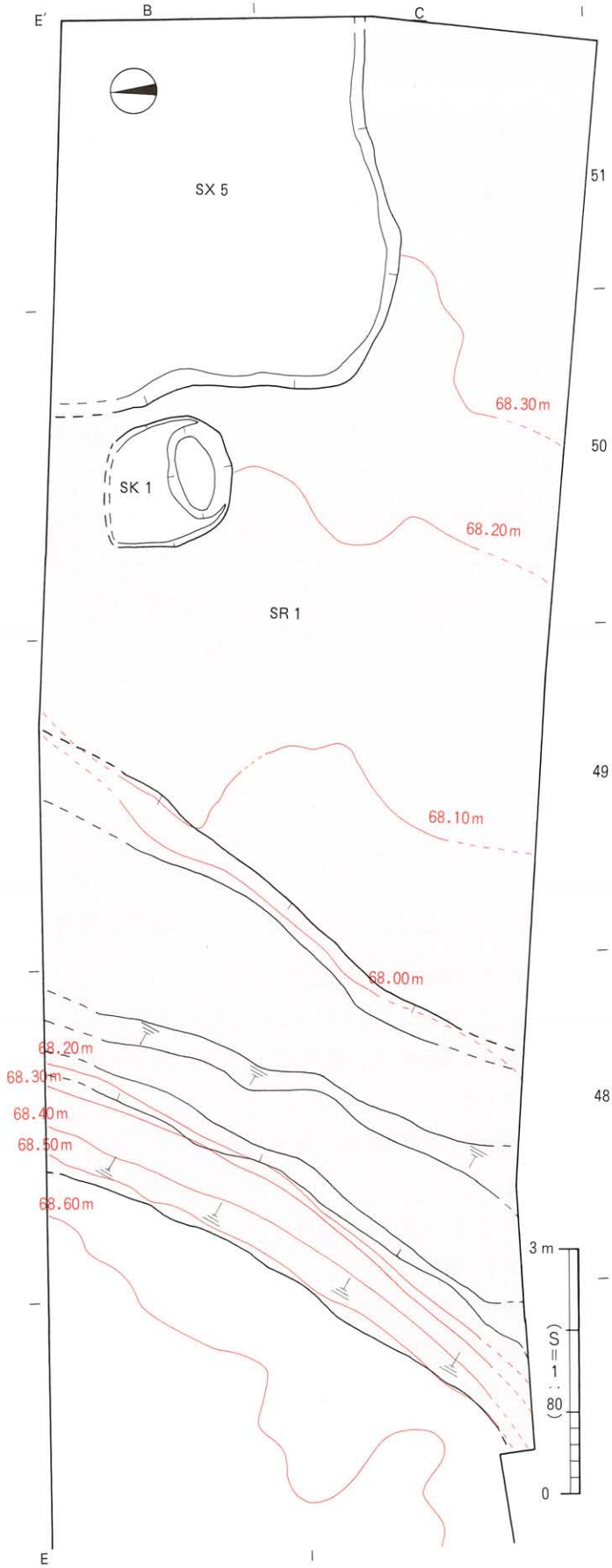
第VI層上面で自然流路1基、自然流路中層の暗褐色土上面（第47図19層）で土坑1基、性格不明遺構1基、下層の暗灰色砂質土（第47図14層）では溝1条を検出した。

(1) SR 1中層上面検出遺構

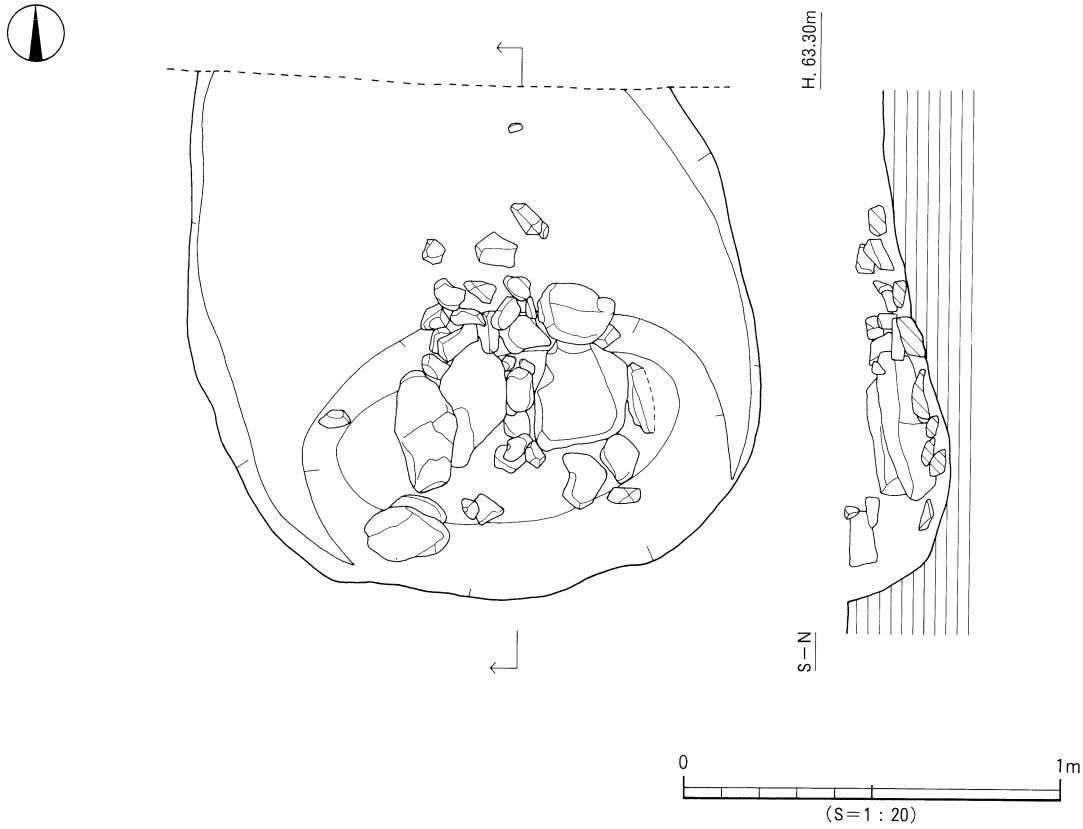
SK 1（第55図、図版23）

調査区北東部のB・50区に位置する。平面形態は楕円形、断面形態は楕円形を呈する。規模は長軸1.4m以上、短軸1.5m、深さ27cmを測る。基底面には10cm～30cm大の礫が密集した状態で検出された。埋土は灰褐色土で、遺物は弥生土器片が出土した。

時期：出土遺物から、弥生時代としか判らない。



第54図　E地区第VI層上面・自然流路中層上面の遺構配置図



第55図　Ｅ地区 SK １測量図

SX ５（第54図、図版23）

調査区北東部のＢ～Ｃ・50～51区に位置する。平面形態は隅丸方形、断面形態は皿状を呈する。規模は東西4.5m以上、南北3.5m以上、深さ６㎝を測る。埋土は暗灰褐色土である。遺物は弥生土器片が出土した。

時期：出土遺物から、弥生時代としか判らない。

(2)　SR １下層検出遺構

SD １（第56図）

調査区中央部北側のＢ・49～50区に位置する。東西を指向しており、東側は北壁までは延びていない。断面形態はレンズ状である。規模は検出長4.6m、上場幅1.0～1.2m、深さ10～16㎝を測る。埋土は暗灰色土である。出土遺物はない。

時期：出土遺物がなく遺構検出層（第47図14層上面）から、SK １やSX １に先行する時期のものとしか判らない。

(3) 第VI層上面遺構

SR 1（第56図、図版24）

調査区西側のB～D・47～51区に位置し、流路の北岸を検出した。南より南東方向に傾斜して下がる河岸は急傾斜を呈し、下位はえぐられており、河川による攻撃斜面の様相を呈する。埋土は上層が灰褐色土～暗黄灰色土（第47図2・1・7層）、中層が暗褐色土～黒褐色土（第47図19・17層）、下層が暗褐色土～暗灰色砂質土（第47図20・14層）である。遺物は中層から須恵器・土師器片、下層から弥生土器片が出土している。SR 1は中層が堆積した時期には、河幅3.6～4.4mで機能していたことを確認した。

出土遺物（第57図、図版27）

弥生土器：34～37は口縁部が緩やかに外反する甕である。34・35・37は頸部に沈線文、34～36は口縁端部に刻み目が施される。34は外面にミガキ調整が施される。38・39は甕の底部である。平底の底部は、外傾して立ち上がる。40～43は壺である。40は頸部付近に3条の沈線文と刺突文が施される。41は平底の底部、扁平球状の胴部、直立する頸部をもち頸部下半には4条の沈線文が施されている。42・43は平底の底部で、42の内面に指頭痕が残る。43の内面はミガキ調整が施される。

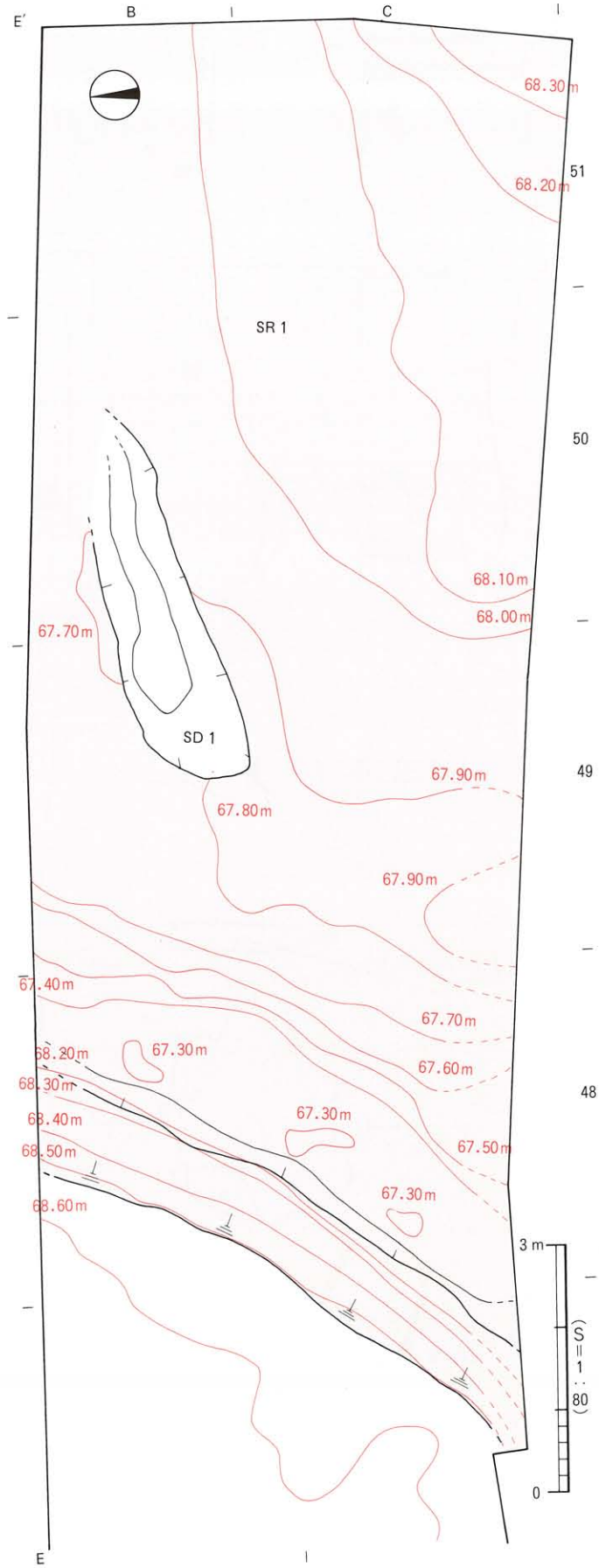
須恵器：44は坏身で、短い受部が上方向にのびる。45は甕で、口縁端部は肥厚する。

石器：46はサヌカイト製の剝片である。

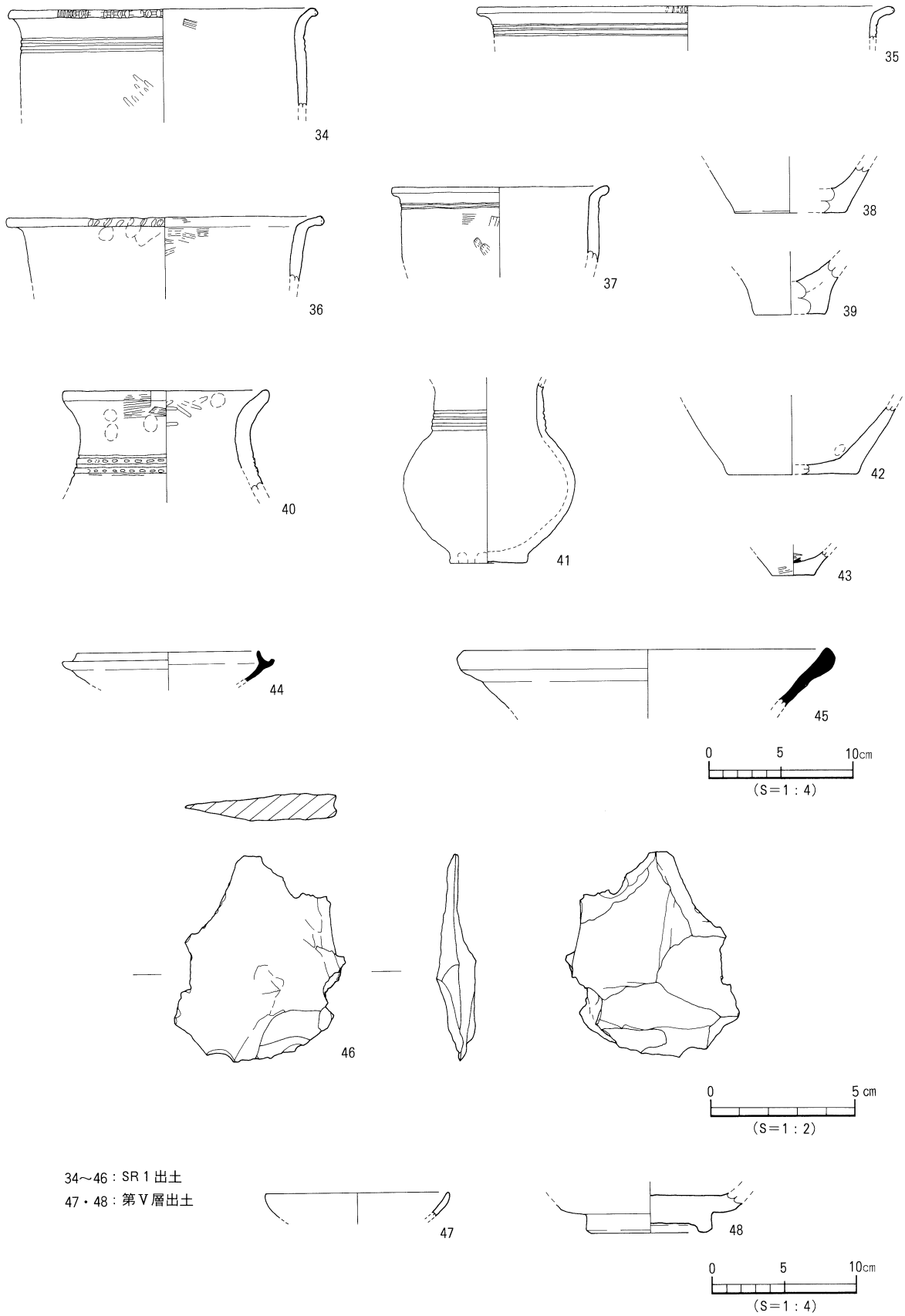
時期：古市遺跡1区SR 1との位置関係から、SR 1につづく流路と判断され、弥生時代前期から古代にかけ機能していたと考えられる。

第V層出土遺物（第57図）

47は坏で、内湾気味に立ち上がる口縁端部はやや尖る。48は陶器の碗である。断面四角形の高台をもち、底部は厚い。内外面に施釉がみられる。



第56図　E地区自然流路下層上面の遺構配置図



第57図　E地区SR１・第Ⅴ層出土遺物実測図

〔6〕F 地 区（第58図）

調査区西端の第Ⅳ層上面にて、南東方向から北西方向に流れる SR 1の北岸と土坑3基、柱穴25基、溝1条、鋤跡6条、倒木痕1基、性格不明遺構1基を検出した。

鋤跡遺構（第58図）

調査区東部のA～C・71～73区に位置し、調査区外に延びている。東西方向に平行する6条の鋤跡を検出した。断面形状はレンズ状の凹みを呈する。規模は検出長7.6m以上、上場幅0.5～0.9m、深さ2～7cmを測る。埋土は灰色土である。遺物はかわらけと磁器の細片が出土した。

時期：出土遺物から中世と考えられる。

SK 2（第58図）

調査区西側のB・69～70区に位置する。平面形態は楕円形、断面形態は逆台形状を呈する。規模は長軸1.8m、短軸0.9m、深さ35cmを測る。埋土は黒色土である。遺物は土師器片が出土した。

時期：出土遺物が細片であるため、埋土がSD 2と同様であることから、6世紀後半に埋没したものと考えられる。

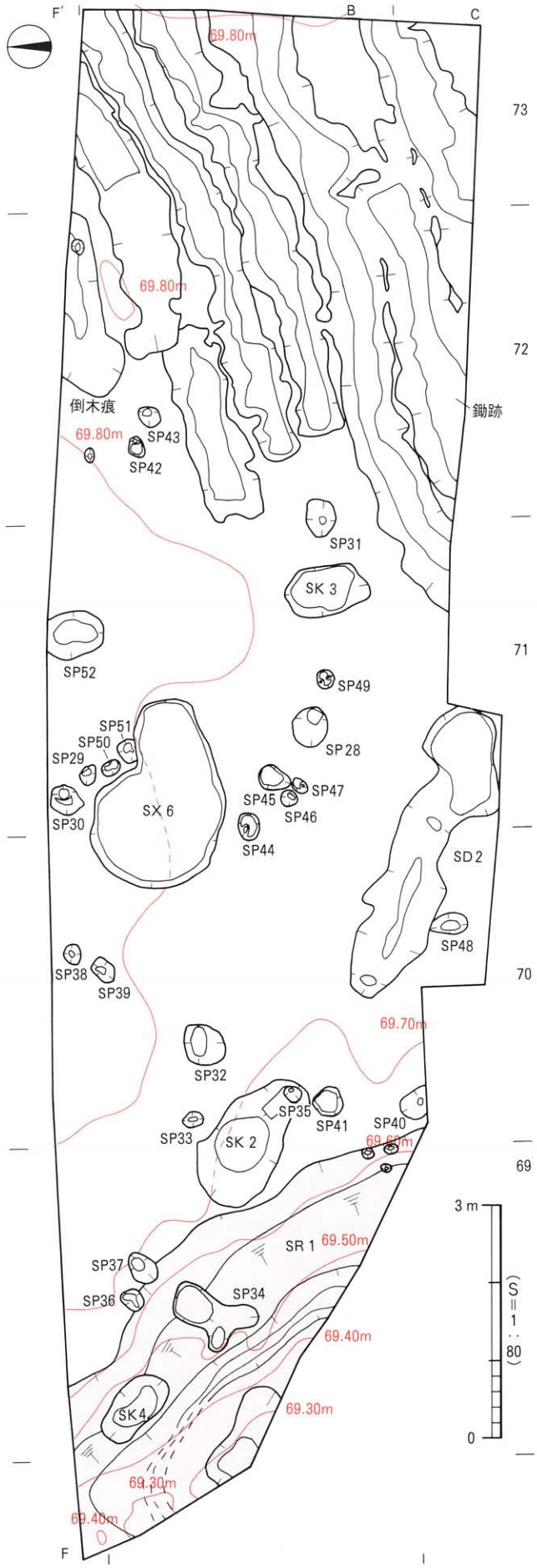
SK 3（第58図）

調査区中央部のB・71区に位置する。平面形態は楕円形、断面形態は逆台形状を呈する。規模は長軸1.0m、短軸0.6m、検出面よりの深さ24cmを測る。埋土は黒色土である。遺物は須恵器片が出土した。

時期：出土遺物が細片であるため、埋土がSD 2と同様であることから、6世紀後半に埋没したものと考えられる。

SK 4（第58図）

調査区西側A～B・69区の SR 1傾斜部にて SR 1に切られた状態で検出する。平面形態は楕円形、断面形態は逆台形状を呈する。規模は長軸1m、短軸0.5m、検出面よりの深さ15cmを測る。埋土は



第58図　F地区遺構配置図

暗褐色土である。遺物は須恵器と土師器片が出土する。

時期：出土遺物が細片であるため、古市遺跡２区の掘立３と同じ埋土から古墳時代としか判らない。

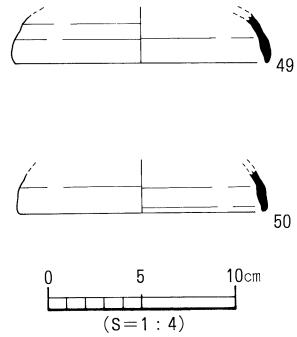
SD ２（第58図）

調査区中央部南側のＢ～Ｃ・70～71区に位置し、東端は調査区外に延びる。断面形態はレンズ状を呈する。規模は検出長４m、上場幅0.7～0.9m、深さ20cmを測る。埋土は黒色土である。出土遺物は須恵器が出土している。

出土遺物（第59図）

49・50は須恵器の坏蓋で、内湾して下がる口縁部をもつ。50は端部内側に段がみられる。

時期：出土遺物から６世紀後半に埋没したものと考えられる。



第59図　Ｆ地区 SD ２出土遺物実測図

柱穴（第58図）

本地区において検出したピットは25基である。平面形態は円形10基、楕円形15基である。埋土の違いにより４つに分類され、暗灰褐色土の埋土が７基（SP 33・37・38・40・42・43・48）、暗褐色土の埋土が10基（SP 31・34・36・39・41・44～47・49）、黒色土の埋土が６基（SP 28～30・32・35・52）、褐色土の埋土が２基（SP 50・51）である。規模は直径0.2～0.6m、深さ５～15cmを測る。遺物は黒色土と暗褐色土の埋土をもつ柱穴から土師器と須恵器の細片が出土している。

時期：出土遺物が細片であるため黒色・暗褐色埋土は古墳時代、褐色・暗灰褐色埋土は、それ以降に埋没したものである。

SX ６（第58図）

調査区中央部北側のＡ～Ｂ・70～71区に位置する。平面形態は不整楕円形、断面形態は皿状を呈する。規模は長軸2.4m、短軸1.6m、深さ５cmを測る。埋土は暗褐色土である。出土遺物は焼成不良の須恵器片が僅かに出土している。

時期：出土遺物が細片である。古市遺跡２区掘立３と同じ埋土より古墳時代とする。

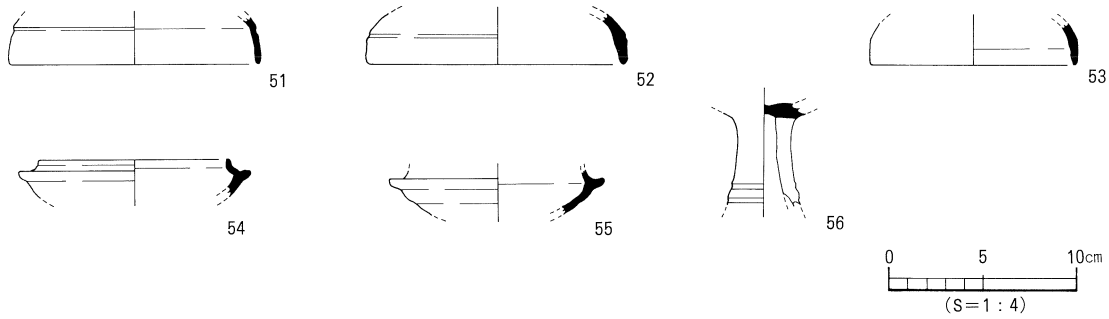
SR １（第58図、図版25）

調査区西側のＡ～Ｃ・68～70区に位置する。河岸の傾斜角は７～10°と緩やかな傾斜である。埋土は上層から下層にかけ粘性の強い暗褐色土が堆積している。出土遺物は須恵器・土師器片が出土した。

出土遺物（第60図）

須恵器：51～53は坏蓋である。51・52は天井部と口縁部の境に稜による凹みがある。53は内湾気味に下がる口縁部である。54・55は坏身である。54は受部に沈線状の凹みがある。55は受部端がやや外上方向にのびる。56は高坏の脚部で、脚上部には透かし、中位には２条の凹線がみられる。

時期：古市遺跡１区 SR １との位置関係から、SR １につづく流路と判断され、弥生時代前期から古代にかけ機能していたと考えられる。

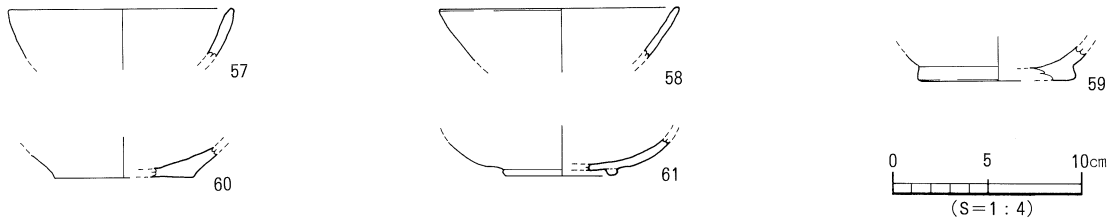


第60図　F地区SR 1出土遺物実測図

第Ⅴ層出土遺物（第61図）

土師器：57～60は坏である。57は内湾気味に立ち上がる口縁部で、58は外傾する口縁部である。

瓦器：61は椀で、底部に断面逆台形状の貼り付け高台をもつ。



第61図　F地区第Ⅴ層出土遺物実測図

4．小　結

今回の調査では、古市遺跡1区の自然流路SR 1につづく流路、古墳時代の集落関連遺構と中世の生産遺構を検出した。

(1) 縄文時代

D地区の自然流路SR 1の堆積土からは、縄文時代晩期の浅鉢片と深鉢片が各1点出土した。本調査区の北東約150mの古市遺跡2次調査地では、晩期の土坑SK 2が検出されており、周辺に当該期の集落が存在する資料を得たことになる。

(2) 弥生時代

E地区SD 1はSR 1の下層堆積土上面（第47図14層上面）で検出した。この溝の存在からSR 1の下層部が堆積する段階に当調査区付近には水流がなく、SR 1の岸の最深部に流れる小溝が形成されたことが考えられる。また、SR 1の中層部で検出したSK 1からは礫が多数出土した、この礫は廃棄されたものと考える。なお、隣接するSX 1は平面形態と規模から隅丸方形の竪穴式住居址の可能性がある。

(3) 弥生時代～古代

全調査区で自然流路の岸部を検出した。これは、古市遺跡1区で検出されたSR 1につながる流路と

判断した。Ｃ・Ｅ地区の流路は岸部が抉られる様に浸食されており河川の攻撃斜面の様相を呈するのに対し、Ｄ・Ｆ地区の流路は河岸が緩やかに傾斜しており、澱みの地点とみられる。このことは、SR１はＣ～Ｆ地区において、流路が２ヶ所で蛇行していることを裏付ける資料になりえる。Ｃ～Ｆ地区においてSR １が２ヶ所で大きく蛇行することが確認できた。また、Ａ・Ｂ地区ではSR ２の主軸が北西方向より南東方向を示しており、Ｂ・Ｃ地区の調査区外の南側にてSR １に合流することが考えられる。流路幅は約30mを測る。出土遺物では弥生時代前期の土器がSR １下層部から出土し、SR １の中～上層では須恵器・土師器が出土する。このことは、古市遺跡１区SR １と同様に弥生時代前期に機能していた流路が古代にかけて徐々に河川の堆積作用により埋没していくことを示す資料である。

また、Ｂ・Ｄ・Ｆ地区では、古墳時代の柱穴・土坑・溝を検出している。いずれも詳細な時期を特定できる遺物がない。古市遺跡２区では古墳時代後期の掘立柱建物址が検出されており、SR １が機能していた古墳時代には流路付近に居住域が存在していたようである。

(4) 中　世

Ｂ・Ｆ地区では鋤跡が検出され、Ａ～Ｃ・Ｅ・Ｆ地区では中世の遺物を包含する堆積層がある。当該期に調査地一帯には、生産域と居住域とが存在していたことがわかる。

今回の調査からは、弥生時代前期から古代にかけ機能していた自然流路や古墳時代の集落関連遺構、中世の生産関連遺構を確認することができた。今後の周辺地域での調査では、流路の規模や、流路周辺に存在する集落の構造や変遷を解明することが課題になる。

〔文献〕

横田賢次郎・森田　勉「太宰府出土の貿易陶磁」『九州歴史資料館研究論集』1978
尾上　実「南河内の瓦器椀」『藤澤一夫先生古希記念古文化論』1983
重松　佳久「下苅屋遺跡」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅷ』松山市教育委員会・㈶松山市埋蔵文化財センター 1996
栗田　茂敏・河野　史知・大森　一成「古市遺跡（１・２区）、下苅屋遺跡２次調査地」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅸ』松山市教育委員会・㈶松山市埋蔵文化財センター 1997
山本　健一・山之内志郎「古市遺跡２次調査地」「五楽遺跡」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅸ』松山市教育委員会・㈶松山市埋蔵文化財センター 1997

遺構・遺物一覧

(1) 以下の表は遺構・遺物の計測値及び観察一覧である。

(2) 遺物観察表の各表記について。

法量欄（　）：復元推定値

形態・施文欄：土器の各部位名称を略記。

例）天→天井部、口→口縁部、頸→頸部、胴→胴部、胴上→胴部上位、胴下→胴部下位、坏→坏部、底→底部

胎土・焼成欄：胎土欄では混和剤を略記した。

例）砂→砂粒、長→長石、石→石英、密→精製土、金→金雲母

（　）内の数値は混和剤粒子の大きさを示す。（単位：㎜）

焼成欄の略記について。◎→良好、○→良、△→不良

表28　土坑一覧

土坑(SK)	地　区	平面形	断面形	規　　模(m) 長さ(長径)×幅(短径)×深さ	床面積(m²)	埋　土	出土遺物	時　期	備　　考
1	B・50	楕円形	楕円形	1.4×1.5×0.27	1.79	灰褐色土	弥生	弥生	
2	B 69～70	楕円形	逆台形状	1.8×0.9×0.35	1.36	黒 色 土	土師	6 C後半	
3	B・71	楕円形	逆台形状	1.0×0.6×0.24	0.46	黒 色 土	須恵	6 C後半	
4	A～B 69	楕円形	逆台形状	1.0×0.5×0.15	0.44	暗褐色土	須恵土師	古墳	

表29　溝一覧

溝(SD)	地　　区	断面形	規　　模(m) 長さ(長径)×幅(短径)×深さ	方　向	埋　土	出土遺物	時　期	備　　考
1	B・49～50	レンズ状	4.6×1.0～1.2×0.1～0.16	東西	暗灰色土	ナシ	弥生以前	
2	B～C・70～71	レンズ状	4.0×0.7～0.9×0.2	東西	黒色土	須恵	6 C後半	調査区外に延びる

表30　性格不明遺構一覧

性格不明遺構(SX)	地　区	平面形	断面形	規　　模(m) 長さ(長径)×幅(短径)×深さ	床面積(m²)	埋　土	出土遺物	時　期	備　　考
1	C～D 8	不整楕円形	逆台形状	1.2×0.66×0.04	0.49	暗褐色土	須恵・土師	古墳	
2	C・7	三日月形	逆台形状	0.65×0.2×0.16	0.11	暗褐色土	ナシ	古墳	
3	C・7	不整楕円形	逆台形状	1.16×0.6×0.08	0.45	暗褐色土	ナシ	古墳	
4	C・9	不整楕円形	皿状	0.7×0.35×0.04	0.21	明黄灰色土	ナシ	中世	
5	B～C 50～51	隅丸方形	皿状	4.5×3.5×0.06	13.37	暗灰褐色土	弥生	弥生	調査区外に延びる
6	A～B 70～71	不整楕円形	皿状	2.4×1.6×0.05	2.35	暗褐色土	須恵	古墳	

表31　A地区 SR 2 出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形　態　・　施　文	調　整		色調	胎　土 焼　成	備考	図版
				外　面	内　面	(外面) (内面)			
1	甕	口径 (22.6) 残高 5.2	「く」の字状の口縁部をもつ。	㊐ナデ ㊙格子タタキ	ナデ	暗灰色 暗灰色	長(1) 砂 ◎		

表32　A地区第Ⅴ層出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形　態　・　施　文	調　整		色調	胎　土 焼　成	備考	図版
				外　面	内　面	(外面) (内面)			
2	椀	口径 (16.2) 底径 4.2 器高 5.0	底部に断面逆台形状の貼り付け高台をもつ。	指頭痕	マメツ	暗灰色 黒色	長(1) 砂 ○		27

表33　B地区 SR 2 出土遺物観察表　土製品　(1)

番号	器種	法量(cm)	形　態　・　施　文	調　整		色調	胎　土 焼　成	備考	図版
				外　面	内　面	(外面) (内面)			
3	坏蓋	口径 (14.6) 残高 3.8	天井部に凹みによる稜がみられる。	㊦回転ヘラケズリ ㊐回転ナデ	回転ナデ	オリーブ黒色 白灰色	密 ◎	自然釉	
4	坏蓋	口径 (12.1) 残高 1.8	かえりが口縁端部より上がる。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		
5	坏蓋	口径 (12.8) 残高 2.5	平らな天井部に口縁端部は下方向に断面三角形状をなす。	回転ナデ	ナデ	灰色 灰色	長(1) ○		
6	坏身	口径 (11.7) 残高 2.0	受部に沈線状の凹みあり。	㊐回転ナデ ㊙回転ヘラケズリ	回転ナデ	灰色 灰色	長(1) ◎		

B 地区 SR ２出土遺物観察表　土製品　(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
7	坏身	受部径(11.7) 残高 1.8	上外方向にのびる受部に上方向にのびる立ち上がりをもつ。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		
8	坏蓋	口径 (13.2) 残高 3.1	内湾気味に下がる口縁部。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	長(1) ○		
9	坏蓋	口径 (11.4) 残高 3.0	内湾して下がる口縁部。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 白灰色	密 ◎		
10	坏蓋	口径 (9.3) 残高 2.2	内湾気味に下がる口縁部。	回転ナデ	回転ナデ	白灰色 白灰色	密 ◎		
11	坏身	口径 (9.6) 残高 2.6	外方向にのびる受部に内傾する立ち上がり。	回転ナデ	回転ナデ	暗灰色 灰色	長(1～2) ◎		
12	坏身	口径 (12.0) 残高 2.8	上方向にのびる受部に、立ち上がりは短い。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	長(1) ○		
13	高坏	残高 6.7	脚は外反しながら下方にのびる。	ナデ	ナデ・しぼり痕	灰色 灰色	長(1) 砂 ○		
14	高坏	脚底径(10.8) 残高 0.8	ラッパ状に開く脚裾部。	ナデ	ナデ	灰色 暗灰色	長(1) ◎		
15	高坏	底径 (7.0) 残高 2.9	やや外反して下がる脚裾部。	ナデ	ナデ	黒色 黒色	長(1) ◎		
16	台付壺	底径 (12.0) 残高 3.2	脚裾部の端面が凹む。	回転ナデ	回転ナデ	黒色 灰色	長(1) ◎		
17	台付壺	底径 (13.0) 残高 2.8	脚裾部の端面が凹む。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		
18	台付壺	底径 (10.3) 残高 2.5	脚裾部の端面が凹む。	回転ナデ	回転ナデ	白灰色 白灰色	長(1) ◎		
19	甕	口径 (17.2) 残高 3.5	口縁端部に凸帯状の貼り付けがみられる。	ナデ	ナデ	青灰色 青灰色	長(1) ◎		
20	甕	口径 (17.6) 残高 2.6	外反する口縁部に端部外側は肥厚される。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 暗オリーブ灰色	長(1) ◎		

表34　C 地区 SR １出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
21	坏蓋	口径 (13.2) 残高 2.5	天井部に屈曲をもち、内湾気味に下がる口縁部。	㊦回転ヘラケズリ ㊤回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰白色	長(1) ◎		
22	坏身	口径 (10.0) 残高 2.5	受部は外上方向、立ち上がりは上方向にのびる。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰白色	長(1) ○		
23	坏身	口径 (11.5) 残高 2.0	外方向にのびる受部に内傾する短い立ち上がりをもつ。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	長(1) ◎		
24	高坏	残高 3.4	坏部は接合基部から内湾気味に立ち上がる。	マメツ	マメツ	乳白色 乳白色	長(1) ○		
25	坏身	口径 (9.6) 残高 3.1	やや外反する口縁端部が肥厚される。	㊤回転ナデ ㊦回転ヘラケズリ	回転ナデ	灰色 白灰色	長(1) ◎		
26	壺	口径 (6.2) 残高 3.1	やや外反する口縁端部が外方向に肥厚される。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	長(1) ◎		
27	壺	残高 4.2	屈曲した胴部に１条の沈線をもつ。	回転ナデ	回転ナデ	オリーブ灰色 白灰色	密 ◎	自然釉	
28	器台	残高 4.2	脚部に透かしが施される。	ナデ	㊦同心円タタキ ㊥ナデ	赤灰色 赤灰色	長(1) ◎		
29	甕	残高 6.7	胴部に穿孔がみられ、その上下に凹線が施される。	(胴上)回転ナデ (胴下)ヘラケズリ ㊦ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	長(1～2) 砂 ◎		

表35　C地区第Ⅴ層出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
30	坏	口径 (12.1) 底径 (7.8) 器高 3.3	平底の底部より外傾する口縁部。	マメツ	マメツ	浅黄色 浅黄色	密 ○		
31	鍋	口径 (30.8) 残高 2.2	口縁部が屈曲し外方向にのびる。	ヨコナデ 施釉	ヨコナデ 施釉	灰オリーブ色 灰オリーブ色	密 ◎		

表36　D地区SR 1出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
32	浅鉢	残高 3.6	頸部の屈曲が鋭い。	ミガキ	ミガキ	黄褐色 黒色	石(1) 砂 ◎		27
33	深鉢	口径 (33.0) 残高 3.5	外反する口縁部。	巻貝条痕調整		灰黄褐色 黒色	長(1～2) ◎		27

表37　E地区SR 1出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
34	甕	口径 (20.7) 残高 6.8	頸部に3条の沈線文。口縁端部に刻み目が施される。	㊀ヨコナデ ㊁ミガキ	㊀ハケ ㊁マメツ	黒褐色 灰黄褐色	石・長(1～2) 砂・金 ◎		27
35	甕	口径 (28.4) 残高 2.1	頸部に沈線、口縁端部に刻み目を施される。	ヨコナデ	マメツ	灰黄褐色 黄橙色	石(1) 砂 ○		
36	甕	口径 (21.5) 残高 4.5	口縁端部に刻み目が施される。	㊀ヨコナデ・指頭痕 ㊁マメツ	ハケ(6本/cm)	褐色 明褐色	石・長(1～2) 砂 ○		
37	甕	口径 (14.7) 残高 5.3	頸部に2条の沈線が施される。	㊂ヘラ描き ㊁ハケ	マメツ	灰黄褐色 灰白色	石・長(1～2) 砂・金 ◎		
38	甕	底径 (7.5) 残高 3.0	平底の底部。	マメツ	マメツ・指頭痕	黄橙色 橙色	石・長(1～3) 砂・金 ○		
39	甕	底径 (5.0) 残高 3.7	平底の底部。	ナデ・ハケ	マメツ	橙色 黄橙色	石・長(1) 砂 ◎		
40	壺	口径 (14.2) 残高 6.8	頸部付近に2条の沈線文と刺突文が施される。	㊀ハケ(6本/cm) ㊂指頭痕	㊀指頭痕 ㊀㊂ミガキ	赤褐色 明赤褐色	石・長(1～3) 砂 ○		27
41	壺	底径 5.3 残高 12.3	頸部に4条の沈線文が施される。	マメツ	マメツ	黄灰色 黄灰色	長(1) 砂 ○		27
42	壺	底径 (8.8) 残高 4.5	平底の底部。	マメツ	マメツ ㊃指頭痕	黄橙色 黄橙色	石・長(1～2) 砂 ○		
43	壺	底径 (2.8) 残高 1.3	平底の底部。	ミガキ	ミガキ	黄橙色 黄橙色	石・長(1) 砂 ○		
44	坏身	口径 (12.4) 残高 2.1	受部が上方向にのびる。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		
45	甕	口径 (24.9) 残高 4.1	外傾する口縁端部はやや肥厚される。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		

表38　E地区SR 1出土遺物観察表　石製品

番号	器種	残存	材質	法量 長さ(cm)	法量 幅(cm)	法量 厚さ(cm)	法量 重さ(g)	備考	図版
46	剝片		サヌカイト	7.1	5.9	1.4	31.7		

表39　E地区第Ⅴ層出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
47	坏	口径 (12.5) 残高 1.6	内湾気味に立ち上がる口縁部に端部はやや尖る。	マメツ	マメツ	乳白色 乳白色	長(1) 砂 ○		
48	碗	底径 (6.0) 残高 2.0	断面四角形の高台をもち底部は厚い。	施釉	施釉	灰オリーブ色 灰オリーブ色	密 ◎		

表40　F地区SD 2出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
49	坏蓋	口径 (13.4) 残高 2.6	やや内湾して下がる口縁部。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎		
50	坏蓋	口径 (13.0) 残高 2.2	口縁端部に内面に段が残る。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎		

表41　F地区SR 1出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
51	坏蓋	口径 (13.0) 残高 2.5	天井部に凹みによる稜がみられる。	回転ナデ	回転ナデ	暗灰色 暗灰色	長(1) 砂 ◎		
52	坏蓋	口径 (13.3) 残高 2.7	天井部に凹みによる稜がある。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰白色	密 ○		
53	坏蓋	口径 (10.8) 残高 2.2	内湾気味に下がる口縁部。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	長(1) ◎		
54	坏身	口径 (9.8) 残高 2.0	受部に沈線状の凹みがあり、立ち上がりは内傾する。	回転ナデ	回転ナデ	暗灰色 暗灰色	長(1) ◎		
55	坏身	受部径 (11.2) 残高 2.3	受部端がやや外上方向にのびる。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	長(1) ◎		
56	高坏	残高 5.4	脚部に透かし、２条の浅い凹線文が施される。	マメツ	マメツ	灰白色 灰白色	長(1) ○		

表42　F地区第Ⅴ層出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
57	坏	口径 (11.8) 残高 2.6	内湾気味に立ち上がる口縁部。	口ヨコナデ 胴マメツ	口ヨコナデ 胴マメツ	浅黄橙色 浅黄橙色	密 ◎		
58	坏	口径 (12.8) 残高 2.7	外傾する口縁部。	マメツ	マメツ	黄橙色 黄橙色	長(1) 砂・金 ○		
59	坏	底径 (7.8) 残高 1.4	円盤成形の平高台の底部。	マメツ	マメツ	黄橙色 黄橙色	長(1) 砂・金 ○		
60	坏	底径 (7.4) 残高 1.6	平底の底部より内湾気味に立ち上がる。	坏マメツ 底回転糸切り？	マメツ	浅黄色 灰白色	密 ○		
61	椀	底径 (6.0) 残高 1.8	底部に断面逆台形状の貼り付け高台をもつ。	マメツ	マメツ	黒色 黒色	長(1) ◎		

第５章

下苅屋遺跡

― ３次調査地―

第５章　下苅屋遺跡３次調査地

１．調査の経過

(1) 調査に至る経緯

1995（平成７）年10月、松山市道路部道路建設第１課（以下、道路建設第１課）より、松山市平井町甲2392-1外における松山市道「平井・水泥線」道路建設工事にあたり、当該地における埋蔵文化財の確認願いが松山市教育委員会文化教育課（以下、文化教育課）に提出された。

当該地は、松山市の指定する埋蔵文化財包蔵地の『152平井遺物包含地』内にある。調査地周辺ではこれまでに下苅屋遺跡・下苅屋遺跡２次調査地、古市遺跡・古市遺跡２次調査地の調査が行われている。調査地の東方にある古市遺跡１区では、弥生時代前期から古代までに機能していたと考えられる自然流路や、室町時代の水路が検出されている。また、東接する下苅屋遺跡では古墳時代後期の竪穴式住居址（６棟）、土坑、溝、掘立柱建物に伴う柱穴等が検出されている。

これらのことから、文化教育課では、当該地における埋蔵文化財の有無と、さらには遺跡の範囲やその性格を確認するために、路線のうち用地買収完了部分について、1997（平成９）年４月１日～４月17日の間、計52本のトレンチによる試掘調査を実施した。

試掘調査では、古市遺跡１区で検出された自然流路のつづきや、古墳時代の掘立柱建物址や土坑、柱穴等を確認した。

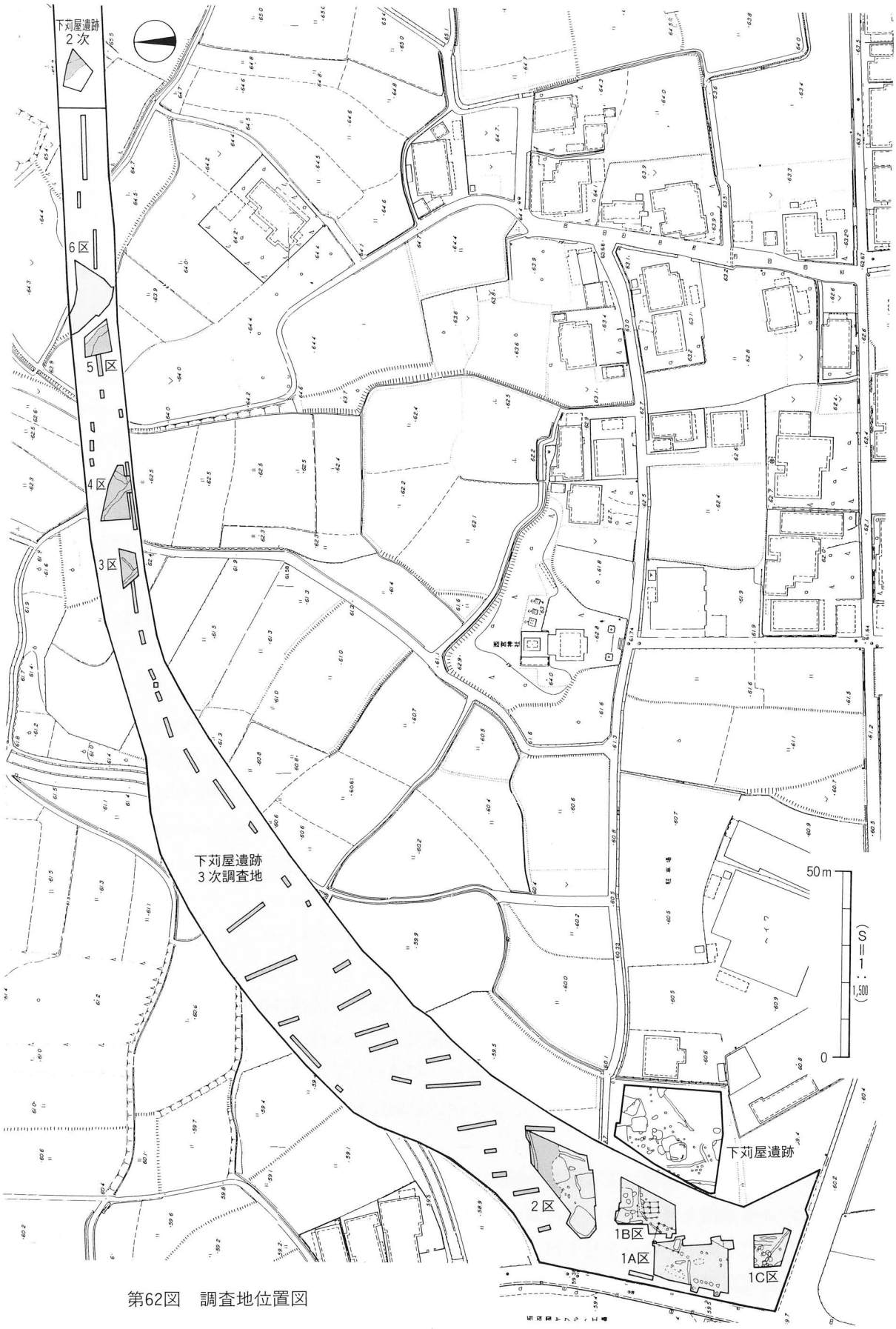
これらの結果を受け、文化教育課、㈶松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センターと道路建設第１課は発掘調査について協議を行い、開発工事によって失われる遺構や遺物について、記録保存のため発掘調査を実施することにした。今回の調査では、古市遺跡１区で検出された自然流路のつながりと、下苅屋遺跡で検出した古墳時代集落の範囲とその構造解明を主目的とし、平成９年４月18日から平成10年10月31日の間に野外調査を実施した。なお、調査の都合上、調査区を１～６区に大別し、１区はＡ～Ｃ区に分け、さらに１・２区は４ｍのグリットを設け、西から東へＡ～Ｅ……、南から北へ１～７……とし、呼称はＡ・１区、Ｂ～Ｅ・２～７区……とした。

(2) 調査の経緯

平成９年４月18日、１Ａ区を重機により掘削開始。土層壁と遺構検出面を精査する。４月22日、１Ａ区の重機による掘削を終了。４区を重機により掘削する。４月23日、５区を人力により表土はぎ取り作業開始。５月２日、４区の遺構検出写真撮影、遺構掘り下げ開始。６月16日、１Ａ区の遺構検出写真撮影、遺構の半掘作業開始。６月25日、４区の遺構完掘。６月30日、４区の遺構完掘写真撮影をし、４区の現場作業終了。

７月３日、１Ｂ区を重機による掘削を開始し、土層壁と遺構検出面の精査を行う。７月15日、１Ｂ区の重機による掘削を終了する。７月24日、１Ｂ区の遺構検出写真撮影を行う。７月25日、１Ｂ区の遺構の掘り下げを開始する。８月１日、中学生を対象とした職業体験を行う。８月27日、１Ａ・１Ｂ区の遺構完掘写真撮影を行い、１Ｂ区の現場作業を終了。

９月１日、３区の表土はぎ取り作業を開始。９月２日、６区の１号墓検出。１Ａ区の現場作業終了。


下苅屋遺跡
２次
６区
５区
４区
３区
下苅屋遺跡
３次調査地
50m
0
(S＝1：1,500)
下苅屋遺跡
２区
1B区
1A区
1C区

第62図　調査地位置図

9月4日、2区を重機により掘削開始。3区の表土はぎ取り作業を終了する。9月5日、3区の西側を拡張する。6区1号墓の検出写真撮影。9月9日、1A・1B区をヘリコプターによる航空測量ならび写真撮影を行う。9月10日、3区の遺構検出写真撮影。9月12日、1A区を重機により部分的に埋め戻す。2区の重機による掘削終了。9月17日、2区の壁・床面精査を開始する。3区の遺構完掘写真撮影。9月18日、3区を人力による埋め戻し作業、同日終了。10月16日、2区の遺構検出写真撮影。遺構の掘り下げを開始する。10月28日、中学生を対象とした職業体験を行う。

10月30日、5区を重機にて掘削開始。6区2号墓の検出作業開始。10月31日、5区の重機での掘削終了。11月5日、5区の遺構検出写真撮影。6区2号墓の検出写真撮影。11月21日、5区の遺構完掘写真撮影し、現場作業を終了。重機にて埋め戻し開始。11月25日、5区の重機での埋め戻し終了。12月2日、6区2号墓の完掘写真撮影を行い、本日にて6区の現場作業終了。12月25日、現場仕事納め。

平成10年1月6日、現場仕事始め。1B区北西部を重機にて拡張。1月20日、調査地全体をセスナ機により航空写真撮影をする。1月24日、現場説明会を行う。1月27日、2区の遺構完掘写真撮影。1月28日、1A区を重機にて埋め戻す。1月30日、1B区の重機にて埋め戻しを開始する。2月6日、1B区の図面測量を終了し、同区の作業は終了。2月13日、1B区の重機にて埋め戻しを終了する。

9月29日、1C区を重機で掘削。10月1日、1C区の遺構検出作業と遺構の掘り下げを行う。10月29日、1C区の遺構完掘写真撮影。10月31日、1C区の現場作業を終え、全調査区の野外調査を終了。

(3) 調査組織

調 査 地　松山市平井町甲2391外37筆

遺 跡 名　下苅屋遺跡3次調査地

調査期間　屋外調査　1997年4月18日～1998年10月31日

調査面積　7,655m²

調査担当　1A・B区・2～6区　河野史知、1C区　相原浩二

2. 層　位（第63～65図）

本遺跡は、小野谷に水源を発する小野川と、平井谷に水源を発する堀越川によって形成された扇状地の扇央付近、標高59～64mに立地する。調査地は東西に全長430mで、東から西へ向けて7mの緩傾斜をなしている。基本土層は第Ⅰ層黄灰色土、第Ⅱ層暗灰色土、第Ⅲ層明黄褐色土～赤色土、第Ⅳ層暗灰褐色土、第Ⅴ層灰黄褐色土、第Ⅵ層灰黄褐色砂質土～茶灰色砂質土、第Ⅶ層灰褐色土～黒色土、第Ⅷ層明黄灰色土～暗灰色土である。

第Ⅰ層―現代の造成土で、層厚は30～100cmを測る。

第Ⅱ層―現代の農耕による客土で、層厚は5～35cmを測る。

第Ⅲ層―水田耕作に伴う床土で、層厚は1～15cmを測る。

第Ⅳ層―旧耕作土で、層厚は8～24cmを測る。

第Ⅴ層―旧耕作土に伴う床土で、層厚は6～11cmを測る。

第Ⅵ層―1A区～1C区に堆積し、中世の遺物を包含する。層厚は4～6cmを測る。
色調の違いから、Ⅵ―a層は灰黄褐色砂質土、Ⅵ―b層は茶灰色砂質土になる。

第Ⅶ層―１Ａ区～１Ｃ区・２区に堆積し、古墳時代の遺物を包含する。層厚は14～16cmを測る。色調・砂質の違いから、Ⅶ―ａ層は灰褐色土で３～５㎜大の黄色土が粒混じり、Ⅶ―ｂ層は灰褐色土、Ⅶ―ｃ層は灰褐色土に暗褐色土が混じり、Ⅶ―ｄ層は黒色土になる。

第Ⅷ層―地山と呼ばれるものであり、この面において１Ａ区～１Ｃ区・２区では遺構を検出した。色調の違いから、Ⅷ―ａ層は明黄灰色土、Ⅷ―ｂ層は暗灰色土になる。

１Ａ区の層位（第63図）

１Ａ区は標高59.6ｍに立地し、基本土層の第Ⅰ層、第Ⅱ層、第Ⅲ層、第Ⅵ層、第Ⅶ層、第Ⅷ層が堆積する。第Ⅰ層は調査区全域で50～70cmの厚さを測る。第Ⅱ層は暗灰色土になり、調査区全域で15～30cmの厚さを測る。第Ⅲ層は明黄褐色土になり、調査区全域で５～10cmの厚さを測る。第Ⅵ層は南東部の一部を除いて堆積がみられ、４～６cm厚さを測る。第Ⅶ層は南西部の一部を除いて堆積がみられ、10～15cmの厚さを測る。遺構は第Ⅷ層上面にて検出した。

１Ｂ区の層位（第63図）

１Ｂ区は標高60.1ｍに立地し、基本土層の第Ⅰ層、第Ⅱ層、第Ⅲ層、第Ⅵ層、第Ⅶ層、第Ⅷ層が堆積する。第Ⅰ層は調査区全域で60～80cmの厚さを測る。第Ⅱ層は暗灰色土になり、調査区全域で10～35cmの厚さを測る。第Ⅲ層は調査区全域で３～13cmの厚さを測る。第Ⅵ層は南西部の一部を除いて堆積がみられ、４～15cm厚さを測る。第Ⅶ層は北東部の一部を除いて堆積がみられ、８～16cmの厚さを測る。遺構は第Ⅷ層上面にて検出した。

１Ｃ区の層位（第63図）

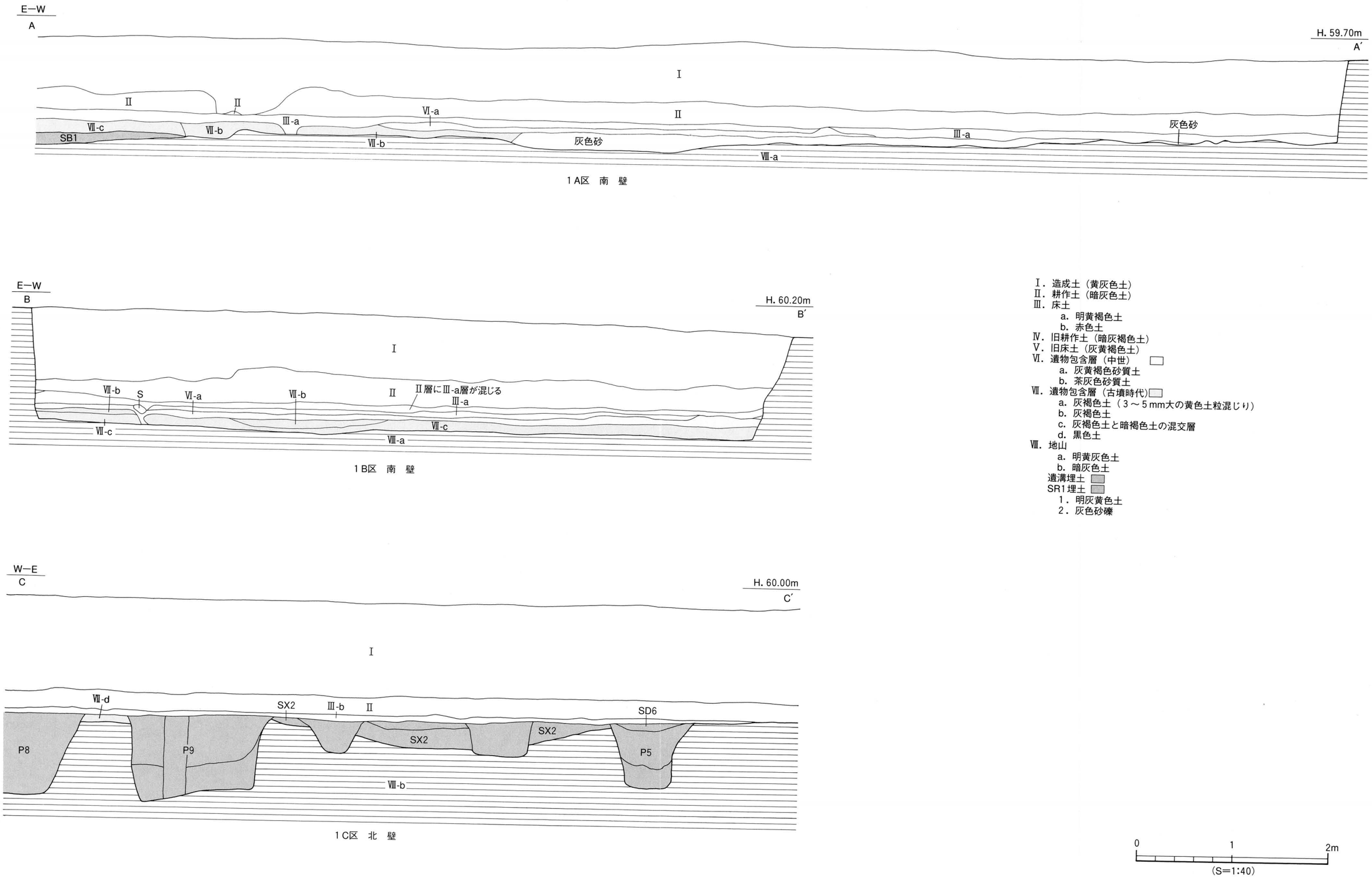
１Ｃ区は標高59.8ｍに立地し、基本土層は、第Ⅰ層、第Ⅱ層、第Ⅲ層、第Ⅶ層、第Ⅷ層が堆積する。第Ⅰ層は調査区全域で100cmの厚さを測る。第Ⅱ層は調査区全域で16～205cmの厚さを測る。第Ⅲ層は赤色土になり、調査区全域で３～８cmの厚さを測る。第Ⅶ層は東側半部を除いて堆積がみられ、８～14cmの厚さを測る。遺構は第Ⅷ層上面にて検出した。

２区の層位（第64図）

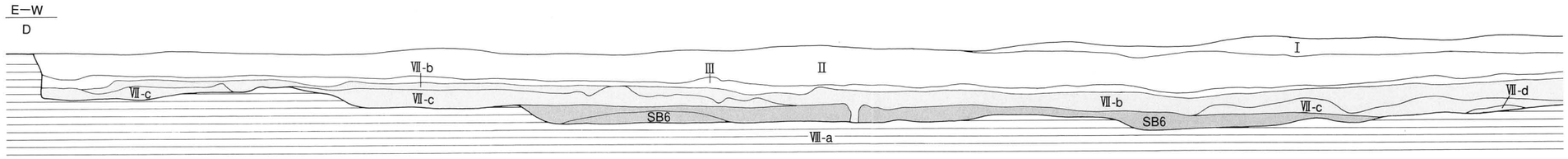
２区は標高59.6ｍに立地し、基本土層の第Ⅰ層、第Ⅱ層、第Ⅲ層、第Ⅶ層、第Ⅷ層が堆積する。第Ⅰ層は調査区全域で30～50cmの厚さを測る。第Ⅱ層は暗灰色土になり、調査区全域で20～35cmの厚さを測る。第Ⅲ層は明黄褐色土になり、調査区全域で3～15cmの厚さを測る。第Ⅶ層は南半部に堆積し、14～16cmの厚さを測る。第Ⅷ層は明黄灰色土になる。遺構は第Ⅷ層上面にて検出した。

３区の層位（第64図）

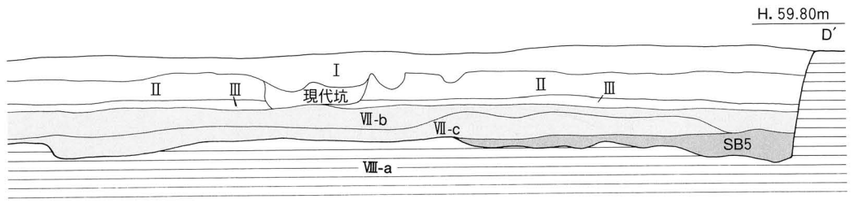
３区は標高62.4ｍに立地し、基本土層の第Ⅱ層、第Ⅲ層があり、第Ⅲ層の下にＳＲ１埋土の１層明灰黄色土（調査区全域で５～50cmの厚さを測る）と、灰色砂礫（1.5ｍ以上の堆積を測る）とがある。第Ⅱ層は調査区全域で５～21cmの厚さを測る。第Ⅲ層は明黄褐色土になり、調査区全域で３～11cmの厚さを測る。遺構は第Ⅲ層下の明灰黄色土上面にて検出した。

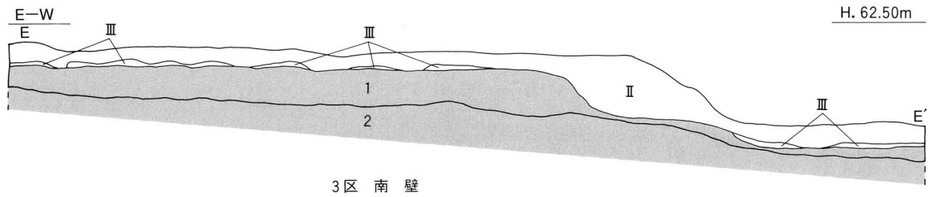


第63図　1A・1B・1C区南・北壁土層図



2区　南　壁



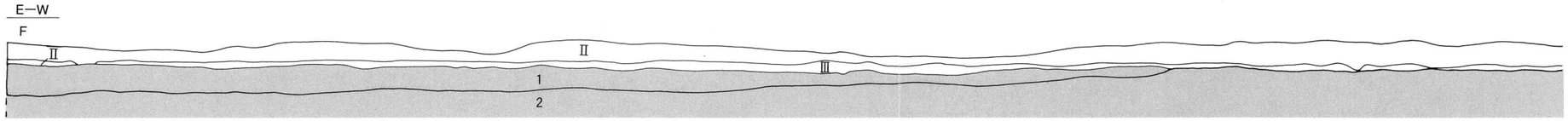


3区　南　壁

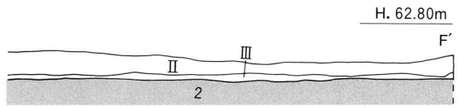
Ⅰ．造成土（黄灰色土）
Ⅱ．耕作土（暗灰色土）
Ⅲ．床土
　a．明黄褐色土
　b．赤色土
Ⅳ．旧耕作土（暗灰褐色土）
Ⅴ．旧床土（灰黄褐色土）
Ⅵ．遺物包含層（中世）
　a．灰黄褐色砂質土
　b．茶灰色砂質土
Ⅶ．遺物包含層（古墳時代）
　a．灰褐色土（3～5mm大の黄色土粒混じり）
　b．灰褐色土
　c．灰褐色土と暗褐色土の混交層
　d．黒色土
Ⅷ．地山
　a．明黄灰色土
　b．暗灰色土
遺溝埋土
SR1埋土
　1．明灰黄色土
　2．灰色砂礫

0　1　2m
(S=1:40)

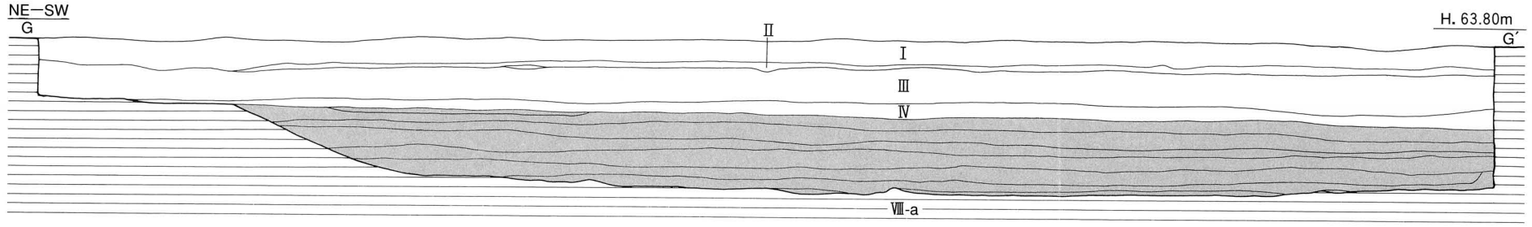
第64図　2・3区南壁土層図



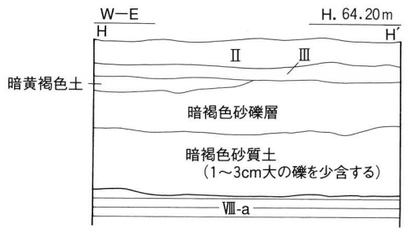
4区　南　壁



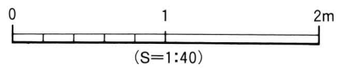
Ⅰ．造成土（黄灰色土）
Ⅱ．耕作土（暗灰色土）
Ⅲ．床土
　a．明黄褐色土
　b．赤色土
Ⅳ．旧耕作土（暗灰褐色土）
Ⅴ．旧床土（灰黄褐色土）
Ⅵ．遺物包含層（中世）
　a．灰黄褐色砂質土
　b．茶灰色砂質土
Ⅶ．遺物包含層（古墳時代）
　a．灰褐色土（3～5mm大の黄色土粒混じり）
　b．灰褐色土
　c．灰褐色土と暗褐色土の混交層
　d．黒色土
Ⅷ．地山
　a．明黄灰色土
　b．暗灰色土
遺溝埋土
SR1埋土
　1．明灰黄色土
　2．灰色砂礫



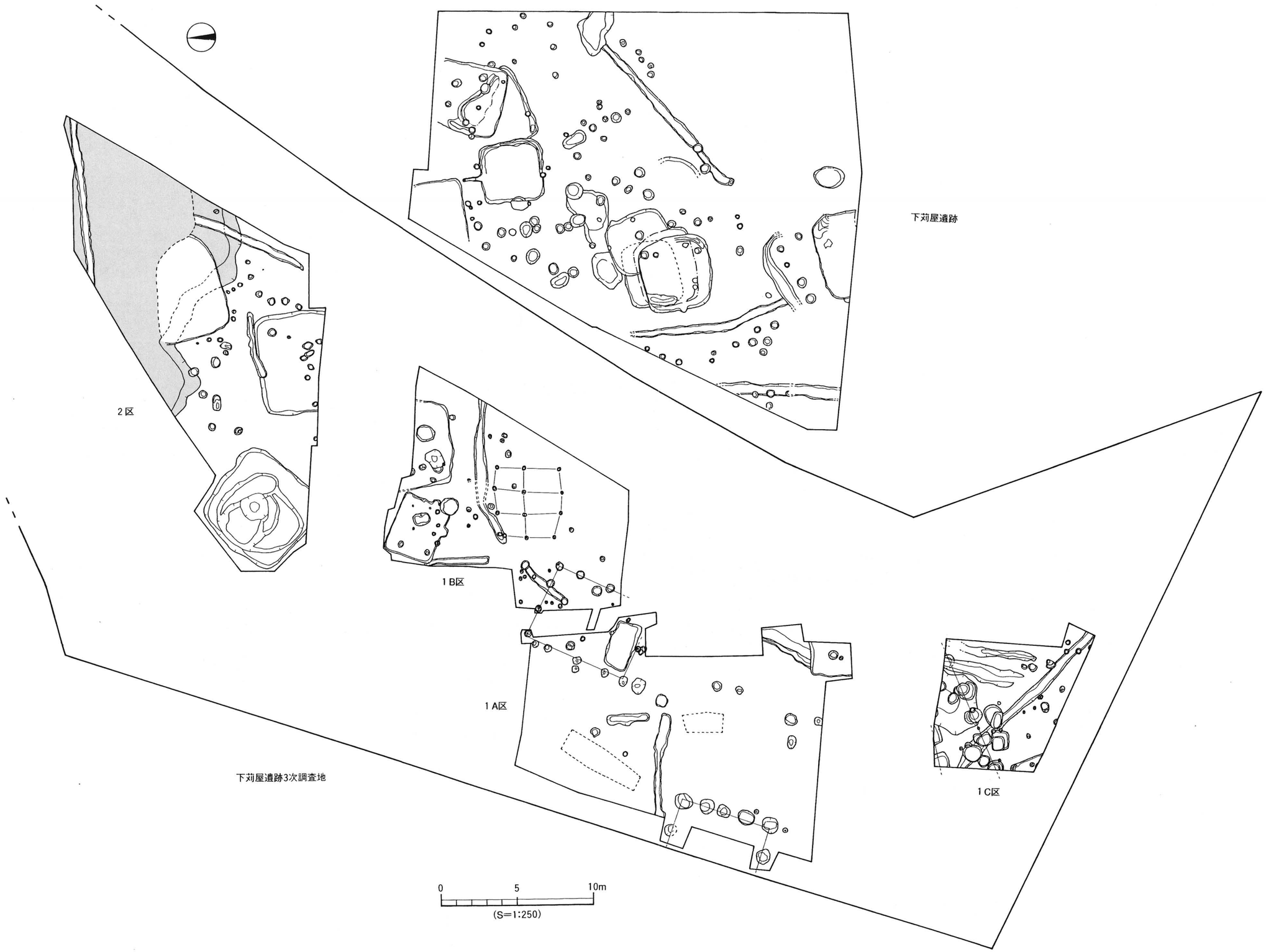
5区　南　壁



6区　東　壁



第65図　4・5・6区南・東壁土層図



第66図　1A～1C区・2区と周辺遺跡の遺構配置図

4区の層位（第65図）

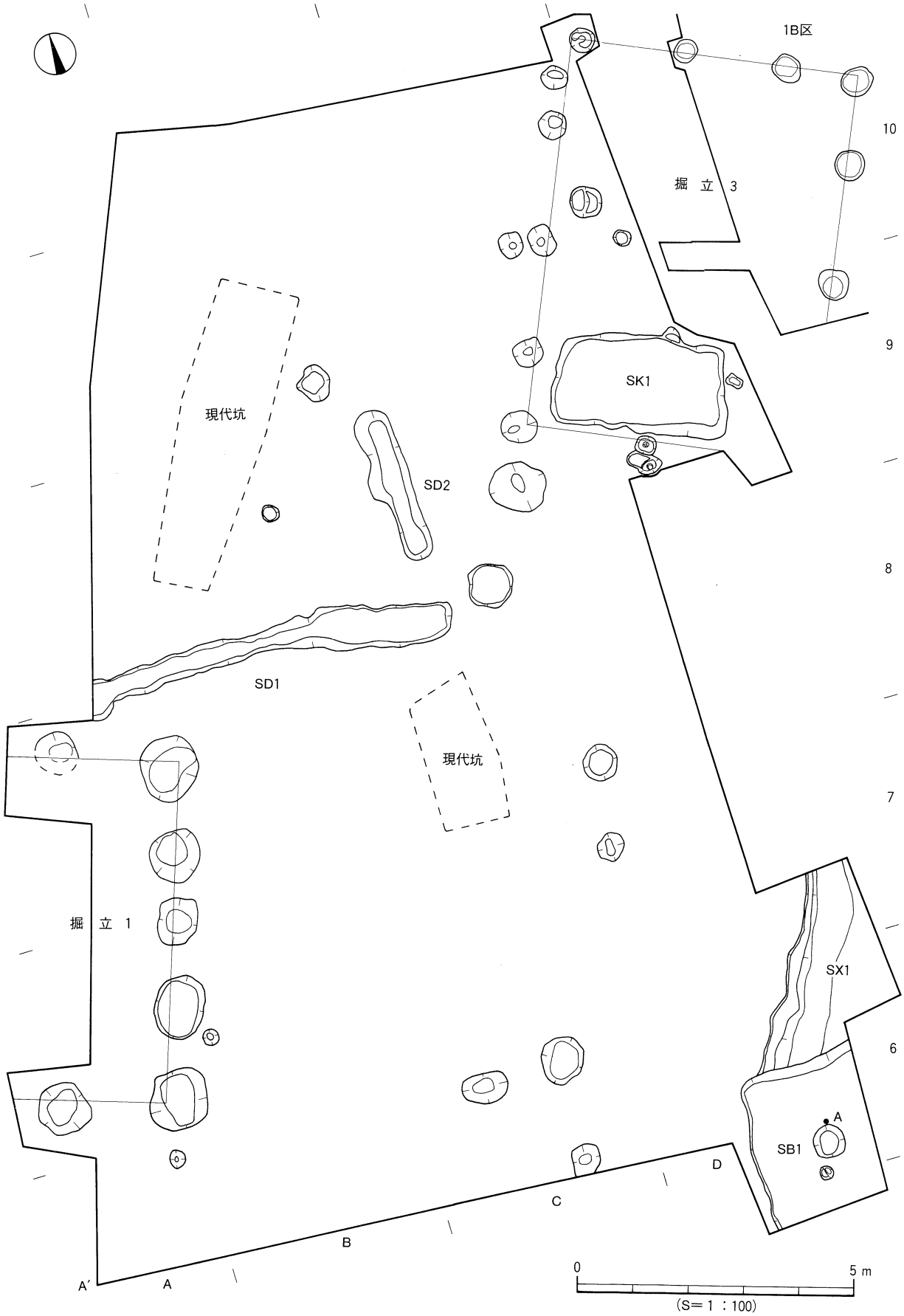
4区は標高62.6mに立地し、基本土層の第II層、第III層が堆積し、その下にSR 1の埋土である1層明灰黄色土（調査区全域で5～10cmの厚さを測る）と、2層灰色砂礫（1.5m以上の堆積を測る）とがある。第II層は調査区全域で5～17cmの厚さを測る。第III層は黄褐色土になり、調査区全域で3～6cmの厚さを測る。遺構はSR 1埋土上面にて検出した。

5区の層位（第65図）

5区は標高63.7mに立地し、基本土層の第I層、第II層、第III層、第IV層、第VIII層が堆積する。第I層は黄灰色土になり、調査区全域で13～16cmの厚さを測る。第II層は暗灰色土になり、調査区全域で1～7cmの厚さを測る。第III層は調査区全域で18～24cmの厚さを測る。第IV層は調査区全域で6～11cmの厚さを測る。遺構は第VIII層上面にて検出した。

6区の層位（第65図）

6区は標高64.1mに立地し、基本土層の第II層、第III層、第VIII—a層が堆積する。第III層と第VIII層の間には暗黄褐色土（厚さ10cm）と、暗褐色砂礫（厚さ25～30cm）と暗褐色砂質土（厚さ40cm）が堆積する。遺構は第II層上面に露出した状態で近世墓を検出した。第II層は調査区全域で11～14cmの厚さを測る。第III層は調査区全域で11～13cmの厚さを測る。



第67図　１Ａ区遺構配置図

３．１Ａ区の遺構と遺物（第67図）

第Ⅷ層上面より竪穴式住居址１棟、掘立柱建物址１棟、土坑１基、溝２条、柱穴17基、性格不明遺構１基を検出した。

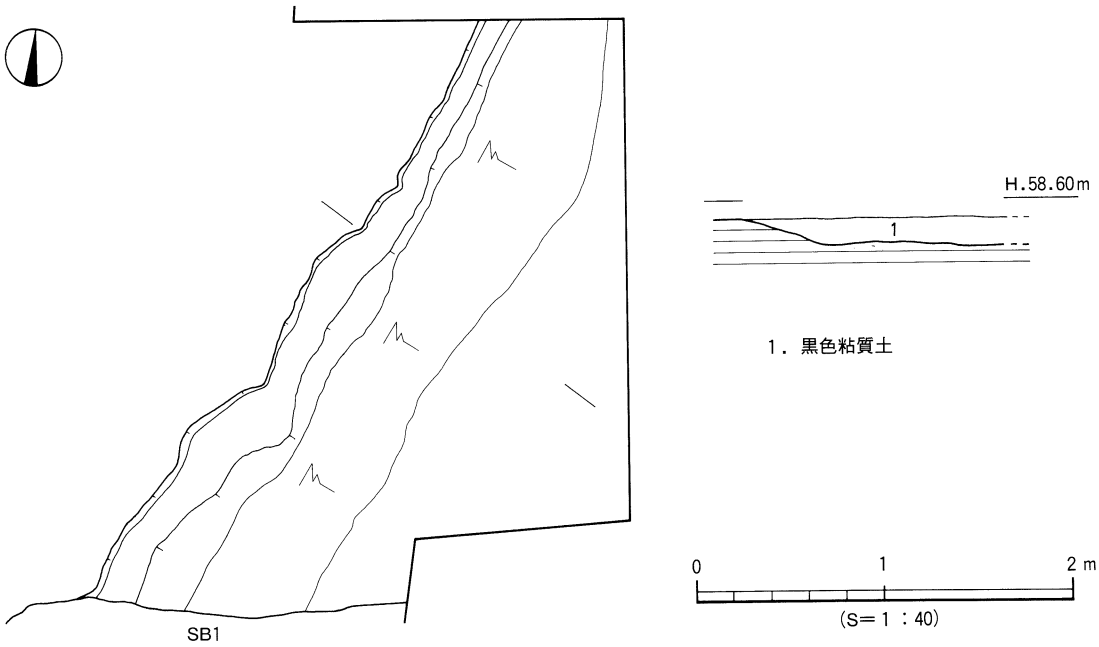
(1) 弥生時代

１）性格不明遺構

SX １（第68図）

調査区南東側のＤ～Ｅ・６～７区に位置し、南側はSB １に切られ、北・東側は調査区外に延びる。西側の壁体はN-28°-E を指向する。床面は西側の壁体より緩やかに傾斜し、傾斜部に２～17cm大の礫を多数検出している。規模は南北3.75m以上、東西2.2m以上、深さ15cmを測る。埋土は黒色粘質土である。遺物は弥生土器の細片が僅かに出土する。

時期：出土遺物から弥生時代とし、それ以上の時期決定はできない。



第68図　SX １測量図

(2) 古墳時代

１）竪穴式住居址

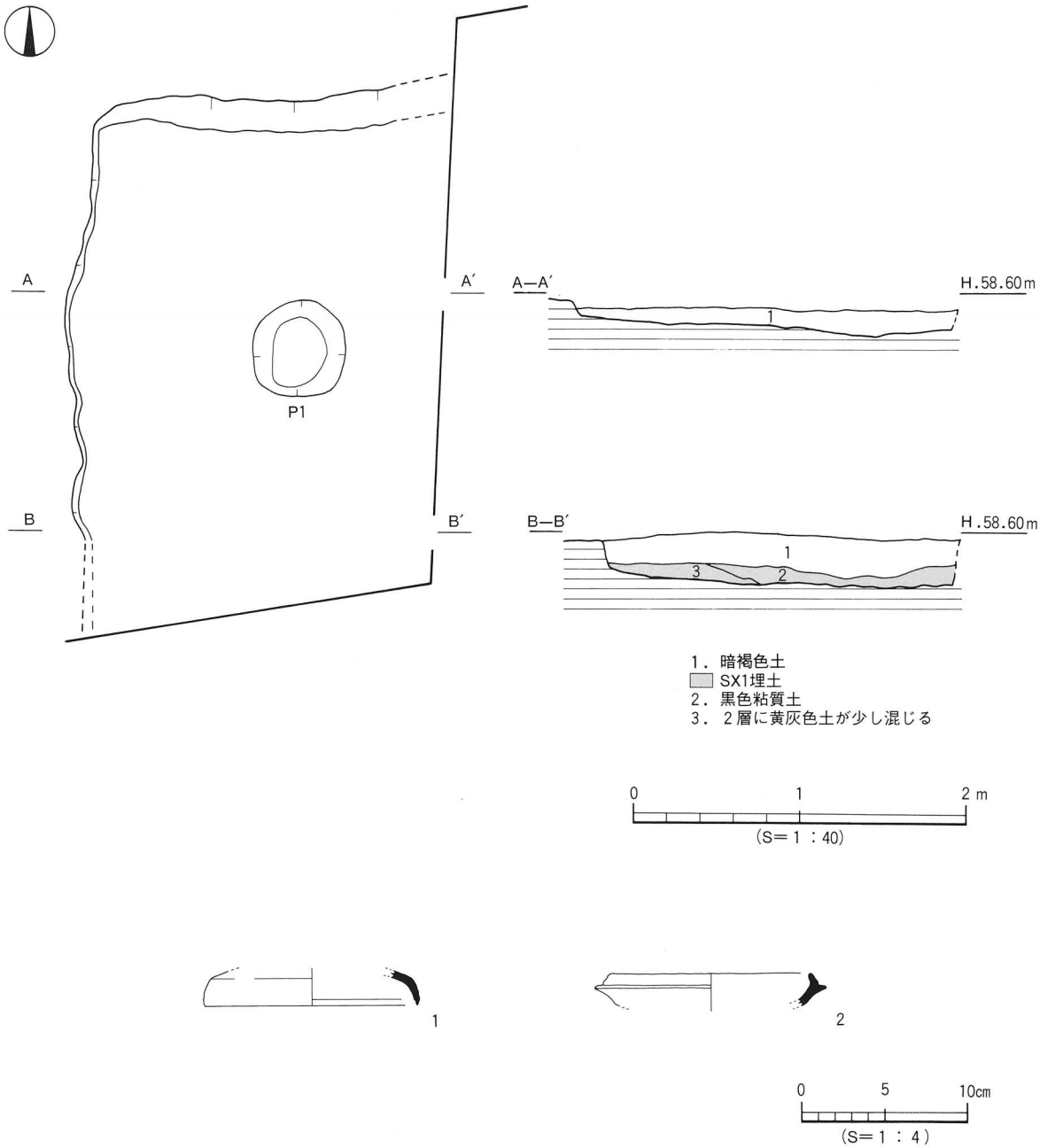
SB １（第69図）

調査区南東隅のＤ・５～６区に位置し、SX １を切り、南・東側は調査区外に延びる。平面形態は方形を呈し、検出規模は南北2.75m、東西2.2m、床面積5.9m²、深さ22cmを測る。床面では直径63cm、深さ36cmの柱穴（Ｐ１）を検出した。埋土は暗褐色土である。遺物は須恵器と土師器の小片が出土する。

出土遺物（第69図）

１は坏蓋で、口縁端部内面には明瞭な段をもつ。２は坏身で、外方向に延びる受部に、内傾する立ち上がりをもつ。

時期：出土遺物から、６世紀末～７世紀初頭に比定する。



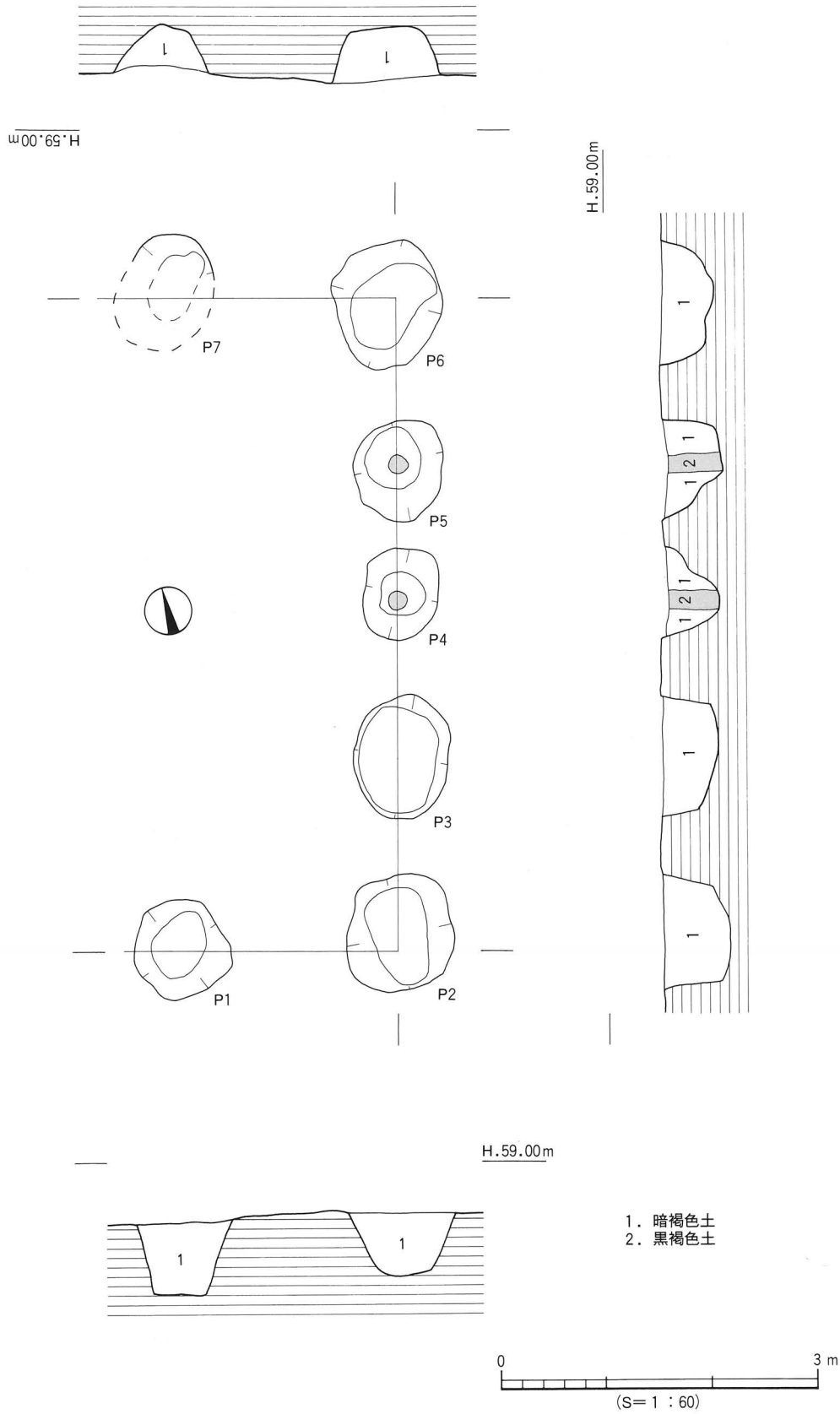
第69図　SB １測量図・出土遺物実測図

２）掘立柱建物址

掘立１（第70図）

調査区南西部のＡ～Ｂ・７～８区に位置し、西側は調査区外に延びる。主軸は桁行方向 N-17°-E で、柱穴は南北に４間、東西に１間以上である。規模は桁行き6.3m、梁行き2.1m以上で、桁方向の柱間は1.3～1.8m、梁方向の柱間は2.1m、床面積は13.2m²以上になる。柱穴は径0.7～1.2m、深さ46～72cmを測る。Ｐ４・５からは直径18cmの柱痕を検出した。埋土は暗褐色土である。遺物は須恵器と土師器の細片が少量出土したが、図化できるものはない。

時期：埋土がSB １と同じことから、６世紀末～７世紀初頭とする。


H.59.00m
P7
P6
P5
P4
P3
P1
P2
H.59.00m
H.59.00m
1
2
1．暗褐色土
2．黒褐色土
0
3 m
(S＝1：60)

第70図　掘立１測量図

３）土坑

SK １（第71図、図版29）

調査区北東部のＤ～Ｅ・９区に位置する。平面形態は長方形で、断面形態は逆台形状を呈する。主軸は東西方向を指向する。規模は長軸3.04m、短軸1.75m、深さ0.3mを測る。埋土は上層が暗灰褐色土、中層が暗灰黄褐色土、下層が暗黄褐色土である。遺物は上面から基底面までに、須恵器、土師器、３～10cm大の礫が密集した状態で出土した。出土土器は、須恵器片が2/3を占める。

第71図　SK １測量図

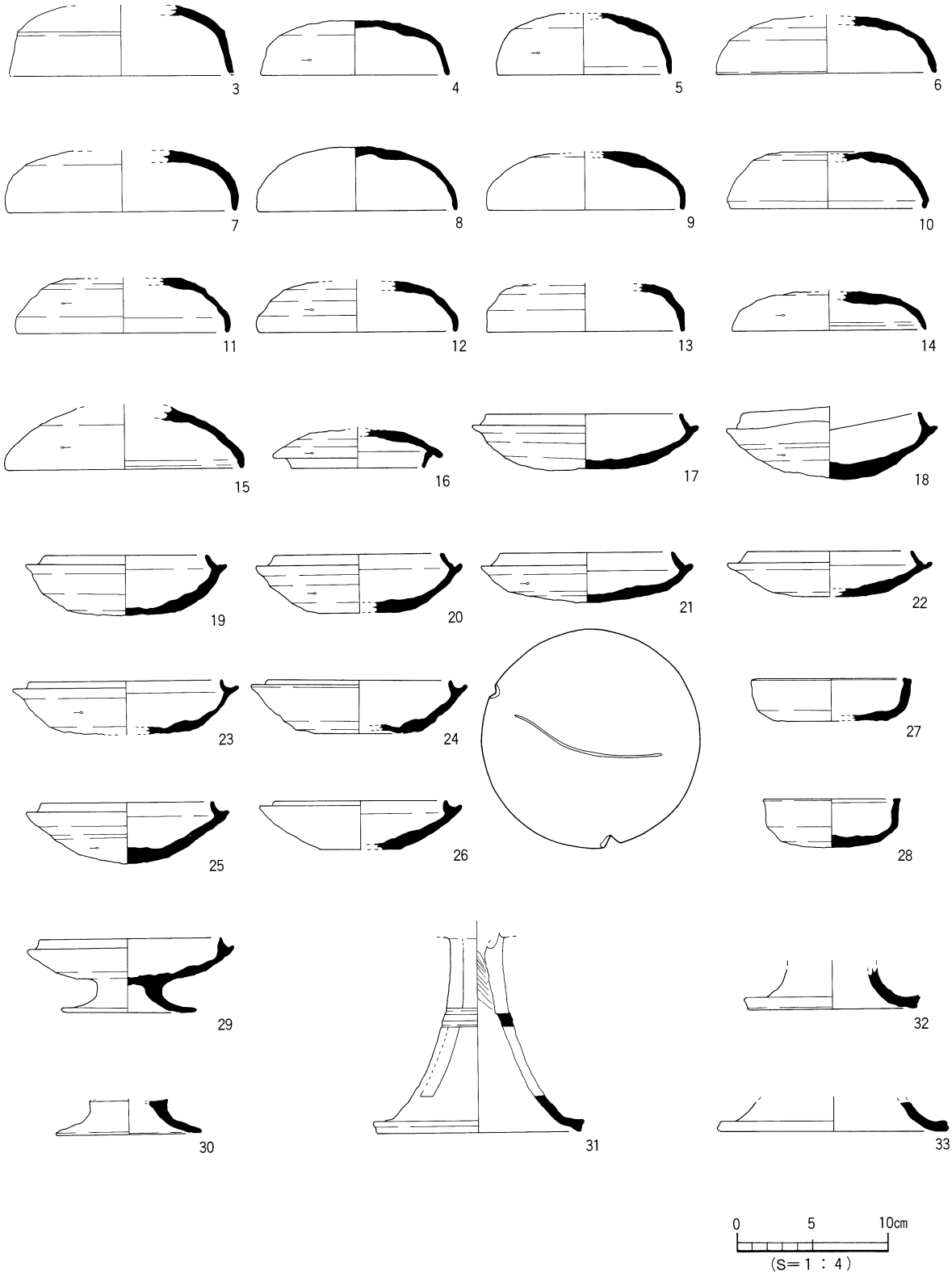
出土遺物（第72・73図、図版43）

須恵器：３～16は坏蓋である。３・４は天井部と口縁部の境界に稜をもつ。７～９は内湾して下がる口縁部をもつ。10は内湾して下がる口縁部に、内傾する端部をもつ。11・12は内湾して下がる口縁部に、端部は丸く納まる。13は天井部と口縁部の境が凹む。14･15は内湾気味に下がる口縁部をもつ。16はかえりが口縁端部より下方にある。17～28は坏身である。17～22は受部端に沈線状の凹みをもつ。29～33は高坏である。29は坏部の立ち上がりが上方、受部は外上方にのびる。29・30は脚部が短脚になる。31は３方向に２段の透かしが施される。32・33はラッパ状にのびる脚裾部で、33は透かしを施す。34～36は長頸壺である。34は緩やかに外傾する口縁部外面にはカキ目調整をもつ。35・36は扁球状の胴部をもち、36は胴上部に３条の凹線を施す。37は横瓶で、僅かに外傾する口縁部をもつ。38は台付壺の脚部で、内湾しながら下がる脚部には透かしが施される。39は甕で、「く」の字状の口縁部は端部が内湾する。40・41は**甕**である。40は段をもって外傾する口縁部になり、41は胴上部に２条の沈線と刺突文が施される。42は平**瓶**である。扁球形の胴部に、頸部には１条、胴部には２条の凹線がみられる。43は蓋で、上方向に延びるつまみをもつ。

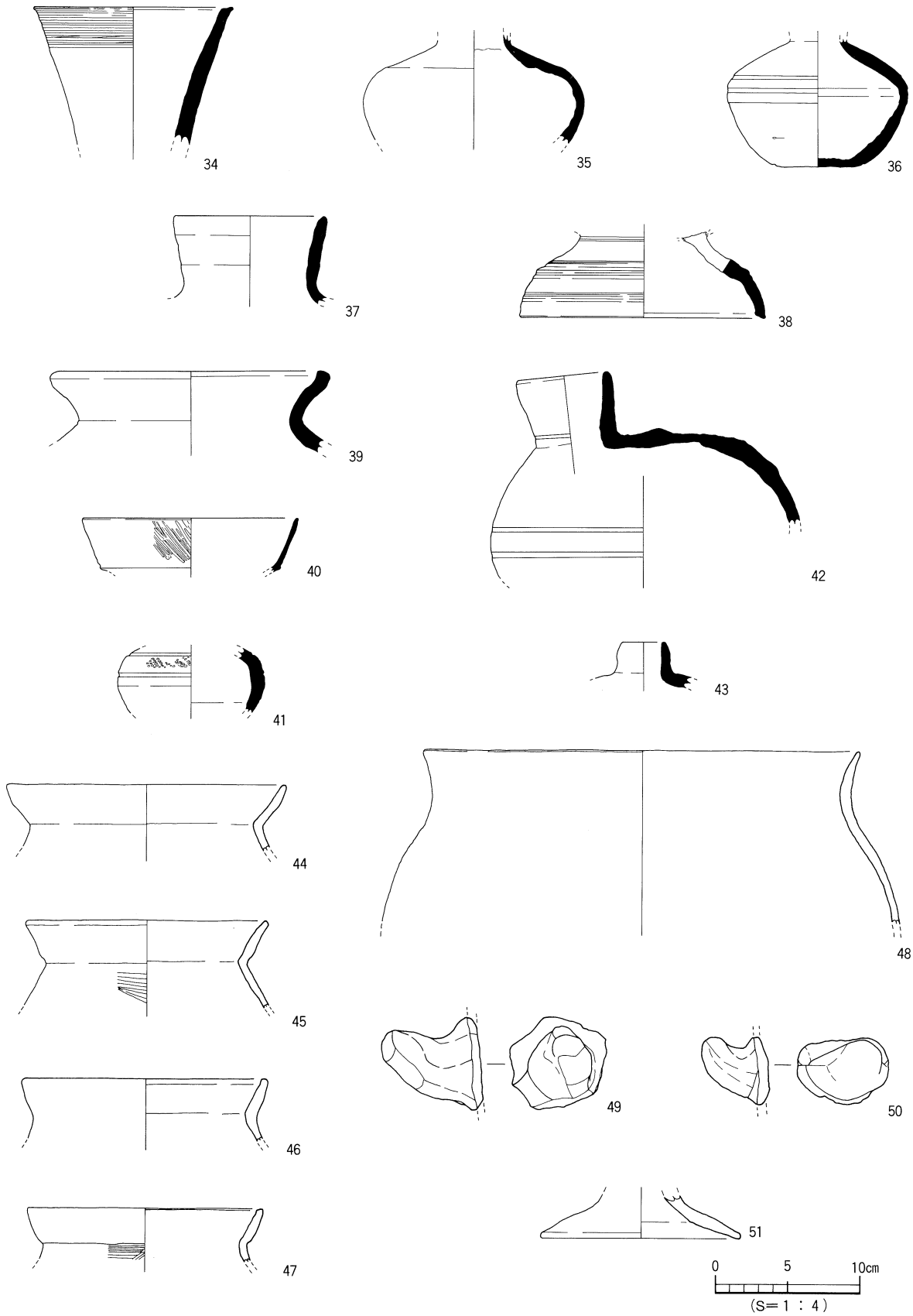
土師器：44～48は甕である。44～47は「く」の字状の口縁部をもち、48は緩やかに外反する口縁部

をもつ。49・50は甑の把手で、中実で棒状の把手をもつ。51は高坏の脚裾部で、ラッパ状に広がる裾部内面には稜をもつ。

時期：出土遺物から、６世紀末～７世紀初頭に比定する。



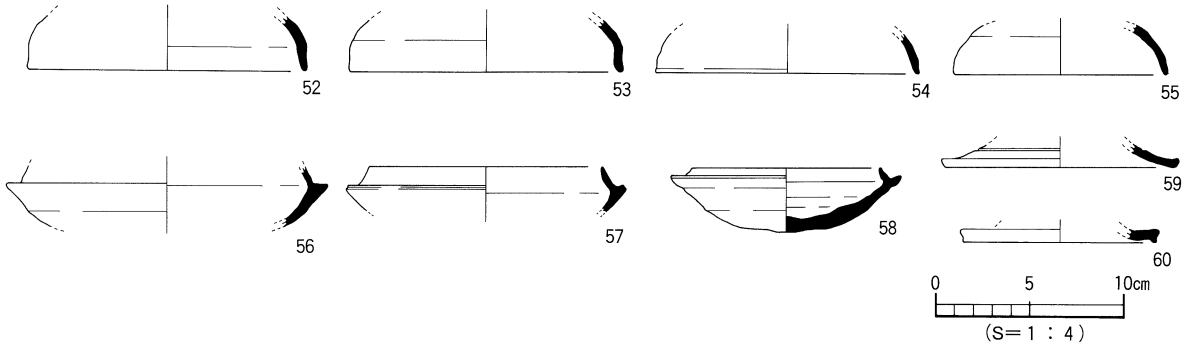
第72図　SK 1 出土遺物実測図(1)



第73図　SK １出土遺物実測図(2)

４）第Ⅶ層出土遺物（第74図）

須恵器：52～55は坏蓋である。52は口縁端部内側に、段を微かにもち、53は天井部と口縁部との境界には不明瞭な凹みをもつ。54・55は内湾して下がる口縁部をもつ。56～58は坏身である。56は受部が水平な面をなし、57は受部端が凹み、58は受部に沈線状の凹みをもつ。59・60は高坏の脚部である。59は脚端部が上方に肥厚され、60は脚端部が下方に肥厚される。



第74図　第Ⅶ層出土遺物実測図

(3) 中　　世

１）溝

SD １（第75図）

調査区中央部西側のＢ～Ｃ・８～９区に位置し、西側は調査区外に延びる。主軸は東西方向で、やや湾曲している。断面形態は逆台形状を呈する。規模は検出長6.7m、上場幅0.32～0.82m、深さ８～13cmを測る。遺物は拳大～人頭大の礫が密集した状態で検出し、このなかに土師器と磁器の破片が混じる。埋土は灰褐色土である。

出土遺物（第75図）

61は土釜の口縁部である。口縁端部外側には、断面三角形の凸帯が貼り付けられる。62は磁器碗である。外面に草花文がみられる。

時期：出土遺物と埋土から、中世とした。

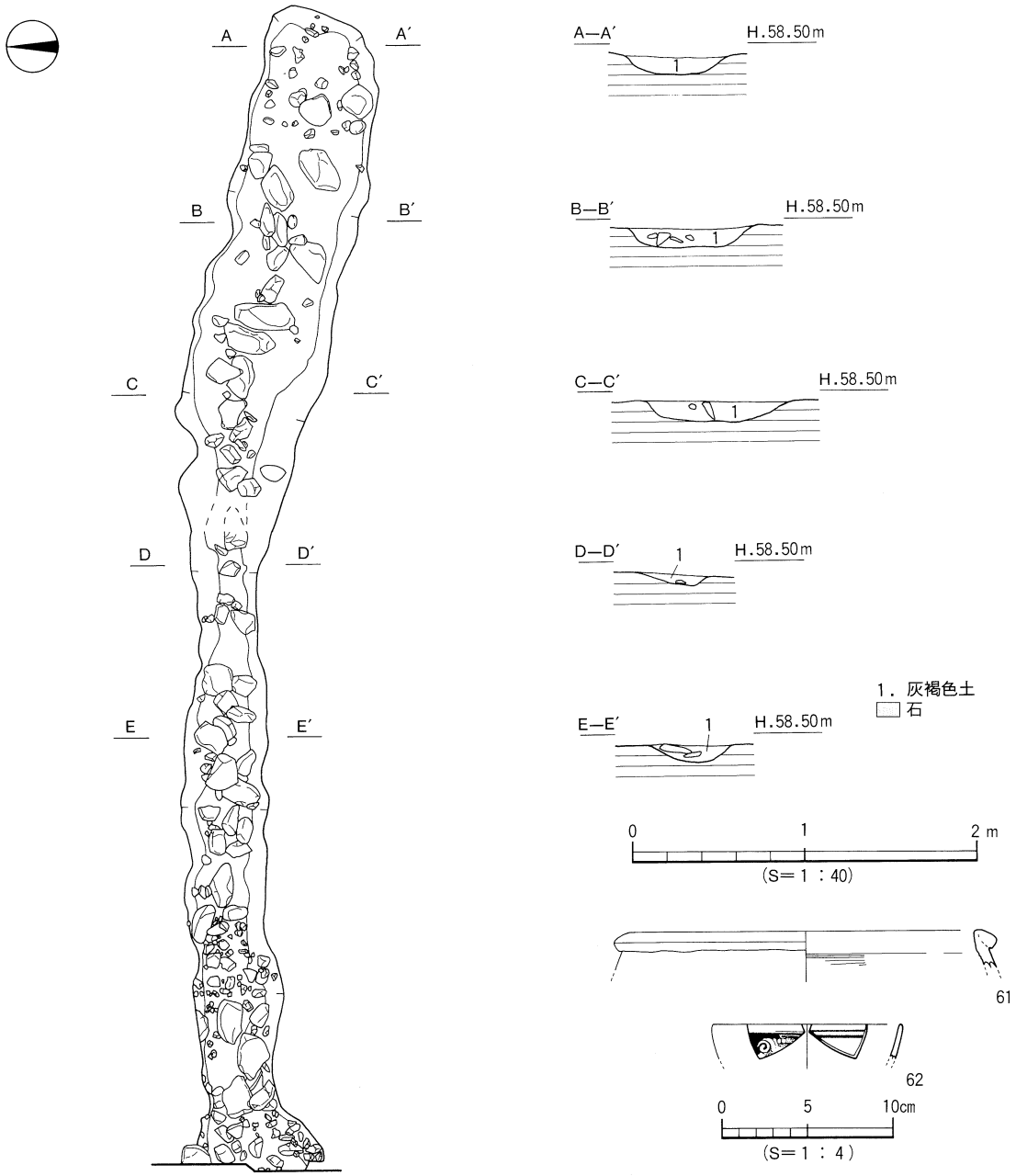
SD ２（第67図）

調査区中央部北側のＣ・９区に位置する。主軸は南北を指向する。断面形態はレンズ状を呈する。規模は検出長2.83m、上場幅0.6m、深さ８cmを測る。埋土は上層が暗灰褐色土、下層は灰褐色土である。出土遺物はない。

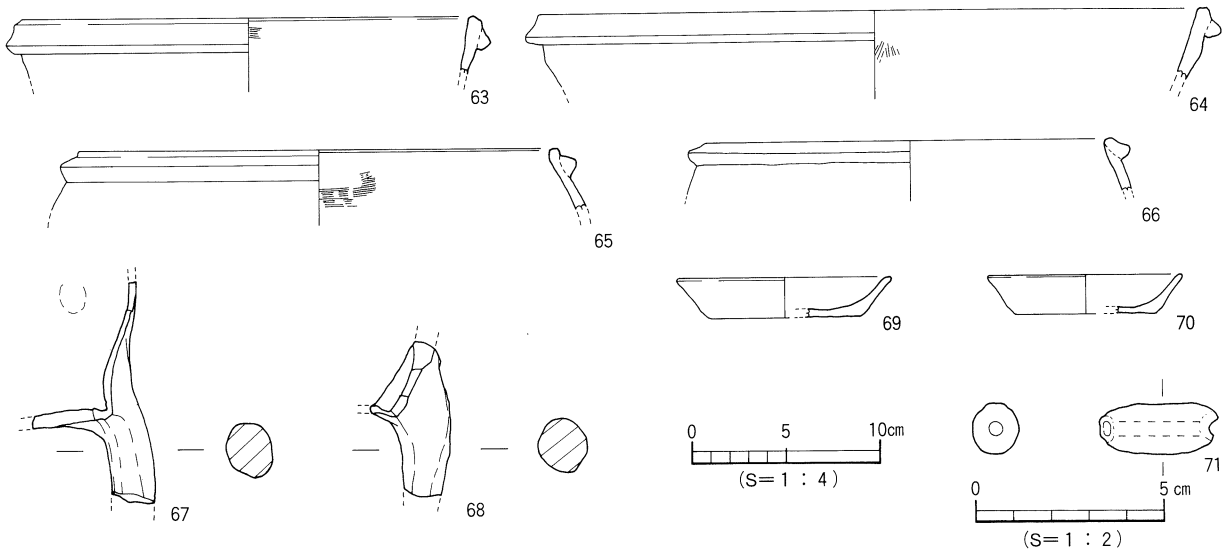
時期：出土遺物はなく、埋土から中世とする。

２）第Ⅵ層出土遺物（第76図、図版44）

土師器：63～66は土釜である。63・64は外傾する口縁部に貼り付け凸帯をもつ。65・66は内湾する口縁部に、断面三角形状の貼り付け凸帯をもつ。67・68は土釜の脚部である。断面楕円形の脚は下方に延びる。69・70は皿である。平底の底部から胴部は外反気味に立ち上がり、口縁端部は丸くおさめる。71は管状土錘で、中心部に孔を開けている。



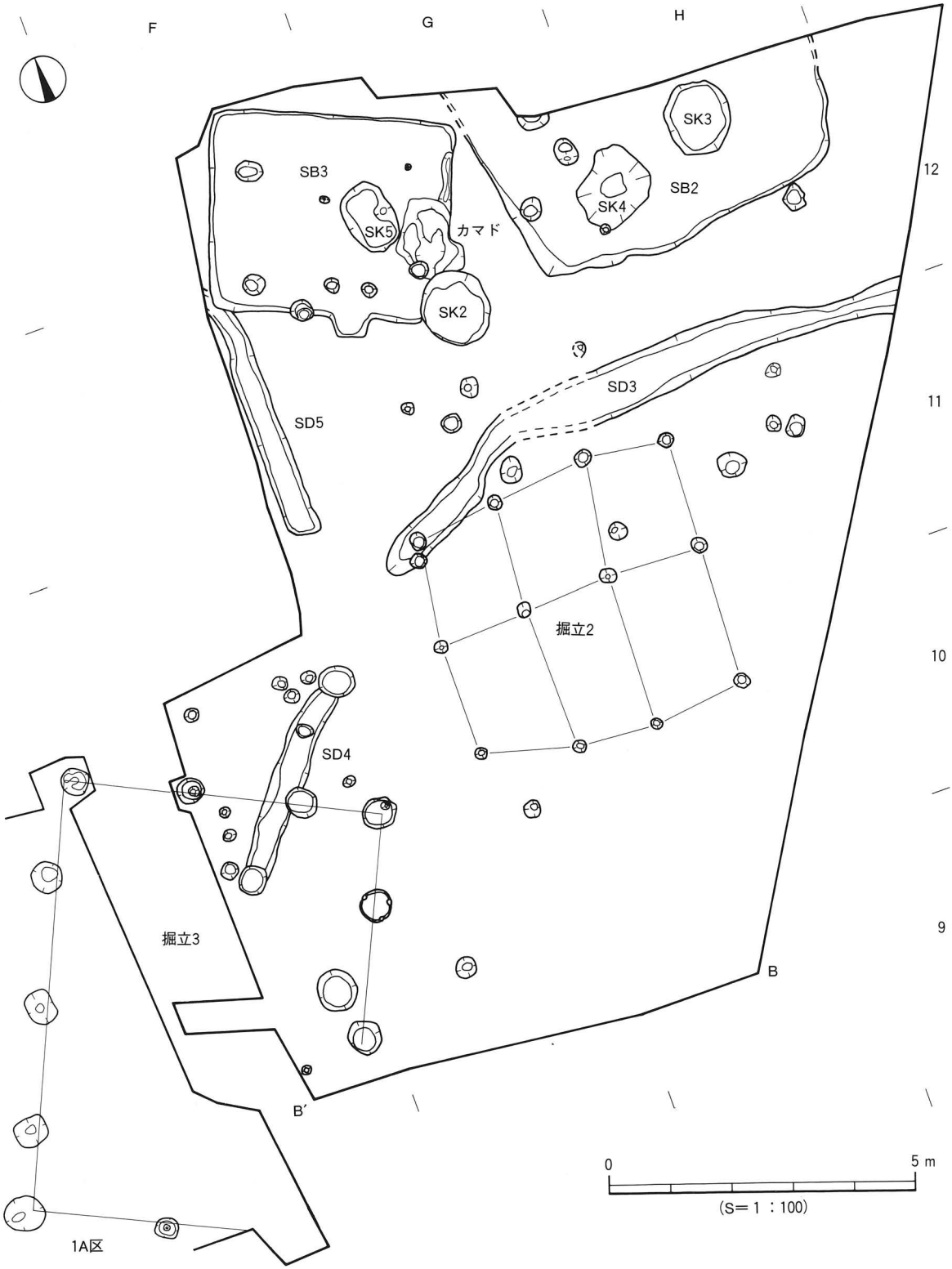
第75図　SD 1 測量図・出土遺物実測図



第76図　第Ⅵ層出土遺物実測図

４．１Ｂ区の遺構と遺物（第77図）

第Ⅵ層上面では竪穴式住居址２棟、掘立柱建物址２棟、土坑４基、溝３条、柱穴10基、小穴８基を検出した。



第77図　１Ｂ区遺構配置図

(1) 古墳時代

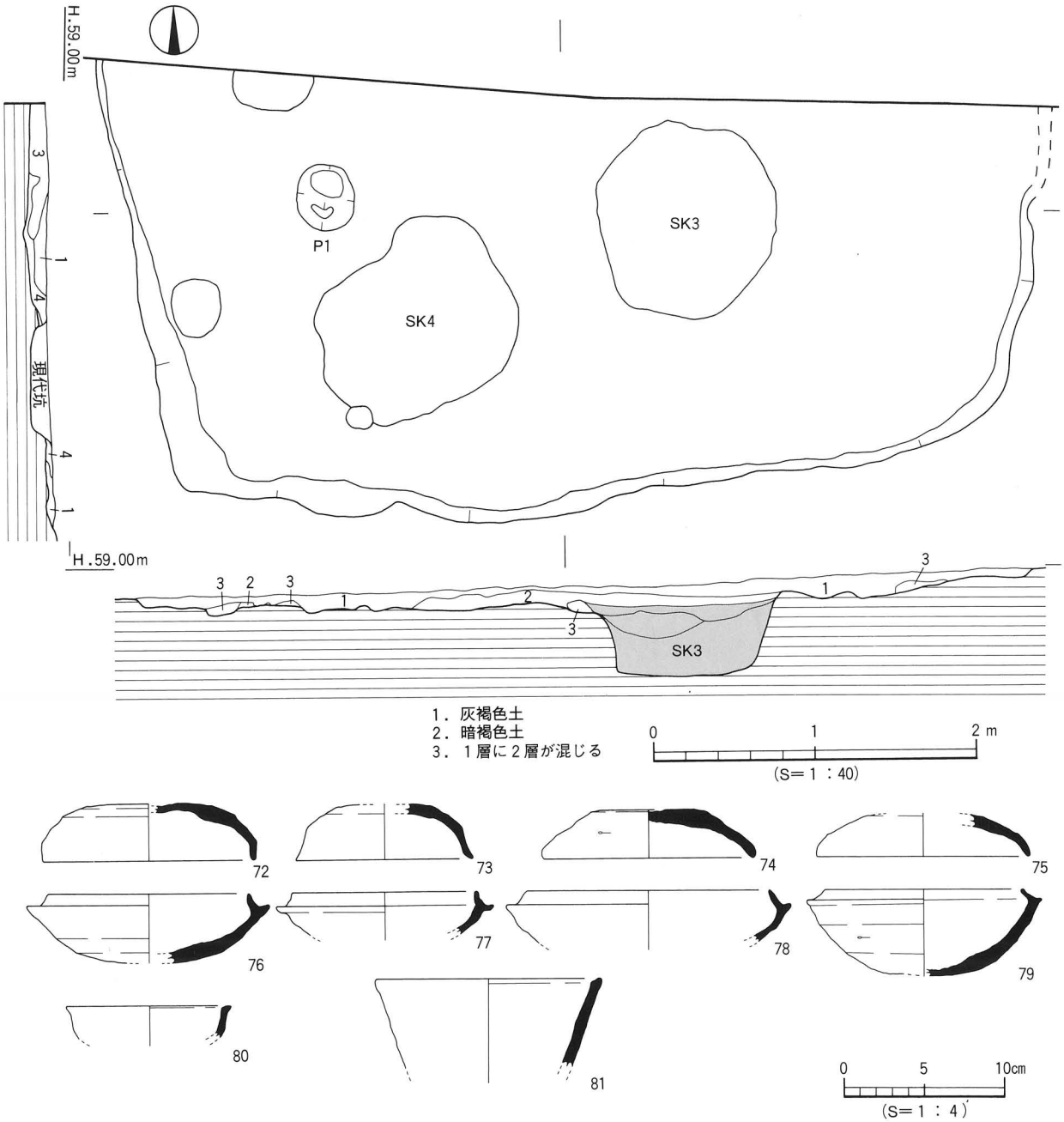
１）竪穴式住居址

SB ２（第78図）

調査区北端のG～H・12～13区に位置し、SK ３・４を切る。平面形態は隅丸方形を呈する。主柱穴は１基（Ｐ１）を検出した。規模は東西5.86m、南北長2.72m、深さ0.16mを測る。埋土は上層が灰褐色土、下層が暗褐色土で、基底面には部分的に灰褐色土と暗褐色土の混合土がみられる。基底面ではSK ３・SK ４を検出した。遺物は須恵器・土師器・砥石が出土する。

出土遺物（第78・79図、図版44）

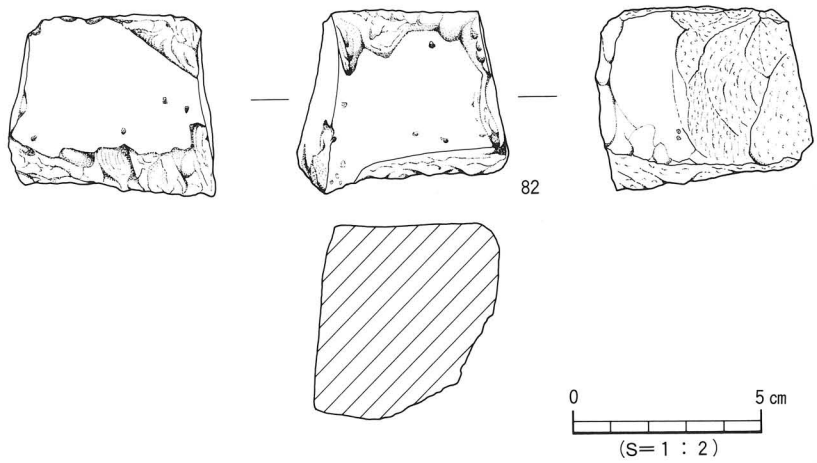
72～75は坏蓋である。72は口縁端部が下方に延び、73は口縁端部が外反し、74は平坦な天井部をもち、75は内湾しながら下がる口縁部をもつ。76～80は坏身である。76は受部に凹みをもち、77は立ち



第78図　SB ２測量図・出土遺物実測図(1)

上がりが上方に延びる。78・79は立ち上がりは内傾し、受部は外方に延びる。80は外傾気味の口縁部に、端部は外方に肥厚する。81は壺の口縁部で、外傾する口縁端部は段をなす。82は砥石で、両端が欠損している。石材は凝灰岩製である。砥面は４面あり、平面研磨された使用痕がみられる。

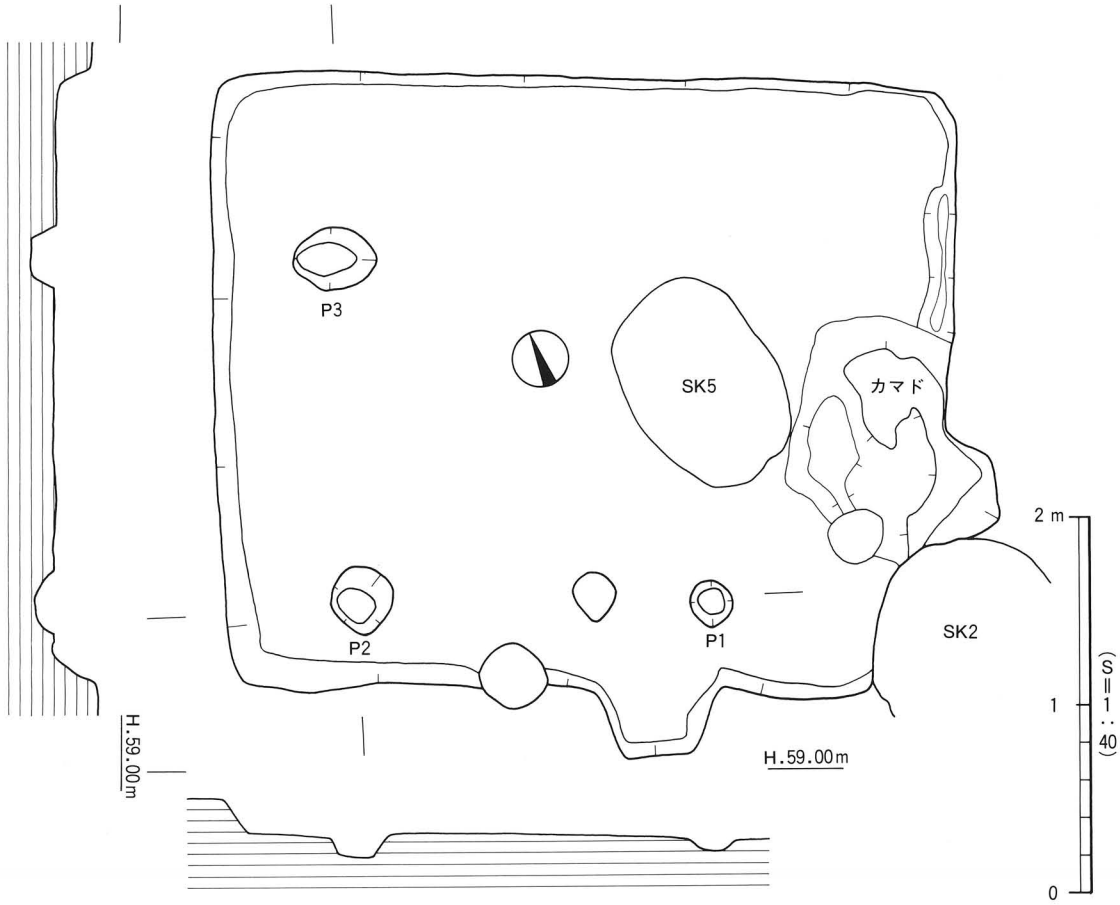
時期：出土遺物から、６世紀末～７世紀初頭に比定する。



第79図　SB ２出土遺物実測図(2)

SB ３（第80図、図版30・31）

調査区北西隅のＦ～Ｇ・12～13区に位置し、北・西側は調査区外に延び、南東コーナーはSK ２に切られており、基底面からはSK ５を検出している。平面形態は方形を呈する。規模は東西2.45m、南北2.68m、深さ0.19mを測る。周壁溝は幅23cmで、主柱穴は３基（Ｐ１～Ｐ３）を検出した。東壁には



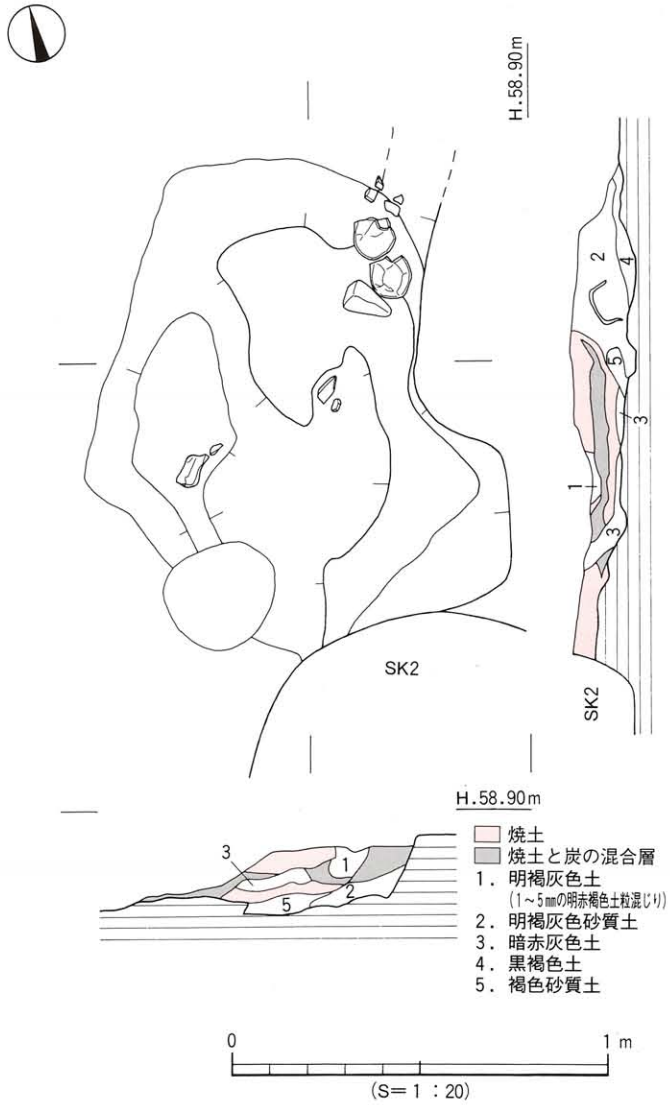
第80図　SB ３測量図

竈があり、平面形態は馬蹄形を呈し、規模は長さ1.16m、幅0.77m、高さ0.17mを測る。煙道は未検出で、竈は住居址の壁体より外へ0.45mスロープ状に突出している。竈内部から須恵器の埦（92）が出土している。埋土は焼土・炭との互層である。遺物は須恵器片と土師器片が出土する。

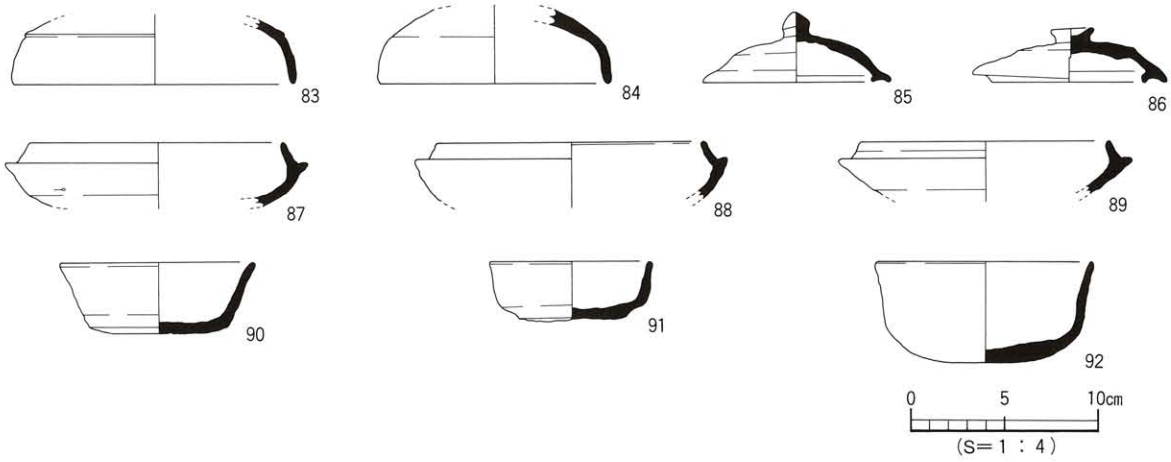
出土遺物（第82図、図版44）

須恵器：83～86は坏蓋である。83は天井部と口縁部との境界に稜がみられる。84は天井部と口縁部との境界にある稜が消滅し、口縁端部は丸くおさめる。85は天井部に断面菱形を呈する宝珠様つまみが付く。かえりは口縁端部と同じ高さである。86は天井部の中央が凹むつまみをもち、かえりが口縁端部より下に延びる。87～91は坏身である。87～89は受部端に沈線状の凹みをもつ。90は平底の底部から、外反気味に立ち上がる。91は底部端が外反し、外傾気味に立ち上がる。92は埦で、口縁部は外反する。

時期：出土遺物から、７世紀中葉に埋没したとみられる。



第81図　SB ３カマド測量図



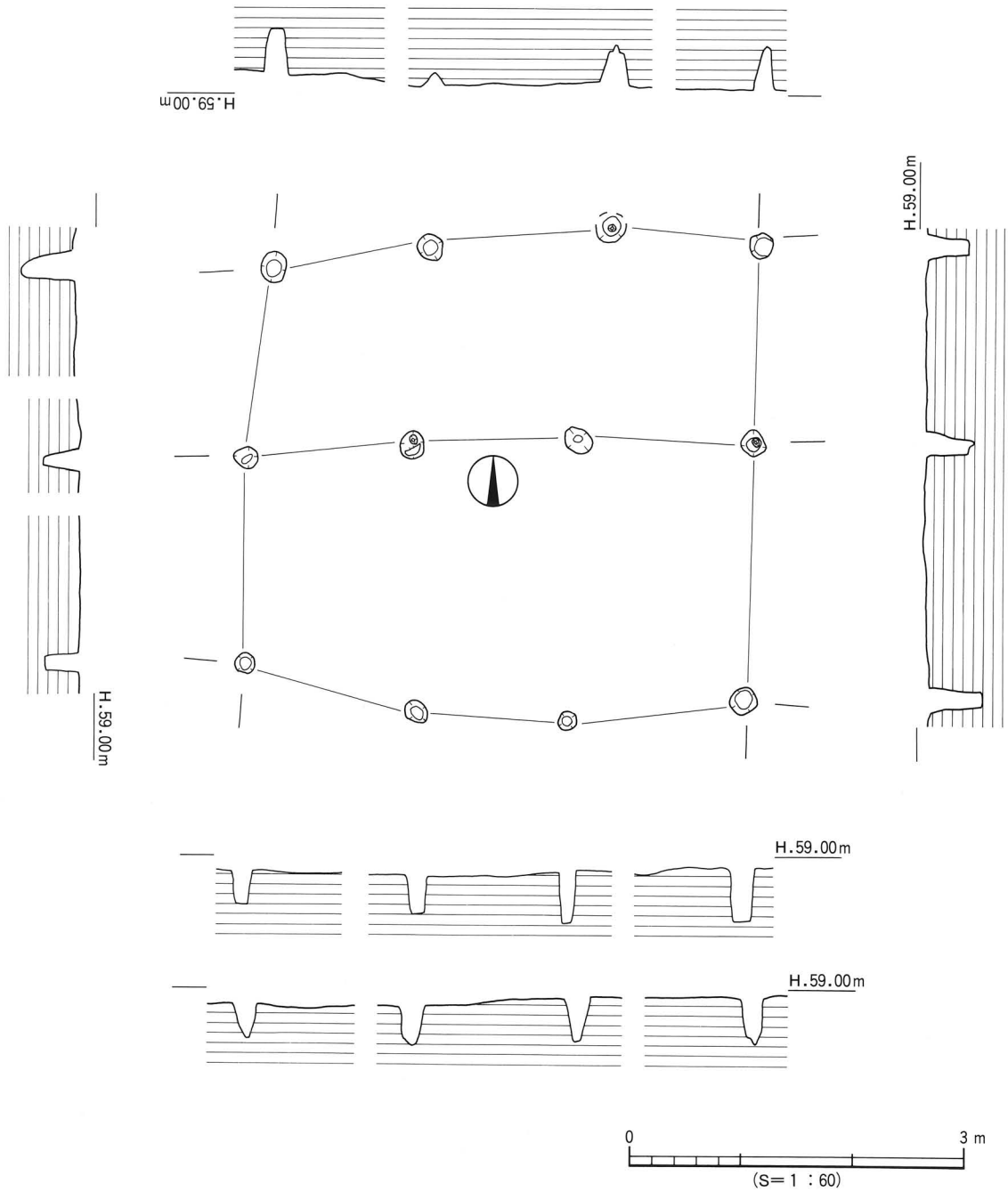
第82図　SB ３出土遺物実測図

２）掘立柱建物址

掘立２（第83図）

調査区中央部のＦ～Ｇ、10～11区に位置し、SD ３を切る。総柱の東西棟で、東西３間、南北２間になる。規模は桁行4.57m（柱間1.35～1.62m）、梁行4.11m（柱間1.78～2.33m）、柱穴の直径18～27cm、深さ29～49cmを測る。埋土は灰褐色土である。遺物は須恵器と土師器の小片が出土した。

時期：埋土がＳＢ２と同じことから、６世紀末～７世紀初頭とする。

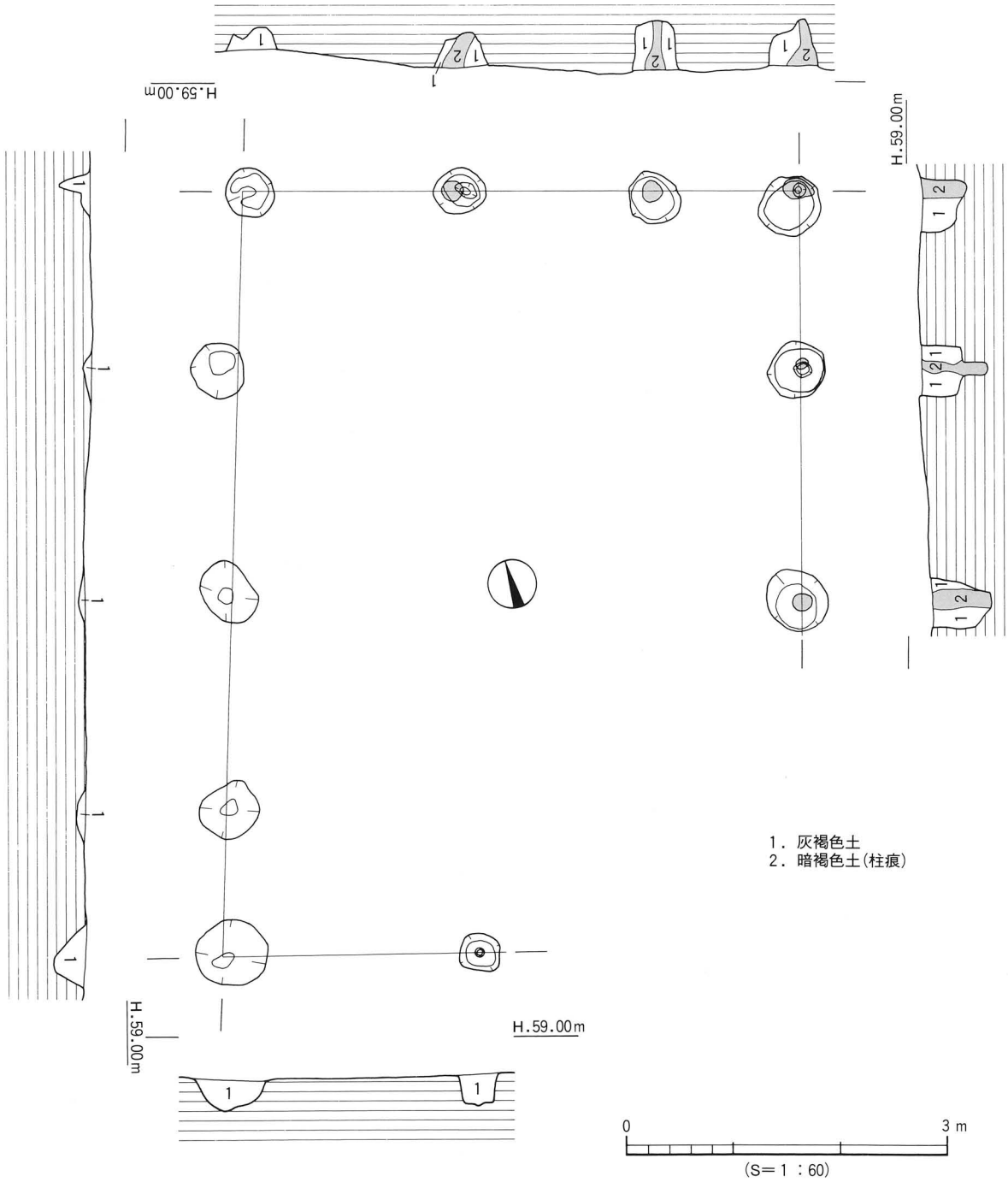


第83図　掘立２測量図

掘立３（第84図）

調査区北西部のＤ～Ｆ・９～11区に位置し、SD ４を切る。Ｐ６～Ｐ11は１Ａ区内にある。SD ４を切る。東西３間、南北４間の南北棟で、規模は桁行き４間7.08m、梁行き３間5.32m、柱間1.32～2.16m、柱穴の大きさ46～68cm、深さ9.2～71cmを測る。Ｐ１～Ｐ５では直径10～20cmの柱痕を検出した。柱穴の埋土は灰褐色～暗褐色土である。遺物は須恵器と土師器の小片が出土している。

時期：埋土がSB ２と同じことから、６世紀末～７世紀初頭とする。



第84図　掘立３測量図

３）溝

SD ３（第85図）

調査区中央部のＦ～Ｉ・11～12区に位置する。北東から南西方向に湾曲しながら延びており、東側は調査区外に延びる。掘立２に切られている。規模は検出長9.7m、上場幅30～82cm、深さ１～８cmを測り、溝床は東から西に16cm下がる。断面形態はレンズ状である。埋土は灰褐色土である。遺物は須恵器と土師器片が出土している。

出土遺物（第86図）

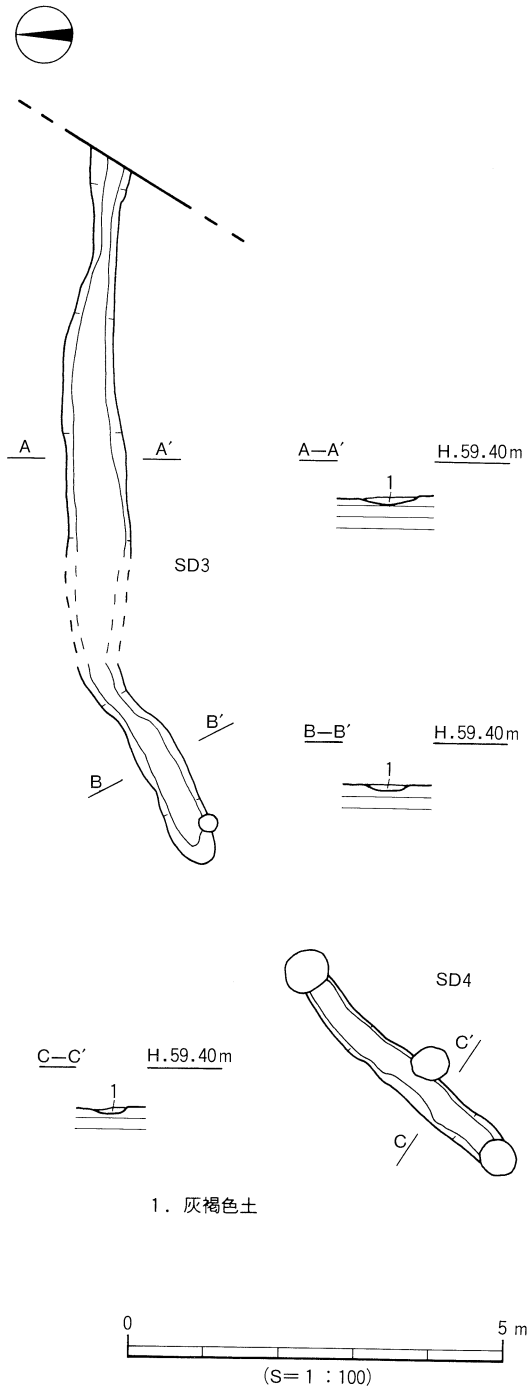
93は坏蓋で、口縁端部は内側に段をもつ。94～96は坏身である。94は立ち上がりが上方向に延び、95・96は受部に沈線状の凹みをもつ。

時期：出土遺物から、６世紀末～７世紀初頭に比定する。

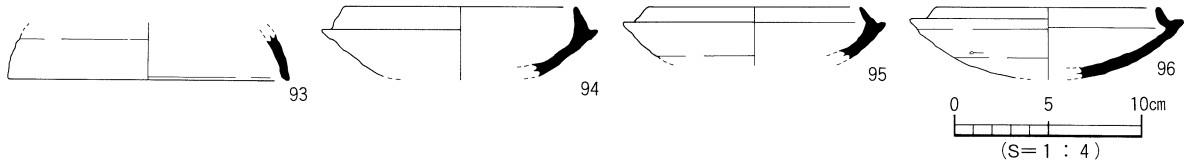
SD ４（第85図）

調査区西側のＥ～Ｆ・10～11区に位置し、掘立３に切られる。北東―南西方向を指向する。規模は上場幅40～54cm、深さ１～８cm、検出長3.2m、溝床は東から西に３cm下がる。断面形態はレンズ状である。埋土は灰褐色土である。遺物は須恵器・土師器の小片が出土している。

時期：SD ４はSD ３と同じ埋土で、SD ３に続くものと考えられる。よって、６世紀末～７世紀初頭とする。



第85図　SD ３・４測量図



第86図　SD ３出土遺物実測図

SD ５（第77図）

調査区西端のＦ･11～12区に位置し、SB ３に切られ、北端は調査区外に延びる。方位は南北を指向し、規模は検出長3.9m、上場幅0.5m、深さ16cmを測る。断面形態は逆台形状を呈する。溝床は南から北に３cm下がる。埋土は黒褐色土である。遺物は土師器の小片が僅かに出土したにとどまる。

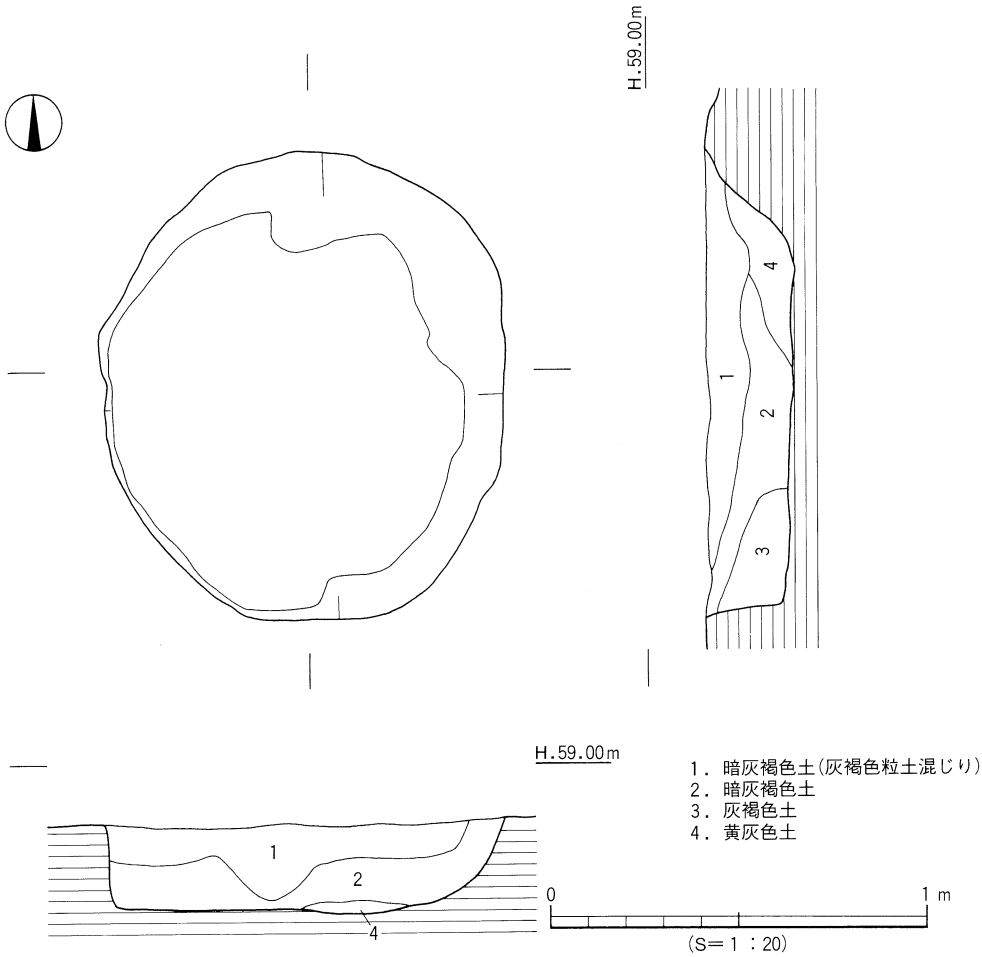
時期：遺構の切り合いから、７世紀中葉以前とする。

４）土坑

SK ２（第87図）

調査区北西部のＧ･12区に位置し、SB ３を切る。平面形態は円形、断面形態は逆台形状を呈し、基底面は平坦になる。規模は東西1.08m、南北1.25m、深さ28cmを測る。埋土は暗灰褐色土である。遺物は須恵器と土師器片が出土する。

時期：遺構の切り合いから、７世紀中葉以降とする。



第87図　SK ２測量図

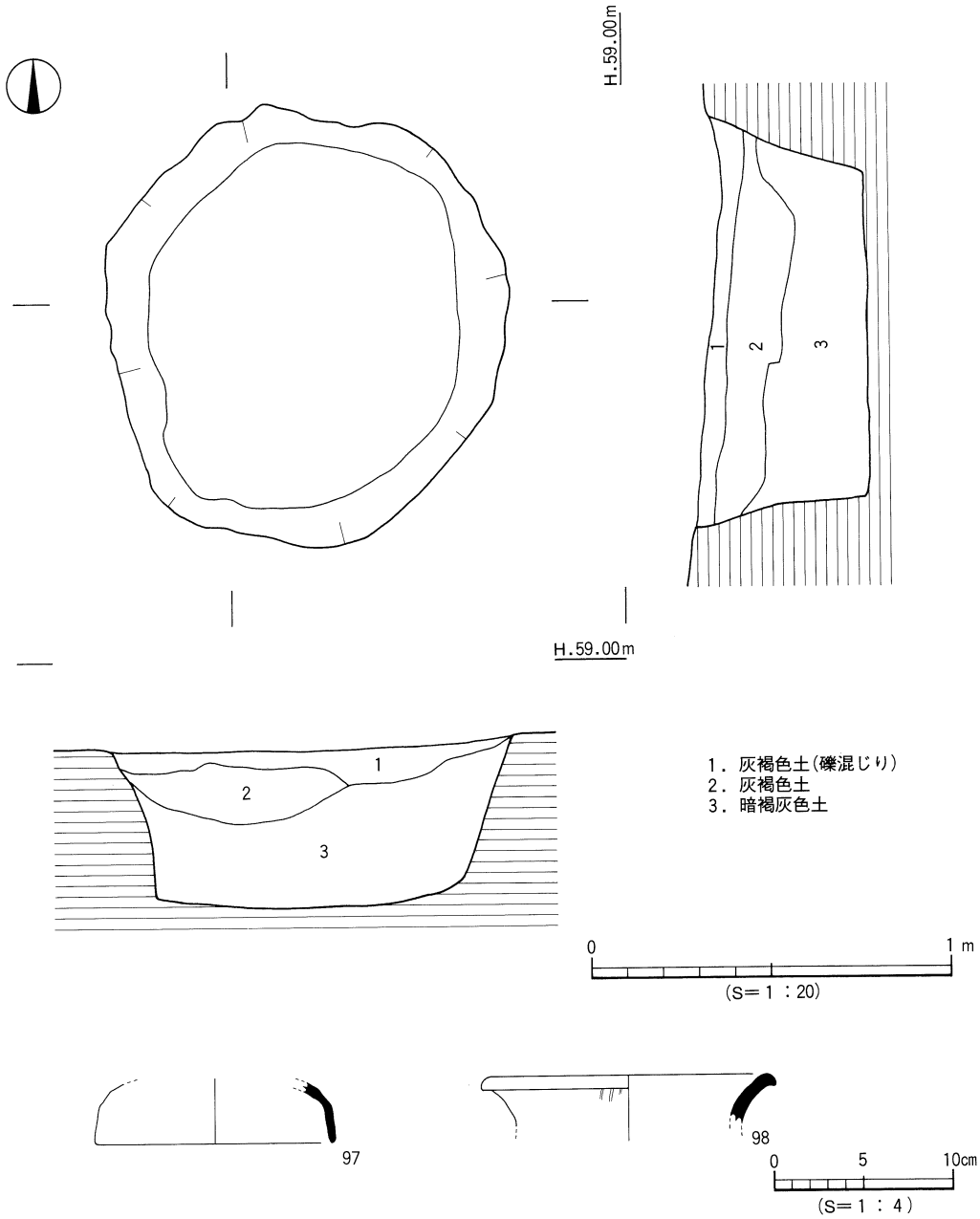
SK ３（第88図）

調査区北東部のＨ・12～13区に位置し、SB ２に切られている。平面形態は円形、断面形態はＵ字状を呈し、基底面は平坦である。規模は東西1.18m、南北1.12m、深さ53cmを測る。埋土は上層が灰褐色土（上部には礫が混じる）、下層が暗灰褐色土である。遺物は須恵器と土師器片が出土する。

出土遺物（第88図）

97は坏蓋で、天井部と口縁部との境界には稜がない。98は甕の口縁部で、端部が外下方にのびる。

時期：遺構の切り合いと出土遺物から、６世紀末～７世紀初頭以前とする。



第88図　SK ３測量図・出土遺物実測図

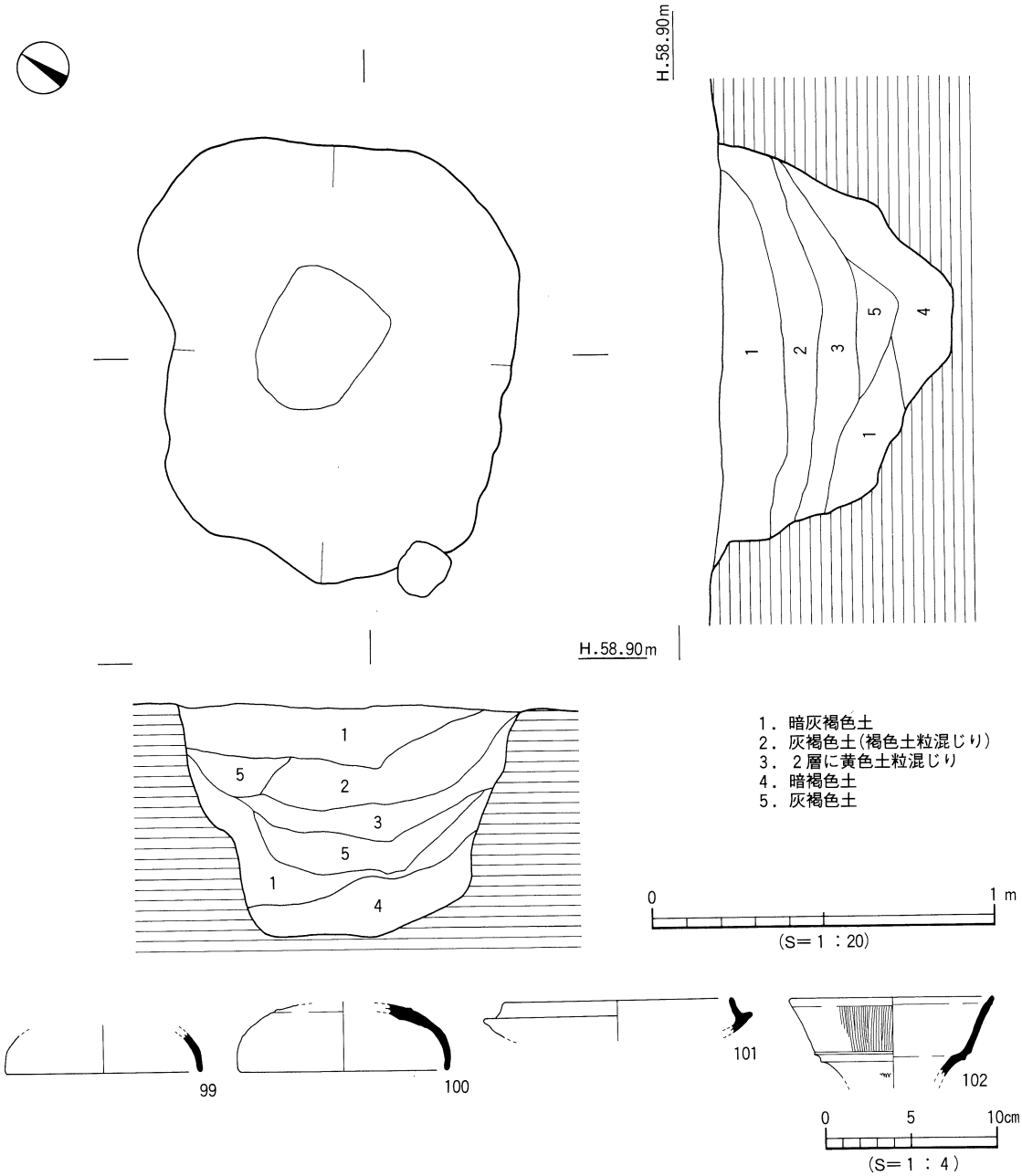
SK ４（第89図）

調査区北側のＧ～Ｈ･12区に位置し、SB ２に切られている。平面形態は不整楕円形、断面形態はＵ字状を呈する。規模は東西1.57m、南北1.15m、深さ94cmを測る。埋土は上層が暗灰褐色土、中層が灰褐色土（上部には褐色土、下部には黄色土が混じる）、下層は灰褐色土と暗褐色土で、中層と下層の間には暗灰褐色土がある。遺物は須恵器と土師器片が出土する。

出土遺物（第89図）

99・100は坏蓋、101は坏身、102は甕の口縁部である。

時期：遺構の切り合いと出土遺物から、６世紀末～７世紀初頭以前とする。



第89図　SK ４測量図・出土遺物実測図

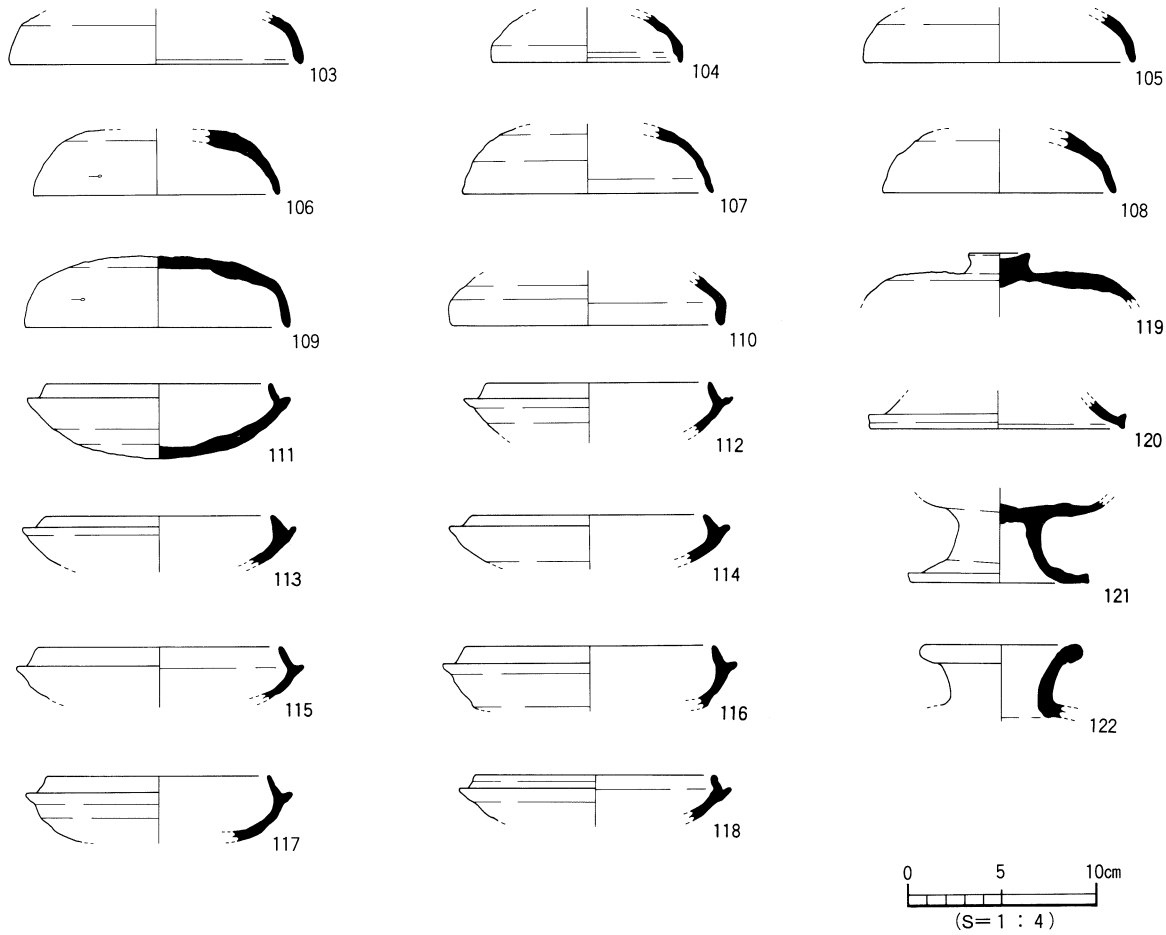
SK ５（第77図）

調査区北西部、Ｆ～Ｇ・12～13区に位置し、SB ３に切られ、東側の壁体は柱穴に切られている。平面形態は楕円形、断面形態は舟底状を呈する。規模は長軸1.2m、短軸0.8m、深さ23cmを測る。埋土は上層が明黄褐色土～暗褐色土、下層が灰黄褐色砂質土である。出土遺物は土師器の小片が僅かに出土するが、図化には至らなかった。

時期：遺構の切り合いから、７世紀中葉以前とする。

５）第Ⅶ層出土遺物（第90図）

須恵器：103～110は坏蓋である。103・104は口縁端部内側に段をもち、105～108は内湾しながら下がる口縁部をもつ。109・110は天井部と口縁部に境界をもち、口縁部は下方にのびる。111～118は坏身である。111～114は受部端に沈線状の凹みをもち、115・116は立ち上がりが内傾し、受部は外方向にのびる。119は高坏の蓋である。つまみの中央部が凹む。120・121は高坏である。ラッパ状に広がる脚裾部に、端部は平らな面をもち、120は端部が上下に肥厚される。122は提瓶の口縁部で、外反する口縁部は端部が丸くおさまる。



第90図　第Ⅶ層出土遺物実測図

５．１Ｃ区の遺構と遺物（第91図）

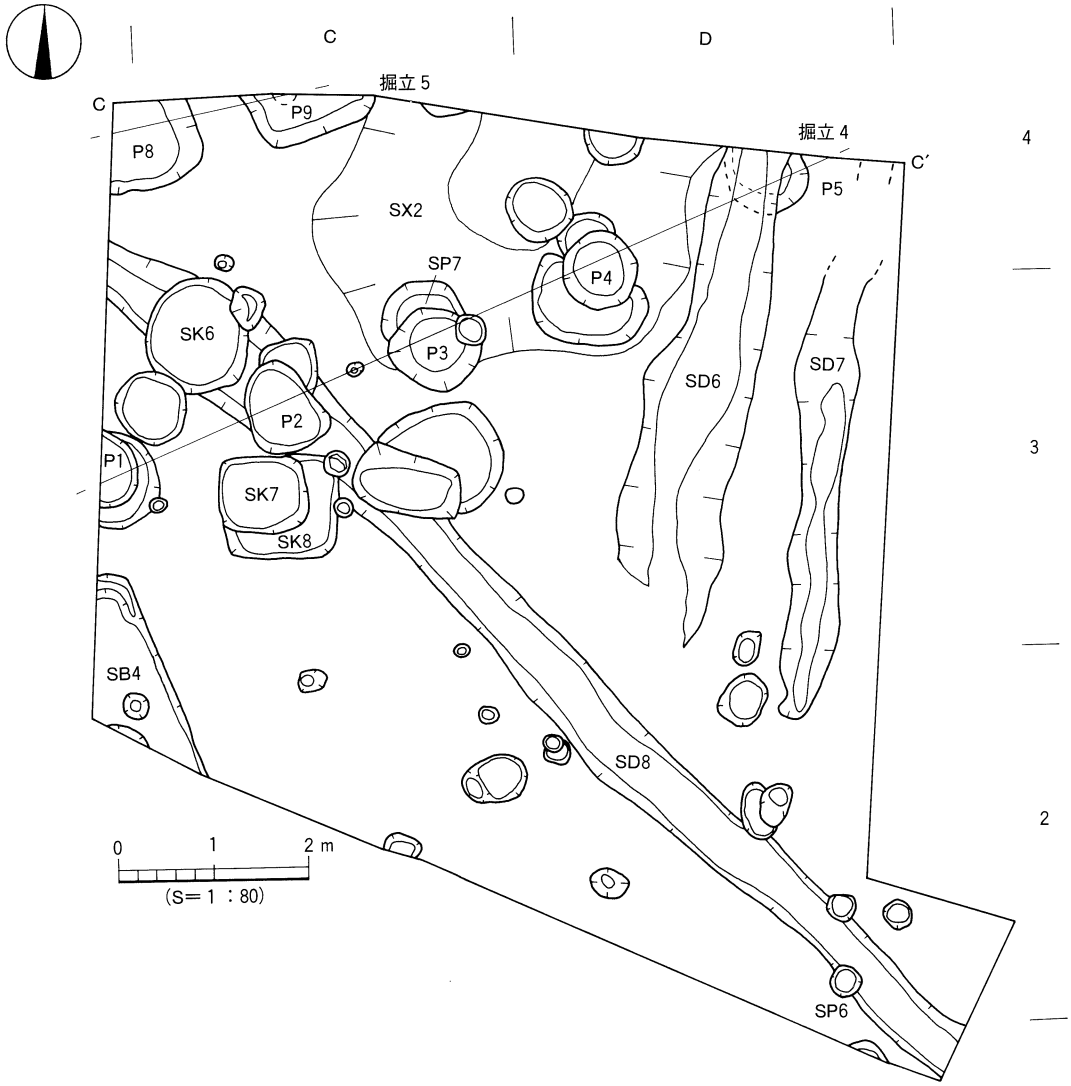
１Ｃ区で検出した遺構は、竪穴式住居址１棟、掘立柱建物址２棟、溝３条、土坑３基、柱穴30基、性格不明遺構１基である。

(1) 弥生時代

１）性格不明遺構

SX ２（第92図）

調査区の北側、Ｃ～Ｄ・３～４区にあり、遺構の北側は調査区外となっている。検出規模は東西4.00m、南北2.60m、深さ0.12～0.24mを測る。平面形態は不整形で、断面形態はレンズ状を呈する。埋土は上層が茶褐色土、下層が黒色粘質土になる。遺物は、黒色粘質土から弥生土器が出土した。

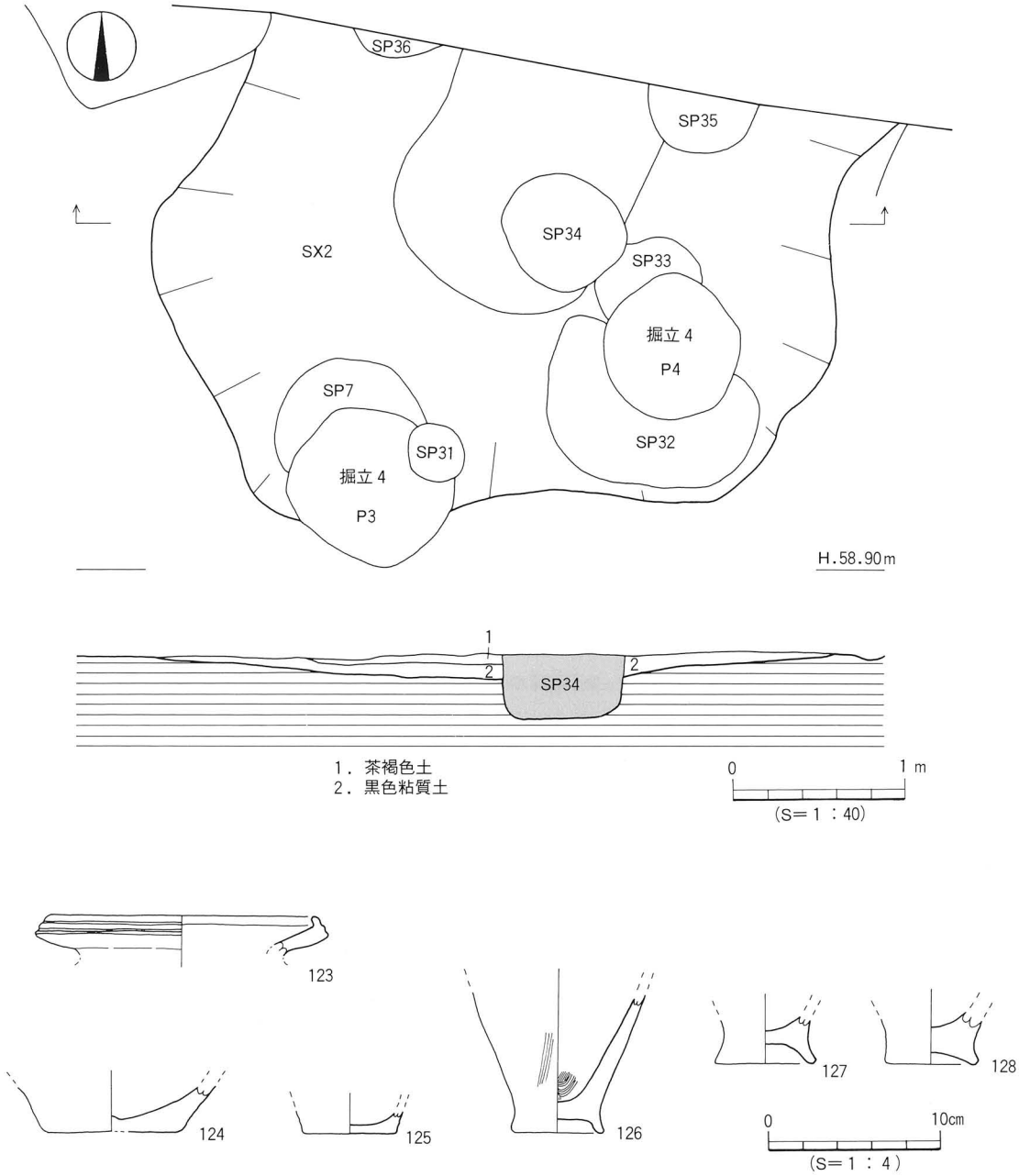


第91図　１Ｃ区遺構配置図

出土遺物（第92図）

123～128は弥生土器の甕である。123は口縁部片で、口縁部外面には２条の凹線文を施す。124～128は底部片で、124・125は平底の底部、126～128は上げ底の底部となる。

時期：出土遺物から、弥生時代中期末葉に比定する。



第92図　SX ２測量図・出土遺物実測図

(2) 古墳時代

１）竪穴式住居址

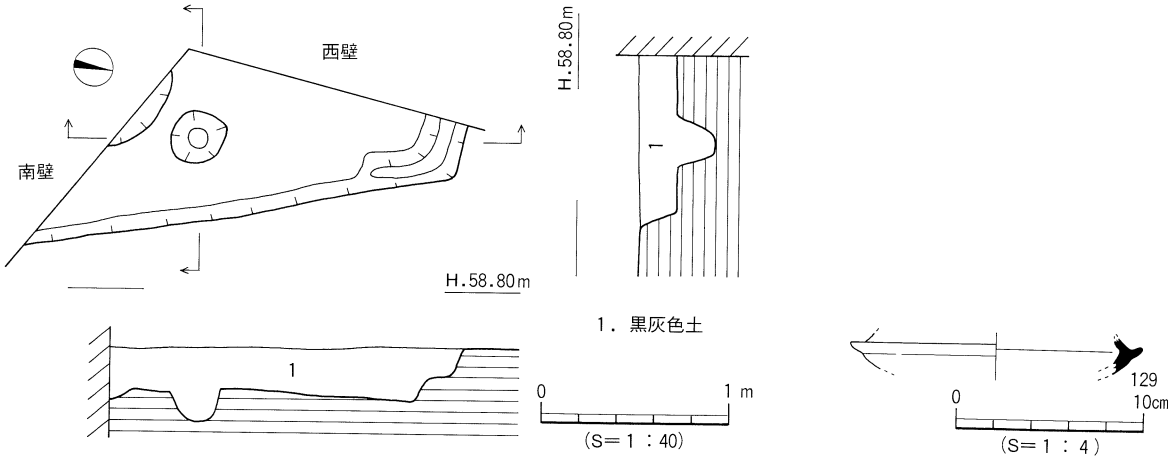
SB ４（第93図）

調査区の南西隅、Ｂ～Ｃ・２～３区で検出した。住居址の北東部分を検出したに限られ、全体の4/5は調査区外となる。平面形態は四角形で、検出規模は南北1.80m、東西1.00m、深さ0.20mを測る。埋土は黒灰色土である。北東隅の壁体の掘り方は、２段掘りになっている。

出土遺物（第93図）

129は坏身で、受部は短く上方にのびている。

時期：出土遺物から、７世紀初頭～７世紀前半に比定する。



第93図　SB ４測量図・出土遺物実測図

２）掘立柱建物址

掘立４（第94図）

調査区の中央やや北、Ｂ～Ｄ・３～４区に位置する。東西４間の柱列（Ｐ１～Ｐ５）を検出するにとどまる。柱穴の平面形態は、円形ないし楕円形を呈する。柱穴規模は、直径60cm～72cm、深さ42cm～48cmを測る。柱穴の埋土は、Ｐ１～Ｐ４は黒褐色粘質土の１層で、Ｐ５は上部が黒褐色粘質土で、下部が黄色砂礫となる。柱痕跡は未検出である。遺物は、Ｐ１・２より出土した。

出土遺物（第94図）

130の坏身は、Ｐ１出土品である。たちあがりは内傾し、端部は尖り気味になる。受部は、水平にのびる。131はＰ２出土の手ずくね土器で、口縁端部と底部は欠失している。残高は5.9cmを測る。

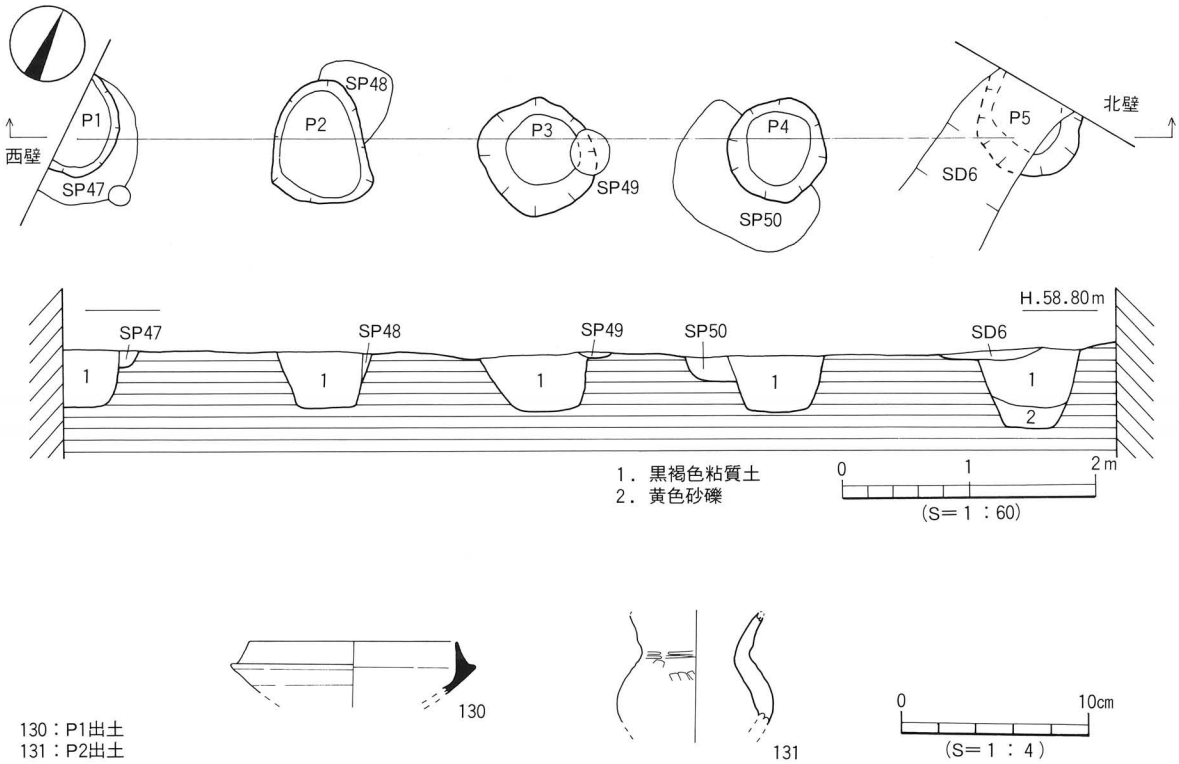
時期：出土遺物から、７世紀前半に比定する。

掘立５（第95図）

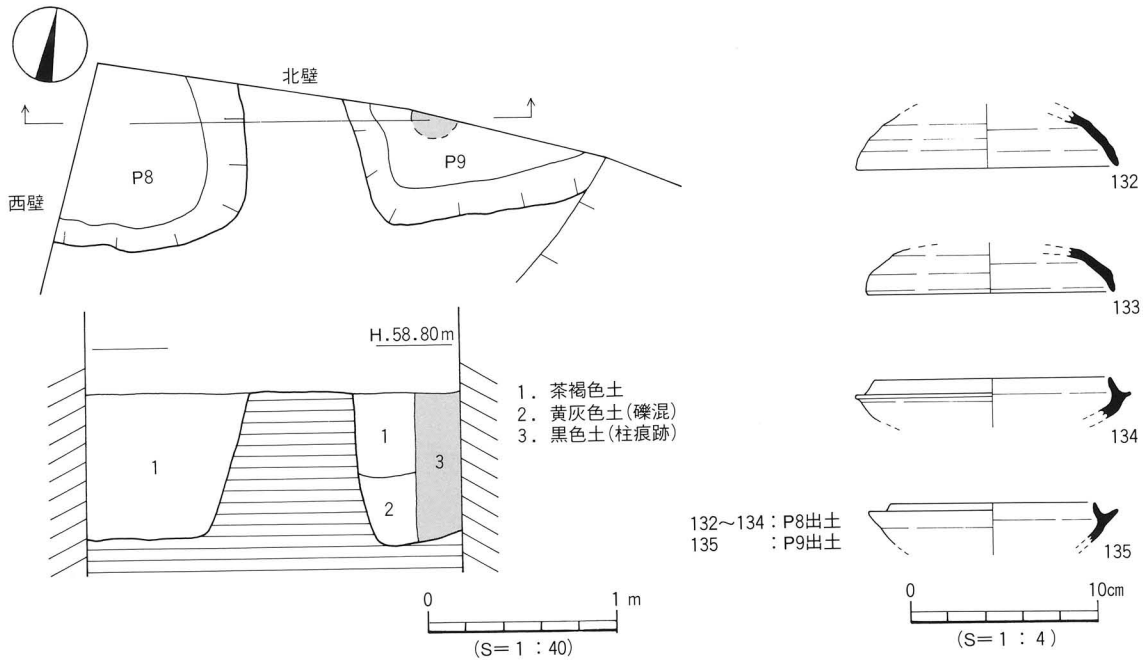
調査区の北西隅、Ｂ～Ｃ・４区に位置する。検出状況は、東西１間の柱列（Ｐ８・９）を検出したにとどまる。柱穴Ｐ８・９は、１／２以上が調査区外となっている。柱穴の平面形態は、隅丸方形と思われ、深さは80cmを測る。Ｐ９では柱痕を検出し、規模は直径20cm、深さ80cmを測る。

出土遺物（第95図）

132～134はＰ８出土品である。132・133は坏蓋で、天井部と口縁部との境が不明瞭なもので、口縁端部は丸くおさめている。132は器高が高く、133は器高が低い。134は坏身で、たちあがりは内傾し、



第94図　掘立４測量図・出土遺物実測図



第95図　掘立５測量図・出土遺物実測図

上方に短くのびる。端部は丸くおさめ、受部は水平にのびる。135は、たちあがりは内傾し短い。端部は丸くおさめ、受部は上方にのびる。

時期：出土遺物から、７世紀前半に比定する。

３）溝

SD ８（第96図、図版33）

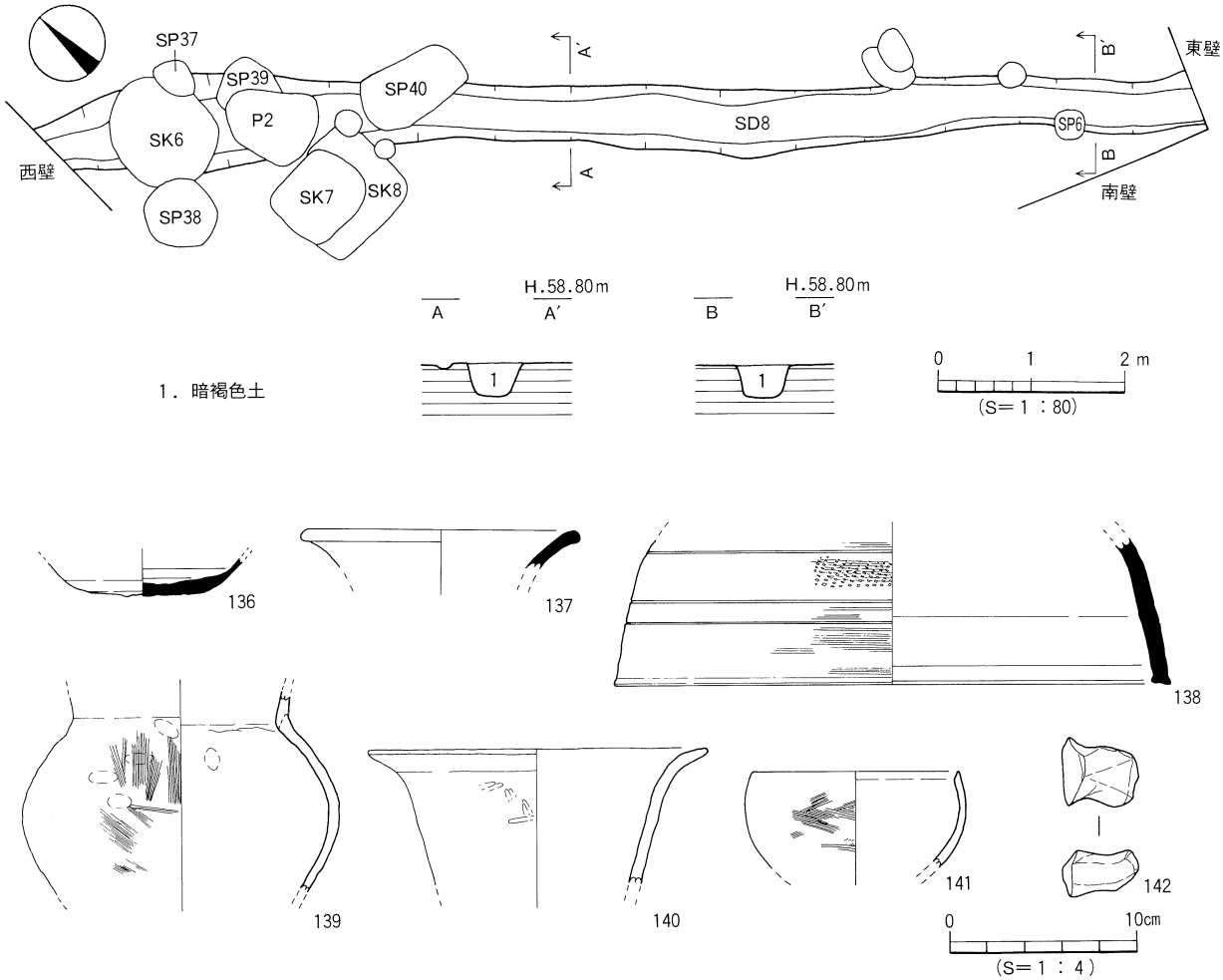
調査区の北西（B・４区）から南東（E・１区）にのびる。SD ８は、掘立４・SK ６に切られている。検出規模は12.30m、幅0.48m～0.72m、深さ0.28m～0.32mを測る。埋土は暗褐色土である。

出土遺物（第96図）

須恵器：136の坏身は、口縁部が欠失している。底部は平坦になる。137は甕の口縁部片で、端部は丸くおさめる。138は器台の脚部片である。３条の凹線が施された文様帯間には、櫛状工具による刺突文をもつ。脚部端面はくぼむ。

土師器：139は壺で、口縁部と底部を欠失している。調整は、体部外面がハケメ調整、内面はナデである。140は壺の口縁部片である。口縁端部はゆるやかに開き、端部は丸くおさめる。141は椀で、底部を欠失している。口縁部は内湾し、口縁端部は内側に傾斜面をもつ。142は甑の把手である。断面形態はやや偏平で、先端部は上方を向く。

時期：出土遺物や掘立１・SK ６・８との切り合い関係から、６世紀後半までに埋没したものとする。



第96図　SD ８測量図・出土遺物実測図

４）土坑

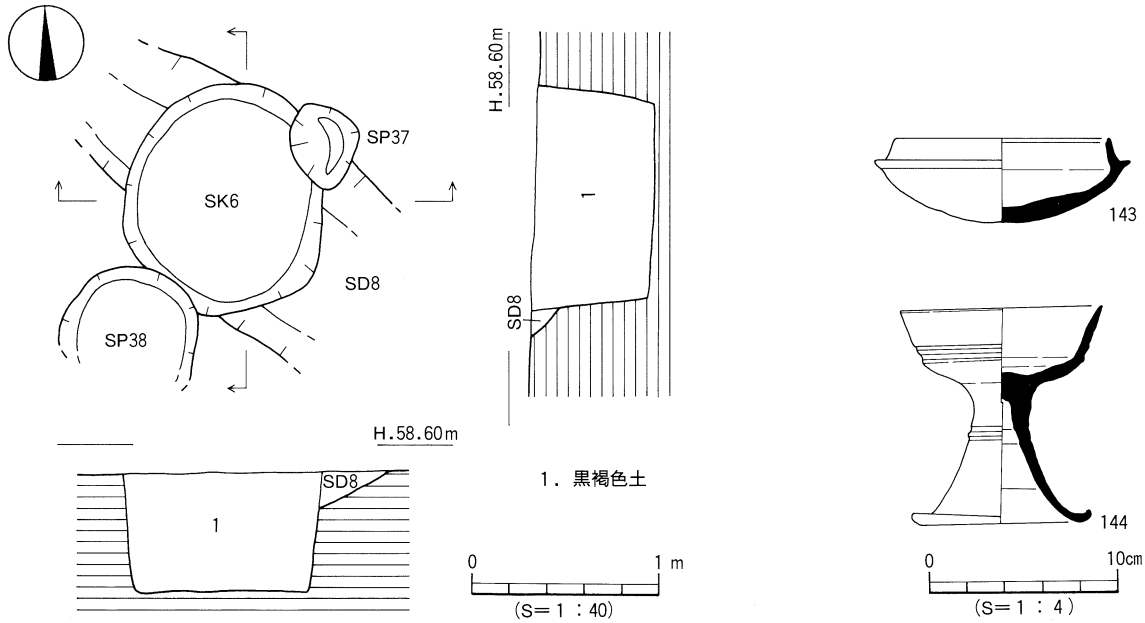
SK ６（第97図）

調査区西側、Ｃ・３区にあり、SD ８を切る。平面形態は円形を呈する。規模は直径1.22m、深さ64cmを測る。埋土は黒褐色土である。

出土遺物（第97図、図版44）

143は坏身で、推定口径11.4cmを測る。たちあがりは内傾し、上方にのび、端部は段をなす。受部は上方にのび、底部は丸い。144は高坏で、口径10.7cm、器高11.7cmを測る。坏部は、底部と口縁部との境に２条の凹線を施す。脚部は、上方に２条の凹線が施される。脚部は外方に開き、内側で接地する。

時期：坏身143は６世紀前半に、高坏144は７世紀中葉に比定される。したがって、遺構の時期を７世紀中葉に比定する。



第97図　SK ６測量図・出土遺物実測図

SK ７（第98図）

調査区西側の中央部、Ｃ・３区で検出した。平面形態は隅丸方形を呈する。規模は長軸92cm、短軸80cm、深さ８cm～16cmを測る。基底面は、東側が深い。埋土は黒褐色土である。

出土遺物（第98図）

145は坏身で、底部を欠失している。たちあがりは内傾し、上方に短くのびる。たちあがり端部は尖り気味。受部は水平にのびる。

時期：出土遺物から、７世紀前半に比定する。

SK ８（第98図）

調査区西側の中央部、Ｃ・３区で検出した。SK ７に切られる。平面形態は方形を呈する。規模は長軸1.2m、深さ６cmを測る。埋土は茶褐色土である。出土遺物はない。

時期：出土遺物がなく、切り合いから７世紀前半以前と考える。

５）柱穴

SP ６（第99図）

調査区南東部、D・２区にあり、SD ８を切って検出した。平面形態は円形を呈する。規模は直径32cm、深さ20cmを測る。埋土は黒褐色土である。

出土遺物（第99図）

146は坏蓋で、天井部を欠失している。口縁端部は外方に開く。

時期：出土遺物から、７世紀前半に比定する。

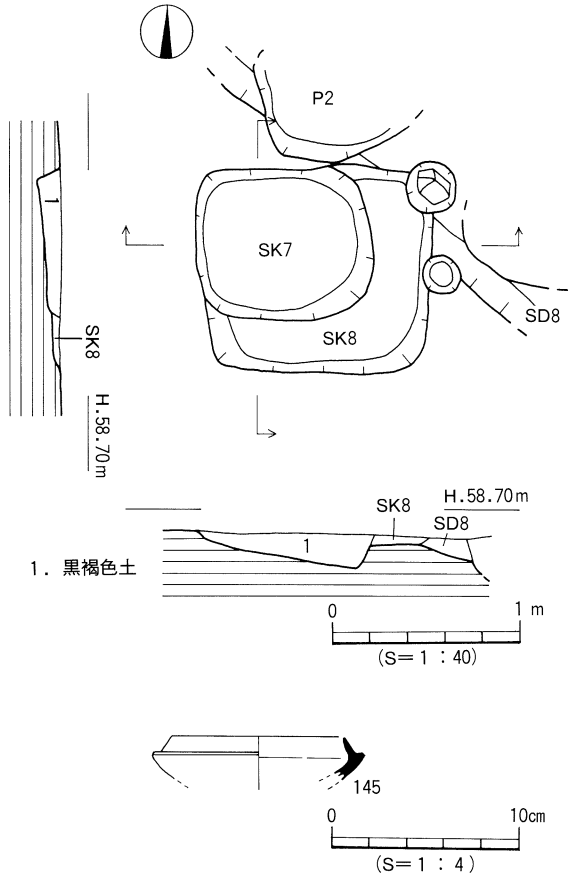
SP ７（第99図）

調査区の北側中央部、C・３区で検出した。SX ２を切り、掘立４の柱穴P ３に切られる。検出規模は長軸43cm、深さ20cmを測る。埋土は黒褐色土である。

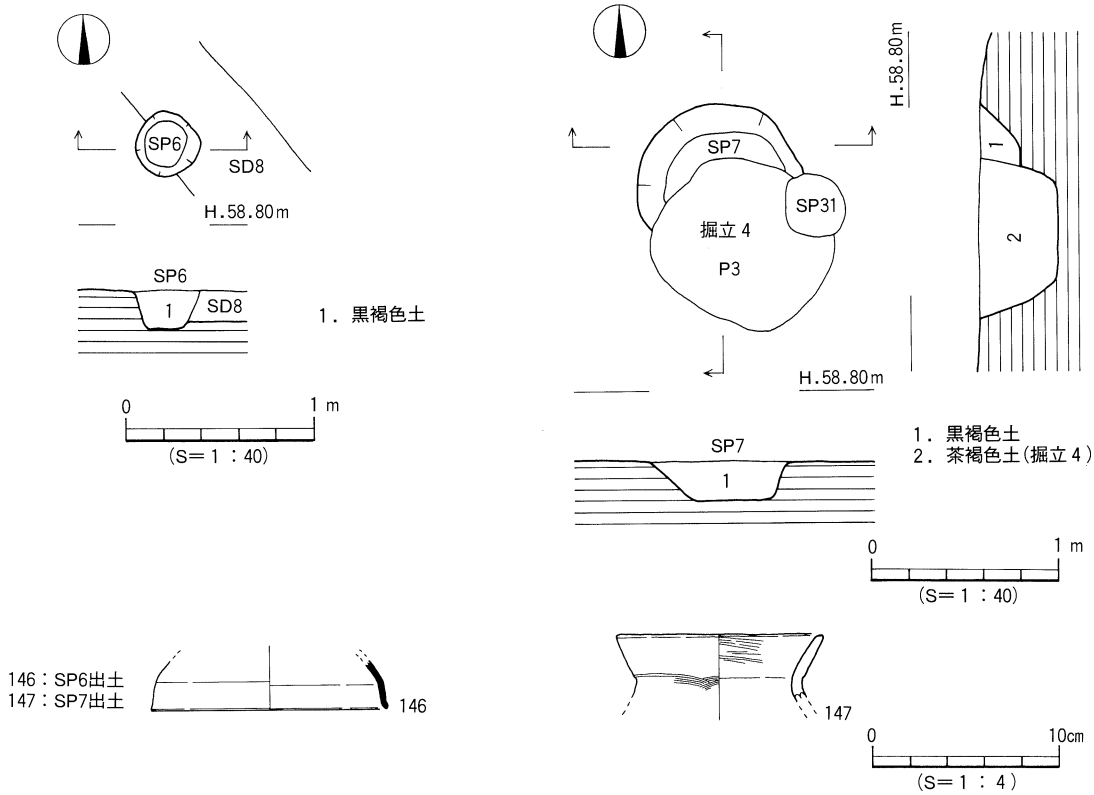
出土遺物（第99図）

147は甕の口縁部片である。口縁部は「く」の字状に開き、端部は丸くおさめている。

時期：出土遺物と切り合い関係から、６世紀後半～７世紀初頭に比定する。



第98図　SK ７測量図・出土遺物実測図



第99図　SP ６・７測量図・出土遺物実測図

(3) 中世以降

１）溝

SD 6 （第100図）

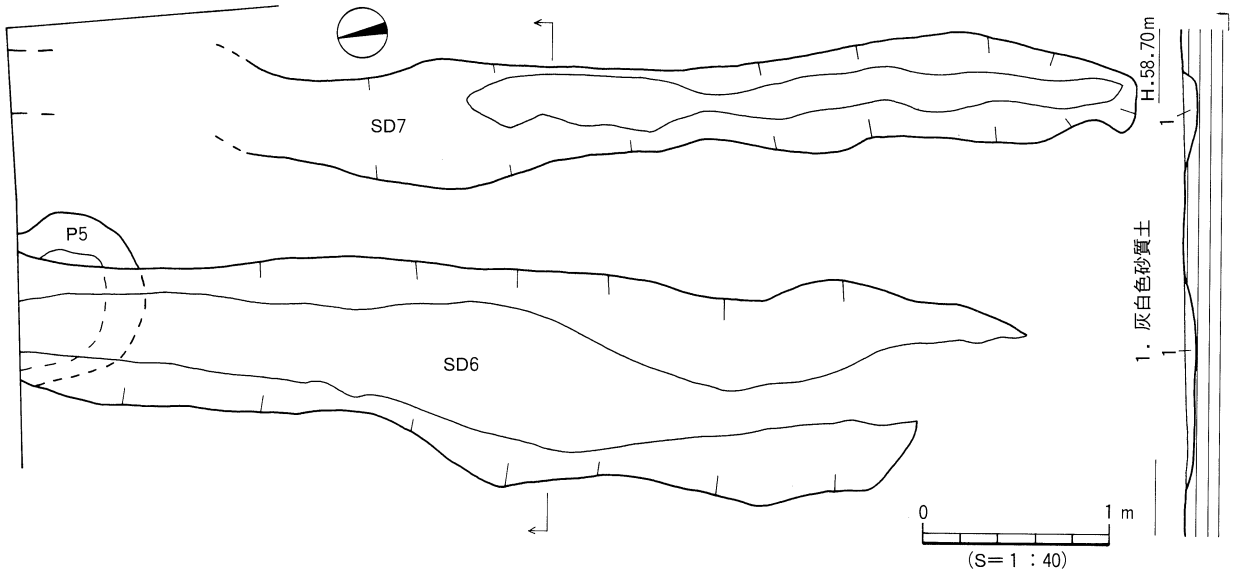
調査区の東側、Ｄ・３～４区で検出した。北から南へのびる溝で、調査区内で途切れる。規模は長さ4.80m、幅0.80m～1.50m、深さ0.60mを測る。埋土は灰白色砂質土である。出土遺物は陶磁器片、土師器片が出土したが、図示しえるものはない。

時期：明確に時期を特定する遺物がないものの、陶磁器を出土することから中世以降とする。

SD 7 （第100図）

調査区の東側、Ｄ・２～４区で検出した。SD 6の東側に平行する。SD 7はSD 6と同様に、調査区内で途切れる。規模は長さ6.10m、幅0.40m～0.68m、深さ0.08mを測る。埋土は灰白色砂質土である。出土遺物は陶磁器片、土師器片が出土するが図示しえるものはない。

時期：明確に時期を特定する遺物がないものの、陶磁器を出土することから中世以降とする。

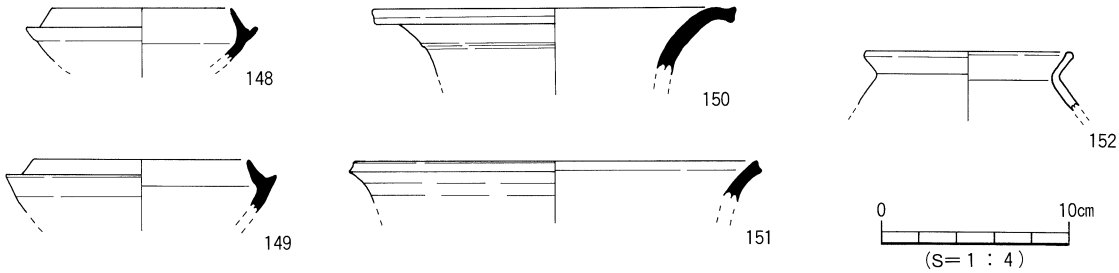


第100図　SD 6・7測量図

(4) 第Ⅶ層出土遺物（第101図）

須恵器：148･149は坏身で、底部が欠失する。148は、たちあがりが内傾してのび、端部は丸くおさめる。受部は上方にのびる。149は、たちあがりが内傾し短くのび、端部は丸くおさめる。受部は上方にのびる。150･151は、甕の口縁部片である。150の口縁部は、端部近くで水平に外へ開く。口縁端部は上方にやや肥厚する。151の口縁端部はくぼむ。

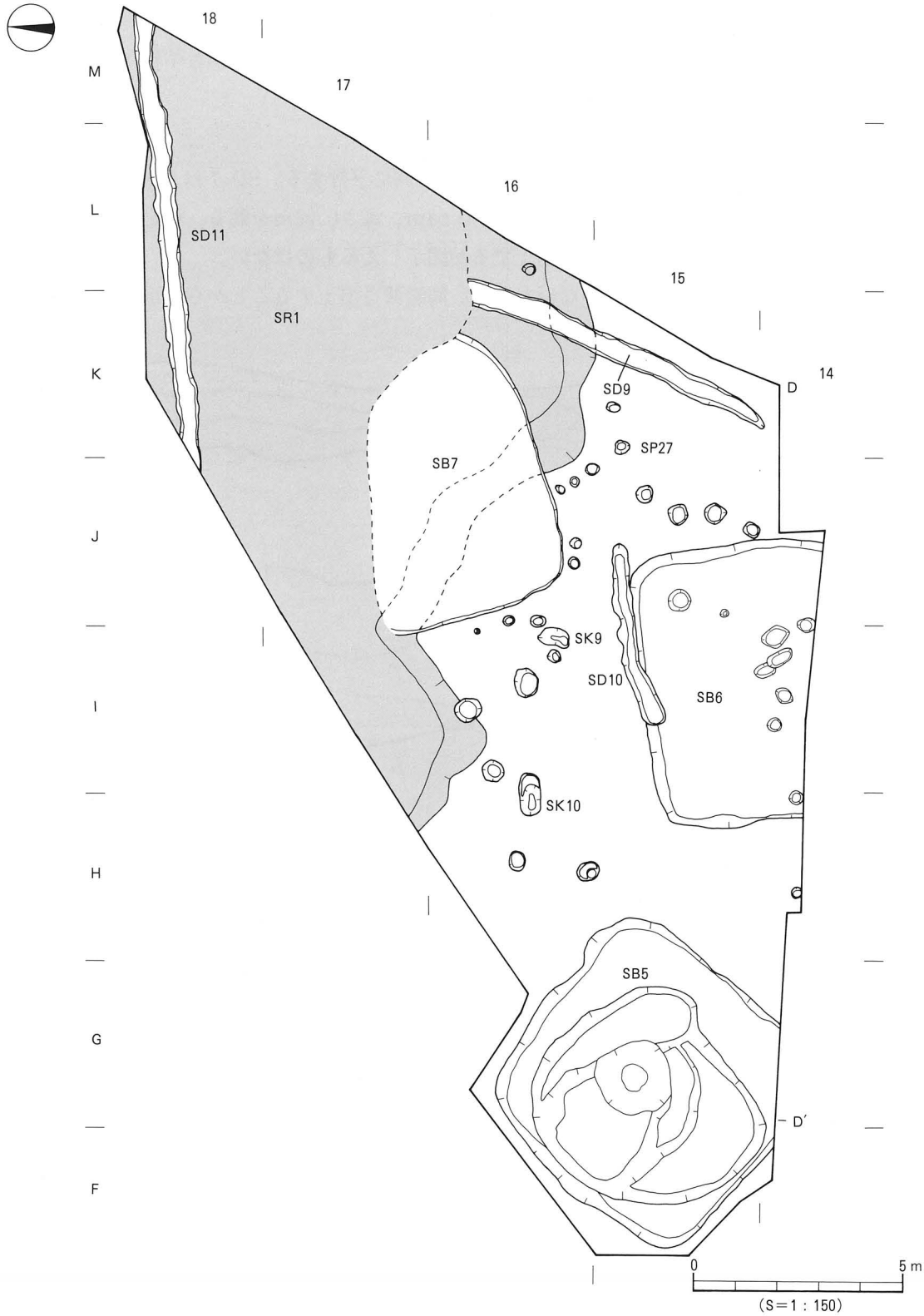
土師器：152は、甕の口縁部片である。口縁端部は内に肥厚する。



第101図　第Ⅶ層出土遺物実測図

６．２区の遺構と遺物（第102図）

第Ⅷ層上面では、竪穴式住居址３棟、土坑２基、溝２条、柱穴17基、自然流路１条、SR １上面では、溝１条を検出した。



第102図　２区遺構配置図

(1) 弥生時代

1) 自然流路

SR 1 (第103図、図版35)

調査区北側のH～M・16～18区に位置する。SB 7・SD 9を切り、SD 11に切られている。南岸の一部を検出し、河岸は抉られる様に削られており、砂礫層のみが堆積している。このことより蛇行河川の攻撃斜面の様相を示し、水流が速かったことが窺える。深さは1.3m、検出長13.5mを測る。基底面は下がる傾向を示す。出土遺物はない。

時期：堆積層や位置関係から、下苅屋遺跡2次調査地で検出した自然流路のつづきとみられ、弥生時代前期にはじまり、埋没は古代になる。

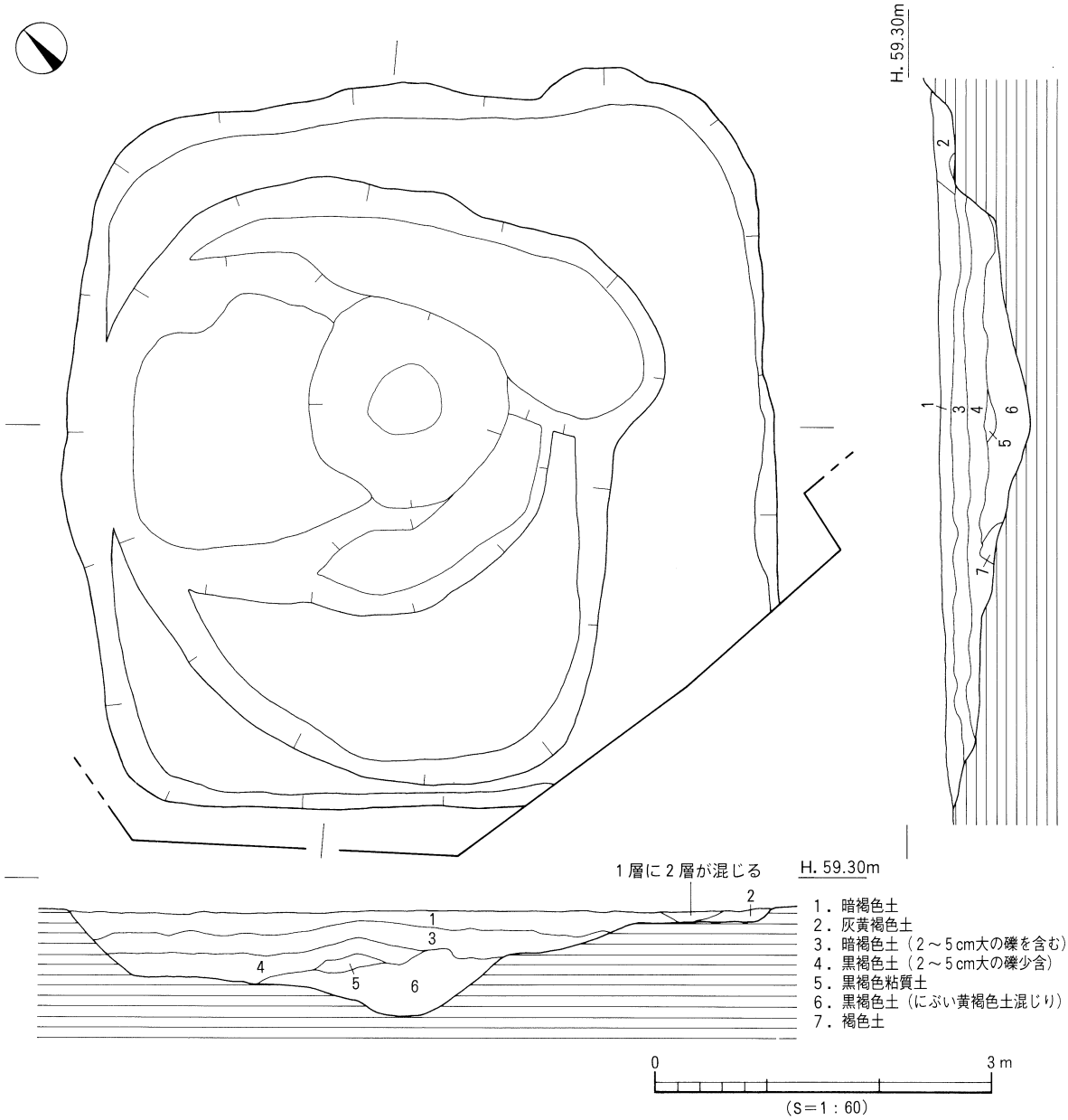
第103図　SR 1 測量図

(2) 古墳時代

１）竪穴式住居址

SB ５（第104図、図版35）

調査区西側のＦ～Ｈ・14～16区に位置する。平面形態は方形を呈し、規模は一辺6.3～6.4m、深さ30cmを測る。基底面に平面形態が不整形の掘り込みを検出したが、主柱穴等の施設は未検出であった。この掘り込みは、複数の遺構の切り合いか、単一遺構内での掘り方の差なのかは判断できなかった。規模は一辺が5.3m、深さ80cmを測り、埋土は上層が暗褐色土で、２～５cm大の礫が混じり、中層が黒褐色土（２～５cm大の礫を少含する）、下層が黒褐色土（鈍い黄褐色土が混じる）である。遺物は上層から下層にかけて須恵器と土師器が出土する。

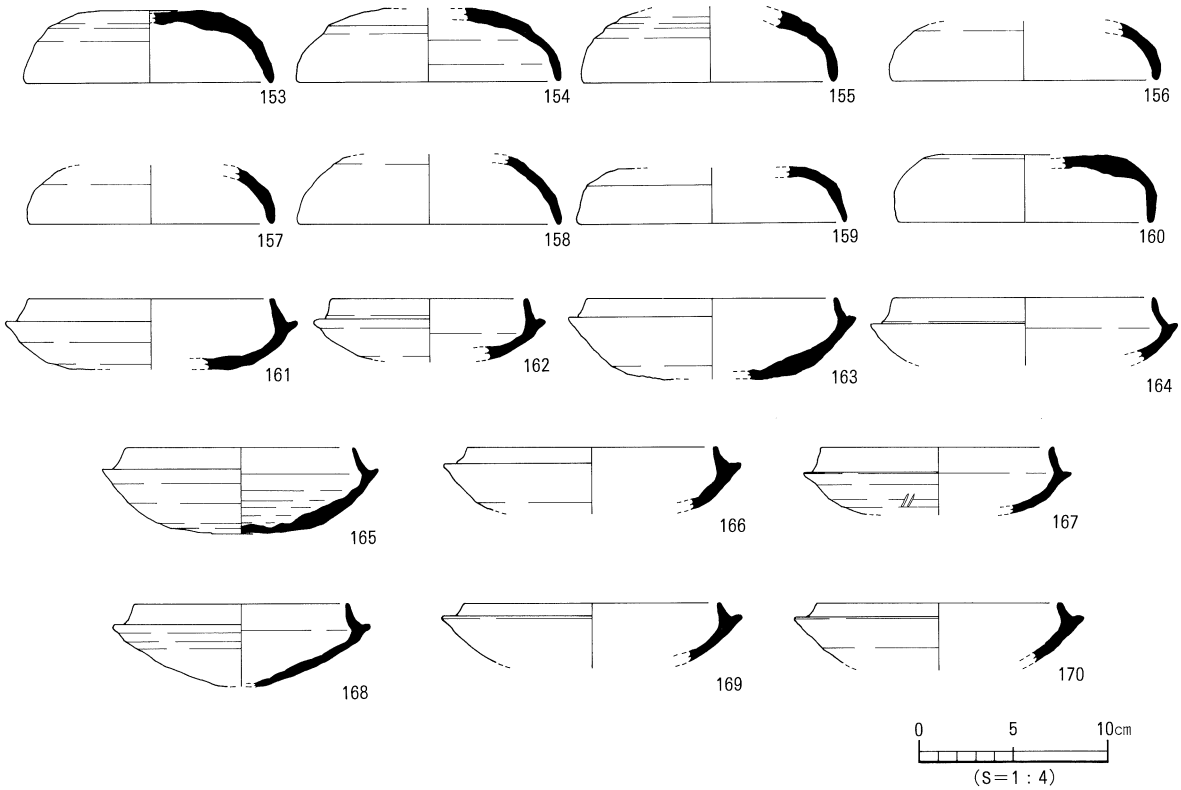


第104図　SB ５測量図

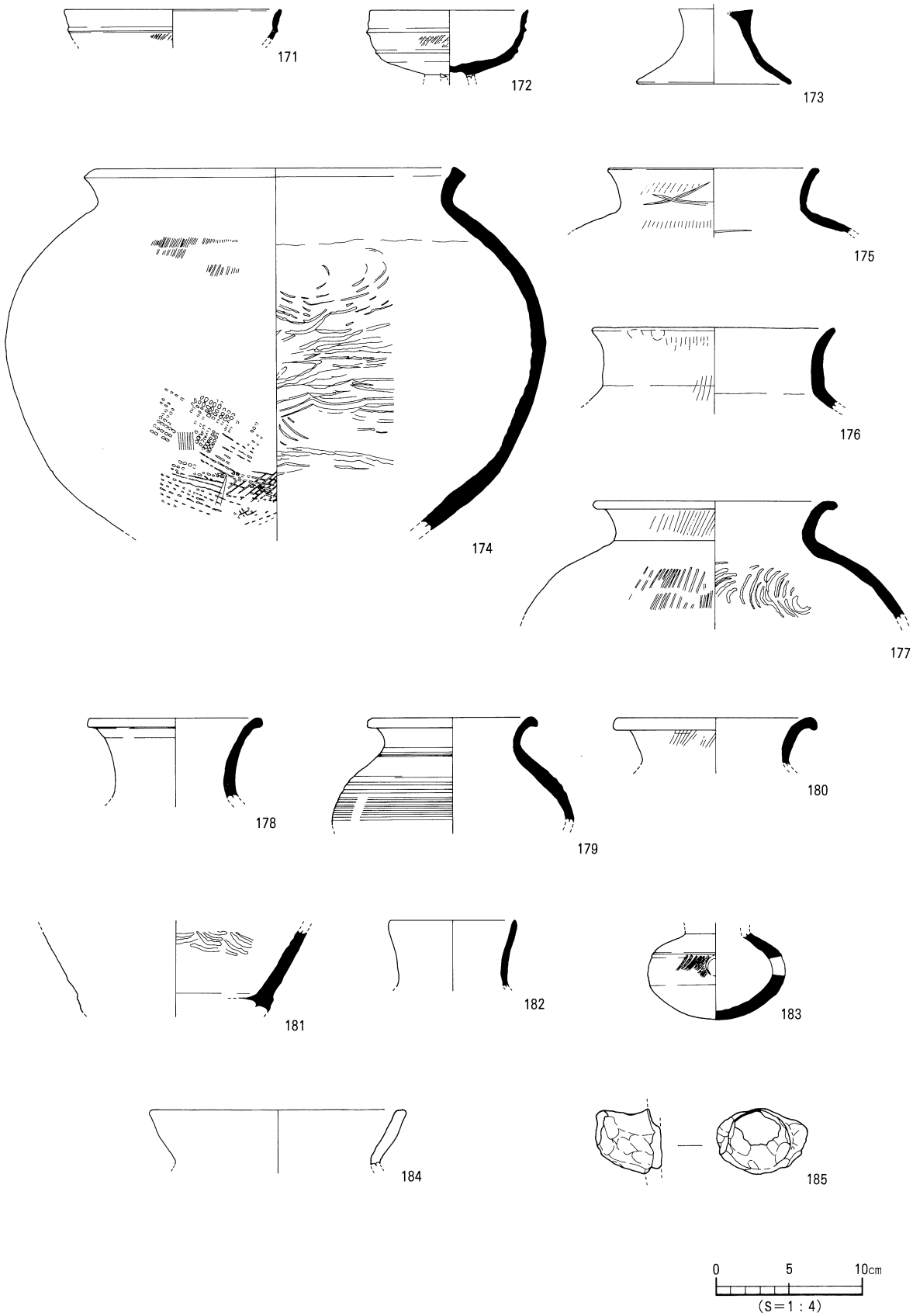
上層出土遺物（第105・106図、図版45）

須恵器：153～160は坏蓋である。153～158は内湾して下がる口縁部をもつ。160はやや凹む天井部より口縁部は下方にのびる。161～170は坏身である。161～168は受部に沈線状の凹みをもつ。171～173は高坏である。171は外傾する口縁部に稜がみられる。172は坏部に2条の稜があり、脚基部には透かしが看取される。173は外反する脚裾部で、端部は丸くおさまる。174～177は甕である。174は球状の胴部で、外面に斜格子のタタキ、内面に同心円文のあて具痕がみられる。175は外反する口縁部で、外面にはヘラ記号がみられる。176は直立する頸部で、口縁部は外反する。177は外傾する口縁部で、端部は外方向にのびる。178～181は壺である。178は頸部は緩やかに外反して立ち上がり、口縁端部は外方向にのびる。179は肩部の張りが弱く、口縁部は外反する。胴部外面にはカキ目調整が施される。180は外反する口縁部で、端部は外下方にのびる。181は底部で、外傾して立ち上がる胴部をもつ。182は平瓶の口縁部で、外反気味の口縁部は端部が尖る。183は瑳で、胴部中位には「ノ」字状の列点文が施される。

土師器：184は甕で、内湾気味の口縁部は端部が平らな面をなす。185は甑の把手である。



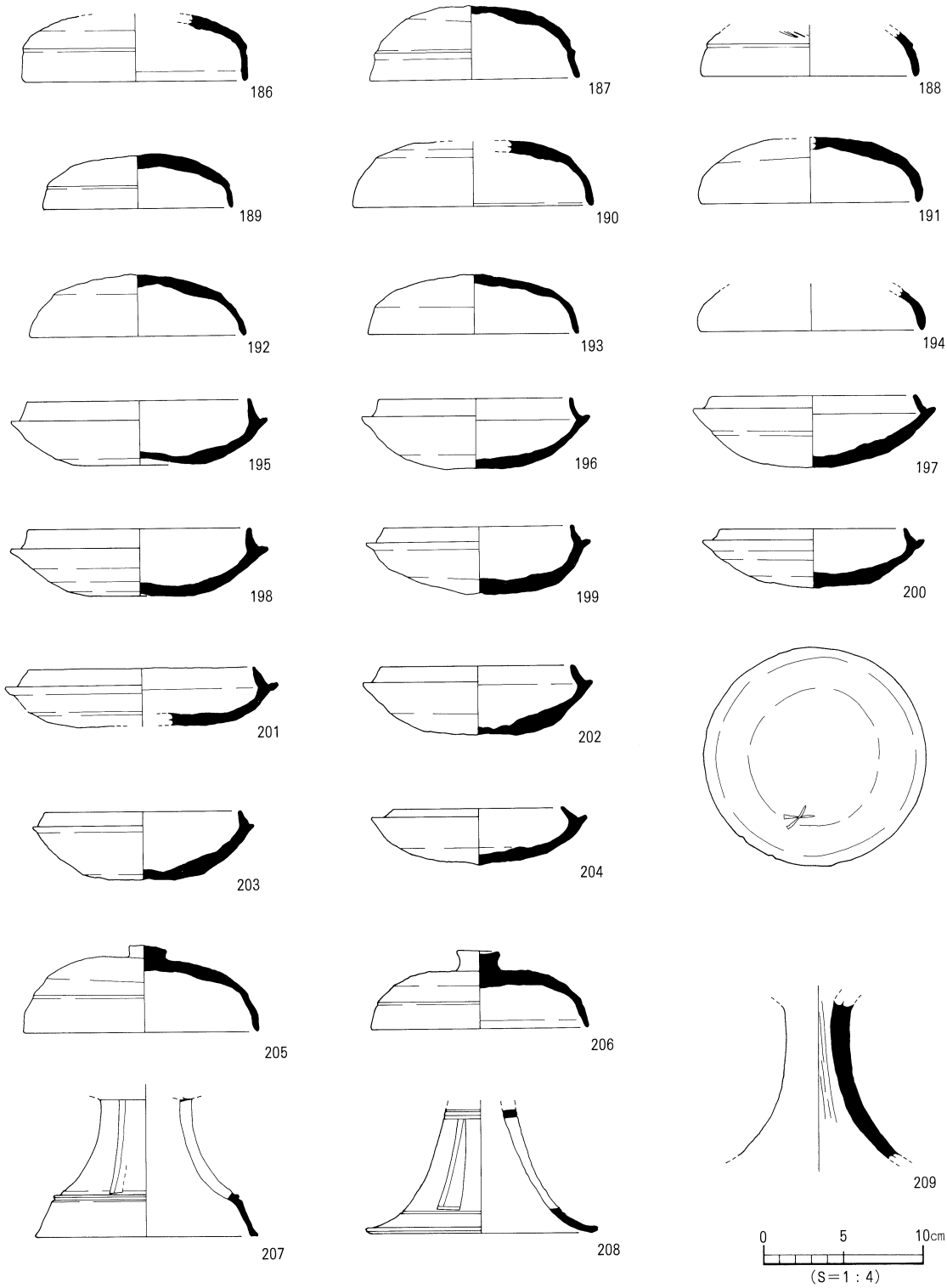
第105図　SB 5上層出土遺物実測図(1)



第106図　SB ５上層出土遺物実測図(2)

中層～下層出土遺物（第107～109図、図版45・46）

須恵器：186～194は坏蓋である。186～189は天井部と口縁部との境界に稜をもち、186と190は口縁端部内面に内傾する段をもつ。191～194は天井部から口縁部まで内湾して下がる。195～204は坏身で、195～201は受部端に沈線状の凹みをもち、200は外面に「メ」字状のヘラ記号がある。205～209は高坏

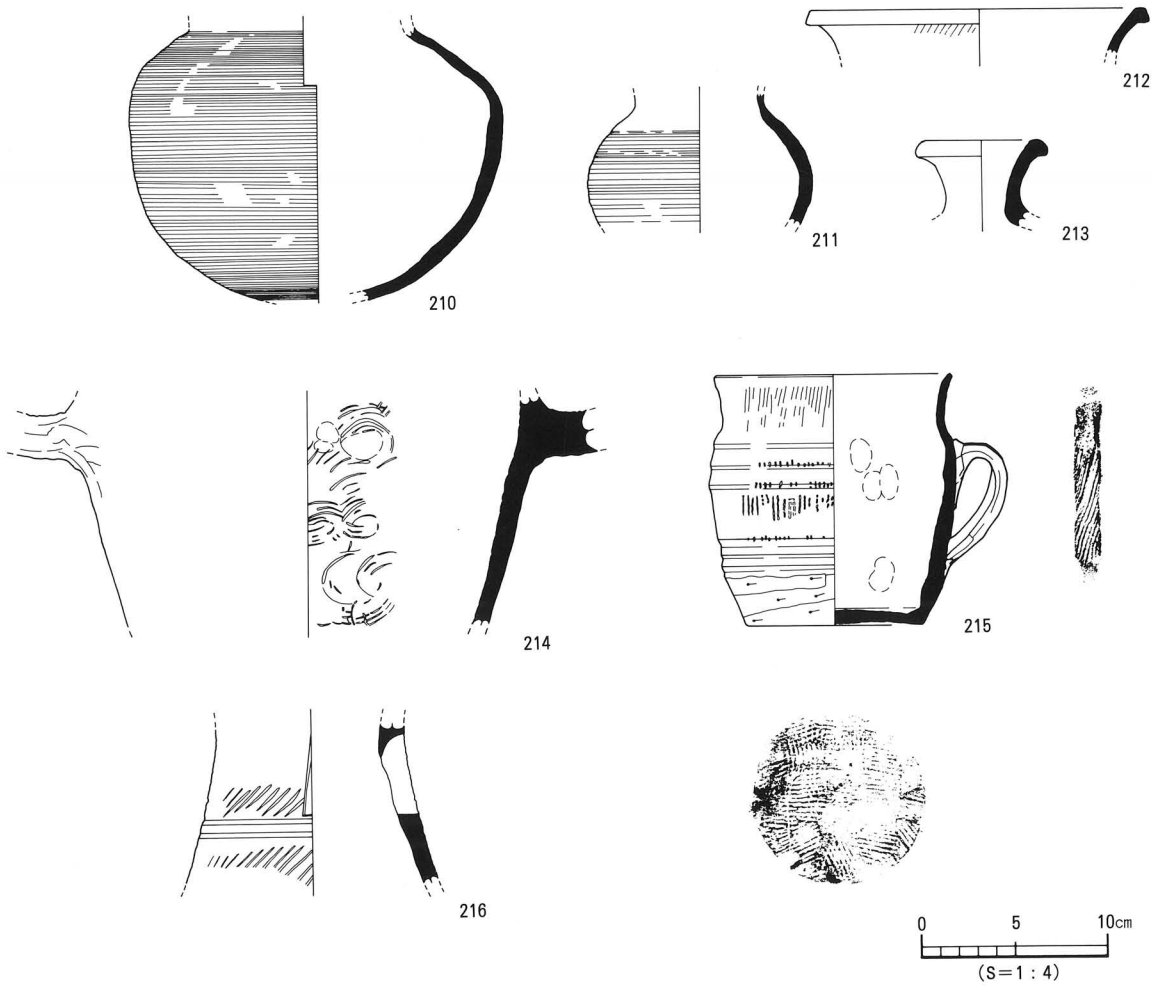


第107図　SB 5 中～下層出土遺物実測図(1)

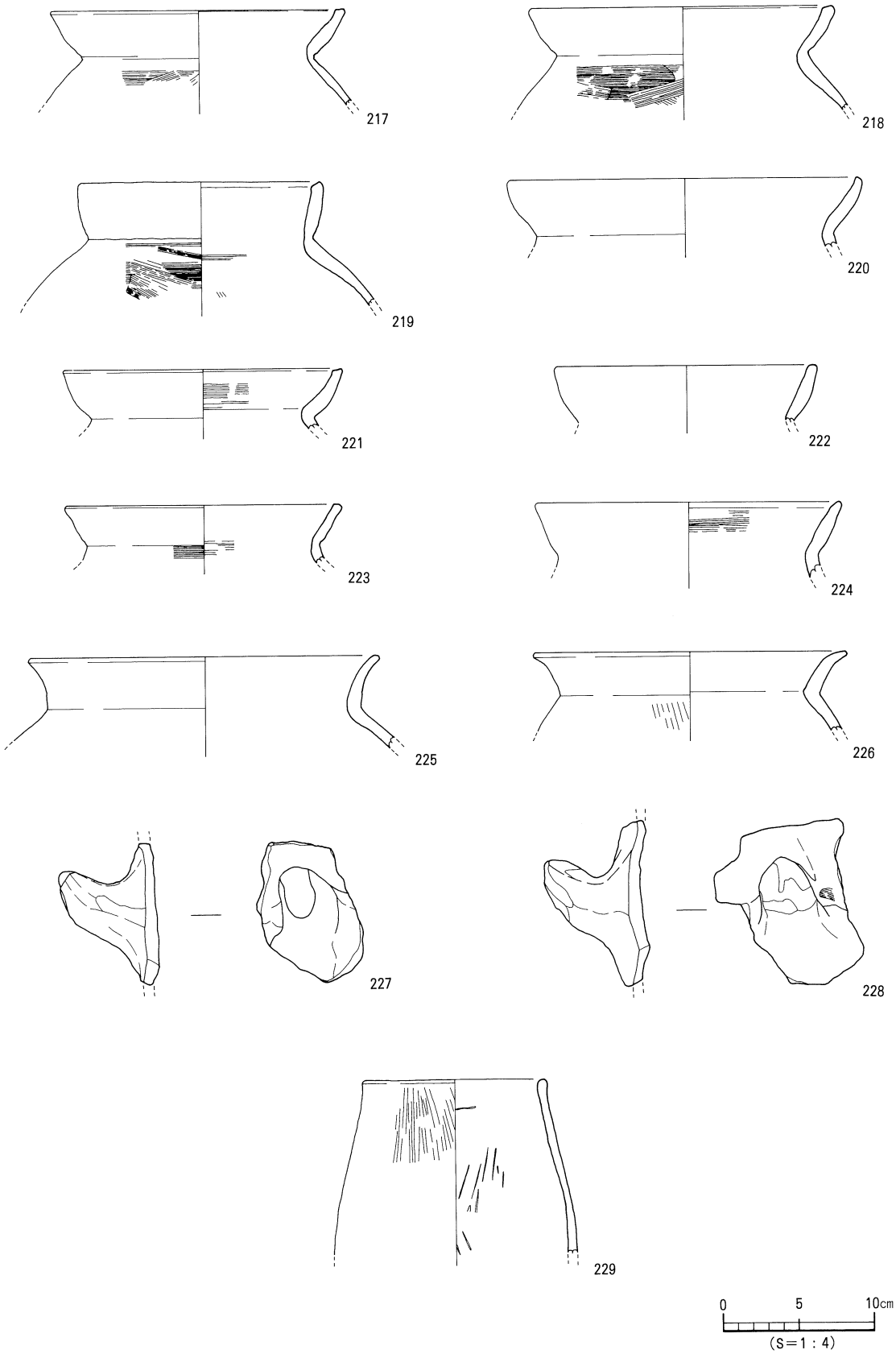
である。205と206は蓋で、天井部と口縁部の境界に僅かに稜がみられ、205は天井部に扁平なつまみをもち、206は中央部が凹む。207～209は脚部である。207は下方向に広がる脚部は屈曲をもち、３方向の透かしが施される。208はラッパ状に広がる脚部中位に凹線が２条、下位に１条と、３方向の透かしが施される。209はラッパ状に広がる脚部をもつ。210～211は壺である。210は肩部に張りをもち、外面はカキ目調整が施される。211は球状の胴部に、外面はカキ目調整が施される。212は甕の口縁部である。外反する口縁部は断面台形状を呈する。213は提瓶の口縁部で、外反する口縁部に、端部は丸みをもつ。214は甑で、外傾する胴部の下方には、断面楕円形の把手がつく。215は把手付の埦である。器高が口径よりやや高く、上胴部と下胴部には２～３条の凹みをもつ。外面調整は口縁部がハケ目調整、上胴部はタタキの後に横ナデ調整を受けており、下胴部は削りが施され、底面はタタキ調整がみられる。216は器台の脚部で、４方向に透かしをもち、２条の凹線を挟み列点文が施される。

土師器：217～226は甕である。217～223は「く」の字状の口縁部に、頸部はやや凹み、端部は平らな面をなす。220は外傾気味の口縁部に、端部は内傾する面をなす。220•221は内湾気味の口縁部をもつ。223・224は直線的に外傾する口縁部をもつ。225・226は口縁端部が外反気味である。227・228は甑の把手で、外上方にのびる。229は器種不明で、内傾する上胴部に、口縁部は窄み気味である。

時期：出土遺物から、７世紀前半に比定される。



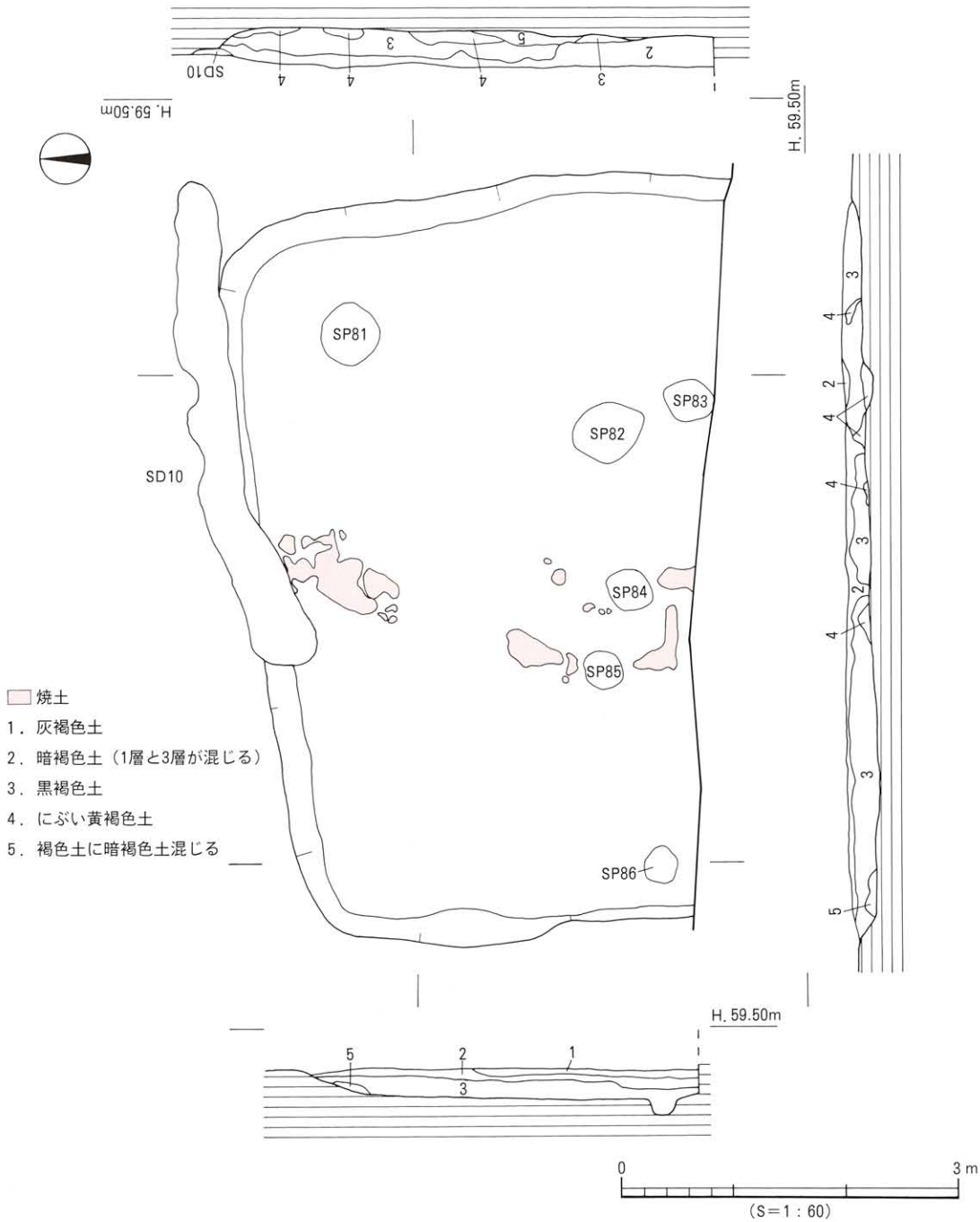
第108図　SB ５中～下層出土遺物実測図(2)



第109図　SB 5 中～下層出土遺物実測図(3)

SB 6（第110図）

調査区南側、H～J・14～15区に位置し、南側は調査区外に延び、北壁はSD10に切られている。平面形態は方形を呈し、規模は東西6.75m、南北4.03m以上、深さ24cmを測る。北壁の床面付近からは焼土と炭が出土し、竈の存在が考えられる。埋土は上層が暗褐色土、下層が黒褐色土で、部分的に灰褐色土、にぶい黄褐色土等が混じる。出土遺物は須恵器と土師器片が出土した。



第110図　SB 6 測量図

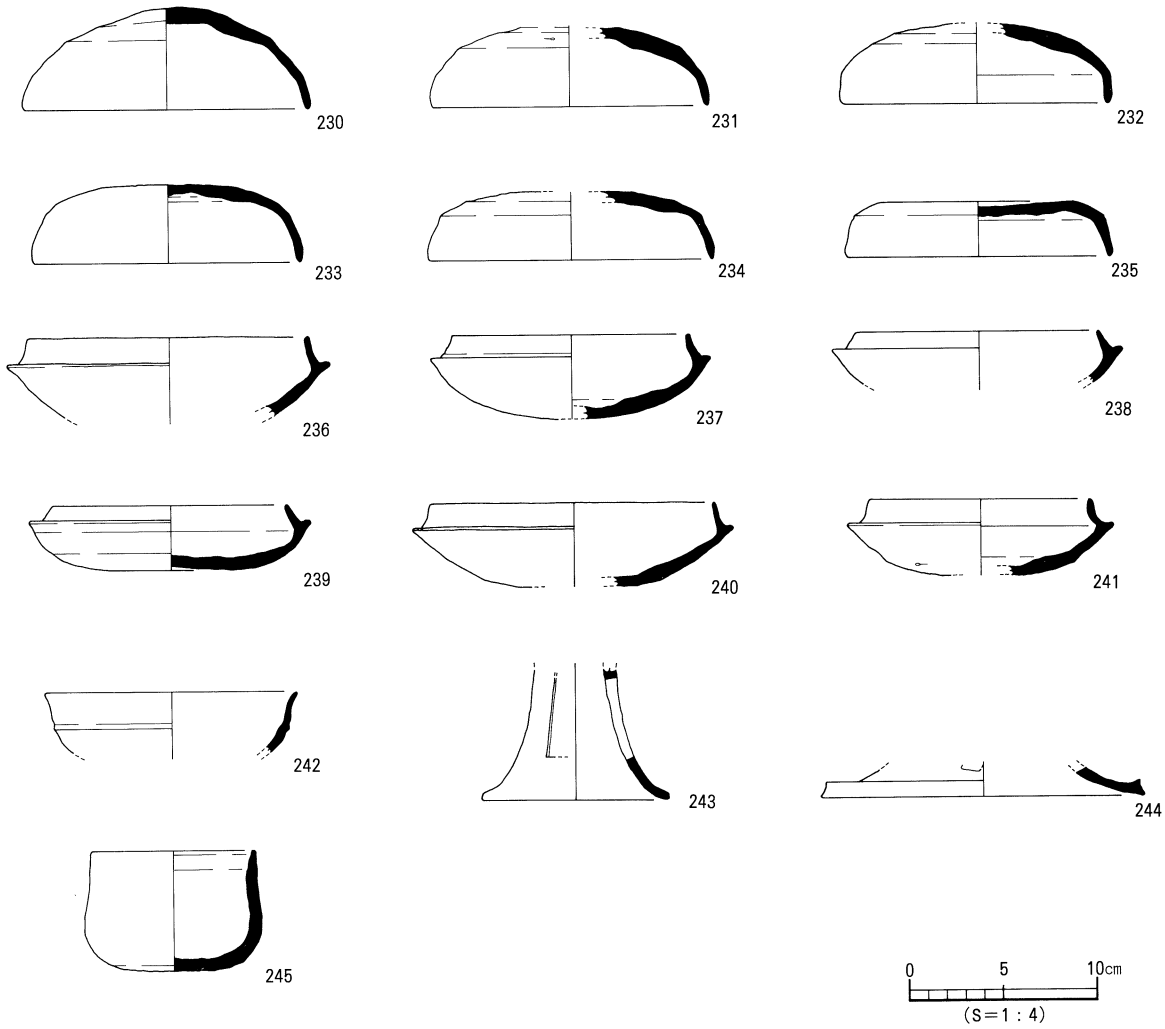
出土遺物（第111・112図、図版46）

須恵器：230～235は坏蓋である。230～231は丸味をもつ天井部より、内湾して下がる口縁部をもつ。232は丸味をもつ天井部で、口縁部は下方にのびる。233は内湾して下がる口縁部をもつ。234は丸味をもつ口縁部より、外傾して下がる口縁部をもつ。235はやや凹む天井部に、外傾して下がる口縁部をもつ。236～241は坏身である。237～239は受部端に沈線状の凹みをもつ。240・241は受部が外方にのびる。242～244は高坏である。242は内湾する坏中位に稜をもち、口縁部は外反する。243は外反して下がる脚部に、3方向の透かしが施される。244は裾部に透かしが施される。245は埦で、内傾気味の口縁部内面には段をもつ。

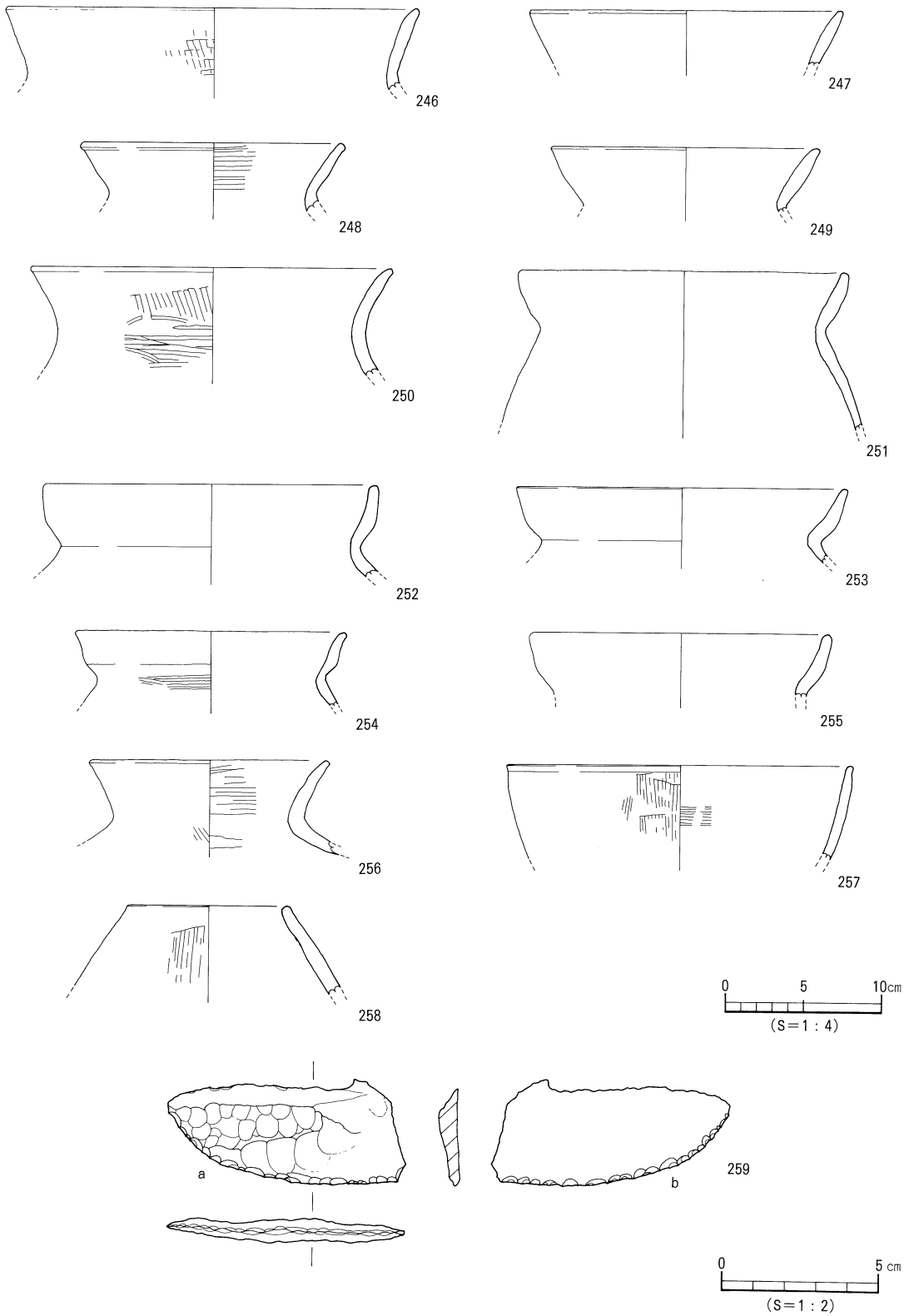
土師器：246～255は甕である。246～250は口縁部が外反し、250は緩やかに外反する口縁部をもつ。251～255は内湾する口縁部をもち、端部は丸く仕上げる。256は壺で、「く」の字状で外反気味の口縁部をもつ。257は鉢で、外反気味の口縁部は、端部外面がやや凹む。外面は刷毛目調整を施す。258は器種不明で、内傾して窄む口縁部である。

石器：259は打製のスクレイパーである。石材はサヌカイトで、a面の刃部から背部と、b面の刃部には打裂調整がなされている。

時期：出土遺物から7世紀前半に比定される。



第111図　SB 6出土遺物実測図(1)



第112図　SB 6 出土遺物実測図(2)

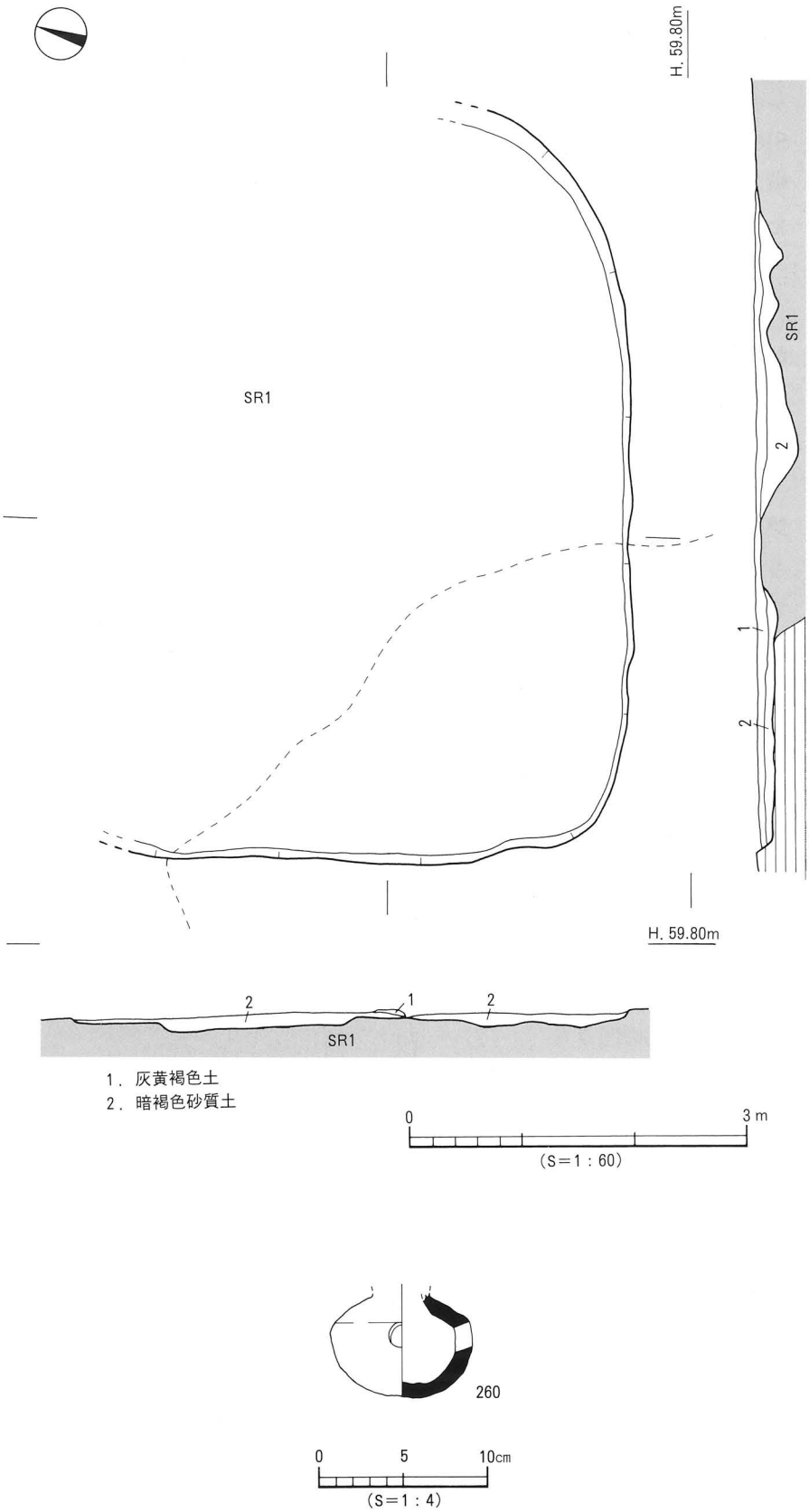
SB 7（第113図）

調査区中央部、I～K・11～12区に位置し、北東の半分がSR 1の埋土で検出され、それより北側はSR 1の上部に切られる。平面形態は方形を呈し、規模は一辺6.3～6.4m、検出面からの深さ10～35cmを測る。埋土は上層が灰黄褐色土、下層は暗褐色砂質土である。出土遺物は須恵器と土師器片が出土する。

出土遺物（第113図）

260は須恵器の瑳である。扁球形の胴部中位には円孔を穿っている。

時期：出土遺物から、6世紀後半に比定する。



第113図　SB 7測量図・出土遺物実測図

２）溝

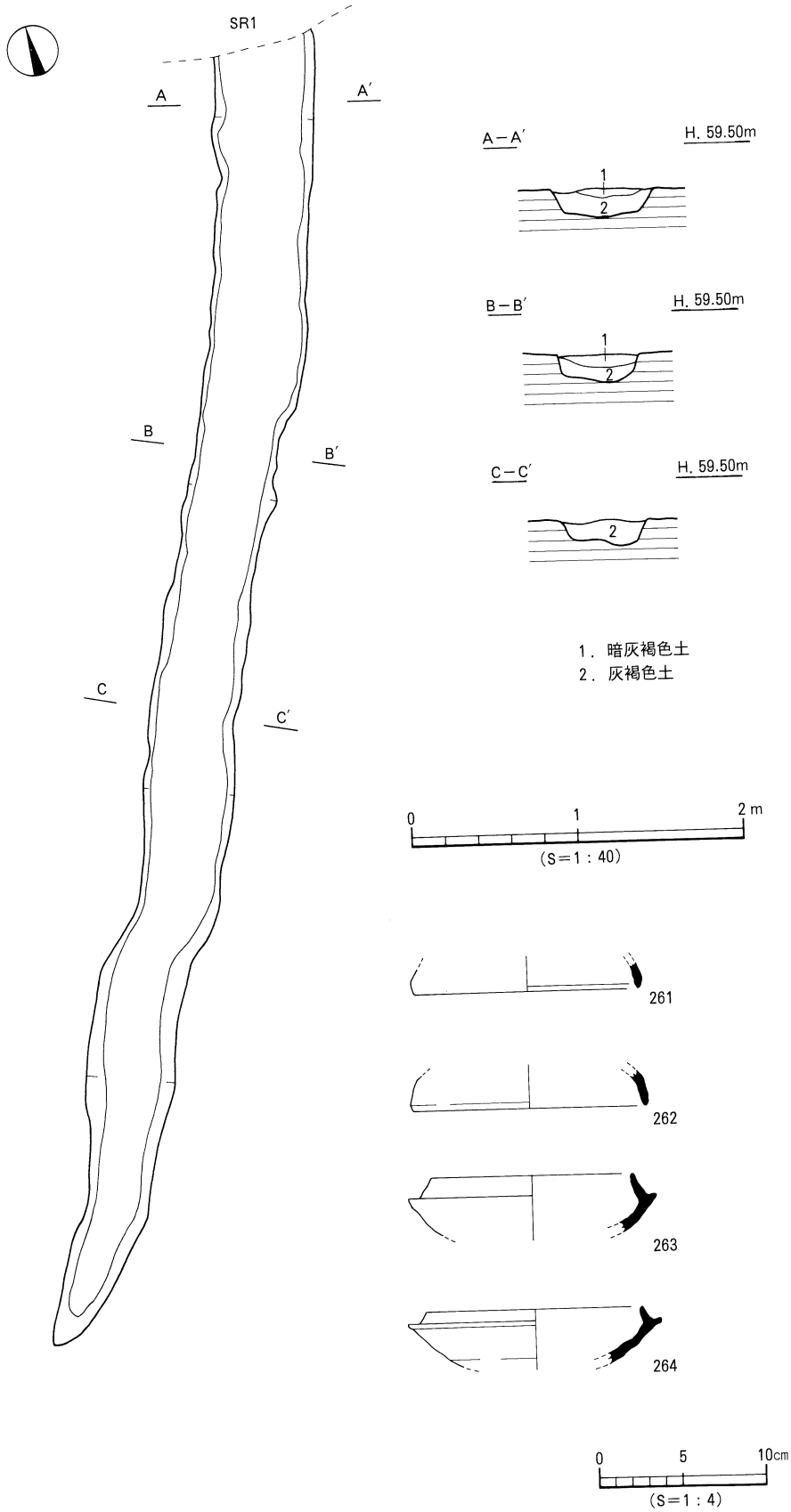
SD ９（第114図）

調査区東側、K～L・14～16区に位置し、北側の３ｍ分はSR １の埋土上面にて検出し、北端はSR １に切られる。主軸はN-24°-Eを指向し、規模は上場幅0.52～0.56ｍ、深さ９～16cm、検出長7.9ｍを測る。断面形態は逆台形状を呈し、基底面は緩傾斜（北側が低い）をなしており、比高差は７cmを測る。埋土は上層が暗灰褐色土、下層が灰褐色土である。遺物は須恵器と土師器片が出土した。

出土遺物（第114図）

261・262は坏蓋である。262は口縁端部内面に不明瞭な段をもつ。263・264は坏身で、受部端に沈線状の凹みをもつ。

時期：出土遺物から、７世紀前半に比定する。



第114図　SD ９測量図・出土遺物実測図

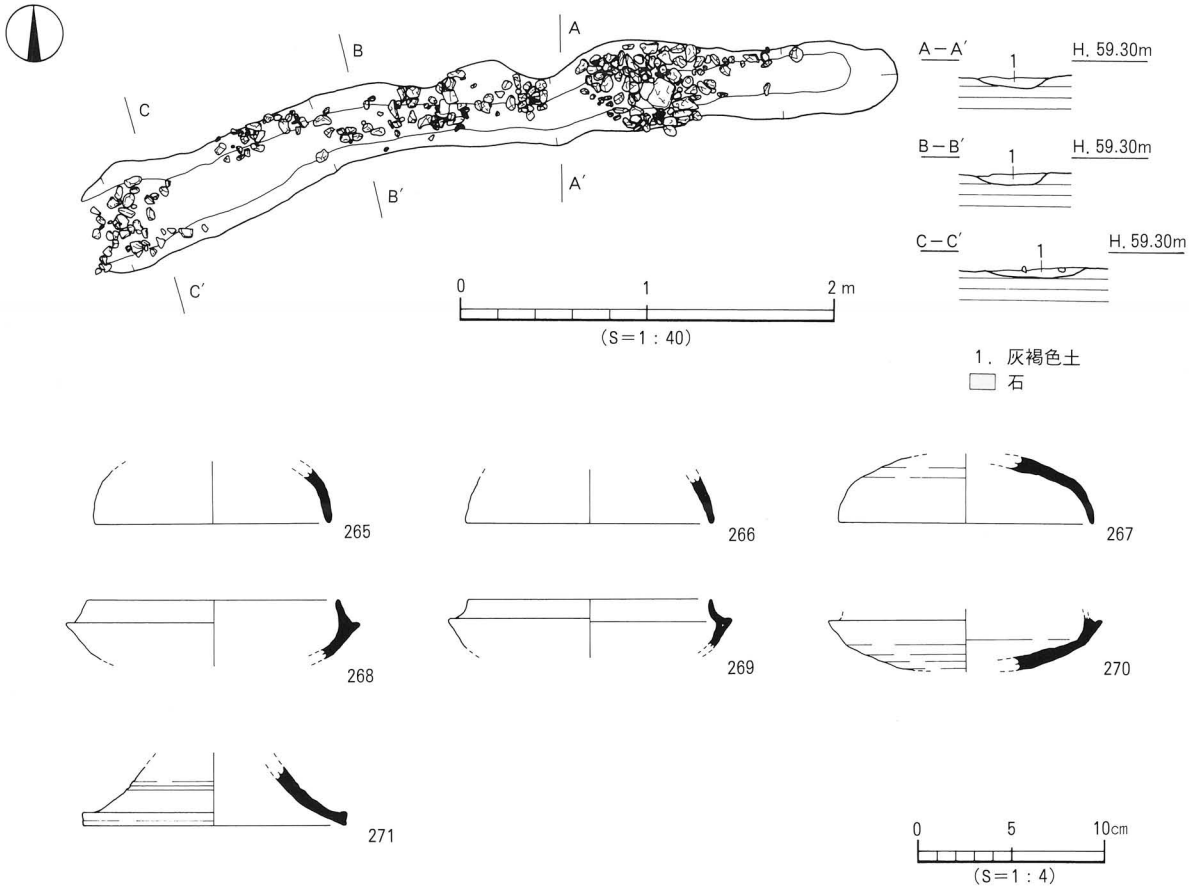
SD 10（第115図）

調査区南側のＩ～Ｊ・15区に位置し、SB 6の北壁を切る。主軸は東西を指向し、西側はやや南に振る。規模は検出長4.35m、上場幅0.35～0.45m、深さ4～6cmを測る。断面形態は逆台形状を呈し、基底面は緩傾斜（西側が低い）をなしており、比高差は6cmを測る。上面から基底面に3～15cmの礫を検出した。埋土は灰褐色土である。遺物は須恵器と土師器片が出土する。

出土遺物（第115図）

265～267は坏蓋で、内湾しながら下がる口縁部をもつ。268～270は坏身である。268・269は立ち上がりは内傾し、受部は外方にのびる。270は受部端に沈線状の凹みをもつ。271は高坏の脚部で、凹線が施されている。

時期：出土遺物から、7世紀前半に比定する。



第115図　SD 10測量図・出土遺物実測図

３）土坑

SK 9（第116図）

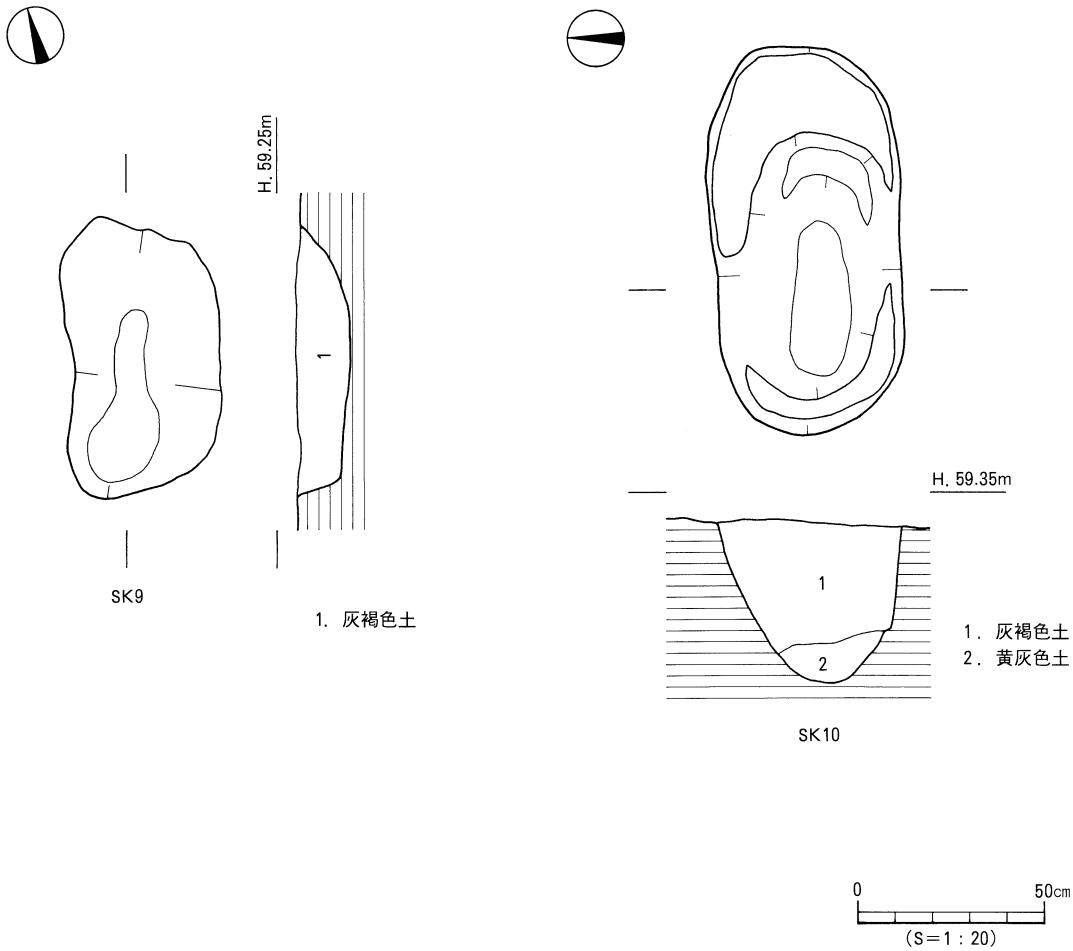
調査区中央部Ｉ・16区に位置する。平面形態は楕円形、断面形態は逆台形状を呈する。規模は長軸0.72m、短軸0.38m、深さ15cmを測る。埋土は灰褐色土である。出土遺物は須恵器と土師器の小片が出土した。

時期：出土遺物が小片であるため、埋土から古墳時代後期とする。

SK 10（第116図）

調査区西側Ｈ～Ｉ・16区に位置する。平面形態は楕円形、断面形態はＵ字状を呈する。規模は長軸1.03m、短軸0.49m、深さ43cmを測る。埋土は上層は灰褐色土、下層は黄灰色土である。出土遺物は須恵器と土師器の小片が出土する。

時期：出土遺物が小片であるため、埋土から古墳時代後期とする。



第116図　SK 9・10測量図

(3) 古代以降

1）溝

SD 11（第117図）

調査区北側のJ～M・18区、SR 1を切り、両端は調査区外に延びる。主軸はN-8°-Wを指向し、規模は検出長10.6m、上場幅0.45～0.5m、深さ7～8cmを測る。断面形態は逆台形状を呈し、基底面は緩傾斜（西側が低い）をなしており、比高差は3cmを測る。埋土は灰色土である。遺物は須恵器と土師器の小片、瓦片が出土する。

時期：出土した瓦片から、古代以降に埋没したとしか判断できない。

(4) 中　　世

1）柱穴

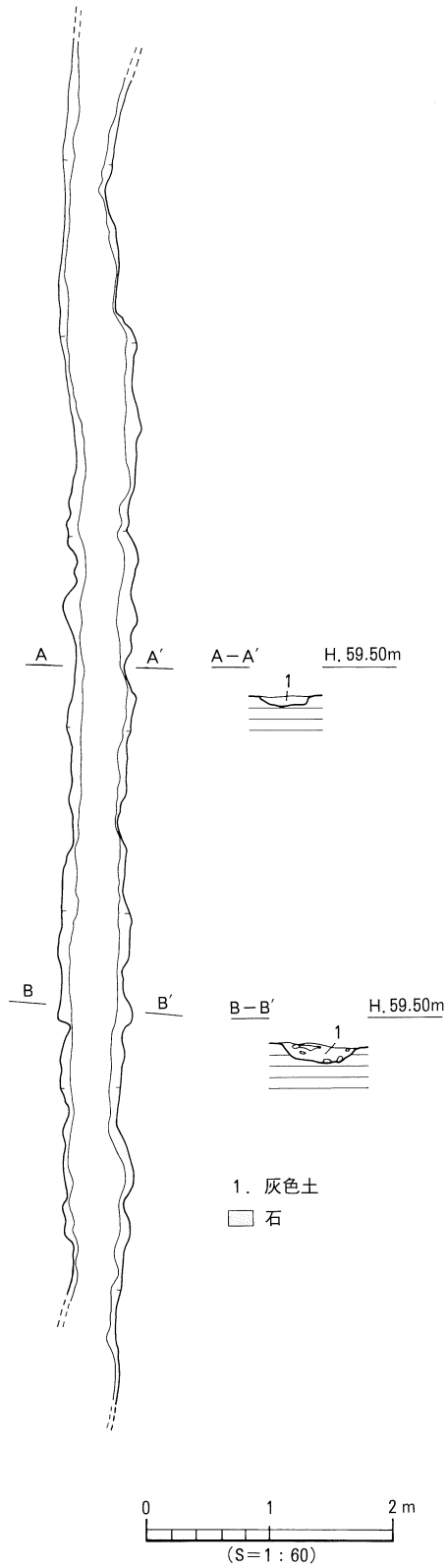
SP 27（第102図）

調査区南東側のK・15区に位置する。平面形態は楕円形、断面形態はU字状を呈し、規模は直径35cm、深さ29cmを測る。埋土は灰褐色土である。出土遺物は土師器片と、埋土中位から瓦器椀が出土した。

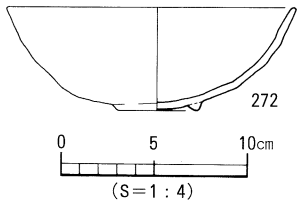
出土遺物（第118図）

272は瓦器の椀である。胴部は内湾して立ち上がり、底部には断面三角形状の貼り付け高台をもつ。内外面共に表面が摩滅し、調整は不明である。和泉型II－3期。

時期：出土遺物から、12世紀後葉に比定する。



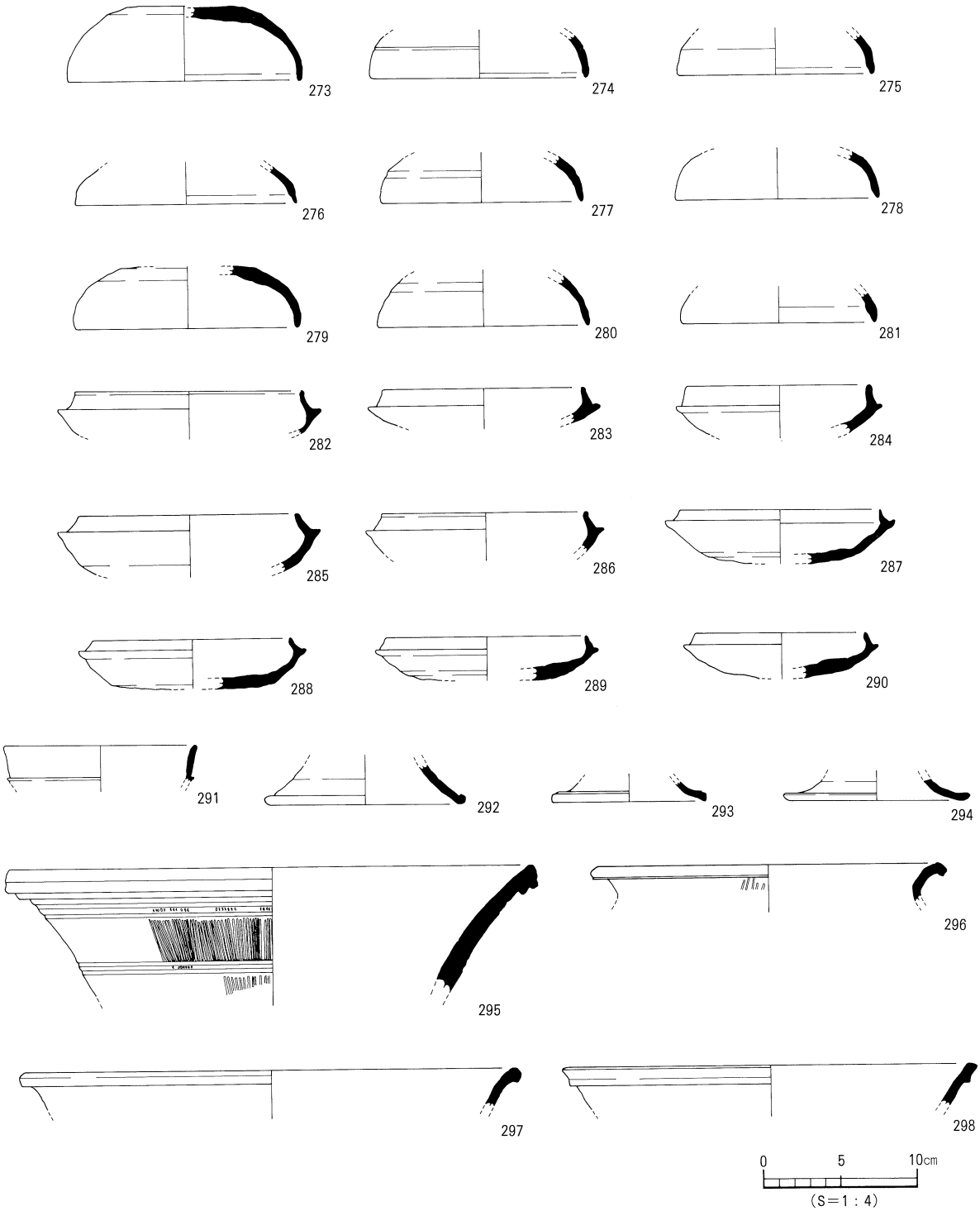
第117図　SD 11測量図



第118図　SP 27出土遺物実測図

(5) 第Ⅶ層出土遺物（第119・120図、図版46）

須恵器：273～281は坏蓋である。273～276は口縁部内側に段をもつ。274は天井部と口縁部との境界に稜をもち、277は天井部と口縁部との境界に凹みによる稜をもつ。282～290は坏身である。282は口縁端部内面に不明瞭な段をもつ。283～288は受部端に沈線状の凹みをもつ。286～290は立ち上がりが、

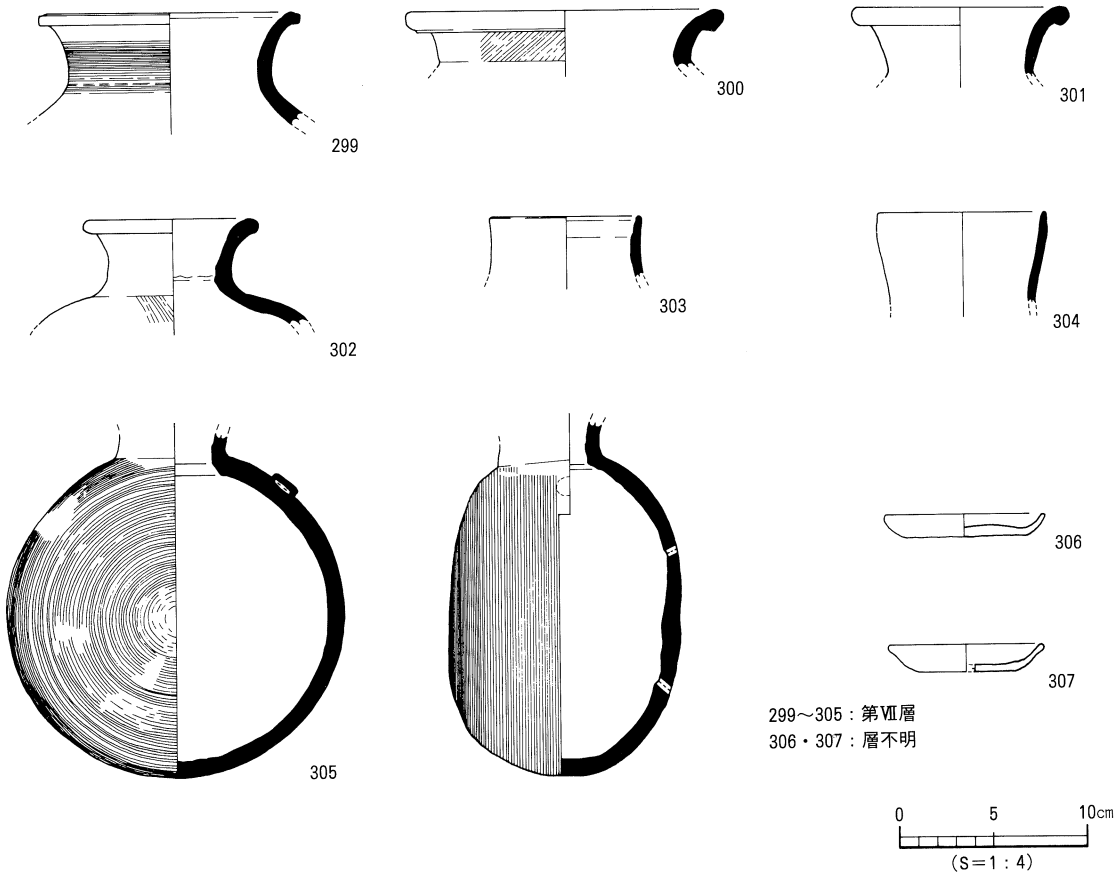


第119図　第Ⅶ層出土遺物実測図

内傾し、受部は外方向にのびる。291～294は高坏である。291は坏部中位に1条の凸線が巡る。292～294はラッパ状に広がる脚裾部である。292は端部が丸くおさめられる。293は裾部に1条の凸線が巡り、端部は平らな面をなす。294は透かしが施される。295～298は甕である。295は口縁部が大きく外反し、頸部にタテナデ調整が施される。296・297は外反する口縁部で、端部は外下方にのびる。298は外傾する口縁部に、端部は外面が肥厚される。299～304は壺である。299は外反する口縁部で、端部は外方にのび、端面は平らな面をなす。300は外反する口縁部で、端部は丸くおさまる。301・302は外傾気味の口縁部で、端部は丸く納まる。303は外反気味の口縁部で、端部内面には不明瞭な段をもつ。304は外傾気味の口縁部で、端部は内湾気味に尖る。305は提瓶である。胴部は球状で、肩部にはボタン状の突起を貼り付けている。胴部外面はカキ目調整が施されている。

(6) 出土地点不明出土遺物（第120図）

306・307は土師器の皿である。平底の底部から内湾して立ち上がり、306は口縁端部が丸くおさまる。底部の切り離し技法は回転糸切りである。



第120図　第Ⅶ層・層不明出土遺物実測図

７．３区の遺構と遺物（第121図）

SR １上面では溝１条を検出した。

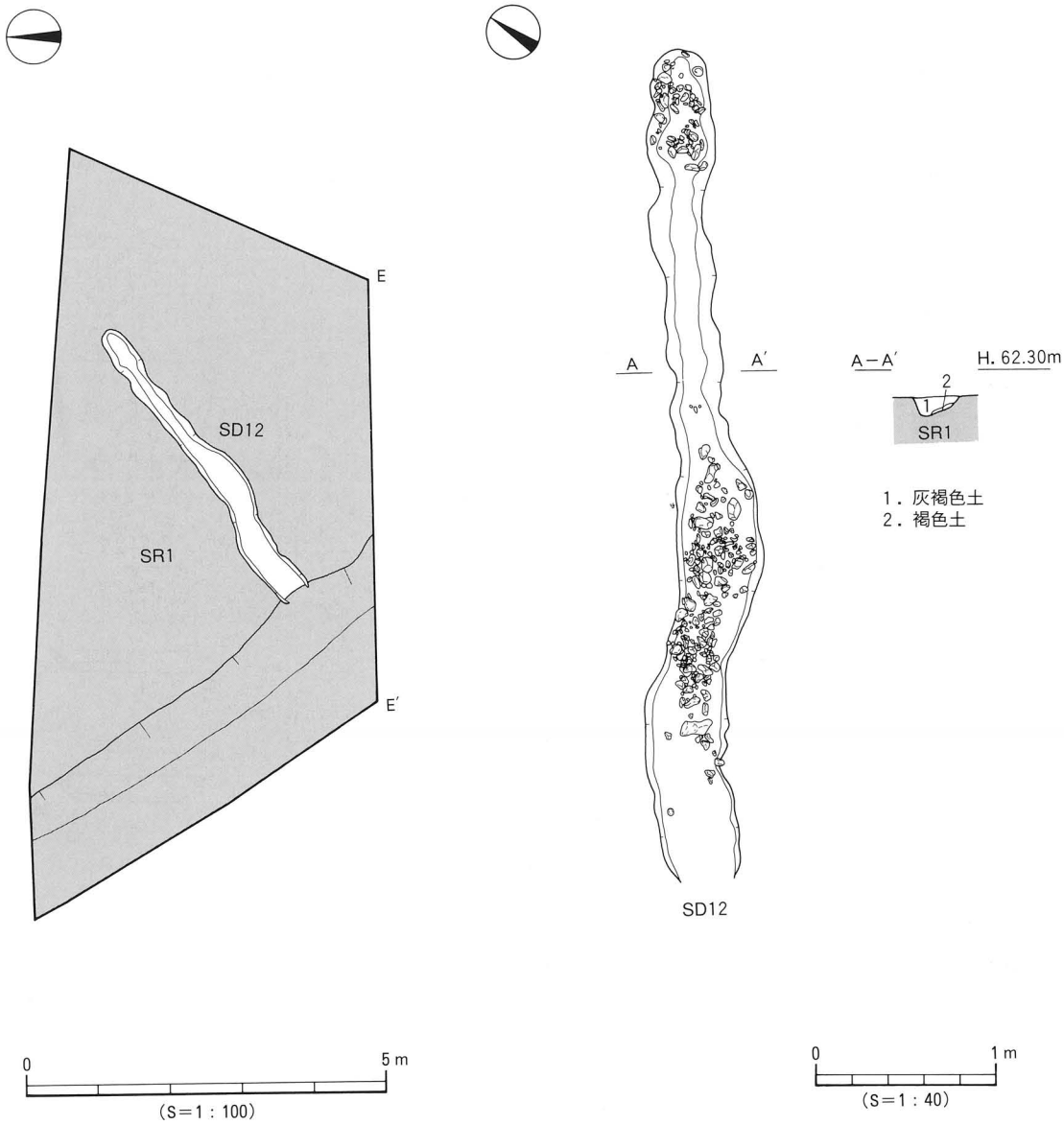
(1) 中　　世

１）溝

SD 12（第121図）

調査区中央部に位置する。主軸はE-53°-N を指向し、南西端は耕作時（現代）に削平を受け消滅する。規模は上場幅0.24～0.48m、深さ7.7～11.9cm、検出長4.65mを測る。断面形態は逆台形状を呈する。溝床はやや凹凸があり、北東部から南西部へ傾斜（南西部が低い）し、比高差は7.9cmを測る。埋土は灰褐色土で、基底部付近に褐色土がある。出土遺物はない。

時期：埋土が下苅屋遺跡２次調査地Ｂ地区の中世遺構と同じであることから、中世とする。



第121図　３区遺構配置図・SD 12測量図

8．4区の遺構と遺物（第122図）

SR 1上面では溝2条を検出した。

(1) 中　　世

1）溝

SD 13（第122図）

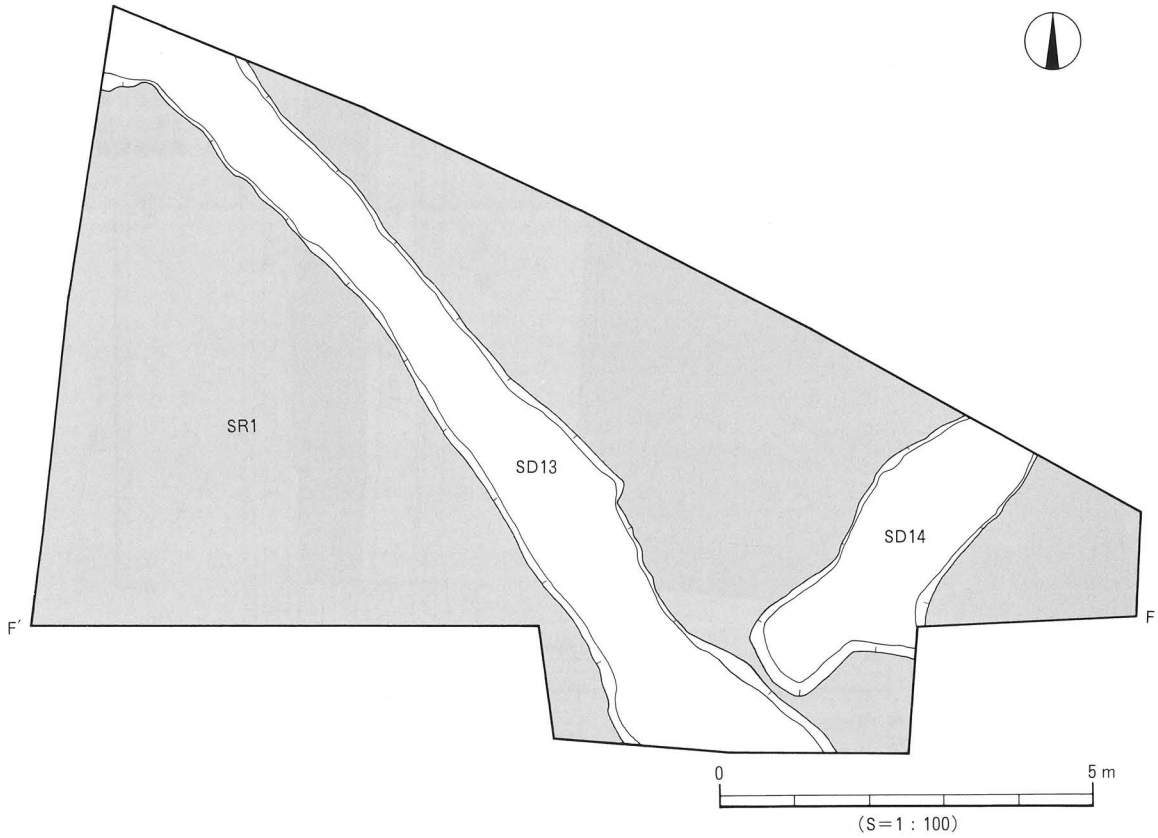
調査区南東～北西部に位置し、両端は調査区外へ延びる。主軸はN-49°-Wを指向し、規模は上場幅0.82～1.95m、深さ6.8～11.4cm、検出長12.2mを測る。断面形態は皿状を呈する。溝床は下層の礫層が基底面となり、北西から南東へ傾斜（南東部が低い）し、比高差は14.2cmを測る。埋土は灰褐色土である。出土遺物は土師器の小片が僅かに出土した。

時期：埋土が下苅屋遺跡2次調査地B地区の中世遺構と同じであることから、中世とする。

SD 14（第122図）

調査区東部に位置し、北端は調査区外へ延びる。主軸はW-46°-Sを指向し、SD 13とほぼ直角方向である。規模は上層幅1.2～1.6m、深さ3.8～12.8cm、検出長4.4mを測る。溝床は下層の礫層が基底面となり、北東から南西へ傾斜（南東部が低い）し、比高差は6cmを測る。埋土は灰褐色土である。出土遺物はない。

時期：埋土が下苅屋遺跡2次調査地のB地区中世遺構と同じであることから、中世とする。



第122図　4区遺構配置図

９．５区の遺構と遺物（第123図）

第Ⅷ層上面では旧流路を検出した。

(1) 弥生時代～古代

１）自然流路

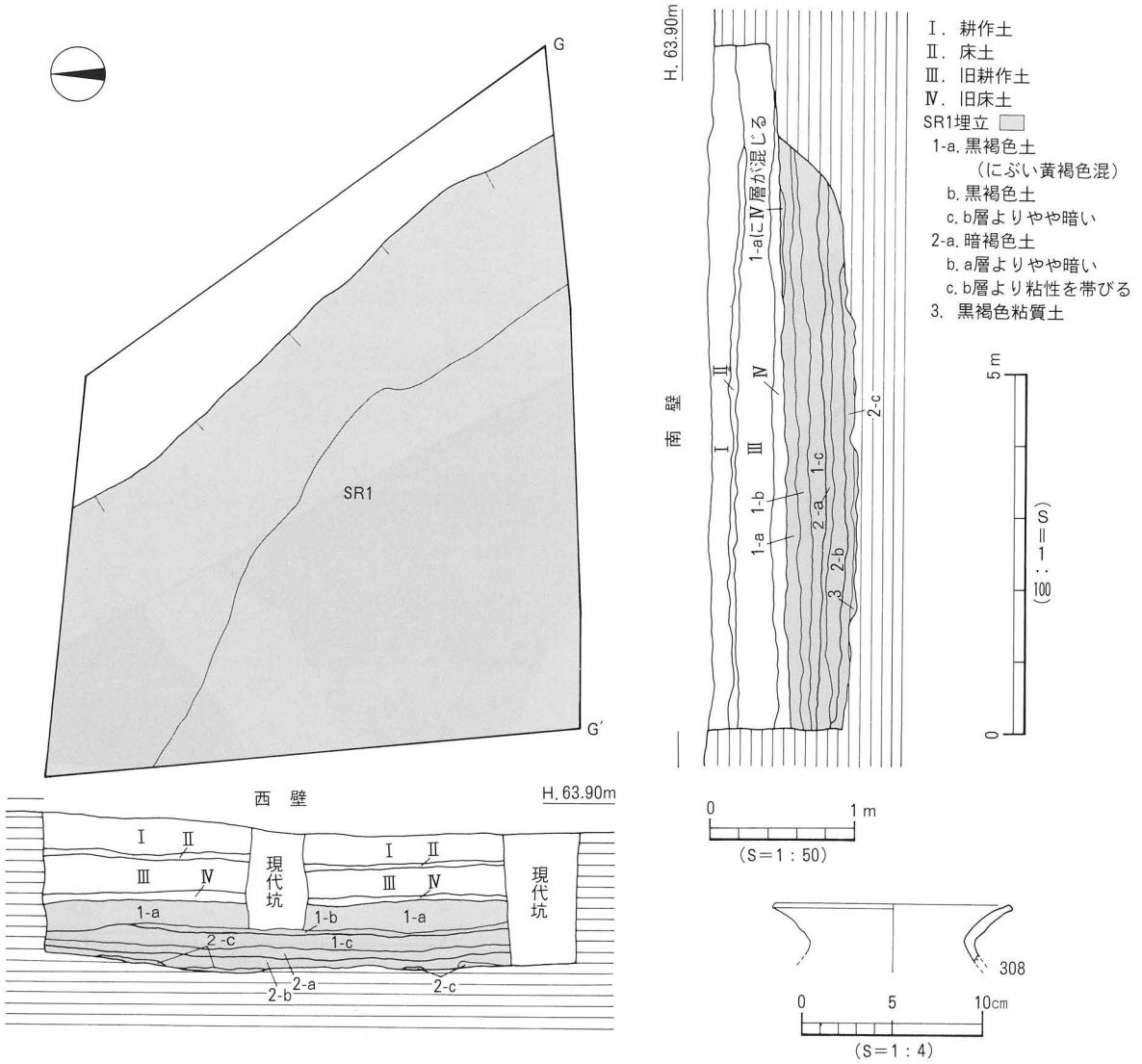
SR １（第123図、図版38）

調査区南東部から北西部では、流路の東側の上場を検出した。北東方向から南西方向に20度の勾配をもち傾斜する。上場付近には厚さ30～40cmの礫層の堆積がみられる。検出幅は8.5m、深さは１mを測り、西側へは緩傾斜が調査区外に延びる。埋土は３層に大別でき、上層は黒褐色土、下層は暗褐色土、最下層は黒褐色粘質土である。遺物は須恵器・土師器片が多く、最下層では弥生土器の小片が僅かに出土している。

出土遺物（第123図）

308は土師器の甕である。「く」の字状の口縁部は、端部が傾斜して面をなす。

時期：堆積層や位置関係などから、下苅屋遺跡２次調査地で検出した自然流路につづくものと考えられ、弥生時代前期にはじまり古代に埋没していたと判断される。



第123図　５区遺構配置図・壁土層断面図・SR １出土遺物実測図

10. 6区の遺構と遺物（第124図）

地表面に露出する墓2基を検出した。

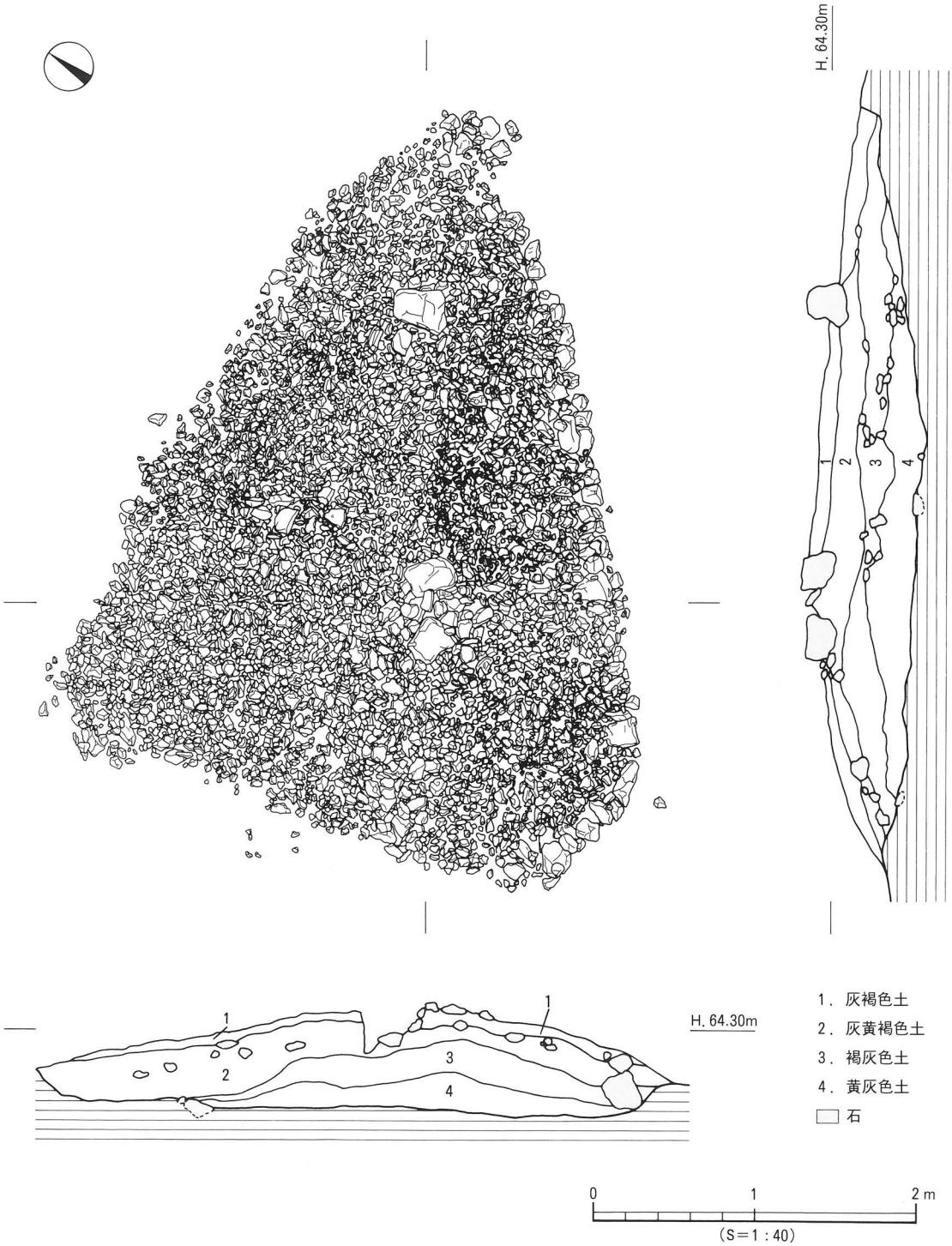
第124図　6区遺構配置図

(1) 近　　世

1）墓

1号墓（第125図、図版39・40）

調査区北東部隅に位置しており、北側は畔により壊されている。平面形態は三角形状を呈し、規模は南北3.6m、東西4.5m、地表面より上に40cm露出し、地表面より下に20cmの掘り込みを測る。露出した南東部には５～20cm大の礫を並べて、周りを囲んでいる。床面には土を５cmの厚みで敷いている。石塔は１号墓の横に移動し、まつられていた。中央部中層の礫内からは、寛永通寶銭が２枚出土した。



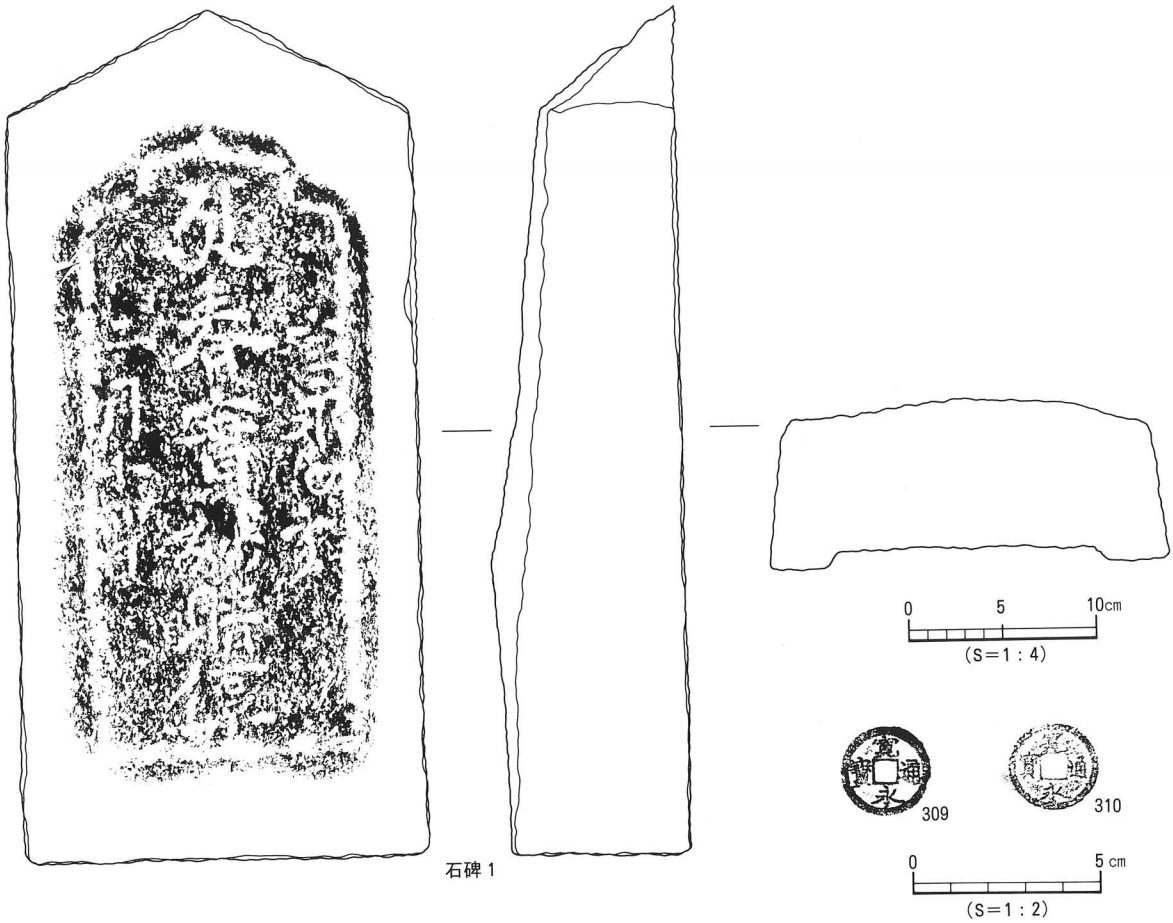
第125図　１号墓測量図

出土遺物（第126図、図版46）

石碑１は、板碑型で花燈形の彫り凹みがみられる。石材は花崗岩である。頂部を三角形に尖らせている。規模は全長46.5cm、幅21cm、厚み７～10cm、重さ24.9kgを測る。石碑側面の上部と、下部の厚みを比べると、下部が大きい。塔身面の右側には「宝永四亥」、中央には「春實妙晴信女」の銘、左側には「二月十四日」が彫られている。

309・310は寛永通寶銭である。309は鉄銭であり、外径24.55mm、重量2.802ｇを測る。文字形態から古寛永通寶銭である。310は銅銭であり、外径24.50mm、重量2.644ｇを測る。文字形態から新寛永通寶銭である。

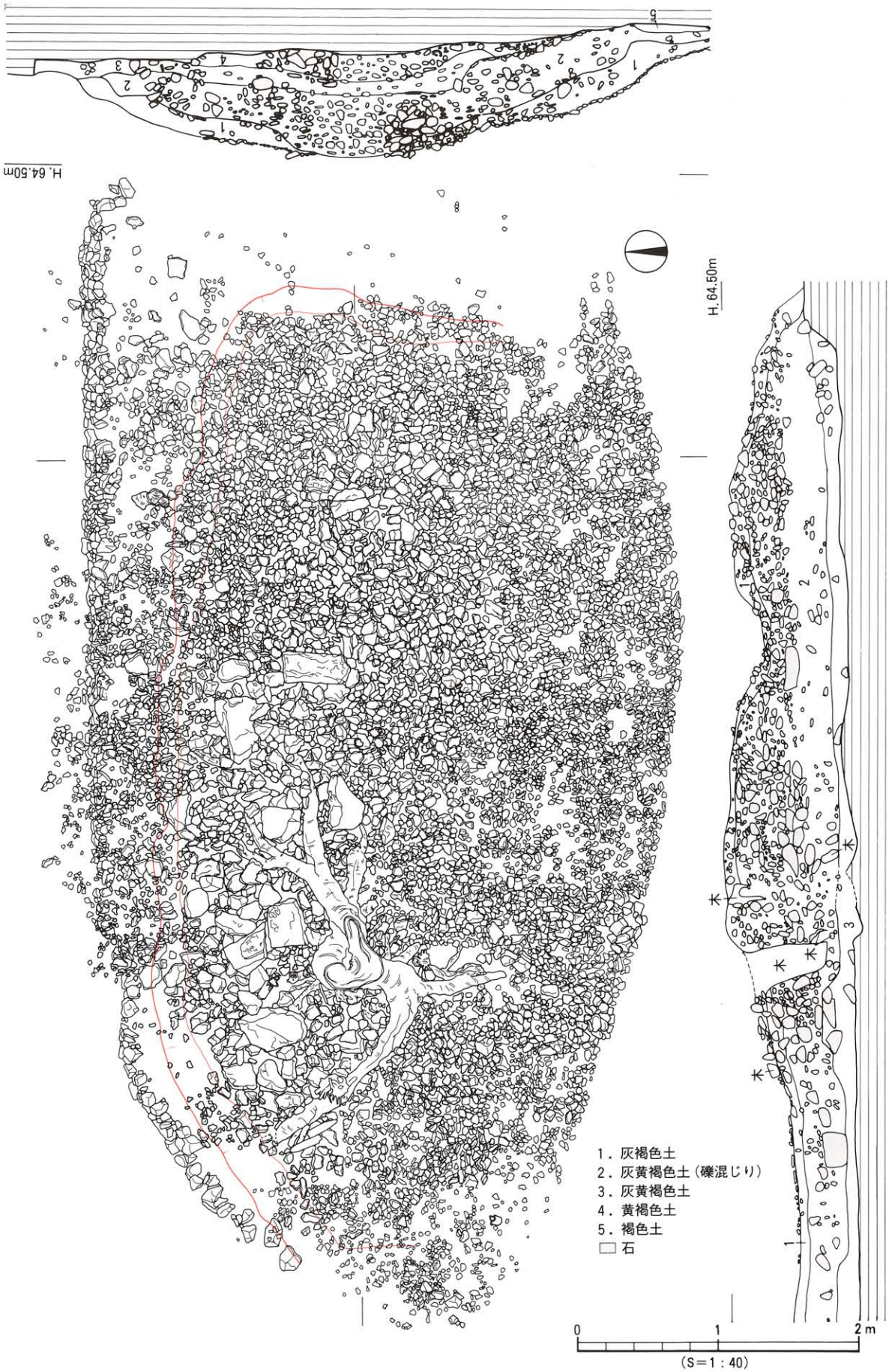
時期：墓標から、1707年２月14日に没したことが判る。



第126図　１号墓出土遺物実測図・古銭拓影

２号墓（第127図、図版41・42）

調査区南東部に位置し、南側は現存する水路により壊されている。東西には、集石の盛り上がりを２箇所並んで検出した。規模は東西８ｍ、南北4.6ｍ、検出面より上に50cm露出しており、下に20cmの掘り込みをもつ。１号墓と同様に床面に土を約５cmの厚みで敷いている。石碑は２カ所の集石の谷間部より完形の石碑１点と、西側の盛り上がり部から上半が欠損した石碑１点を検出した。骨は西側の盛り上がり部の中央部中層の礫に混じって出土した。また、北東部中層からは歯が出土した。この歯は馬の臼歯であり、10歳未満の骨であった。礫内出土の骨片は人骨で、大腿骨と頸骨である。床面か



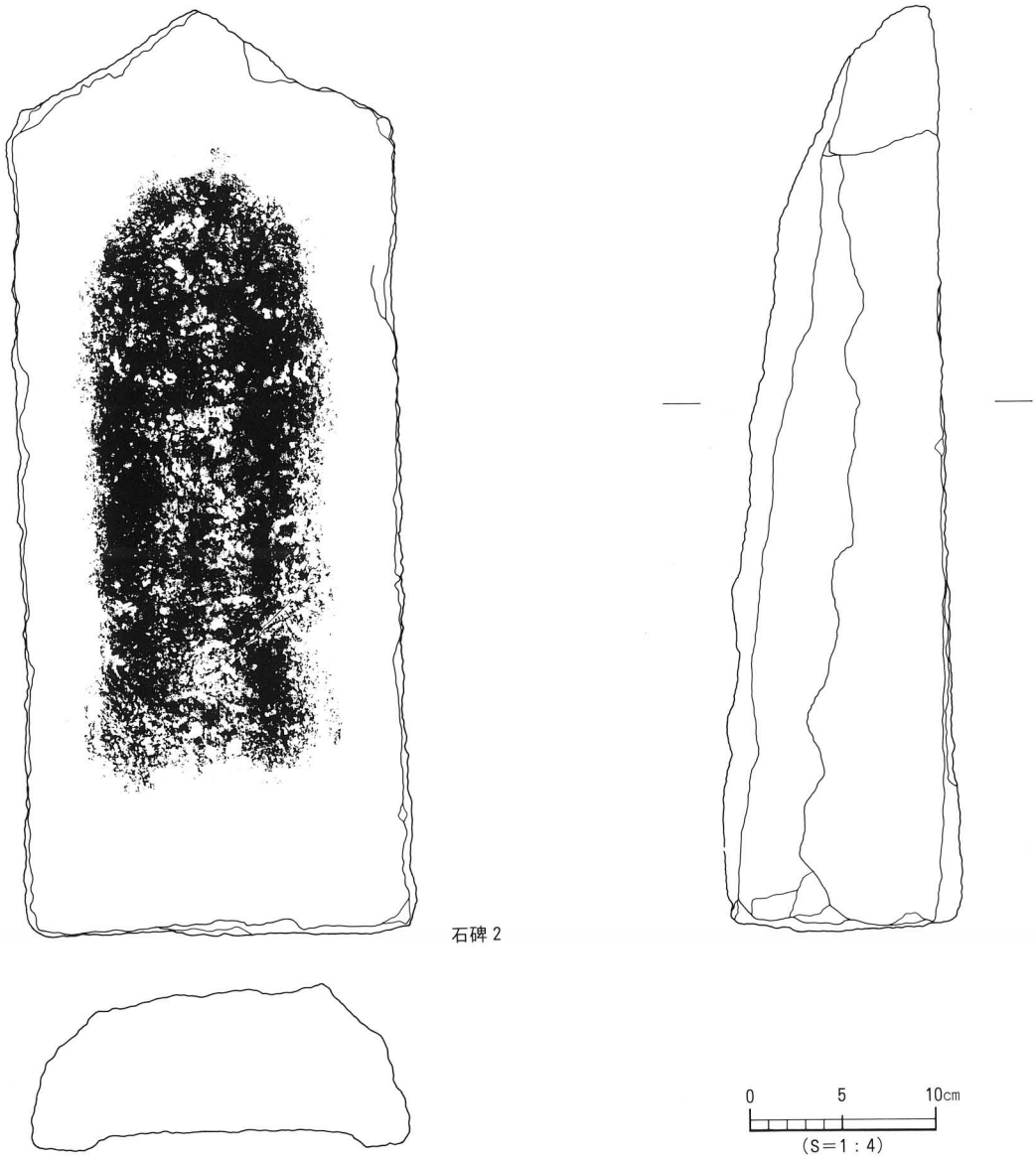
第127図　２号墓測量図

らは掘り込みが検出された。掘り込みは、外郭をなす石組から東部が5°南に振れている。平面形態は隅丸長方形、断面形態は皿状を呈する。規模は長軸7m、端軸2.5m、深さ20cmを測る。北側の壁面には5～20cm大の礫が1段積まれている。

出土遺物（第128・129図）

石碑2は、石材は花崗岩である。形態は板碑型で花燈型の彫り凹みがみられる。頂部を三角形に尖らせている。規模は全長49.6cm、幅20.5～21cm、厚み8.5～12.5cm、重さ21.7kgを測る。板碑側面の厚みは上部より下部が厚い。石碑は風化が著しく、塔身面中央部では居士の戒名が解読できるだけであった。

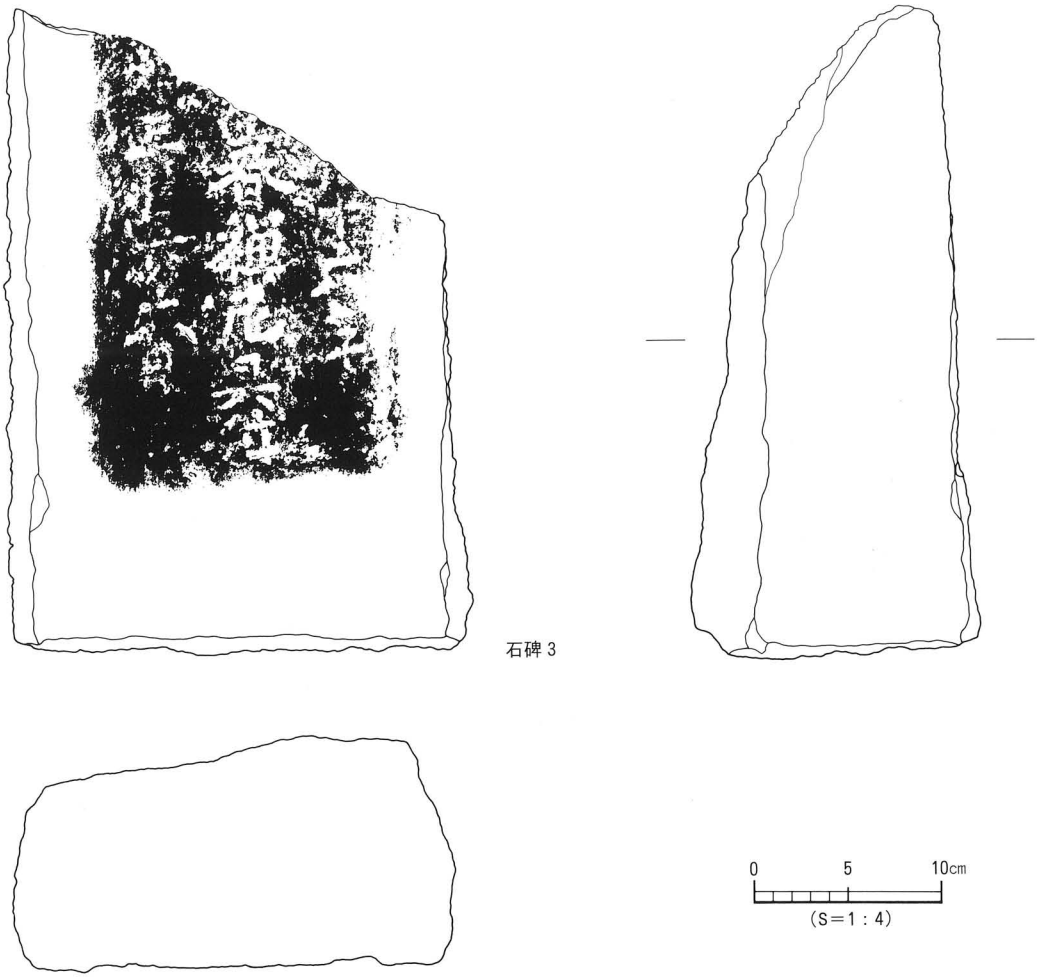
石碑3は、石材は花崗岩である。石碑上半部が欠損しており、残存する下半部には正面右側に十六□、中央部に春禅尼□位、左側に三月□六日だけが解読できた。残存する規模は残存高33.5cm、幅



第128図　2号墓出土遺物実測図(1)

23.5～24.6cm、厚み12～15.5cm、重さ19.3kgを測る。

時期：１号墓との位置関係や、墓の構造と石碑の形態が類似していることから、１号墓に前後する時期と考える。



第129図　２号墓出土遺物実測図(2)

11. 小　結

今回の調査では、弥生時代前期から古代まで機能していた自然流路や、古墳時代後期を主体とした集落、さらに近世墓を検出した。

(1) 弥生時代～古代

1 C区 SX 2 は、出土遺物から中期末葉に比定した。1 A区 SX 1 は時期を特定する遺物は出土していないが、弥生土器の破片が出土していることや埋土が1 C区 SX 2 と同じことから、同一時期の遺構とした。周辺には同時期の集落が存在するであろう。

自然流路 SR 1 は、古市遺跡 1 区や下苅屋遺跡 2 次調査地で検出された自然流路につながるものと考えられ、弥生時代前期から古代まで機能していたことがわかっている。古市遺跡では流路の幅は70mを超えると想定されているが、今回の調査では、2 区と 5 区で検出された流路の両岸から、流路幅は約150mと想定された。2 区の流路南岸は、流路の岸が抉られ、砂礫層だけが堆積していることから、河川の攻撃斜面の様相を呈していた。また、対岸である 5 区で検出された流路の北岸は砂礫層がなく、粘質土層が堆積していることから、淀みであったことが想定できる。これらのことから SR 1 は、本調査地を南東方向から北西方向に蛇行しながら西流していたことがわかる。

(2) 古墳時代

1 A～C区・2 区で検出した竪穴式住居址や掘立柱建物址からは、下苅屋遺跡で検出された古墳時代後期の集落址が本調査地にまで広がることを確認した。なかでも、SK 1 からは未製品を含む須恵器が多量に出土した。隣接する下苅屋遺跡では須恵器の一括廃棄を示す土坑状の遺構が検出されており、したがって SK 1 は遺物の廃棄土坑と考えられる。

掘立 3 と SK 1 は時期差はなく、遺構の配置状況から SK 1 は掘立柱建物に附設された土坑と考えられる。SB 7 と SD 9 は、遺構の一部を SR 1 の埋土上で検出し、さらに SR 1 に切られていた。これは流路の南岸付近が埋まった時期に構築し、その後の洪水等により南岸付近が再度浸食された結果と考えられる。

2 区 SB 5 は、遺構の基底面の大半が掘り込みにより壊されている。この掘り込みは、土層の堆積状態から SB 5 を廃棄する前に掘られたものと考えられる。SB 3 はカマドを除去した後に、東側の壁体から外にスロープ状に傾斜して上がる突出部を検出した。これは煙道の可能性がある。ただし、南の壁体にも同様の突出部があり、この施設がいかなる性格のものか現段階では判断できない。SB 6 は住居址内の北側に焼土を確認し、北壁付近にカマドの存在が窺われる。

今回検出した遺構は、6 世紀後半から 7 世紀中葉までの集落存在を示したものである。下苅屋遺跡では、SR 1 の上流にある丘陵部に展開する窯跡で生産された須恵器の搬入・選別等を行う、いわゆる生産地と消費地とを結ぶ中継的様相を示す集落を想定している。今回の調査では、集落に接する様に SR 1 が流れていたことを確認し、集落と SR 1 との密接な関係が窺えた。

(3) 中　　世

3・4 区 SD 12～14は、SR 1 が埋没した後に掘られた溝である。3・4 区の周辺には SR 1 埋土（砂

礫層）の上に土譲の堆積がみられ、３・４区では遺構の内外に遺物が殆ど出土しない。一方、１Ａ～１Ｃ区は遺物包含層が堆積し、SD １・６・７等の遺構が検出され、遺構内外からも遺物が出土する。したがって、地盤の不安定な３・４区には農耕施設等の生産域があり、安定した土地となる１Ａ～１Ｃ区付近には居住域の展開が推測される。

(4) 近　　世

１・２号墓は礫で積まれた江戸時代前期の墓である。１号墓は、石碑の銘から成人女性の墓であることがわかった。礫内より出土した２枚の寛永通寶銭は、死者に持たせる六文銭（六道銭）と考えられる。２号墓は石碑の銘から成人男性と成人女性の墓であることがわかった。骨の一部を検出したが、骨は出土状況から埋葬地点を移動し、本来遺体は墓の構造から礫で囲んだ掘り込み部に埋葬されていたものと考えられる。

また、２号墓は検出段階で２基は東西に並ぶ様に２つの盛り上がりがみられ、石碑も２点出土しているが、下部施設である礫で囲まれた掘り込み部は東西に長く１基分だけであった。検出状況からは、近親者が同時に埋葬されたことを推察できる。

〔文献〕

横田賢次郎・森田　　勉　「太宰府出土の貿易陶磁」『九州歴史資料館研究論集』1978
尾上　　実　「南河内の瓦器椀」『藤澤一夫先生古希記念古文化論』1983
重松　佳久　「下苅屋遺跡」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅷ』松山市教育委員会・㈶松山市埋蔵文化財センター 1996
栗田　茂敏・河野　史知・大森　一成　「古市遺跡（１・２区）、下苅屋遺跡２次調査地」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅸ』㈶松山市埋蔵文化財センター 1997
山本　健一・山之内志郎　「古市遺跡２次調査地」「五楽遺跡」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅸ』松山市教育委員会・㈶松山市埋蔵文化財センター 1997

遺構・遺物一覧

(1)　以下の表は遺構・遺物の計測値及び観察一覧である。

(2)　遺物観察表の各表記について。

法量欄（　）：復元推定値

形態・施文欄：土器の各部位名称を略記。

例）天→天井部、口→口縁部、口端→口縁端部、口頸→口縁・頸部、頸→頸部、肩→肩部、把→把手、胴→胴部、胴上→胴部上位、胴下→胴部下位、坏→坏部、坏底→坏底部、脚→脚部、底→底部

胎土・焼成欄：胎土欄では混和剤を略記した。

例）砂→砂粒、長→長石、石→石英、密→精製土、金→金雲母

（　）内の数値は混和剤粒子の大きさを示す。（単位：mm）

焼成欄の略記について。◎→良好、○→良、△→不良

表43　竪穴式住居址一覧

竪穴(SB)	時期	平面形	規模(m) 長さ(長径)×幅(短径)×深さ	埋土	床面積(㎡)	主柱穴(本)	内部施設				周壁溝	備考
							高床	土坑	炉	カマド		
1	6C末～7C初頭	方形	2.75以上×2.2以上×0.22	暗褐色土	5.9以上	1						SX 1を切る
2	6C末～7C初頭	隅丸方形	5.86×2.72以上×0.16	灰褐色土 暗褐色土	13.54以上			○				SK 3・4を切る
3	7C中葉	方形	2.68×2.45×0.19	灰褐色土 暗灰褐色土	5.24			○		○		SK 5を切り、SK 2に切られる
4	7C初頭～7C前半	不明	1.8以上×1.0以上×0.2	黒灰色土	1.32以上							
5	7C前半	方形	6.4×6.3×0.8	暗褐色土 黒褐色土	36.52							
6	7C前半	方形	6.75×4.03×0.24	暗褐色土 黒褐色土	27.14以上							SD 10に切られる
7	6C後半	方形	6.4×6.3×0.10～0.35	灰黄褐色土 暗褐色砂質土	29.04							SR 1に切られる

表44　竪穴式住居址の炉・カマド一覧

竪穴(SB)	時期	炉	カマド	位置	平面形	規模(m) 長さ(長径)×幅(短径)×高さ	出土遺物	備考
3	7C中葉		○	G・7	不整形	1.16×0.77×0.17	須恵・土師	面積0.88㎡

表45　掘立柱建物址一覧

掘立	規模(間)	方向	桁行		梁行		方位	床面積(㎡)	時期	備考
			実長(m)	柱間寸法(m)	実長(m)	柱間寸法(m)				
1	4×1間以上	南北	6.3	1.8・1.3・1.45・1.75	2.1以上	2.1・α	N-17°-E	13.2以上	6C末～7C初頭	
2	3×2	東西	4.57	1.62・1.35・1.6	4.11	1.78・2.33	W-1°-N	18.8	6C末～7C初頭	SD 3を切る
3	4×3	南北	7.08	1.62・2.16・1.98・1.32	5.32	2.16・1.78・1.38	N-7°-E	38.9	6C末～7C初頭	SD 4を切る
4	4×α	東西					N-64°-E	16.54以上	7C前半	
5	1×α						N-79°-E	0.24以上	7C前半	

表46　溝一覧

(1)

溝(SD)	地区	断面形	規模(m) 長さ×幅×深さ	方向	埋土	出土遺物	時期	備考
1	B～C・8～9	逆台形状	6.7以上×0.32～0.82×0.08～0.13	東西	灰褐色土	土師・磁器	中世	
2	C・9	レンズ状	2.83×0.6×0.08	南北	暗灰褐色土 灰褐色土	ナシ	中世	
3	F～I・11～12	レンズ状	9.7以上×0.3～0.82×0.01～0.08	東西	灰褐色土	須恵・土師	6C末～7C初頭	掘立2に切られる
4	E～F・10～11	レンズ状	3.2×0.4～0.54×0.01～0.08	南北	灰褐色土	須恵・土師	6C末～7C初頭	掘立3に切られる
5	F・11～12	逆台形状	3.9以上×0.5×0.16	南北	黒褐色土	土師	7C中葉以前	SB 3に切られる
6	D・3～4	皿状	4.8×0.8～1.5×0.06	北南	灰白色砂質土	土師・陶磁器	中世以降	
7	D・2～4	皿状	6.1×0.4～0.68×0.08	北南	灰白色砂質土	土師・陶磁器	中世以降	

溝一覧

(2)

溝(SD)	地　区	断面形	規　模(m) 長さ×幅×深さ	方　向	埋　土	出土遺物	時　期	備　考
8	B～E・1～4	逆台形状	12.3×0.48～0.72×0.28～0.32	南東	暗褐色土	須恵・土師	6Ｃ後半	掘立４・SK 6に切られる
9	K・14～16	レンズ状	7.9×0.52～0.56×0.09～0.16	南北	暗灰褐色土 灰褐色土	須恵・土師	7Ｃ前半	SR 1に切られる
10	I～J・15	逆台形状	4.35×0.35～0.45×0.04～0.06	東西	灰褐色土	須恵・土師	7Ｃ前半	SB 6を切る
11	J～M・18	逆台形状	10.6×0.45～0.50×0.07×0.08	東西	灰色土	須恵・土師	古代以降	SR 1を切る
12	3区中央部	逆台形状	4.65×0.24～0.48×0.07×0.12	東西	灰褐色土	ナシ	中世	
13	4区南東～北西部	皿状	12.2×0.82～1.95×0.06～0.11	南西	灰褐色土	土師	中世	
14	4区東部	皿状	4.4×1.2～1.6×0.04×0.13	東西	灰褐色土	ナシ	中世	

表47　土坑一覧

土坑(SK)	地　区	平面形	断面形	規　模(m) 長さ(長径)×幅(短径)×深さ	床面積(㎡)	埋　土	出土遺物	時　期	備　考
1	D～E 9	長方形	逆台形状	3.04×1.75×0.30	5.19	暗灰褐色土 暗灰黄褐色土 暗黄褐色土	須恵・土師	6Ｃ末～ 7Ｃ初頭	
2	G・12	円形	逆台形状	1.25×1.08×0.28	1.05	暗灰褐色土	須恵・土師	7Ｃ中葉以降	SB 3を切る
3	H 12～13	円形	U字状	1.18×1.12×0.53	1.07	灰褐色土 暗灰褐色土	須恵・土師	6Ｃ末～ 7Ｃ初頭	SB 2に切られる
4	G～H 12	不整 楕円形	U字状	1.57×1.15×0.94	1.31	暗灰褐色土 灰褐色土 灰褐色土 暗褐色土	須恵・土師	6Ｃ末～ 7Ｃ初頭以前	SB 2に切られる
5	F～G 12～13	楕円形	舟底状	1.20×0.8×0.23	0.78	明黄褐色土 暗褐色土 灰黄褐色砂質土	土師	7Ｃ中葉以前	SB 3に切られる
6	C・3	円形	逆台形状	1.22×1.06×0.64	0.97	黒褐色土	須恵	7Ｃ中葉	SD 8を切る
7	C・3	隅丸方形	逆台形状	0.92×0.8×0.08～0.16	0.74	黒褐色土	須恵	7Ｃ前半	SK 8を切る
8	C・3	方形	皿状	1.2×1.1×0.06	1.32	茶褐色土	ナシ	7Ｃ前半以前	SK 7に切られる
9	I・16	楕円形	逆台形状	0.72×0.38×0.15	0.26	灰褐色土	須恵・土師	古墳後期	
10	H～I 16	楕円形	U字状	1.03×0.49×0.43	0.46	灰褐色土 黄灰色土	須恵・土師	古墳後期	

表48　性格不明遺構一覧

性格不明遺構(SX)	地　区	平面形	断面形	規　模(m) 長さ(長径)×幅(短径)×深さ	床面積(㎡)	埋　土	出土遺物	時　期	備　考
1	D～E 6～7	不明	不明	3.75以上×2.2以上×0.15	5.31以上	黒色粘質土	弥生	弥生	SB 1に切られる
2	C～D 3～4	不整形	レンズ状	4.0×2.6×0.12～0.24	9.33以上	茶褐色土 黒色粘質土	弥生	弥生中期末葉	

表49　SB 1　出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形　態・施　文	調　整		色調	胎　土 焼　成	備考	図版
				外　面	内　面	(外面) (内面)			
1	坏蓋	口径 (12.8) 残高 2.1	口縁端部内面に明瞭な段をもつ。	㊦回転ナデ ㊤回転ナデ→ナデ	㊦回転ナデ ㊤回転ナデ→ナデ	灰黄色 灰色	密 ◎		
2	坏身	口径 (11.9) 残高 2.0	外方向に延びる受部に、内傾する立ち上がりをもつ。	マメツ	マメツ	灰白色 淡黄色	密 △		

表50　SK 1　出土遺物観察表　土製品　(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
3	坏蓋	稜径 (13.6) 残高 4.6	天井部と口縁部の境界に稜が残る。	マメツ	マメツ	乳白色 乳白色	砂 △		
4	坏蓋	口径 (12.4) 器高 3.6	天井部と口縁部の境界は、僅かに稜をもつ。	㊦回転ヘラケズリ 3/5 ㊐回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	長(1) 砂 ◎		
5	坏蓋	口径 (11.4) 残高 4.0	内湾して下がる口縁部に、端部は尖り気味である。	㊦回転ヘラケズリ 1/2 ㊐回転ナデ	回転ナデ	暗灰色 灰色	長(1) ◎		
6	坏蓋	口径 (14.4) 残高 3.7	天井部と口縁部の境界の稜は消失する。	㊦回転ヘラケズリ 2/3 ㊐回転ナデ	回転ナデ	暗灰色 灰色	密 ◎		
7	坏蓋	口径 (15.0) 残高 4.0	内湾して下がる口縁部に、端部は丸くおさまる。	回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙色 浅黄橙色	長(1) △		
8	坏蓋	口径 13.2 器高 4.2	内湾しながら下がる口縁部である。	マメツ	回転ナデ	灰色 浅黄色	長(1～2) △		
9	坏蓋	口径 (12.8) 残高 3.8	内湾して下がる口縁部に、端部は丸くおさまる。	㊦回転ヘラキリ ㊐回転ナデ	回転ナデ	暗灰色 灰色	長(1) ◎	自然釉	43
10	坏蓋	口径 (12.8) 残高 3.6	内湾して下がる口縁部に、内傾する端部をもつ。	㊦回転ヘラキリ 回転ヘラケズリ ㊐回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰白色	長(1) ◎		
11	坏蓋	口径 (13.8) 残高 3.6	内湾して下がる口縁部に、端部は下方にのびる。	㊦回転ヘラケズリ ㊐回転ナデ	回転ナデ	オリーブ黒色 灰白色	密 ◎	自然釉	
12	坏蓋	口径 (13.0) 残高 3.5	内湾して下がる口縁部に、端部は丸くおさまる。	㊦回転ヘラケズリ ㊐回転ナデ	回転ナデ	青灰色 灰色	長(1) ◎		
13	坏蓋	口径 (12.8) 残高 3.1	天井部と口縁部の境界は凹む。	㊦回転ヘラケズリ ㊐回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	長(1) ◎		
14	坏蓋	口径 (12.8) 残高 2.5	内湾して下がる口縁部、端部内側に段を有する。	㊦回転ヘラケズリ 1/3 ㊐回転ナデ	回転ナデ	暗灰色 灰色	密 ◎		
15	坏蓋	口径 (15.5) 残高 4.1	内湾気味に下がる口縁部、端部は下方にのびる。(歪んでいる)	㊦回転ヘラケズリ ㊐回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	石・長(1) ◎	自然釉	43
16	坏蓋	口径 (8.8) 残高 2.5	かえりが口縁端部より下方にある。	㊦回転ヘラケズリ 1/2 ㊐回転ナデ	回転ナデ	灰色 オリーブ灰色	長(1) ○		
17	坏身	口径 13.9 器高 3.7	受部端に沈線状の凹みあり。	㊐回転ナデ ㊧回転ヘラケズリ 2/3	回転ナデ	青灰色 灰色	長(1～2) 砂 ◎		43
18	坏身	口径 11.7 器高 4.7	立ち上がりは内傾し、受部は外方にのびる。(歪んでいる)	㊐回転ナデ ㊧回転ヘラケズリ 3/5	回転ナデ	暗灰色 暗灰色	石・長(1～3) ○		43
19	坏身	口径 10.5 器高 4.0	受部端に沈線状の凹みあり。	㊐回転ナデ ㊧回転ヘラケズリ 1/2	回転ナデ	灰色 灰白色	長(1～2) 砂 ◎		
20	坏身	口径 (11.0) 残高 3.9	受部端に沈線状の凹みあり。	㊐回転ナデ ㊧回転ヘラケズリ 1/2	回転ナデ	灰白色 灰色	密 ◎		
21	坏身	口径 (11.4) 器高 3.2	受部端に沈線状の凹みあり。	㊐回転ナデ ㊧回転ヘラケズリ 2/3	㊐回転ナデ ㊧ナデ	灰色 灰白色	長(1) 砂 ○	自然釉	43
22	坏身	口径 (10.8) 残高 3.0	受部端に沈線状の凹みあり。	㊐回転ナデ ㊧回転ヘラケズリ 1/2	回転ナデ	暗灰色 灰色	密 ◎		

SK 1　出土遺物観察表　土製品　(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
23	坏身	口径 (12.7) 残高 3.5	立ち上がりは内傾し、受部は外上方にのびる。	㊐回転ナデ ㊞回転ヘラケズリ 1/2	回転ナデ	灰色 灰色	長(1) ◎		
24	坏身	口径 (12.1) 残高 3.5	受部端が外上方にのびる。	㊐回転ナデ ㊞回転ヘラキリ	回転ナデ	灰色 灰色	長(1) 砂 ◎		
25	坏身	口径 11.2 器高 4.1	立ち上がりは内傾し、受部は太くやや上外方にのびる。	㊐回転ナデ ㊞回転ヘラケズリ 2/3	回転ナデ	灰白色 灰白色	密 ○		
26	坏身	口径 (11.3) 残高 3.2	立ち上がりは短く、上外方にのびる受部をもつ。	回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙色 浅黄橙色	長(1) 砂 △		
27	坏身	口径 (9.6) 残高 2.8	口縁端面はやや凹み、内側に肥厚される。	㊐ナデ ㊞回転ヘラキリ	回転ナデ	灰色 灰色	長(1) 砂 ◎	自然釉	
28	坏身	口径 (9.0) 器高 3.2	外反気味の口縁部に、端部は平らな面をなす。	㊐回転ナデ ㊞回転ヘラキリ	回転ナデ	青灰色 白灰色	長(1) ◎		43
29	高坏	口径 11.9 器高 5.0 底径 (8.7)	坏部は立ち上がりが上方、受部は外上方にのび、脚は短脚である。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	長(1) ◎		43
30	高坏	底径 (9.4) 残高 2.2	ラッパ状に広がる短脚である。	回転ナデ	回転ナデ	暗灰色 暗灰色	長(1) ◎		
31	高坏	底径 (13.4) 残高 12.9	３方向に２段の透かしが施される。	回転ナデ	脚上しぼり痕 脚下回転ナデ	灰色 灰色	長(1～2) ◎		
32	高坏	底径 (11.0) 残高 2.7	裾部はラッパ状に広がり、端面は斜めに面をなす。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		
33	高坏	底径 (14.9) 残高 1.9	ラッパ状に広がる裾部に、透かしが施されている。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	長(1) ◎		
34	壺	口径 (13.5) 残高 14.5	緩やかに外傾する口縁部。	㊐カキメ ㊍回転ナデ	回転ナデ	青灰色 灰色	長(1～2) ◎		
35	壺	胴径 (15.2) 残高 7.0	扁球形の胴部。	回転ナデ	回転ナデ	緑黒色 緑黒色	長(1) 砂 ◎	自然釉	
36	壺	底径 (4.8) 残高 8.7	上胴部に３条の凹線が施される。	胴上回転ナデ 胴下回転ヘラケズリ	回転ナデ	灰色 灰白色	密 ◎		
37	横瓶	口径 (10.2) 残高 6.0	僅かに外傾する口縁部。	回転ナデ	㊐回転ナデ ㊍ナデ	青灰色 青灰色	長(1) ◎		
38	台付壺	底径 (16.8) 残高 5.9	内湾しながら下がる脚部に透かしが施される。	カキメ	回転ナデ	灰色 灰色	長(1～2) 砂 ◎		
39	甕	口径 (17.9) 残高 5.6	「く」の字状の口縁部、端部は内湾する。	回転ナデ	マメツ	灰白色 灰白色	石・長(1) △		
40	甕	口径 (14.9) 残高 3.5	口縁部は段をなし外傾する。	回転ナデ	回転ナデ	オリーブ黒色 暗オリーブ灰色	密 ◎	自然釉	
41	甕	胴径 (10.0) 残高 4.4	上胴部に２条の沈線と刺突文が施される。	胴上回転ナデ 胴下回転ヘラケズリ	回転ナデ	暗青灰色 暗青灰色	長(1) ◎		
42	平瓶	口径 6.1 残高 14.5	扁球形。頸部に１条、胴部に２条の凹線。	回転ナデ	㊐㊍回転ナデ ㊞ナデ	明オリーブ色 灰色	密 ○	自然釉	43

SK 1　出土遺物観察表　土製品　(3)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
43	蓋	口径 (3.0) 残高 3.1	上方向にのびるつまみを有する。	回転ナデ	㊀回転ナデ ㊁ナデ	灰色 灰色	長(1～2) 砂 ◎		
44	甕	口径 (19.1) 残高 4.3	「く」の字状で内湾気味の口縁部。	マメツ	マメツ	橙色 橙色	石・長(1～2) 金 ○		
45	甕	口径 (16.4) 残高 5.8	「く」の字状の口縁部。	㊀ヨコナデ ㊁ハケ(4/cm)	マメツ	橙色 橙色	石・長(1～3) △		
46	甕	口径 (16.6) 残高 4.1	緩い「く」の字状の口縁部に、端面は平らな面をなす。	マメツ	マメツ	橙色 橙色	石・長(1～4) 砂 ○		
47	甕	口径 (16.1) 残高 3.5	緩やかに「く」の字状を呈する口縁部、頸部はやや凹む。	㊀マメツ ㊁ハケ	マメツ	赤褐色 橙色	石・長(1～5) 砂・金 ○		
48	甕	口径 (29.9) 残高 11.8	内湾する胴部に、ゆるやかに外反する口縁部をもつ。	マメツ	マメツ	暗灰色 橙色	石・長(1～2) 砂 ○		
49	甑 (把手)	残高 7.0	湾曲して外上方にのびる。	マメツ	ナデ	暗褐色 橙色	石・長(1～2) ◎		
50	甑 (把手)	残高 4.6	湾曲して外上方にのびる。	ナデ・指頭痕	マメツ	橙色 淡黄橙色	石・長(1～4) 砂 ◎		
51	高坏	底径 (13.6) 残高 3.0	ラッパ状に広がる脚裾部内面に稜をもつ。	マメツ	ヨコナデ	橙色 橙色	長(1) ◎		

表51　第Ⅶ層出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
52	坏蓋	口径 (14.6) 残高 2.9	口縁端部内側に、かすかに段を有する。	回転ナデ	回転ナデ	浅茶色 灰色	長(1) ◎		
53	坏蓋	口径 (14.4) 残高 2.8	天井部と口縁部の境界に、不明瞭な凹みがみられる。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	密 ○		
54	坏蓋	口径 (14.0) 残高 2.1	内湾して下がる口縁部。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎		
55	坏蓋	口径 (11.4) 残高 2.7	内湾して下がる口縁部。	回転ナデ	回転ナデ	灰黒色 明灰色	密 ○		
56	坏身	稜径 (17.0) 残高 3.2	受部に水平な面をもつ。	㊀回転ナデ ㊁回転ヘラケズリ	回転ナデ	灰色 青灰色	長(1) ◎		
57	坏身	口径 (12.4) 残高 2.4	立ち上がりは内傾し、受部端が凹む。	回転ナデ	回転ナデ	黄白色 白黄色	密 △		
58	坏身	口径 (10.1) 器高 3.4	受部端に沈線状の凹をみもつ。	㊀回転ナデ ㊁回転ヘラケズリ 1/2	回転ナデ	灰色 灰色	長(1) ◎		
59	高坏	脚底径 (12.2) 残高 1.2	ラッパ状に広がる脚裾端部が、上方に肥厚される。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		
60	高坏	脚底径 (10.3) 残高 0.7	脚裾端部が下方に肥厚される。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰白色	長(1) ○		

表52　SD 1　出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
61	土釜	口径 (19.8) 残高 2.2	口縁端部外側に、断面三角形の凸帯がつく。	ナデ	ナデ ハケ	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	石(1～2) 長(1) 金 ○		
62	碗	口径 (11.0) 残高 2.0	外面に草花文が施される。	施釉	施釉	灰白色・ 灰オリーブ色 灰オリーブ色	密 ○		

表53　第Ⅵ層出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
63	土釜	口径 (24.0) 残高 2.1	外傾気味の口縁部に、下膨れ気味の断面三角形の貼付凸帯をもつ。	ヨコナデ	ハケ	褐色 黄橙色	石・長(1～2) 砂 ○		
64	土釜	口径 (35.5) 残高 3.9	外傾する口縁部に、丸みのある断面三角形の貼付凸帯をもつ。	マメツ	ハケ	褐色 赤褐色	石・長(1～2) 砂 ○		44
65	土釜	口径 (25.4) 残高 3.1	内湾する口縁部の、端部よりやや下がる位置に、断面三角形の貼付凸帯をもつ。	マメツ	ハケ(10本/cm)	褐色 褐色	石・長(1～3) 砂 ○	煤付着	44
66	土釜	口径 (21.6) 残高 2.8	内湾する口縁部の端部に、下膨れ形の貼付凸帯をもつ。	ナデ	ナデ	浅茶色 浅茶色	石・長(1～5) 金 ○		44
67	土釜 (脚)	残高 11.9	平底の底部に脚部は下方にのびる。	ヨコナデ	ヨコナデ・指頭痕	褐色 褐色	石・長(1～4) ◎	煤付着	44
68	土釜 (脚)	脚最大径 2.7 残高 8.3	下方にのびる脚の断面は、円形である。	マメツ		黄褐色 黄橙色	石・長(1～3) 砂 ◎		44
69	皿	口径 (11.2) 器高 2.1 底径 (8.0)	平底の底部より外反気味に立ち上がり、口縁端部は丸くおさまる。	㊐ヨコナデ ㊡回転糸切り	ヨコナデ	乳黄色 乳黄色	密 ◎		44
70	皿	口径 (10.3) 器高 2.1 底径 (7.5)	平底の底部より外反気味に立ち上がり、口縁端部は丸くおさまる。	ヨコナデ	ヨコナデ	乳黄色 乳黄色	密 ◎		44
71	土錘	全長 3.2 外径 1.3 内径 0.4	中心部に孔を開けている。			灰黄褐色 黄灰色	細粒 ○		44

表54　SB 2　出土遺物観察表　土製品　(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
72	坏蓋	口径 (13.0) 残高 3.4	内湾して下がる口縁部、端部付近は下方にのびる。	㊦回転ヘラケズリ 1/2 ㊐回転ナデ	回転ナデ	暗青灰色 紫灰色	石(1～3) 砂 ◎		
73	坏蓋	口径 (11.0) 残高 4.0	内湾して下がる口縁部に、端部は外反する。	㊦回転ヘラケズリ ㊐回転ナデ	回転ナデ	淡黄色 橙色	長(1) 砂 △		
74	坏蓋	口径 (13.0) 器高 3.0	天井部と口縁部の境界の稜は消失しており、口縁端部は丸くおさまる。	㊦回転ヘラケズリ 2/5 ㊐回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	長(1) ◎		
75	坏蓋	口径 (13.2) 残高 2.6	内湾しながら下がる口縁部。	㊦回転ヘラケズリ ㊐回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	長(1) ○		
76	坏身	口径 (12.4) 残高 4.3	口縁端に沈線状の凹みあり。	㊐回転ナデ ㊡回転ヘラケズリ 1/2	回転ナデ	オリーブ灰色 オリーブ灰色	石・長(1～5) ◎		

SB 2　出土遺物観察表　土製品　(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
77	坏身	口径 (11.2) 残高 2.7	立ち上がりは上方、受部は外方にのびる。	回転ナデ	回転ナデ	灰オリーブ色 灰白色	長(1) ◎	自然釉	
78	坏身	口径 (15.0) 残高 3.2	立ち上がりは内傾し、受部は外上方にのびる。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰白色	石・長(1～2) ○		
79	坏身	口径 12.3 器高 4.4	立ち上がりは内傾し、外方にのびる受部は短い。	ⓘ回転ナデ 底回転ヘラケズリ 1/2	回転ナデ	青灰色 灰色	密 ◎		
80	坏身	口径 (10.0) 残高 2.0	外傾気味の口縁部に、端部は外方に肥厚する。	回転ナデ	回転ナデ	暗青灰色 灰色	石・長(1～2) ◎		
81	壺	口径 (14.0) 残高 5.5	外傾する口縁部の端部が、段状を呈する。	回転ナデ	回転ナデ	オリーブ黒色 灰色	長(1) 砂 ◎		

表55　SB 2　出土遺物観察表　石製品

番号	器種	残存	材質	法量 長さ(cm)	法量 幅(cm)	法量 厚さ(cm)	法量 重さ(g)	備考	図版
82	砥石	一部	凝灰岩	4.9	5.6	5.17	186.60		44

表56　SB 3　出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
83	坏蓋	口径 (14.8) 残高 3.4	天井部と口縁部の境界に稜がみられる。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ○	自然釉	
84	坏蓋	口径 (12.2) 残高 3.9	天井部と口縁部の境界に稜はみられない。	天回転ヘラケズリ ⓘ回転ナデ	回転ナデ	青灰色 灰白色	長(1) 砂 ◎		
85	坏蓋	口径 9.9 つまみ高 1.4 天井高 2.3	かえりが口縁端部と同じ高さ。	マメツ	マメツ	灰色 灰色	密 △		44
86	坏蓋	口径 8.1 つまみ高 0.7 天井高 2.2	かえりが口縁端部より下にのびる。	つまみⓘ回転ナデ 天回転ヘラケズリ 1/2	回転ナデ	灰白色 灰白色	密 ○		44
87	坏身	口径 (13.5) 残高 3.4	受部端に沈線状の凹みあり。	ⓘ回転ナデ 底回転ヘラケズリ	回転ナデ	灰色 灰白色	長(1) ◎		
88	坏身	口径 (14.0) 残高 3.1	受部端に沈線状の凹みあり。	回転ナデ	回転ナデ	灰オリーブ色 灰色	長(1～2) 砂 ○	自然釉	
89	坏身	口径 (13.2) 残高 2.8	受部端に沈線状の凹みあり。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	石・長(1～3) ◎		
90	坏身	口径 (10.3) 器高 5.8	平底の底部より、外反気味に立ち上がる。	ⓘ回転ナデ 底回転ヘラキリ	回転ナデ	灰白色 灰白色	長(1) ○		
91	坏身	口径 8.6 器高 3.2 底径 5.8	底部端が外反し、外傾気味に立ち上がり、端部は丸くおさまる。	ⓘ回転ナデ 底回転ヘラキリ	回転ナデ	灰色 灰白色	長(1) 砂 ○		44
92	埦	口径 (11.3) 器高 5.4	外反する口縁部。	マメツ	マメツ	明黄色 橙色	石・長(1) △		

表57　SD 3　出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
93	坏蓋	口径 (14.8) 残高 2.4	内湾気味に下がる口縁部、端部内側に段を有する。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	長(1) ◎		
94	坏身	口径 (12.4) 残高 3.7	立ち上がりは内傾気味、受部は外方にのびる。	マメツ	マメツ	淡黄色 淡黄色	石・長(1～2) △		
95	坏身	口径 (11.4) 残高 2.7	受部端に沈線状の凹みあり。	㊀回転ナデ ㊁回転ヘラケズリ	回転ナデ	灰色 灰白色	密 ◎		
96	坏身	口径 (11.8) 残高 3.8	受部端に沈線状の凹みあり。	㊀回転ナデ ㊁回転ヘラケズリ 3/5	回転ナデ	灰色 青灰色	石・長(1～2) ◎		

表58　SK 3　出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
97	坏蓋	口径 (13.0) 残高 3.4	天井部と口縁部の境界の稜は消失する。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		
98	甕	口径 (15.5) 残高 2.8	口縁部は外反し、端部は外下方にのびる。	マメツ	回転ナデ	乳白色 乳白色	密 △		

表59　SK 4　出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
99	坏蓋	口径 (11.4) 残高 2.2	内湾して下がる口縁部。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	長(1) 砂 ◎		
100	坏蓋	口径 (12.0) 残高 3.9	内湾して下がる口縁部。	㊅回転ヘラキリ ㊀回転ナデ	回転ナデ	暗青灰色 暗青灰色	密 ◎		
101	坏身	口径 (13.4) 残高 2.0	受部端に沈線状の凹みあり。	回転ナデ	回転ナデ	灰赤色 暗紫灰色	長(1～2) ◎		
102	甕	口径 (11.8) 残高 4.7	外反する口縁部は段をもち、さらに外反する。	口端回転ナデ 口頸ハケ(8本/cm)	回転ナデ	暗青灰色 暗青灰色	長(1) ◎		

表60　第Ⅶ層出土遺物観察表　土製品　(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
103	坏蓋	口径 (15.5) 残高 2.6	天井部と口縁部の境界は、僅かに稜をもつ。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	石・長(1～3) ◎		
104	坏蓋	口径 (10.0) 残高 2.5	内湾して下がる口縁部、端部内側に段を有する。	回転ナデ	回転ナデ	黒色 灰色	長(1) ◎		
105	坏蓋	口径 (14.2) 残高 2.5	内湾しながら下がる口縁部。	回転ナデ	回転ナデ	暗灰色 灰色	密 ◎		
106	坏蓋	口径 (13.0) 残高 2.4	内湾して下がる口縁部。	㊅回転ヘラケズリ ㊀回転ナデ	回転ナデ	暗灰色 灰色	長(1) 砂 ◎		
107	坏蓋	口径 (13.4) 残高 3.5	内湾しながら下がる口縁部。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	長(1～2) 砂 ◎		

第Ⅶ層出土遺物観察表　土製品

(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
108	坏蓋	口径 (12.2) 残高 3.3	天井部と口縁部の境界の稜は消失する。	天回転ヘラケズリ 口回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	長(1) 砂 ◎		
109	坏蓋	口径 (14.0) 器高 3.8	天井部と口縁部の境界の稜は消失する。	天回転ヘラケズリ 1/2 口回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	石・長(1～3) 砂 ◎		
110	坏蓋	口径 (14.2) 残高 2.6	天井部と口縁部に境界をもち、端部は下方にのびる。	天回転ヘラケズリ 口回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		
111	坏身	口径 (12.0) 器高 4.0	受部端に沈線状の凹みあり。	口回転ナデ 底回転ヘラケズリ 1/2	回転ナデ	灰色 灰色	石・長(1～4) ◎		
112	坏身	口径 (11.9) 残高 2.7	受部端に沈線状の凹みあり。	回転ナデ	回転ナデ	暗灰色 灰色	密 ◎		
113	坏身	口径 (12.0) 残高 2.6	受部は上外方にひねり出されている。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	石・長(1～3) 砂 △		
114	坏身	口径 (12.4) 残高 2.6	受部端に沈線状の凹みあり。	口回転ナデ 底回転ヘラケズリ	回転ナデ	明オリーブ灰色 灰黄色	長(1) △		
115	坏身	口径 (12.8) 残高 2.7	立ち上がりは内傾し、受部は外方にのびる。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	石(1～3) 砂 ○		
116	坏身	口径 (13.2) 残高 3.3	立ち上がりは内傾し、受部は外方にのびる。	口回転ナデ 底回転ヘラケズリ	回転ナデ	青灰色 青灰色	石・長(1～3) ◎		
117	坏身	口径 (11.8) 残高 3.5	立ち上がりは内傾し、端部は尖り気味に丸い。	回転ナデ	回転ナデ	暗灰色 青灰色	長(1) ◎		
118	坏身	口径 (12.6) 残高 2.4	受部端に沈線状の凹みあり。	回転ナデ	回転ナデ	明オリーブ灰色 灰白色	長(1) 砂 △		
119	高坏	つまみ径 (3.2) 残高 2.5	つまみ上面凹む。	つまみ回転ナデ 天回転ヘラケズリ	回転ナデ	褐灰色 褐灰色	長(1～2) 砂 ◎		
120	高坏	脚底径 (13.5) 残高 1.5	ラッパ状に広がる脚裾部の端部は、上下に肥厚される。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	石・長(1～3) ○		
121	高坏	脚底径 9.5 残高 4.3	ラッパ状に広がる脚裾部に、端部は平らな面をなす。	坏底回転ナデ 脚回転ナデ→ナナメナデ	回転ナデ	浅黄色 浅黄色	長(1) △		
122	提瓶	口径 (8.2) 残高 3.9	外反する口縁部に端部は丸くおさまる。	回転ナデ	回転ナデ	黒色 紫灰色	石・長(1～4) ◎		

表61　SX 2　出土遺物観察表　土製品

(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
123	甕	口径 (15.2) 残高 2.3	口縁端部は内上方にのびる。口縁端部外面に2条の凹線を施す。	口ナデ	ナデ	灰白色 明褐色	石・長(1) ○		
124	甕	底径 7.7 残高 2.6	平底の底部。	胴マメツ 底ナデ	マメツ	褐色	石・長(1～5) ◎		
125	甕	底径 (5.2) 残高 1.3	平底の底部。底部の器壁は薄い。	胴～底ナデ	ナデ	暗灰色 明褐灰色	石・長(1～3) ◎		

SX 2　出土遺物観察表　土製品　(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
126	甕	底径 (5.0) 残高 7.9	上げ底の底部。	胴ヘラミガキ (指頭痕) 底ナデ	ハケメ→ナデ	灰褐色 褐灰色	石・長(1～4) ◎		
127	甕	底径 5.5 残高 2.8	上げ底の底部。	胴～底ナデ 剝離し不明	底ナデ	明褐色	石・長(1～5) ◎		
128	甕	底径 5.2 残高 3.0	上げ底の底部。器壁は厚い。	マメツ	マメツ	灰白色 黒褐色	石・長(1～6) ○		

表62　SB 4　出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
129	坏身	受部径 15.6 残高 2.0	立ち上がりは内傾する。受部は上方にのびる。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色	長(細粒) ◎		

表63　掘立 4　出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
130	坏身	口径 (11.0) 残高 2.7	立ち上がりは上方に短くのびる。口縁端部は丸くおさめる。受部は水平にのびる。	回転ヘラケズリ	回転ヘラケズリ	灰色	長(細粒) ◎		
131	(手捏)壺	残高 5.9	頸部は「く」の字状を呈し、口縁部は外方に開く。	剝～胴ナデ (工具痕)	ナデ	明褐色	石・長(1～2) ○		

表64　掘立 5　出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
132	坏蓋	口径 (13.9) 残高 2.9	天井部欠失。天井部と口縁部の境は不明瞭。口縁端部は丸い。	回転ヘラケズリ	回転ヘラケズリ	青灰色 灰白色	長(細粒) ○		
133	坏蓋	口径 (13.1) 残高 2.3	天井部欠失。天井部と口縁部の境は不明瞭。口縁端部は丸い。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色	長(細粒) ○		
134	坏身	口径 (12.5) 残高 2.1	立ち上がりは内傾し短くのびる。口縁端部は丸くおさめる。	回転ヘラケズリ	回転ヘラケズリ	灰色	長(細粒) ○		
135	坏身	口径 (10.9) 残高 2.1	立ち上がりは内傾して上方に短くのびる。口縁端部は丸くおさめる。受部は上方にのびる。	回転ナデ	回転ナデ	白色 黄橙色	長(細粒) △	赤焼	

表65　SD 8　出土遺物観察表　土製品　(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
136	坏身	底径 5.7 残高 2.0	口縁部欠失。底部は平坦。	底回転ヘラケズリ 胴回転ナデ	回転ナデ	暗青灰色 明青灰色	石・長(細粒～1) ◎		
137	甕	口径 (14.0) 残高 2.0	口縁端部は丸い。	ヨコナデ	ヨコナデ	灰色	石・長(細粒) ○		
138	器台	脚底径 (29.3) 残高 7.8	脚部片。文様帯には櫛状工具による刺突文が施される。脚端中央に１条の凹線。	ハケ	ヨコナデ	灰白色 褐灰色	長(細粒～3) ◎		

SD 8　出土遺物観察表　土製品　(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
139	壺	残高　10.7	底部欠失。胴部は丸く肩が張らない。	㋐ヨコナデ ㋑ハケ→ナデ (指頭痕)	㋒～㋑ナデ (指頭痕)	浅黄橙色 灰白色	石・長(細粒～1) ○		
140	壺	口径 (18.1) 残高　7.2	口縁部は逆「ハ」字状に広がり、口縁端部で外方に短く屈曲する。	ナデ	ナデ	明褐灰色 褐灰色	石・長(細粒～3) ○		
141	椀	口径 (11.0) 残高　5.0	内湾して立ち上がる口縁部。口縁端部は劣る。	㋐ヨコナデ ㋑ハケ→ナデ	㋐～㋑ナデ	灰白色	石・長(細粒) ○	黒斑	
142	甑	残高　4.1	偏平な把手。先端部は上方を向く。	ナデ		浅黄橙色	石・長(細粒) ○		

表66　SK 6　出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
143	坏身	口径 (11.4) 器高　4.4	立ち上がりは内傾し上方にのびる。端部は段をなす。受部はやや上方にのびる。底部は丸い。	㋐回転ナデ ㋒回転ヘラケズリ	回転ナデ	青灰色	長(細粒～4) ◎		
144	高坏	口径　10.7 脚底径　9.5 器高　11.7	坏部の底部と口縁部の境に2条の凹線を施す。脚柱には2条の凹線を施す。脚端は内で接地する。	㋓㋔回転ヘラケズリ 回転ナデ	回転ナデ	灰色	長(細粒～3) ◎		44

表67　SK 7　出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
145	坏身	口径　(9.2) 残高　2.3	立ち上がりは内傾して短く上方にのびる。受部は水平にのびる。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色 明褐灰色	長(細粒) ○		

表68　SP 6　出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
146	坏蓋	口径 (12.5) 残高　2.6	天井部欠失。口縁端部は短く外反し、端部は丸くおさめる。	回転ナデ	回転ナデ	暗灰色 灰黄褐色	長(細粒～1) ○		

表69　SP 7　出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
147	甕	口径 (11.0) 残高　3.5	口縁部は外上方に開く。口縁端部は丸くおさめる。口縁部と体部との境に1条の沈線が巡る。	㋐ナデ ㋒ハケ→ナデ	㋐～㋓ハケ→ナデ ㋒～㋑ハケか	褐色 明褐色	石・長(細粒～3) 金 ○		

表70　第Ⅶ層出土遺物観察表　土製品　(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
148	坏身	口径　(9.6) 残高　2.8	立ち上がりは内傾し上方に短くのびる。端部は丸い。受部は上方にのびる。	㋒回転ヘラケズリ ㋐回転ナデ	回転ナデ	青灰色	長(細粒) ◎		
149	坏身	口径 (11.4) 残高　2.8	立ち上がりは内湾して上方に短くのびる。端部は丸い。受部は上方にのびる。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色	長(細粒) △		
150	甕	口径 (19.2) 残高　3.6	口縁部は外反して開く。口縁端部外面に1条の凹線を施す。	ナデ	ナデ	灰白色	長(細粒～1) ○		

第Ⅶ層出土遺物観察表　土製品　(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
151	甕	口径 (21.2) 残高 2.2	口縁部は外反して開く。	ナデ	ナデ	褐灰色	石・長(細粒) ○		
152	甕	口径 (10.8) 残高 2.8	口縁部は外方に開く。口縁端部は丸くおさめる。	ナデ	剝離の為不明	灰白色 褐色	石・長(1～2) ○		

表71　SB 5　出土遺物観察表　土製品　(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
153	坏蓋	口径 (13.0) 残高 3.7	内湾して下がる口縁部。	㊦回転ヘラケズリ 3/5 ㊐回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰色	長(1) 砂 ◎	自然釉	
154	坏蓋	口径 (13.9) 残高 3.9	丸味をもつ天井部より、内湾しながら下がる口縁部。	㊦回転ヘラケズリ ㊐回転ナデ	回転ナデ	浅茶色 濁茶色	石・長(1) ○		
155	坏蓋	口径 (13.4) 残高 3.2	内湾して下がる口縁部。	㊦回転ヘラケズリ ㊐回転ナデ	回転ナデ	暗灰色 灰白色	密 ◎	自然釉	
156	坏蓋	口径 (14.0) 残高 3.0	内湾しながら下がる口縁部に、端部は丸くおさまる。	㊦回転ヘラケズリ ㊐回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰色	密 炭混入 ○		
157	坏蓋	口径 (12.8) 残高 3.0	内湾して下がる口縁部。	㊦回転ヘラケズリ ㊐回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	長(1) 砂 ○		
158	坏蓋	口径 (14.0) 残高 3.6	内湾して下がる口縁部。	㊦回転ヘラケズリ ㊐回転ナデ	回転ナデ	青灰色 灰色	長(1) 砂 ◎		
159	坏蓋	口径 (14.2) 残高 2.9	外傾して下がる口縁部。	㊦回転ヘラケズリ ㊐回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	石・長(1～3) ◎		
160	坏蓋	口径 (13.4) 残高 3.6	やや凹む天井部より、内湾気味に下がり、口縁部は下方にのびる。	㊦回転ヘラケズリ ㊐回転ナデ	㊦ナデ ㊐回転ナデ	灰色 灰色	石・長(1～3) ○		
161	坏身	口径 (13.0) 残高 3.8	受部端に沈線状の凹みあり。	㊐回転ナデ ㊧回転ヘラケズリ	回転ナデ	暗青灰色 灰色	石・長(1～3) ◎		
162	坏身	受部径 (12.4) 残高 3.3	立ち上がりは内傾気味で、外方にのびる受部は丸味をもつ。	㊐回転ナデ ㊧回転ヘラケズリ	回転ナデ	灰黒色 灰色	密 ◎		
163	坏身	口径 (13.2) 残高 4.3	受部端に、沈線状の凹みあり。	㊐回転ナデ ㊧回転ヘラケズリ	回転ナデ	青灰色 青灰色	長(1～2) ◎		
164	坏身	口径 (13.8) 残高 3.4	受部端が凹む。	マメツ	マメツ	黄褐色 浅黄白色	石・長(1～2) △		
165	坏身	口径 (12.0) 残高 4.6	立ち上がりは内傾し、受部は外上方にのびる。	㊐回転ナデ ㊧回転ヘラケズリ 3/4	回転ナデ	灰色 灰色	石・長(1～3) ○		
166	坏身	口径 (13.2) 残高 3.4	立ち上がりは内傾気味に立ち上がり、受部は外方にのびる。	㊐回転ナデ ㊧回転ヘラケズリ	回転ナデ	灰色 灰色	長(1) 砂 ◎		
167	坏身	口径 (12.2) 残高 3.6	立ち上がりは内傾し、受部は外方にのびる。	㊐回転ナデ ㊧回転ヘラケズリ	回転ナデ	灰茶色 明茶色	密 ○		
168	坏身	口径 (11.4) 残高 4.4	受部端に沈線状の凹みあり。	㊐回転ナデ ㊧回転ヘラケズリ 3/4	回転ナデ	オリーブ灰色 オリーブ灰色	長(1～2) 砂 ◎		

SB 5　出土遺物観察表　土製品　(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
169	坏身	口径 (13.7) 残高 3.1	受部端に沈線状の凹みあり。	回転ナデ	回転ナデ	灰オリーブ色 灰色	石・長(1～2) ◎	自然釉	
170	坏身	口径 (13.0) 残高 3.2	立ち上がりは内傾し、受部は外方にのびる。	㊐回転ナデ ㊡回転ヘラケズリ	回転ナデ	青灰色 青灰色	石・長(1～4) ◎		
171	高坏	口径 (14.7) 残高 2.1	外傾する口縁部に稜がみられる。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	長(1) ◎		
172	高坏	口径 (10.8) 残高 4.7	坏部の2条の凸線に狭まれて、「ノ」字状に列点文が施される。坏基部に透かしが看取される。	㊍回転ナデ ㊡回転ヘラケズリ	回転ナデ	灰色 淡灰色	密 ◎		45
173	高坏	底径 (10.6) 残高 5.2	外反して下がる脚部に、端部は丸くおさまる。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		
174	甕	口径 (24.5) 残高 24.9	胴部は球状で、口縁端部は面をなす。	㊐回転ナデ ㊤タタキ→ナデ ㊡タタキ	㊐回転ナデ ㊤同心円文タタキ	暗灰色 黒色	密 ◎		45
175	甕	口径 (14.2) 残高 4.5	外反する口頸部外面に、ヘラ記号がみられる。	タタキ→ナデ	回転ナデ	淡灰色 淡灰色	密 ◎		
176	甕	口径 (16.4) 残高 5.6	直立気味に立ち上がる口頸部に、端部は外反する。	タタキ・指頭痕	マメツ	橙色 橙色	長(1～2) ○		
177	甕	口径 (16.1) 残高 8.0	口縁部は外反し、端部は外方にのび丸くおさまる。	㊐ハケ ㊤タタキ	㊐回転ナデ ㊤同心円文タタキ→ナデ	浅黄橙色 浅黄橙色	長(1) 砂 △		
178	壺	口径 (11.8) 残高 5.4	頸部より外反して立ち上がり、口縁端部は外方にのびる。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	長(1) ◎		
179	壺	口径 (11.1) 残高 7.3	肩部は張りが弱く、口縁部は外反し、端部は外下方へ肥厚する。	(口端)ナデ (口頸)回転ナデ ㊤カキメ	回転ナデ	灰色 灰色	長(1) 砂 △		45
180	壺	口径 (13.2) 残高 3.3	外反する口縁部に、端部は下外方にのびる。	(口端)回転ナデ (口頸)ハケ(5本/cm)	回転ナデ	暗青灰色 暗青灰色	石・長(1～2) ◎		
181	壺	残高 5.6	外傾気味に立ち上がる。	ナデ	㊤円孤タタキ ㊡回転ナデ	灰褐色 淡灰色	密 ◎		
182	平瓶	口径 (8.6) 残高 4.6	外反気味の口頸部に端部は尖る。	回転ナデ	回転ナデ	黄灰色 黄灰色	石・長(1～3) ○		
183	瓿	残高 6.1	胴中位に「ノ」字状の列点文が施される。円孔あり。	(胴上)回転ナデ (胴下)回転ヘラケズリ ㊡ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ○		45
184	甕	口径 (17.2) 残高 3.8	内湾気味の口縁部に、端面は平らな面をなす。	マメツ	ヨコナデ	橙茶色 橙茶色	石・長(1～2) △		
185	甑	残高 4.5	湾曲して上外方にのびる。	ナデ	マメツ	明茶色 明茶色	長(1～2) ○		
186	坏蓋	口径 (13.8) 残高 4.1	天井部と口縁部の境界に稜がみられ、口縁端部内面に不明瞭な段を有する。	㊦回転ヘラケズリ ㊐回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	石・長(1～2) ○		
187	坏蓋	口径 (13.0) 器高 4.6	天井部と口縁部の境界に稜をもつ。	㊦回転ヘラケズリ 2/5 ㊐回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎		
188	坏蓋	口径 (13.4) 残高 2.7	天井部と口縁部の境界に稜をもつ。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	石・長(1～5) ◎		

SB 5　出土遺物観察表　土製品　(3)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
189	坏蓋	口径 10.8 器高 3.3	天井部と口縁部の境界に稜をもつ。	㊦ナデ ㊤回転ナデ	㊦指ナデ ㊤回転ナデ	青灰色 灰色	長(1) 砂 ◎		45
190	坏蓋	口径 (14.8) 残高 4.1	口縁端部内面に不明瞭な段あり。	㊦回転ヘラケズリ ㊤回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	長(1) ◎		
191	坏蓋	口径 (13.5) 残高 4.1	天井部から口縁部まで、内湾して下がる。	㊦回転ヘラケズリ 2/3 ㊤回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	長(1) 砂 ○		
192	坏蓋	口径 (13.3) 器高 3.9	内湾しながら下がる口縁部。	㊦回転ヘラケズリ 3/5 ㊤回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	密 ◎		
193	坏蓋	口径 (13.2) 器高 3.7	天井部と口縁部の稜は消失する。	㊦回転ヘラケズリ 3/4 ㊤回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	石・長(1～5) 砂 ◎		
194	坏蓋	口径 (14.0) 残高 2.6	内湾気味に下がる口縁部に、端部は丸くおさまる。	回転ナデ	回転ナデ	灰赤色 灰色	石・長(1) ○		
195	坏身	口径 (13.9) 器高 4.0	受部端に沈線状の凹みあり。底部は歪む。	㊤回転ナデ ㊡回転ヘラケズリ 3/5	回転ナデ	オリーブ灰色 灰色	石・長(1～3) ◎	自然釉	
196	坏身	口径 (12.0) 器高 4.4	受部端に沈線上の凹みあり。	㊤回転ナデ ㊡回転ヘラケズリ 1/2	回転ナデ	灰色 灰色	長(1～2) ◎		
197	坏身	口径 (12.8) 器高 4.5	受部端に沈線状の凹みあり。	㊤回転ナデ ㊡回転ヘラケズリ 3/4	㊤回転ナデ ㊡ナデ	灰色 灰オリーブ色	長(1～3) 砂 ○		
198	坏身	口径 (14.0) 器高 4.2	受部端に沈線状の凹みあり。	㊤回転ナデ ㊡回転ヘラケズリ 4/5	回転ナデ	青灰色 青灰色	石・長(1～5) 砂 ◎		45
199	坏身	口径 11.8 器高 4.3	受部端に沈線状の凹みあり。	㊤回転ナデ ㊡回転ヘラケズリ 1/2	㊤回転ナデ ㊡ナデ	青灰色 青灰色	長(1) ◎		45
200	坏身	口径 11.6 器高 3.7	受部端に沈線状の凹みあり。	㊤回転ナデ ㊡回転ヘラケズリ 1/2	回転ナデ	青灰色 青灰色	長(1) ◎		45
201	坏身	口径 (14.2) 残高 3.6	受部端に沈線状の凹みあり。	㊤回転ナデ ㊡回転ヘラケズリ1/2 ナデ	㊤回転ナデ ㊡ナデ	青灰色 青灰色	石・長(1～3) ◎		
202	坏身	口径 (12.2) 器高 4.2	受部端に沈線状の凹みあり。	㊤回転ナデ ㊡回転ヘラケズリ 2/3	回転ナデ	灰白色 灰白色	長(1) 砂 △		45
203	坏身	口径 (12.2) 器高 4.3	立ち上がりは内傾し、受部は外方に短い。	㊤回転ナデ ㊡回転ヘラケズリ 1/2	回転ナデ	灰色 灰色	長(1) ○		
204	坏身	口径 (10.6) 器高 3.5	立ち上がりは内傾し、受部は外上方にのびる。	㊤回転ナデ ㊡回転ヘラケズリ 2/3	回転ナデ・指ナデ	灰色 灰色	長(1) ◎		
205	高坏	口径 14.5 つまみ高 0.7 器高 4.8	天井部と口縁部の境界に、稜が僅かにみられる。	(つまみ)ナデ ㊦回転ヘラケズリ3/5 ㊤回転ナデ	回転ナデ	黒色 黒色	長(1) ◎		46
206	高坏	口径 (13.5) つまみ高 1.3 器高 3.6	天井部と口縁部の境界に稜をもつ。	(つまみ)㊤回転ナデ ㊦回転ヘラケズリ 1/2	回転ナデ	暗灰色 暗灰色	長(1) ◎		46
207	高坏	脚底径 (13.8) 残高 8.7	下方向に広がる脚部は屈曲をもち、３方向の透かしが施される。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	長(1) ◎		
208	高坏	脚底径 (14.7) 残高 7.8	ラッパ状に広がる脚部中位に凹線が２条、下位に１条みられ、３方向に透かしが施される。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		

SB 5　出土遺物観察表　土製品　(4)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
209	高坏	残高　9.9	ラッパ状に広がる脚部。	回転ナデ	回転ナデ・しぼり痕	灰色 灰色	長(1) 砂 △		
210	壺	胴径 (19.8) 残高　14.6	肩部に張りを有する。	カキメ	回転ナデ	灰色 灰色	石・長(1～5) 砂 ◎		
211	壺	口径　(6.6) 残高　7.0	胴部は球状を呈し、頸部は外傾気味に立ち上がる。	基回転ナデ 胴カキメ	回転ナデ	灰色 灰色	石・長(1～2) 砂 ○		
212	甕	口径 (17.4) 残高　2.4	外反する口縁部に、端部は肥厚される。	口端回転ナデ 口ハケ→回転ナデ	回転ナデ	灰色 黒灰色	密 ○		
213	提瓶	口径　5.8 残高　4.6	外反する口頸部に、端部は丸味をもつ。	回転ナデ	回転ナデ	灰黒色 灰色	密 ○		
214	甑	残高　12.1	外傾する胴部の外方に、断面楕円形の把手がつく。	把指ナデ 胴回転ナデ→指ナデ	同心円文タタキ→ナデ 指頭痕	青灰色 青灰色	長(1～3) ◎		
215	埦	口径 (12.3) 器高　13.4	器高が口径よりやや大きく、上胴部と下胴部に2～3条の凹みをもつ。	口ハケ(5本/cm) 胴タタキ→ヨコナデ 底ケズリ	回転ナデ	暗灰色 暗灰色	石・長(1～2) 砂 ◎		46
216	器台	残高　8.2	脚部に4方向の透かしを刻み、2条の凹線を狭んで、列点文が施される。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	石・長(1～3) ◎		
217	甕	口径 (19.3) 残高　6.3	「く」の字状の口縁部に、端部は平らな面をなし、頸部は凹む。	口ヨコナデ 胴ハケ(8本/cm)	ヨコナデ	橙色 橙色	石・長(1～5) 砂 ◎		
218	甕	口径 (19.8) 残高　6.9	「く」の字状を呈する口縁部に、端部は平らな面をなす。	口ヨコナデ 胴ハケ(9～10/cm)	マメツ	橙色 橙色	石・長(1～4) 金 ◎		
219	甕	口径 (15.8) 残高　8.2	外傾気味の口縁部に、端部は内傾する面をなす。	口ヨコナデ 胴ハケ(14本/cm)	口ヨコナデ 胴ハケ	橙色 橙色	石・長(1～4) 金 ◎		
220	甕	口径 (23.0) 残高　4.5	緩やかな「く」の字状を呈する口縁部。	マメツ	マメツ	橙色 橙色	石・長(1～4) 砂・金 ○		
221	甕	口径 (18.4) 残高　4.0	内湾する口縁部に、端部は平らな面をなす。	マメツ	ハケ(8本／cm)	橙色 橙色	石・長(1～3) 金 ◎		
222	甕	口径 (17.0) 残高　3.7	内湾気味の口縁部。	ヨコナデ	ヨコナデ	橙色 橙色	石・長(1～5) 金 ◎		
223	甕	口径 (18.0) 残高　3.9	緩やかに「く」の字状を呈する口縁部、頸部に凹みがみられる。	口ヨコナデ 胴ハケ(9本/cm)	口ヨコナデ 胴ハケ(8本/cm)	橙色 褐色	石・長(1～2) 金 ◎		
244	甕	口径 (10.0) 残高　5.1	緩やかな「く」の字状を呈する口縁部。	ヨコナデ	口端ヨコナデ 口ハケ(8本/cm)	赤褐色 赤褐色	石・長(1～2) 金 ◎		
225	甕	口径 (22.9) 残高　6.1	外傾気味の口縁部に端部は外反する。	マメツ	マメツ	明赤褐色 明赤褐色	石・長(1) ◎		
226	甕	口径 (20.5) 残高　5.1	外傾気味の口縁部に、端部は外反する。	口ヨコナデ 胴ハケ(4本/cm)	ヨコナデ	明赤褐色 明赤褐色	長(1) ◎		
227	甑	残高　7.0	湾曲して外上方にのびる。	ハクリ・ハケ	ヨコナデ	明赤褐色 明赤褐色	石・長(1～2) ◎		
228	甑	残高　6.5	外上方にのびる。	マメツ	マメツ	橙色 明赤褐色	長(1～2) 砂 ◎		
229	不明	口径 (11.8) 残高　11.5	内傾する上胴部に、口縁は窄み気味。	口ハケ(5～6本/cm) 胴マメツ	マメツ・カキトリ	橙色 橙色	長(1) ○		

表72　SB 6　出土遺物観察表　土製品　(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
230	坏蓋	口径 (15.1) 器高 5.4	丸味をもつ天井部より、内湾して下がる口縁部。	㊦回転ヘラケズリ 3/5 ㊤回転ナデ	㊦ナデ ㊤回転ナデ	緑灰色 緑灰色	石・長(1～2) ◎		
231	坏蓋	口径 (14.7) 残高 4.2	内湾して下がる口縁部に、端部は丸い。	㊦回転ヘラケズリ ㊤回転ナデ	回転ナデ	灰色 淡灰色	長・石(2～7) ◎		
232	坏蓋	口径 (14.1) 残高 4.3	丸味をもつ天井部より、口縁部は下方にのびる。	㊦回転ヘラケズリ 3/5 ㊤回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	石・長(1～2) ◎		
233	坏蓋	口径 (14.1) 器高 4.2	内湾して下がる口縁部。	㊦回転ヘラケズリ ㊤回転ナデ	回転ナデ	灰黒色 灰色	密 ○		
234	坏蓋	口径 (15.0) 残高 3.6	丸味をもつ天井部に、外傾して下がる口縁部。	㊦回転ヘラケズリ ㊤ナデ→回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	長(1～5) ○		
235	坏蓋	口径 (14.0) 残高 2.9	やや凹む天井部に、外傾して下がる口縁部。	㊦回転ヘラケズリ ㊤回転ナデ	回転ナデ	黄灰色 淡白色	石・長(1～2) ○		
236	坏身	口径 (14.8) 残高 4.3	受部端に沈線状の凹みあり。	マメツ	マメツ	浅黄灰色 浅黄灰色	石(1～2) △		
237	坏身	口径 (12.5) 残高 4.5	受部端に沈線状の凹みあり。	㊤回転ナデ ㊧回転ヘラケズリ 3/4	回転ナデ	灰色 灰色	長(1～3) ○		
238	坏身	口径 (12.8) 残高 2.8	受部端に沈線状の凹みあり。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	石(1～2) 金 △		
239	坏身	口径 (12.4) 器高 3.4	受部端に沈線状の凹みあり。	㊤回転ナデ ㊧回転ヘラケズリ 2/3	回転ナデ	灰色 青灰色	石・長(1～4) ○		
240	坏身	口径 (15.1) 残高 4.5	内傾気味の長い立ち上がりに、受部は外方にのびる。	マメツ	マメツ	浅黄茶色 浅黄茶色	石・長(1～2) ○		
241	坏身	口径 (11.6) 残高 4.1	立ち上がりは内傾し、受部は外方にのびる。	㊤回転ナデ ㊧回転ヘラケズリ	回転ナデ	黄灰色 青灰色	石・長(1～4) ○		
242	高坏	口径 (13.2) 残高 3.3	内湾する坏中位に稜をもち、口縁部は外反する。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 淡灰色	密 ○	自然釉	
243	高坏	脚底径 (9.7) 残高 7.0	外反して下がる脚部は、３方向の透かしが施される。	回転ナデ	㊧上ナデ ㊧下回転ナデ	淡灰色 灰色	密 ○		
244	高坏	脚底径 (17.2) 残高 1.5	ラッパ状に広がる脚裾部は、透かしが施される。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 オリーブ色	密 ○	自然釉	
245	埦	口径 (8.6) 器高 6.4	口縁部はやや内傾し、端部は尖り気味。	㊤回転ナデ ㊧回転ヘラケズリ 1/3	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎		46
246	甕	口径 (26.0) 残高 5.2	外傾する口縁部。	ハケ(3本/cm)	マメツ	橙色 橙色	長(1) ◎		
247	甕	口径 (20.0) 残高 3.4	外傾する口縁部。	マメツ	マメツ	明赤褐色 明赤褐色	石・長(1～3) △		
248	甕	口径 (16.4) 残高 4.4	「く」の字状の口縁部に、端部は外方にやや肥厚される。	マメツ	ハケ(3～4本/cm)	橙色 橙色	長(1) ◎		
249	甕	口径 (17.0) 残高 4.1	外傾する口縁部。	マメツ	マメツ	橙色 橙色	石・長(1～4) 砂 ○		

SB 6　出土遺物観察表　土製品　(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
250	甕	口径 (22.8) 残高 6.9	緩やかに外反する口縁部。	ハケ(4本/cm) (5本/cm)	マメツ	橙色 橙色	石・長(1) ◎		
251	甕	口径 (20.6) 残高 10.1	緩やかに「く」の字状を呈する口縁部。	マメツ	マメツ	黄橙色 橙色	石・長(1～5) 砂 ○		
252	甕	口径 (21.0) 残高 5.9	内湾する口縁部に、頸部はやや凹む。	マメツ	マメツ	黄橙色 黄橙色	石・長(1～4) 砂 ○		
253	甕	口径 (21.0) 残高 4.8	内湾する口縁部。	ヨコナデ	マメツ	明赤褐色 明赤褐色	石・長(1～3) 金 ◎		
254	甕	口径 (17.1) 残高 4.7	「く」の字状に屈曲した口縁部外面が肥厚される。	(口)マメツ (胴)ハケ(6本/cm)	マメツ	橙色 橙色	石・長(1～3) 金 △		
255	甕	口径 (19.0) 残高 4.0	内湾する口縁部に、端部は丸くおさまる。	ヨコナデ	マメツ	黄橙色 橙色	石・長(1～2) 砂 ◎		
256	壺	口径 (15.0) 残高 5.8	「く」の字状で、外反気味の口縁部。	マメツ	(口)ハケ(4本/cm) (胴)ナデ	淡橙色 明橙色	石・長(1～2) ○		
257	鉢	口径 (22.0) 残高 6.0	内湾気味に立ち上がる口縁部。	ハケ(5～6本/cm)	ハケ(6本/cm)	明赤褐色 明赤褐色	石・長(1～2) 砂 ◎		
258	不明	口径 (10.0) 残高 5.6	内傾して窄む口縁部。	ハケ(4本/cm)	ヨコナデ	黒色 浅黄橙色	密 ◎		

表73　SB 6　出土遺物観察表　石製品

番号	器種	残存	材質	法量 長さ(cm)	法量 幅(cm)	法量 厚さ(cm)	法量 重さ(g)	備考	図版
259	スクレイパー	ほぼ完形	サヌカイト	7.6	3.4	0.75	15.93		46

表74　SB 7　出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
260	甑	残高 6.2	扁球形の胴部中位に円孔。	(胴上)回転ナデ (胴下)回転ヘラケズリ	回転ナデ	暗灰色 灰色	長(1) 砂 ◎		

表75　SD 9　出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
261	坏蓋	口径 (13.4) 残高 1.6	口縁端部内面に不明瞭な段をもつ。	回転ナデ	回転ナデ	暗オリーブ灰色 灰白色	密 ◎		
262	坏蓋	口径 (14.0) 残高 2.1	内湾気味に下がる口縁部。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		
263	坏身	口径 (12.0) 残高 3.5	立ち上がりは内傾し、受部は外方にのびる。	回転ナデ	回転ナデ	褐灰色 灰白色	密 △		
264	坏身	口径 (13.0) 残高 3.5	立ち上がりは内傾し、受部は外上方にのびる。	(口)回転ナデ (底)回転ヘラケズリ	回転ナデ	灰白色 灰白色	密 ◎		

表76　SD 10　出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
265	坏蓋	口径 (12.6) 残高 2.9	内湾しながら下がる口縁部。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰白色	密 ◎		
266	坏蓋	口径 (13.2) 残高 2.5	内湾気味に下がる口縁部。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰色	密 ◎		
267	坏蓋	口径 13.6 残高 3.5	内湾して下がる口縁部。	㊦回転ヘラケズリ ㊤回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰色	密 ◎		
268	坏身	口径 (13.4) 残高 3.3	立ち上がりは内傾し、受部は外方にのびる。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰白色	密 ◎		
269	坏身	口径 (12.9) 残高 2.7	立ち上がりは内傾し、受部は外方に短い。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		
270	坏身	受部径 (14.6) 残高 3.0	受部端に沈線状の凹みあり。	㊤回転ナデ ㊧回転ヘラケズリ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎		
271	高坏	脚底径 (14.0) 残高 3.1	脚裾部はラッパ状に広がり、凹線が施されている。	回転ナデ	回転ナデ	オリーブ灰色 オリーブ黒	石・長(１～２) ◎	自然釉	

表77　SP 27　出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
272	椀	口径 (15.4) 器高 5.5	胴部は内湾して立ち上がり、底部に断面三角形状の貼付高台をもつ。	マメツ	マメツ	暗灰色 褐灰色	石・長(１) 砂 ○		

表78　第Ⅶ層出土遺物観察表　土製品　(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
273	坏蓋	口径 (15.0) 残高 4.7	口縁端部内面に不明瞭な段をもつ。	㊦回転ヘラケズリ 1/2 ㊤回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	石・長(１) ○		
274	坏蓋	口径 (13.8) 残高 2.7	天井部と口縁部の境界に稜をもつ。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	密 ○		
275	坏蓋	口径 (12.4) 残高 2.5	口縁端部内側に段を有する。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	密 ○		
276	坏蓋	口径 (14.4) 残高 2.3	口縁端部内面に不明瞭な段をもつ。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		
277	坏蓋	口径 (13.0) 残高 2.9	天井部と口縁部の境界に、凹みによる稜をもつ。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		
278	坏蓋	口径 (13.1) 残高 3.0	内湾して下がる口縁部。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 オリーブ灰色	長(１) ○		
279	坏蓋	口径 (14.3) 残高 4.0	内湾して下がる口縁部。	㊦回転ヘラケズリ ㊤回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	長(１) 砂 ○		
280	坏蓋	口径 (13.6) 残高 3.2	内湾気味に下がる口縁部。	㊦回転ヘラケズリ ㊤回転ナデ	回転ナデ	緑灰色 緑灰色	密 ◎		

第Ⅶ層出土遺物観察表　土製品

(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
281	坏蓋	口径 (12.4) 残高 1.9	内湾気味に下がる口縁部の端部は尖り気味である。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	長(1) ◎		
282	坏身	口径 (14.6) 残高 2.8	口縁端部内面に不明瞭な段をもつ。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	密 ○	自然釉	
283	坏身	口径 (13.0) 残高 2.3	口縁端部に沈線状の凹みあり。	回転ナデ	回転ナデ	オリーブ灰色 オリーブ灰色	長(1) ◎		
284	坏身	口径 (12.0) 残高 3.1	立ち上がりは直立気味に長く、受部は上方に短い。	㊐回転ナデ ㊡回転ヘラケズリ	回転ナデ	灰白色 灰白色	密 △		
285	坏身	口径 (14.0) 残高 3.8	立ち上がりは内傾し、受部端は外方にのびる。	㊐回転ナデ ㊡回転ヘラケズリ	回転ナデ	明オリーブ灰色 明オリーブ灰色	石・長(1～2) △		
286	坏身	口径 (13.1) 残高 2.6	立ち上がりは内傾し、端部は上を向く。受部は外方にのびる。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	長(1) ○		
287	坏身	口径 (12.9) 残高 3.5	受部端に沈線状の凹みあり。	㊐回転ナデ ㊡回転ヘラケズリ	回転ナデ	灰白色 灰白色	密 ◎		
288	坏身	口径 (12.6) 残高 3.2	立ち上がりは内傾し、受部は外上方に短くのびる。	㊐回転ナデ ㊡回転ヘラケズリ 3/5	回転ナデ	灰色 灰色	長(1) ◎		
289	坏身	口径 (13.0) 残高 2.9	立ち上がりは内傾し、受部は外方にのびる。	㊐回転ナデ ㊡回転ヘラケズリ	回転ナデ	灰白色 灰白色	密 △		
290	坏身	口径 (11.0) 残高 3.0	立ち上がりは内傾し、受部は外方にのびる。	回転ナデ	回転ナデ	浅黄色 灰白色	長(1) △		
291	高坏	口径 (12.2) 残高 2.4	坏中位に1条の凸線が巡る。	回転ナデ	回転ナデ	オリーブ灰色 オリーブ灰色	密 ◎		
292	高坏	脚底径 (12.4) 残高 2.5	ラッパ状に広がる脚裾部に、端部は丸くおさまる。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰白色	長(1) ◎		
293	高坏	脚底径 (9.8) 残高 1.3	ラッパ状に広がる脚裾部に、1条の凸線が巡り、端部は平らな面をなす。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	石・長(1～2) ◎		
294	高坏	脚底径 (11.4) 残高 1.4	ラッパ状に広がる脚裾部に、透かしが施される。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		
295	甕	口径 (33.8) 残高 8.2	口縁部は大きく外反し、端部に稜を有する。	㊐回転タデ ㊢タテナデ	回転ナデ	灰オリーブ色 灰オリーブ色	密 ◎	自然釉	
296	甕	口径 (22.2) 残高 2.5	外反する口縁部に端部は外下方にのびる。	(口端)回転ナデ ㊢タタキ→ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	長(1) ◎		
297	甕	口径 (31.8) 残高 2.4	外反する口縁部に、端部は外方にのびる。	回転ナデ	回転ナデ	灰黄色 灰黄色	密 △		
298	甕	口径 (26.0) 残高 2.7	外傾する口縁部、端部は外面が肥厚される。	回転ナデ	回転ナデ	オリーブ黒色 灰オリーブ色	長(1) ◎	自然釉	
299	壺	口径 (14.0) 残高 6.0	外反する口縁部に、端部は外方にのび、面をなす。	㊐回転ナデ ㊢カキメ	回転ナデ	赤灰色 赤灰色	長(1) ○		
300	壺	口径 (17.0) 残高 3.5	外反する口縁部に、端部は丸味をもつ。	(口端)回転ナデ ㊢ハケ→ヨコナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	密 ◎		

第Ⅶ層出土遺物観察表　土製品　(3)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
301	壺	口径 (11.2) 残高 3.7	外反する口縁部に、端部は丸くおさまる。	マメツ	マメツ	褐色 浅黄色	長(1) △		
302	壺	口径 9.0 残高 6.0	外反する口頸部に、端部は丸くおさまる。	㊐回転ナデ ㊥ハケ(5本/cm)	回転ナデ	灰白色 暗灰色	密 ◎		
303	壺	口径 (8.0) 残高 3.3	外反気味の口縁部に、端部内面は不明瞭な段をもつ。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 青灰色	長(1) ◎		
304	壺	口径 (8.9) 残高 4.9	外反気味の口縁部に、端部は内湾気味で尖る。	回転ナデ	回転ナデ	オリーブ灰色 オリーブ灰色	密 ○		
305	提瓶	胴径 18.0 残高 18.9	上胴部側面にボタン状突起の把手を貼付。	㊤回転ナデ ㊥カキメ	回転ナデ	灰色 灰白色	石(1～3) ◎	自然釉	46

表79　層不明出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
306	皿	口径 (8.4) 器高 1.2	平底の底部より、内湾して立ち上がる。	㊐マメツ ㊦糸切り	マメツ	浅黄色 浅黄色	石(1～2) ○		
307	皿	口径 (8.4) 残高 1.4	平底の底部より内湾気味に立ち上がり、口縁端部は丸くおさまる。	㊐ヨコナデ ㊦回転糸切り	ヨコナデ	乳白色 灰色	密 ○		

表80　SR 1　出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
308	甕	口径 (13.0) 残高 3.2	「く」の字状の口縁部に、端部は傾斜する面をなす。	マメツ	マメツ	橙色 橙色	石・長(1～3) 砂・金 ◎		

表81　1号墓出土遺物観察表　銭貨

番号	銭名	初鋳年	銭径(mm)	孔径(mm)	外縁厚(mm)	内側厚(mm)	重量(g)	備考	図版
309	寛永通寶	1626	タテ 24.48 ヨコ 24.55	5.52 5.58	1.18	1.12	2.802	古寛永通寶銭	46
310	寛永通寶	1636	タテ 24.22 ヨコ 24.50	6.38 6.50	1.28	0.94	2.644	新寛永通寶銭	46

第6章　ま　と　め

本書で報告された3遺跡は、松山市道「平井・水泥線」の総長1㎞にわたる区間のうちの4地点における調査である。ここで、これらの調査の成果について簡単にまとめておきたい。

調査は大きくいって、2つの柱から成り立っており、ひとつは沿線を蛇行しながら西流する大規模な流路、もうひとつはこの流路周辺に展開する各期の遺構の調査である。調査自体、幅20mに満たない道路幅の、しかも小間切れの調査であるため、流路についても遺構によって構成される集落の様相も断片的な把握にしかなり得ないが、流路に関しては調査成果に加えて、現況地形から読みとるとおおよそ第130図のように復元できようかと思う。この流路は遅くとも弥生時代前期後半以前には形成され、7～8世紀前後には南北両岸が埋まり、最終的に13・14世紀には全体が埋まっていたものと考えられる。

流路沿線では、6世紀後半から7世紀前半を中心に、弥生時代から中世・近世に至るまでの遺構・遺物の検出がみられ、また流路内あるいは包含層遺物として縄文時代晩期や弥生時代前期の遺物が出土している。この一連の調査では縄文時代や弥生時代の遺構は希薄ではあったが、近年やはり道路関連の遺跡として、主にこの流路の北段丘上で行われている「古市遺跡2次調査」、あるいは「五楽遺跡」などの調査によって、これらの時期の遺構が確認されており、これらの成果とあわせて考えると、該期の集落が流路北段丘上に展開するのはほぼ確定的である。同様に、古代の掘立柱建物などの遺構も同段丘上にまとまってみられ、本調査出土の古代の遺物との関連はやはり段丘上に強く認められる。

一方、古墳時代後期や中世の遺構は、もちろん段丘上にも存在するが、本調査における当該期の中心はむしろ本調査の西南端の流路南岸、「下苅屋遺跡3次調査地」周辺に展開している。古墳時代後期についていうと、調査では該期の竪穴住居、掘立柱建物、廃棄土坑などが検出されている。この3次調査地の東隣接地は1996（平成7）年、松山市教育委員会により「下苅屋遺跡」として調査が行われ、やはり竪穴住居、掘立柱建物、廃棄土坑などが検出されている。さらに、これらの遺構とともに出土する焼け歪み、あるいは焼成不良の須恵器や窯壁片などの出土から、この集落と須恵器窯業集団との関わりが指摘されている。調査地北から北東部の丘陵麓には駄馬、駄馬姥ケ懐、茨谷(ばらだに)、悪社谷、枝朶下池（しだのしたいけ）などの6世紀後半から8世紀代の須恵器窯址群が存在しており、このエリアは松山平野東南部古窯址群と総称され、松山平野南部の砥部古窯址群とともに、当該期の一大窯業生産地であることがわかっている。したがって、この集落の性格を「下苅屋遺跡」の調査では、これら窯業生産地から消費地への中継点、集積地として位置づけている。今回の調査では、この集落がさらに西へひろがる様相が明らかになるとともに、須恵器を多量に出土する集積あるいは廃棄土坑の検出もみられ、集落の性格としても先の調査を補強するようなかたちとなった。なお、加えて述べておくと、さらに西に隣接するエリアの調査が近年「下苅屋遺跡4次調査」として行われ、やはり数棟の竪穴住居および掘立柱建物が検出されており、集落としてかなりな広がりを持っていること、また小鍛冶の可能性の高い竪穴住居が検出されるなど、この集落の多面的な性格が明らかになりつつある。

中世段階の遺構のひろがりも、本調査および上述の「下苅屋遺跡4次調査」の成果をあわせると3次調査周辺のエリアに展開しており、このエリア周辺に居住域のひとつが想定される。道路沿線の大

部分は中世段階には流路が埋積した状況になっている。これらの部分に建物等の痕跡が検出されず、鋤跡や溝、あるいは水路等が検出されているところから判断すると、調査区の大部分は中世以降、現在に至るまで水田域として利用されていたものであろう。

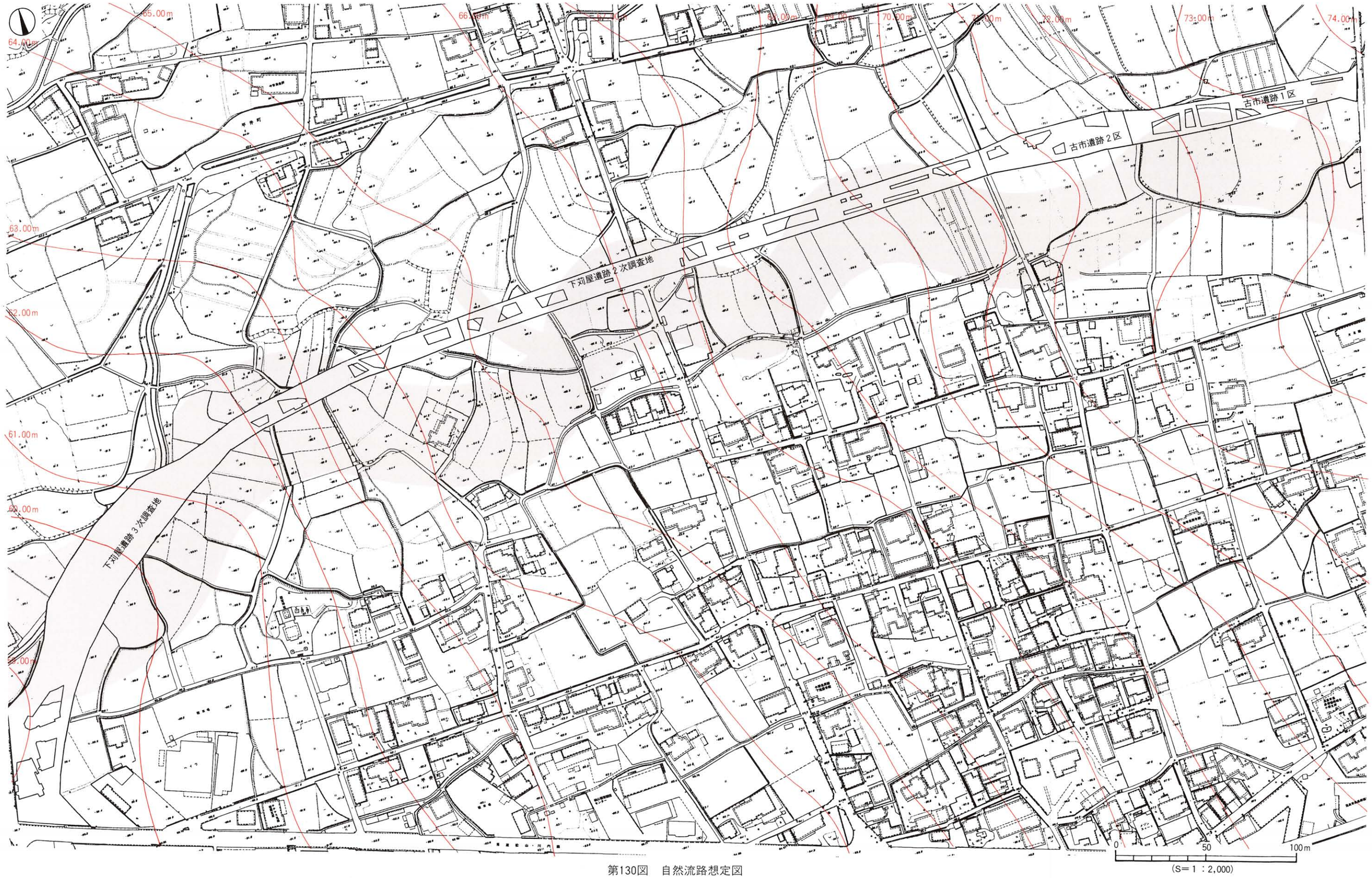
以上簡単に調査の成果をまとめてきたが、特に古墳時代後期以降の窯業生産と流通にかかわる集落としての機能を想定した場合、調査で検出された流路は水運を考えに入れると大きな意味を持つことになる。13・14世紀には確実に埋積してしまっている流路が6世紀後半から7世紀代にかけてどのような状態であったのか、7・8世紀には両岸部分は既に埋まっているようではあるが流路全体としては水運をある程度担えるような状態であったのかどうか、今後周辺のエリアでの調査の大きな柱のひとつとすべき課題であろう。

〔文献〕

山本　健一・山之内志郎　「古市遺跡2次調査地（1区）」「五楽遺跡（1、5区）」『松山市文化財調査年報IX』松山市教育委員会・㈶松山市埋蔵文化財センター 1997

栗田　茂敏・岡根なおみ　「駄場姥ケ懐窯址」『小野川流域の遺跡』松山市教育委員会・㈶松山市埋蔵文化財センター 1996

重松　佳久　「下苅屋遺跡」『松山市文化財調査年報VIII』松山市教育委員会・㈶松山市埋蔵文化財センター 1996



第130図　自然流路想定図

写　真　図　版

写真図版例言

1．遺構の撮影は、各調査担当者がおこない、下苅屋遺跡３次調査では高所作業車を使用した。

使用機材：

カ メ ラ　アサヒペンタックス６７　　レンズ　ペンタックス６７　55㎜他

　　ニコンニューＦＭ２　　ズームニッコール　28～85㎜他

フィルム　プラスＸパン・ネオパンＳＳ

2．遺物の撮影は、大西がおこなった。

使用機材：

カ メ ラ　　トヨビュー４５Ｇ　　レンズ　ジンマーＳ　240㎜

ストロボ　　コメット／ＣＡ-32・ＣＢ2400（バンク使用）

スタンド他　トヨ／無影撮影台・ウエイトスタンド101

フィルム　　プラスＸパン

3．白黒写真の現像・焼き付けは、一部を除いて大西がおこなった。

使用機材：

引 伸 機　ラッキー450ＭＤ　　レンズ　エルニッコール　135㎜

　　ラッキー90ＭＳ　　エルニッコール　50㎜

印 画 紙　イルフォードマルチグレードⅣＲＣ

フィルム現像剤　コダックＤ-76・ＨＣ110

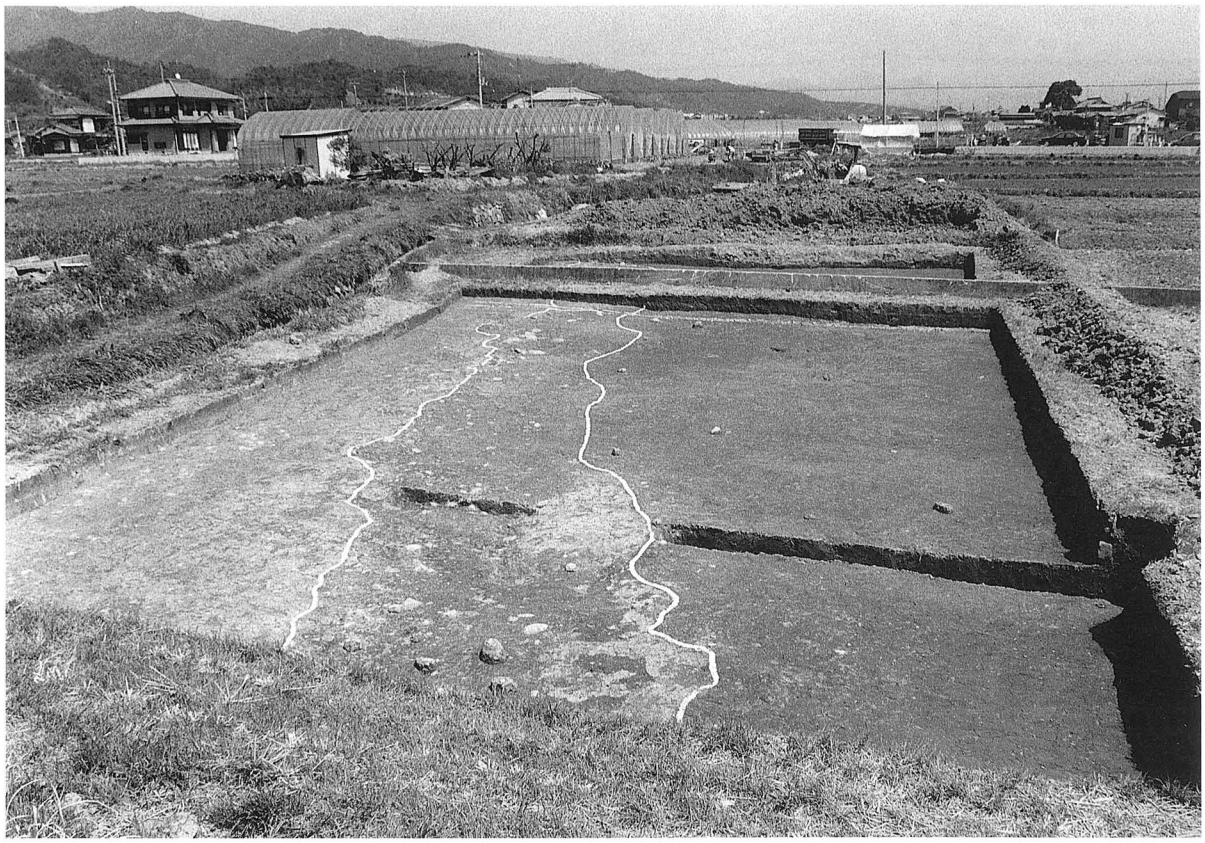
4．航空写真は、株式会社パスコに委託して撮影した。

【参考】　『埋文写真研究』Vol. １～10

〔大西　朋子〕

図版一

１．調査前全景（東より）



２．SD １・SR １検出状況（西より）

図版二

１．SD １遺物出土状況（東より）

２．SD １・SR １の土層堆積状況（北より）

１．SR 1　10層遺物出土状況(1)

２．SR 1　10層遺物出土状況(2)

図版四

１．SD １・SR １完掘状況（東より）

２．SD １・SR １完掘状況（西より）